

果樹園

第24号

書簡から見た伊東静雄 小高根 二郎
赤色のついた漫画ブック 稲垣 足穂
自虐の秋 芳野 清
ティデム 岩崎 昭弥

百貨店の屋上にて 美堂 正義
愛宕山の秋 福地 邦樹
東京哀歌 田中 克己
新旧詩抄 森 亮
木 魂 山根 忠雄
ブレヒト詩抄 たかはし・しげおみ
朝の河 池沢 茂
妊 娠 浅野 晃
いてふもみぢ 服部三樹子

書簡から見た

伊東 静雄 (二十四)

小高根 二郎

伊東は『呂』十一号の「談話のかはりに(一)」で、新即物主義の詩人エリッヒ・ケストネルを紹介してゐたが、同号には次の自作も発表してゐる。

事物の本抄

浅く潜まり未だ冷やかな雲の、どうして
かう道に誘ふのか。 花らを、期待の
中で準備さすのか。

とき放て、とき放て、朝の風の命ずる場
所にゆけ。 従順な決心が真に欲ばし
い。

私は静かに歩るき出した。 白は花環
を編むために、独りごととする為にけれど
時々私は道に踞む。

古樫の白い膚に光り青苔は全く目覚めて
ゐた。 かすかな共感にたよりながら細流
は其の下を流れた。

私はお前に逢ふ、太陽は近い湖のざはざ
はする岸で。 其処に航路を始めてゐる船
ちを、離れて楽しい気がかりで眺める。

雨が洗った十月の森の道よ。 私を超
ゆる言葉はないか、其の花季はなごきよりも尚ほ
かくはしいお前の枝らの様に。

私は物の間で目覚める。 朝はまはりに響
きだし、物の高さの処へ爽やかな風が私
を翹げる。

陽の耀く中をゆき、まもるべき自分はないの
を発見する。 私の手にふれたがる道
の花らを触れながら、私は林を進む。

この蒼空の為めの日は、静かな平野へ私
を迎へる寛やかな日はまたと来ないだら
う。そして明日も蒼空は明けるだらう。

(昭和七年十一月『呂』第六号)

この詩は、先月の主題である「事物の詩抄」
の代りに、「事物の本抄」と銘打たれてゐる
のに気附く。これは明らかにライネル・マリ
ア・リルケ (1875-1926) の「形象の本」
(Das Buch der Bilder) にあやかつてゐる。
つまり、ケストネルの事物 (Sache) とリル
ケの本 (Buch) を合成してゐるわけである。
が、詩風は、現象からその内なる事物の精神
を究明しようとしたケストネルより、内なる

精神から外攻的に事物への形象化を企図した
リルケに近かさうである。さう云った意味
で、この詩は伊東にとつて記念すべき作品で
ある。

しかも、その詩句の中から、今まで伊東書
簡の中で究明してきた詩魂の歷程の幾こまか
を、拾ひ上げることができる。言はば、その
歷程の結論なのである。この詩は二年後に結
実する「わがひとに与ふる哀歌」のまさしく
原型である。この「事物の本抄」のへどうし
てかう道に誘ふのか。花らを、期待の中で準
備さすのか。とき放て、とき放て、朝の風
の命ずる場所にゆけ。従順な決心が真に欲は
しい。Vが、

かく誘ふもの何であらうとも
私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる
第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』一
がひとに与ふる哀歌

に成長し澄化するわけである。
恐らく、この「事物の本抄」の発想は、一
昨年、つまり昭和五年九月二十三日附百合子
さん宛書簡に見えた琵琶行の折に得たもので
あらう。その書簡に、「詩を一つ二つ書きま
した」とあったが、多分、この詩の原型であ
ったのだらう。

尚、第八聯の八私の手にふれたがる道の花

らを触れながら、私は林を進むVは
手にふるる野花はそれを摘み
花とみづからをささへつつ歩みを進べ
第二詩集『夏花』一そんなに凝視め
な

の明らかな原型である。

又、末尾の第九聯八この蒼空の為めの日は
……Vは、ほとんどそのまま「咏唱」と題し
て処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』に収録
されてゐる。

伊東は前述した「事物の本抄」と共に、「静
かなクセニエ」と云ふ主題で、次の三つの短
詩も発表してゐる。クセニエ (Xenie) とは
諷詩の謂である。

静かなクセニエ

幸福な詩人達が

植物の間を、幸福な詩人達がさまよふ。

花 園

花園について考へてゐたので
頭の上で、雲は変つたり
時間が行きすぎたりしたのを
気づかなかつた

秋

深い山林に退いて
多くの旧い秋らに交つてゐる

今年の秋を

見分けるのに骨が折れる

(昭和七年「呂」十一月号)

この末尾の「秋」は、一年後に文学雑誌「コ
ギト」に「風詩」として再録され、処女詩集
『わがひとに与ふる哀歌』では、失題の詩と
され、「読人しらず」と特に銘記されて、他
の詩篇より一段と小さな活字に組まれた作品
である。この「読人しらず」に意外な問題が
含まれてゐるのである。

この「秋」は、古今和歌集の冒頭の歌、業
平の孫である在原元方の次の歌に典拠してゐ
るからだ。

在原元方

ふる年に春立ちける日によめる

年の内に春はきにけり一年を去年とやい
はむ今年とやいはむ

つまり、年内に立春を二度も迎へ、もう年
が明けたのだらうか、それともまだ年内だつ
たのかと云ふ季の不識別感を元方は歌つてゐ
るのである。この年内立春の季の不識別感を、

旧い秋らに交つてゐる今年の秋を見分けるの
に骨が折れると云ふ、古今の季の不識別観に
伊東は換骨脱胎してみせたのである。言はば、
古いも新しいもないと云ふクセニエにして見
せてゐるわけである。処女詩集に於て、この
「秋」に「読人しらず」と特記したのは、か

赤色のついた

漫画ブック

稲垣 足穂

私は赤い一色がついた漫画の本を、しまい忘
れてきた。

ステーション近くに來てやつと気が付き
あの本は誰がしまつてくれるだらうと思つた
が、

自分の本だから我手で片付けないことには、
と思ひ返して取つて返した。
一同は既に散じて漫画帳は見えなかつた。
怖ろしいトレーニングが始まつていた……
誰にも覚えがあることだ

いつたんユニフォームに着換えると、仲間だ
けに判る冗談や合言葉を交して
球をかつ飛ばしたり、受けとめたり
素人はてんで見向きもされぬ。
そつう陰呑極運動場を隙を窺い、横

切つて

私は果物店や饅頭屋やタバコストアが並んで
いる所へはいつて行つた。
今朝方の一軒がどうしても見当らない。
何遍も行つたり來たりしてゐると
先刻の選手の一人が緑色のバットを片手に振
り、やつてきて

君が探しているのは此処だ……と顎で指し示
した。
その大きな店の片側は成程覚えがあつた。
これ／＼の赤い単色刷の本がなかつたろうか
と私は口に出した。

番頭は黙つて、当の品物を眼の前に置いた。
「持つて行つていいのだね」と私は云つた。
その筈だつた。それはたつた朝がたに、この
店で買った私の本だつたから……
私が本を小脇にして出て行つたあとで、番頭
は他の店員から責められてゐる様子だつた
「せつかく返つてきた品を黙つて渡すという
法があるか！ 君のような流儀ではあきう

に発見してゐるからである。

この「秋」が元方の歌を典拠とし、それゆ
ゑに処女詩集に「読人しらず」と特記したと
云ふ私の推理の正当さをあかしするやうに、
伊東は「呂」十二月号に次のやうな古今和歌
集に対する深い関心を示してゐる。

どにはなれないね。」

然し、落ちついた番頭は一向に取上げる風も
なかつた。

私は再びステーション近くに來て、自分が持
つてゐる本がべらぼうに重いことに気がつ
いた。

その筈だつた。素晴らしい上等の紙が費つてあ
つたから……
表紙には赤一色が、其処に刷り出されたデッ
サンを彩つていた。

近ごろ売出しの大選手のいろんな姿態を、マ
チス風の筆致で素描したもので
なにも野球上の仕事とは限らなかつた。
大選手は他の事柄にも関係して、それぞれに
デュークや茶番をつとめていた。

私は、其処に、そんなペーシに、初めて異存
のない「現代」を見出す。
だから、この漫画ブックはシリウス伴星のよ
うに重い！

ライネル・マリヤ・リルケに「形象の本」といふ詩集があり、その絶妙な譬喩的精神に僕は帽を脱がされる。常々僕は詩が散文と分派する第一歩はこの譬喩的精神であると思つてゐる。それにつけていつも思ひ出すのは、日本の和歌、殊に古今集の存在である。万葉集が明治以来多くのエビゴネンを持つてゐる所以は結局、万葉集がその精神の素材な表現をなしてゐるからで、その反対に古今集が今の歌壇で重要視されることの少いのは、反省的、意識的なその精神の表現手法が、日本人のさらりとした茶漬的嗜好にあくどく見えたららしい。素材といふものが、人間の一度は離れねばならぬ故郷である以上、古今集のあの定型的な譬喩や序詞や、枕詞などをも一度勉強し直す歌人の、明治以来少かつたことは、いかにも残念である。子規は秀才で、それ程のこの分らぬ男ではなかつた様だが、そしてそれに少し手をつけて示したものにその初学誘掖の、反対派弁駁の易きに就く歌論に招かれた諸歌人共が、不肖にも感傷や心境や素朴やなどにうろついてゐるうちに、文壇からも落伍してしまつたのは当然である。そして古今集に同情しない人達が批難

的にする修飾の定型といふことも、あれははにかみ屋の日本人にはさもあるべき方向で、又一向に致命的なものではない。はにかみ勝ちな譬喩的精神の表現はその証拠に、独逸では美しいリードになって育つた。それは又僕などにも魅力ある行き方で、僕の「静かなクセニエ」はそれへの足ならしのつもりである。近頃日本でも訳されて、ジツドの「パリュード」や「プロメテ」を読むと外国人のあぐねけのしたしつことでも言ふべき譬喩的精神のフラインな表現に感心せざるを得ない。僕は呂ではつくりものを書く男とされてゐる様だが、以上の様な僕の考へ方からするとあまり広量な言ひ方とはしにくく、も少くじつくりと見てみてほしいと思つてゐるのである。

(昭和七年「呂」十二号)

言はば、この「談話のかほりに」は、卒業論文「子規の俳論」を一步推し進めて、一種の詩論をなしてゐるのである。こゝで大きくクローズ・アップされてゐる古今和歌集の反省的意識的な表現手法——つまり、はにかみがちな譬喩的精神が、前述の読人しらずの「秋」を生みだしたのである。更に臆測を猛しくすれば、六歌仙の歌評を

自虐の秋

芳野清

自虐の秋が
やさしく木の葉を落してゐると
泣いてはいけない
麓で犬や牛の声もやんだ
おまへの襟足に風も冷たい
さあ 山を下りて湖へ行かう
嶺きは虹のやうに明るい
こはしのびよる夜の気はひ
もうすこし恋人同志のやうにテタテし
て
湖上の轍を見てみよう
人工の湖に偽りの恋を映さう
おまへは紅い木の実を拾ひ
その香にうっとりしてゐる
僕はさりげなく胸の固い果実を見てゐる
あゝ こゝは都会のあのとよめきからも
遠い
蝙蝠の翅をもつた紳士や
ミルク肌色の魔女達の棲むサバトから：

テイデム

岩崎昭彌

長い山岳行軍で倦み疲れたとき
樹の間に見えた小さな盆地

三十二疋の荷物を先づ投げおろし
揃つて天を抱くやうに伸びをする

市場に赤十字のマークが描かれ
民家に歩哨が立つてゐる

許されて一日松茸狩に出ると
屍面が獲物を脛に当てて戯れた

征くものも戻るものもほっとする
こゝはインパール戦線の宿場なのだ

——インパール——

中心とする我国最初の文学論を序とし、それに「冬の部」に編入すべき元方の年内立春の歌を統かしめた古今和歌集の構成を、伊東はそのまゝ「談話のかほりに」(一)と元方の歌に典拠した「秋」とで、再現したのだと考へられぬこともない。

然し、秀才青木敬磨氏もこの深遠な伊東の思想の奥処には理解がとゞかなかつたやうである。「談話のかほりに」(一)には、「詩人・伊東がさあ、得意の技巧論と誰かが笑つてる様だからやめる。」とあり、(二)の末尾には、「僕は呂ではつくりものを書く男とされてゐる」云々の記述があるのは、その事実を証明してゐる。事実、「呂」の難文や後記には、一二の同人が伊東を揶揄してゐる言葉が散見される。

さうした「呂」に於ける孤独な伊東の立場を暗示する逸話がある。呂同人だった原野栄二氏が伝へるところによると、同人会がよく梅田O・S劇場にあった喫茶店「コスモス」で持たれた。或る夏の集會に、伊東は眞新しいカンカン帽をかぶってきた。伊東は眞新しいカンカン帽をかぶつた。そして同人達を見廻した。はゝん。カンカン帽の反応を求めてゐるんだナ……と、同人達にピンときた。「案外よく似合ふ」とか「大部したらう」などと挨拶をしようものなら、それをきつかけに、伊

東はすかさず「静かな諷刺」をおッ始めるわけである。で、同人達はニタニタして黙殺してゐた。一種の肩すかしである。伊東は明らかにかがかりした表情をしてゐた。会が果てゝ、一行は四辻を首根崎署の前に渡つた。この時いきなり突風が吹いて、初めて伊東の頭からカンカン帽を脱がした。カンカン帽はころころと電車道路に転がった。周章狼狽して伊東はカンカン帽を取り押へにつッ走つた。その恰好が、今までの取り澄ましてゐた伊東とあまりに対照的であつたので、同人達はワッ! と哄笑した。これは「静かなクセニエ」の失敗例であるが、同人達の伊東に対する揶揄の気配も物語つてゐるやうである。

伊東は「談話のかほりに」(二)と共に次の作品も発表してゐる。

静かなクセニエ抄

水の上の影を食べ
花の匂ひにうつりながら
コンサートにきりがない

(昭和七年「呂」十二月号)

この詩も前述した「秋」と共に、詩集「わがひとに与ふる哀歌」には(読人不知)とし

て収録されてゐる。

その十二月初旬、伊東は次のやうな書簡を百合子さんに送つてゐる。

「ゆり子さん、お手紙有難う。皆様ご達者のご模様で嬉しくあります。私共も平凡無為の生活をつとけてゐます。たゞ呂に月々一頁でも物かくのが楽しみです。先日お送りした十二月の呂、警察から発行禁止を命ぜられ、編輯人共は取調べをうけました。近頃の当局が目を光らせてゐるのにびつくりしました。

先日、高校時代の友人が三人ひよっこり大阪で会ひ、いろんなことを話しました。一人は名古屋の小学校（特殊部落の）校長一人は、大阪ガスのメートル調への労働者。それに私。佐賀に居たころは同じ気風で暮して来たものが、四五年の後には、もうこんなかはりやうです。メートル調べになつてゐる人は、月に四五拾円月給を貰ふさうで、ガス屋の帽子をかぶり、つめ襟をきてゐました。会社がひけると、ゴヤ、シヨウウギをうったり、活動見に行ったりするさうです。本は一頁もよまぬさうです。言葉もすっかり大阪人になり切つて、私にさへも（私とは精神的に一番親しかった人です）サウでつか、とか、よろしうおますな、と

か言ふんです。近い内にお嫁を貰ふさうで、その女の人は、かみゆひさんだそうです。みんな三人とも貧乏なので、たまに会つても、五銭のビツクリせんさいを一杯づつ、キツネずしを一杯づつ食つた切りで別れました。しかし、四五時間も話してゐると、いつのまにか昔の僕らにかへつて、丁度佐賀の町を話しながらゐるような気がしました。名古屋の友人といふのは、よく私が言ふ小浜の伊藤といふ人です。金持ちと貧乏人の子供の道徳観念の違いを研究してゐるとかで、一杯大きな表の様なものを持つて来てゐました。今は私共は幾分世の中がわかり、昔の理想的であつた時分のことをほゞえみ、今のすみにくさや自分らの優小さを苦笑した上で、それぞれの仕事にかへるために分れました。けれど、二三日はその日のことが思ひ出されて興ふんじました。

おたずねの本、ちつとも近頃はよまません。又、ゆり子さんに何をおすゝめしていいのかわかりません。自分が、あまり専門的のことは考へてると、その外のことでは、子供も同然です。近頃の私の詩は少しはものになつてゐるでせうか、その内お暇の時は、思ひ切つて悪口でも書いて

送つてくれませんか。

レコードは金がないから買ひません。近頃、生徒の親が三枚ほど組んだのを持って来てくれました。題は伊太利の印象といふので、作曲者は、シャルバンティエといひです。客観的な、手法的なその作曲態度は私には縁が遠い様です。一体シャルバンティエといふ人はどんな人でせうか。

先日から妹が来て、一緒に暮してゐますので諫早言葉が自由に使へて楽です。後略（昭和七年十二月九日大阪市住吉区天下茶屋三ノ一五より姫路市五軒町六七酒井ゆり子宛封書）この書簡で面白いのは、冒頭に見える佐賀高等学校の同期生の邂逅である。小学校校長の伊藤氏とは現長崎市教育長の伊藤政雄氏、大阪ガスのメートル調への労働者とは、高校だけで大学に進学しなかつた梶原昭次氏のことである。

三人は大阪の浅草に当る歓楽街新世界に集つて、通天閣の下の吃驚ゼンザイ屋で歓迎宴を開いたわけである。この邂逅の模様を、七月後「新世界のキイノ」(註・キイノ・キノ 映画)として伊東は詩に昇華してゐる。

朝鮮へ東京から転勤の途中
旧友が私の町に下車りた
私をこめて同窓が三人この町にゐる

私が彼の電話をうけたのは
私のまはし者どもが新世界でやつてゐる
キイノ一であつた

私は養家に入籍前の名刺を 事務机から
さがし出すと それに送宴の手筈を書き
他の二人に通知した

百貨店の屋上にて

美堂 正義

風のない日でも
百貨店の屋上ではかなり強い
初冬の日射しはもう金魚槽の上ではうそ寒く
熱帯魚の鈍い動きにも
色鮮やかな夏の日の名残りを窺ふことは出来
ない

金網を透して見る街の屋根は波のやうに揺が
り
冬枯れの山さへ近くに見える
玩具のやうな自動車が行く
蟻のやうな人が並んで歩いてゐる
十二年前この市に原子爆弾が落され

私ら四人が集まることになつたホテルに
其の日私は一ばん先に行つた
テラスは扇風機は止つてゐたが涼しかつ
た
噴水の所に 外から忍びこんだ子供らが
ゴム製の魚を
私の腹案の水面に浮べた

「体のいゝ左遷さ」と 吐き出すやうに
旧友が言ひ出したのを まるきり耳に入
らないふりで
異常に私はせき込んで彼と朝鮮の話を始め
めた
私は 私も交へて四人が
だん／＼愉快になつてゆくのを見た
(新世界で キイノ一を一つも信じずに
入場つて
きた人達でさへ 私の命じておいた暗さ
に
どんなにいらいらと 慣れようとして
目をこすることだらう！)

この街に熱帯樹が植ゑられ
熱帯魚が飼育されるといふことを想像出来た
であらうか
軍隊のポロポロの服を着てゐては
いまの婦人の服装は思考の埒外にあつた
時は早く流れる

淀みなく私も流されて
悲痛な想ひや痕跡が癒されてゆく
屋上から見る風景の色彩の豊さ
騒音が街路からわき上つてくる
ひとの営みの激しさが手に取るやうに
力強く力強く迫つてくる

独りホテルに残つた旧友は 彼の方が
友情のきつかけにいつもなくてはならぬ
あの朝鮮の役目をしたことを、激しく後
悔した

二人の同窓は めい／＼の家の方へ

わざとしばらくは徒歩でゆきながら
旧友を憐むことで久しぶりに元気になる
のを感じた

【新詩集『わがひとに与ふる哀歌』
—新世界のキーン—】

この詩は明らかにケストネルの新即物主義の影響が感じられる。先のゆり子さん宛書簡に見えた旧友達の邂逅を、いかにザッハリッヒに、或ひは、いはゆる伊東の言ふ譬喩的精神に昇華させてゐるかを検討し得る好資料である。

邂逅した同期生は伊東、伊藤、梶原の三人だが、詩では四人になってゐる。伊東は、新世界の映画館を経営するボスの家に養子入りしてゐる。彼はさう表現するほど、この猥雑な欲楽街を愛好してゐた。とりわけ、雨の降るセコンド・ラン、サード・ランのハッピー・エンドの映画が好きだった。集会したホテルのテラスは、通天閣からエビス町寄り、大通の南側にあった吃驚ゼンザイ屋の広い土間である。その牀几から、通天閣の前広場にしつらへられた噴水が眺められた。塵埃でいつも盲ひてゐた吹上げ。それを伊東はホテルの内庭にとりこんでゐるわけである。そこに悪戯ッ子が浮べたゴム製の魚とは、煤煙や塵埃と一緒に水面に浮んでゐた赤い三角形の南京豆の空袋だったらう。

つて、一種の虚脱を感じたからかも知れない。いや、その虚脱感を掩って余りある慶事があったからかもしれない。つまり、刎頸の友宮本新治氏が女医吉田貞子さんと結ばれたのは昨年十二月二日であった。その結婚披露宴は明けて昭和八年の新春に神戸京町平和楼で催されたらしく、招宴に出席した伊東は、改めて次のやうな慶びの言葉を宮本夫妻に書き送つてゐる。

「新治兄、貞子さん。先夜は実に愉快でした。物わかりのいゝ人々や素朴な人達と一

東京哀歌

田中克己

髪を包まして遺髪とした散髪屋はなくなつた

識つてゐる人は歩いてゐない

古本屋は移転してひっそりとしてゐる

杉浦明平「細胞生活」といふのを買ひ

包ませながら涙が出さうである。

(阿佐ヶ谷)

この詩と真実の舞台に、伊東は貧富が童童に及ぼす道徳観の相違の研究をやつてゐる小学校長の伊藤氏を、左遷される教師に仕立てゝゐる。まこと、当時はさうした社会学的研究を教師の身分でするだけで、充分な左遷の理由が成り立つた檢察的な世潮だった。同人雑誌なんぞは、つまらん措辞にも言ひがかりを附けられ、『呂』十二月号のやうに発禁処分を受けたのである。然し、事実は、女髪結と結婚して、自ら社会的地位からそっぽを向いた左遷志望者梶原氏が、朝鮮行きの教師に当るわけである。彼は高校時代、精神的立場で伊東に最も近かつた親友だった。その日から僅か六年。その精神的距離もさることながら、伊東の三分の一の給料で自足してゐるこの友に、伊東は異常な衝撃を受けたのである。この懐旧の感慨を、伊東はセコンド・ランの雨の降る暗い映画に見立ててゐるわけである。その暗さから明るさを取戻したのは、友情のきつかけである挑戦(朝鮮)だったのである。この掛け言葉は、先に掲げた「談話のかはりに口」で伊東が弁護してゐる。古今和歌集の修飾の定型——はにかみがちな譬喩的精神を利用したのである。伊東達は五銭の吃驚ゼンザイと十銭の狐寿司をペロリと平らげた後で、いくらでも呑むことができる、あま

緒に、あなた方のご結婚をお祝ひしてゐる内に、私はあり／＼と京都時代の青年らしい高潮した気持がわいて来て、挨拶をしてゐる時など、のどの奥がつかまって仕方ありませんでした。あなた方が待合室に来られるまで、約四十分間花子と二人で、暖炉の前に坐つて、あなた方の到着を待つ気分の静かな喜びを想像して下さい。かへり私達は電車の中でも非常に満足でした。

仲人になられたお医者さんは実に立派な方ですね。教養と品位をそなへた方です。私など、あまり急いで、あんな仲人を得なかつたことを、非常に残念に思ひます。あんな方の家庭が、保証するあなた方の新生活はきつと立派なものになるだらうとしまふ。思ひました。序がありましたら私の敬意をつたへて下さい。

ずいぶお疲れだったでせう。あくる日すぐおつとめにいられたのですか。身体は大切にして下さい。結婚後数ヶ月は大切時さうです。花子も病氣しました。

今夜、目下来てゐる京都の母、妹などと火鉢をかきながら、昔ものがたりがはずみ、私が盲腸を病氣して、あなたの充分なお世話になった病院生活の思出など話してゐたら、手紙書きさなくなつて、これを書き

愛宕山の秋

福地邦樹

愛宕山の秋は
清冽な水であり
光にふくらんだ全山のもみじと杉林であり
り
点々とある山茶花であった
妹達はあとにさきにと賑やかにいざない
がやがて僕らは
季節の豊かな営みの中に
はやる心を吸収され
遠い風のような声で呼びかわしあつた

り茶の気のないでがらしの土瓶入り番茶で、高々とプロジェクトをやつてのけたのである。これが伊東の詩と真実——新即物主義の解釈であつたわけである。

明けて昭和八年の一、二月には伊東は作品を発表してゐない。昨年十一月、十二月号の「談話のかはりに」で、伊東は詩論を発表して腹ふくるゝものを吐露して了つたから、却

ました。後略。

伊 生

二十六日

(昭和八年一月二十六日大阪市住吉区天下茶屋三ノ一)

(五より兵衛 興魚崎町横屋宇内田二九宮本新治宛書簡)

この書簡の末尾に見える伊東の盲腸炎は、五年前の出来事であり、伊東が母、妹と冬の夜長に懐旧してゐるのは、宮本氏の短篇「氷雨降る日」に見えた肉身も及ばぬ宮本氏の世話と看護であつたのである。その宮本氏のめでたい結婚である。祝福の思ひの他に、謝恩の情が交錯去来して、披露宴の挨拶で咽喉の奥が詰つて仕方がなかつた……と云ふ述懐は真実であらう。

伊東は『呂』三月号に、昨年十二月号に引続き「静かなクセニエ」の主題の下に、次の詩を発表してゐる。

静かなクセニエ抄

脚 韻

新しい雪が白い鳥になつて

(よせばよいのに)

朝のシガーを吹かして居る

松の疎林にとまつて

私はそのまはりに
正しい花園を拵え上げ
美しいフォンテーンを
自分のものにした
註・フォンテーン、Fountain 泉

動物園で

林沢の事を考へて
静かに睡くなって居ると
声が
鷺鳥ノ 鷺鳥あるきをしてみろ
私のはっと起って
不覚にもすぐ鷺鳥歩きを
始めた

飛行機

花辛夷の影で あゝ僕は飛行士でなくな
つた

山中で 三篇

霜柱のピカ／＼光り出した坂径を 谷間

る。そこで、先に掲げた端書のやうに、伊東と『コトギ』の間の交渉が生れたわけである。その書簡の末尾で伊東が触れてゐる田中氏の詩は『コギト』第十一号所載ハイネリヒ・ハイネ「神々の黄昏」の訳詩、肥下恒夫〔註・『コギト』発行巻の〕氏の小説とは「しのみ」

新旧詩抄

森 亮

夜の歌

星が流れなくても天窓はたのしい。
わたしが泊った田舎の家で、
それは真夜中の闇にぼっかりと浮んで
ふと目を覚ましたまゝ眠らないわたしを見
まもる。
ほの明るい四角なわくはさながらわが心に
ひらいた天窓、
どんな透明な思ひが入ってくるかとわたし
は受身になって待つてゐた。

へ走る野兎 谷には鮮しい鬻りがある
私の臆病な悦びも 急げ 丁度身丈に合
ふ輪光を 貰えるやうに

○
私の足音に驚きながら
山鳥め
美しい羽色を見せびらかす

○
私を待つ者よ お前は笑ひ 隠るゝが
私は其処の林から
小鳥を皆んなで呼び寄せて
飲んで居るお前をさびしがらせよう
(昭和八年『呂』三月号)

伊東はこれらの詩篇を「静からクセニエ」と云ふ主題で発表してゐるが、格別、諷刺を感じさせるほどの風味はない。

この月末伊東は文学雑誌『コギト』の編集者保田与重郎氏に、次のやうな端書を書き送つてゐる。

「呂へご高評有難う。皆で遠くから、兄らのご勉強愉快に眺めてゐます。ます／＼期待に添ふて下さい。田中氏の詩、肥下氏の小説にも兄より良き挨拶たのみます。」

(昭和八年三月二十日大阪市住吉区天下茶々三ノ一五より東京市中野区招袋南三丁目二六一コギト発行所宛付保田与重郎宛はがき)

のことだらう。

伊東は翌四月の『呂』誌上に、それら『コギト』の若い詩人達に挑むやうに、十五篇の詩を発表してゐる。

VERKEHRSINSEL

忌 日

十七にてみかまりし弟よ十九の兄は四十
余り三(み)つ

お前は十七、わたしは四十三、
知らぬまにひらいて行つた年齢の開きは
わたしが今居る裏日本の小さな町と
お前の灰が眠つてゐる大阪との距離よりず
つと遠い。
人が何も残さないで若死することは悲しい
ことだ。
庭に薄紅いろの椿が幾つも幾つもうなだれ
てゐるけれど
弱い青空の下で思ひ出はもやにつつまれて
曖昧といふほかない。

もともと『コギト』も『呂』も文学的出発

はほとんど同時であつた。つまり『コギト』は昨年の五月、『呂』は六月が創刊だったから一月違ひにすぎない。しかも、『呂』は大阪を基盤にしてゐたし、『コギト』もまた大阪高等学校出身者を基盤にしてゐたのである。この同郷的な親しさと文学歴とが自然両誌を近附けたのは当然である。伊東は『コギト』で特に田中克己氏の詩に注目した。とりわけ昨年十月に出た次の作品に感銘し、無名でその讃辞をコギト社宛に書き送つたことがあつたのである。

屋

田中克己

ソオダ水をよぎる雲
葡萄にゐる蟻
睫毛には陽のかげりの濃さが

田中氏はやがて、その無記名の激励者とは伊東と呼ぶ住吉中学校の一教師である由、大阪在住の『コギト』同人中島栄次郎氏から聞き知つたのである。田中氏はまた『呂』誌上に発表される伊東の作品の骨格が、普通のものでない由、保田与重郎氏に知らせたのであ

銃

私は広大な森を所有つて居る
私が植林した樹列の間や
私が播種した草々の上に

詩の 餞

時があなたを運んでゆく。
やさしい笑ひにも、素直な心のひらめきにも
少女がちらちらしてゐるのに、
あなたはいつのまにかすくすくと伸びて
坐り心地のいゝ古椅子から立ち上がつてしまつた。
章駄天でも文珠でも生み出す力をうちに秘めて、
晩秋の或る晴れた朝、あなたは果立つてゆく。

註 初めの「夜の歌」がその中で最後の稿。二番目は昭和二十八年四月、三番目は三十二年十月下旬に作つた。前者は亡弟を記念したもの。後者は同じ職場のI・Hさんに贈つた「詩のはなむけ」。

私に自由を奪はれた
鳥らが放ち飼ひにしてある

停った馬車の中で

花草の匂ひに私は急に眠りから覚めた
首をつき出してみると
馬の膝から下には
草花が一ぱい生えて居るのだった

木魂

山根 忠 雄

溝川に家鴨が二羽
餌をあさつてゐる
それを子供と見てゐたら
「コッチャンが言ふと
誰かが言ふよ」といふ
なるほど田一枚隔てた
向ひの部落にあたって
声が反響してくるのだ

姪 娠

池 沢 茂

『そのくわ、折れてもかまへんか。折れても
かまへんのやつたら……』ぼくは立ちあがつ
て、うずくまっていた妻の手から、くわをと
った。『あの鉄管、いっぺん、くわで、なぐ
ってみるわ。くわのほう折れてしまつたら、
しまいや。鉄管が折れるか、折れんでも地面
のなかへめりこんでくれたら、いゝんやから
な。井戸やコンクリートの土台は、そのまゝ
にしといて、うえからセメントをぬってしま
おやないか。はじめの予定より浅くなるけど、
せんたく場として、べつに、さしつかえはあ
らへん。むこうのほう深いから、傾斜が急
になつて、水はけがよくなるくらいや』
『くわぐらい、折れたかて、かまへん』と妻
は、なげやりに、つぶやくように答えた。な
んだか、すでに、絶望しているみたいだつた。
ぼくはつぶやくさまに、くわをふりかざし、
その背で、やけくそに、鉄管を打った。相手
も鉄だから、くわの柄か、刃が、折れてしま
うかもしれない。そうしたら、それを機に、こ
の工事は中止になる。せつかく土を掘ってき
た骨折りが全部むだになつてしまふうえに、

ブレヒト詩抄

花 園

海辺の 縦と白楊の谷あい
に
石垣と灌木にまもられた庭
ここには三月から十月まで
いつでも花が咲いてるように
季節季節の花が植えこまれている

ここに朝方 しょっちゅうというわけで
もないが
腰をおろして 思うのだ
僕もまた 良い天気にも悪い天気にも
いつも なにかのよろこびをあらわした
いもの

煙

海辺の 樹々の間の小さな家
屋根に煙があがつている
もし煙があがつてなかつたら
家も樹々も海も

「おおい」……「おうい」……
「おおい」……「おうい」……

ああ久方ぶりの幼時の木魂！
をりから正月四日の曇り空の下
ふと見つけた明るさを心にいだきながら
水路を曲って行く二羽の家鴨を
子供と一しょに黙って見てみた

★

敵 冬

乾睡も空世の瘦も寒のうち 芭蕉

冬の店頭で
たまたまもとめたレモン
一片のレモンに
少しの砂糖
混ぜる紅茶に
はや芳香のつたひきて
(ぐるぐる廻すスプーン……)
——冬の夜の
このレモンティーこそ
一滴たりとも
こぼしてならぬ！

また元どおりに、うずめなおさねばならない。
義父と約束し、妻も、ぼくも、たのしみにし
ていたコンクリートのせんたく場は、すつか
り元のまゝの、水はけのわるい、じめじめし
た、ぬかるみに、かえつてしまふ。あらたに
買ひもとめたスコップも、注文したセメント
や砂も、単なる失費にすぎなくなる……。
『おまえたちには、独立した家庭なんか維持
してゆかれんやろ。もう見込みがないから、
親もとへなど、どこへなど、帰ってくれ』
そういう義父の声を、ぼくはふいと、聞いた
気がした。妻が言ったのかと、ぼくは、は
つとして振りかえつた。妻はしかし、あおい
顔をし、はらはらした目つきで、ぼくを見つ
めていただけだつた。

ぼくは疲れきつていたうえに、脚や腰が痛
みだし、夕やみも急にくなつてきていたの
で、こうふんし、やけ気味になりかゝつてい
た。それでも、ふと、こういう時機は、これ
までも、なんべんか、あつたような気がし
た。ある一つの時機を頂点として、それを乗
りこえるか、ふみはずすかで、たちまちに、
あかるいほうへむかうのと、暗いほうへ落ち
るのどに、わかれてしまふ。ぼくはそういう
ばあい、いつもたいてい、その手前で、ため
らい、立ちどまり、あきらめて、すこゝと

なんとやりきれなくみえることだらうか

(たかほし・しげおみ訳)

引きかえした。たま／＼積極的に立ちむかつ
ていったときには、ふみはずして、どうしよ
うもない暗いほうへ落ちた。こんどのばあい
も、そうかもしれない。せんたく場ぐらい出
来なくても、なんでもない小さなことだけれ
ど、それが転機となつて、ひきつゞき、もつ
と大きな悪いことが、かさなつてくるかもし
れない。それでも、やはり、思いきらねばな
らぬばあひがある。五へん、六へんと、ぼく
はつぶやくて、くわの背で、なぐりつけた。す
ると、鉄管はふいに、まがりだした。戦前の、
ガス水道かの、ふとい鉄製の元管だから、
まがるはずはない。コンクリートの土台のし
たで直角に方向をかえ、となりの家のほうへ、
くゞつていつているその角のところか、よく
見ると、ネジの差しこみになつてゐる。さび
ついていたそのネジが、だん／＼ゆるんで、
すこしずつまわりはじめたのだ。しまいは
地面と平行になり、とう／＼、地中にたゞき
こまれた。

『これで大丈夫や。あとは公休日にセメント

亀井勝一郎氏評——日本民族の個性、
 多くに明治にあらわれた民族の活力と偉人に
 ついて著者は深く頌揚されている。偉人
 自分たちも足もくをみつめて祖國の真の
 たを知ろうとする念願。おまじきを通じて
 自己の新しい生をもう一度築きあげようとい
 う祈りに似た気持ちに私は期待する。一六〇円

明徳出版社

りやったんが、鉄管が出てきたり、練瓦のワ
 クやら、コンクリートの土台やら、おまけに
 井戸やら、おまじきけんものが出てきたんや
 ものな。おかげで、体のあちこちが痛くなっ
 たけど、ひと晩ねたら、なおるやろ」

ぼくは「わたしはべつに、かまへん」と言
 った妻のことばが腹立たしかった。「おまえ
 のためにこそ苦勞しているのではないか」と
 いう気持があったからだ。しかし一方、義父
 との約束を裏切らぬためにも、自分自身のた
 めにも、よい家庭をきずいてゆきたいねがい
 が、しきりに、ぼくをとらえていた。ぼくは
 脚や腰をあまりまげないようにしながら、自
 分で、さっさと、寢床をしいた。じつさいは
 大して痛くないのだと、妻に見せたかったか
 らだ。ところが、ふとんのなかにもぐりこみ、
 寝返りしようとする、やはり、ひどく痛む

をぬいたら、しまいや。お勝手の電灯をつけ
 て、こつちを照らしてくれんか。ついでやか
 ら、もうちょっとやって、かたづけとこう」と
 ぼくは元氣を取りもどし、意氣こんで言った。
 妻も、にわかに、生氣をよみがえらせた。
 そして家のなかへかけこみ、台所の電灯を窓
 にくよりつけて、そとを照らした。くれやす
 い秋の日は、いつのまにか、まっくらになっ
 ていたのだ。そのなかで、ぼくたちは、もう
 一ど、仕事にかゝつた。にゅつと頭をもたげ
 ていた鉄管がなくなつたので、そのうえに土
 をかぶせて、たいらにならず。すみのほうの
 掘りたりない土をとって、かどをととのえる。
 水の落ち口になるどぶの口のほうへ、大体の
 傾斜をつける。いちめん散乱している瓦や
 コンクリートの破片、金くず、ガラスや茶わ
 んのかげらなどを、掘りあげた土といっしょ
 に、ひとまとめにして、積みあげておく。

『やれ／＼、これで半分かたづいたなあ。い
 や、半分やない、三分の一ぐらいかな。あと
 セメントをぬるほうが大仕事やからなあ。し
 かし、とにかくまあ、きょうのぶんは、全部
 やりとげたわけや』

ぼくは座敷へあがると、ねころんで、脚腰
 をのばした。妻は夕食の支度をし、いつもよ
 り、よけいに、ごはんをたいた。なれない労

ような気がするのだ。ぼくはとう／＼、いち
 ばんらくなように、枕にほおをあてて、うつ
 ぶせになった。そして、だんだん心配になり
 はじめた。腰や脚に戦傷を受けたあとに神経

痛がおこり、一度はそのために病院へかよい、
 二十本近くもの注射をせねばならぬことがあ
 ったからだ。こんどまたそういうことになっ
 たら、そのあいだは勤めを休まねばならない。

ところが、ぼくたちには精勤手当というもの
 があって、そのなかから、一日休むごとに、
 一週間まで二百円ずつ引かれてゆく。ひとを
 たのますに、せんとく場の工事にかゝつたの

朝の河

浅野 晃

朝の河は

斜めに長い朝日の中を

半ばは山のかげになり

いそいそと流れてゆく

光は竹林を透いて

緑を払散し

岸の梅の木や白壁をかがやかせ

朝の河は純潔な天の鳥だ

敬虔に光の中を舞ひくんだり

釣橋の下で羽ばたき

岩のある難所を大きく屈曲すると

ゆつくりと翅をひろげ切る

しだいに山は遠ざかり

兩岸が開け

日はすでに高く

汝は自分の全身を光の中にまかせ

悠々と悠々と

迷はず惑はず下つてゆく

ああこの朝の鳥

瀬となつてささめき

淀みとなつてたゆたひ

ああこの地の母鳥

いくつかの長い橋もくぐりぬけ

寛大に肅然とそれはゆく

河よ汝は無名ではない

汝はその名に於いて誇りに流れる

た

汝は単なる自然ではない

汝のいそしみは人間のいそしみと結びつき

われわれは汝としっかりと結びついた

さういふものとして汝は

漫々として満ち足りる

若々しい元氣と

いつのまに成熟した智慧と

汝は信あつき挺身者

そしてゆく

収穫にいそがしい人々は

手足を働かしながら汝を見る

そして励まされ力づけられる

静謐で清浄な空間を

声なき無尽の光は充たし

河も野も光をうけとり

感謝のまことを反射しながら

悠々と悠々と

疲れを知らず嬉々として

溢れるやうに幅をひろげ

岸とすれすれに波打ちながら

人間くさい地帯をもちとはず

人間の不浄をもこころよく受け入れ

空と地平のつながるあたりに

歓喜の眼を据えながら

汝といふ山出しの巨きな象は

巨きな脚をふみしめふみしめ

ひしめく家並をすぎてゆく

いてふもみち

服部三樹子

二条の橋ほのほの白き夕ぐれに石のてすりに触れて渡りぬ
橋をゆく人も車も少なくて右も左も白き夕ぐれ
山と水空とネオンの暮れ色に石橋渡る石の白さに
ほのかなる約束のごと石の橋東に越えしことなかりけり
一ひらのいてふもみちの散るまなかひ昔は物を思はざりけり
我がこころ何に恐れてゆきがたくなりし辺りか夕茜雲
風の運ぶ便りも遠く黄金なすいてふ大木の下に見る夢
目もあやに紅葉散りしく地模様につと拵げたりいてふ落葉

も、第一は費用をけんやくするためだったのに、そのために病気になるたしたら、せつかくの苦勞も、なんにもならない。勤めの將來にも、なにか不利なことが、おこってくるにちがいない。「どうか、ひと腕のうちに、なおつてくれるように」とぼくは、枕をかゝえこむようにしながら、じっと、息をつめて、まっすぐに脚や腰をのぼしていた。すると、ふいに、かけぶとんが引きめくられた。びっくりして頭をあげると、いつのまにか、妻が足もとへ来て、脚や腰をもみにかゝっていた。『あ、もんでくれるのか』
『きょうは、ほんとに、ごころうさんやったわ』と妻は、はずかしそうにした。
『ありがとう』とぼくは口のなかで言った。もういゝと言つても、妻はなお、もみつゞけていた。それから、ふと手をやすめ、しばらくためらつていてから、
『このあいだから、言おうと思つてたんやけど……もつと早うに言うたら、よかつたんやけど……』と言いくそうにして、ぼくがさいそくすると『わたし、どうやら、妊娠していらしいの。お医者さんに見てもらつたら、もう五カ月ぐらいやつて。赤んぼが出来たら、まいにち、おむつのせんとくをせんならんから、だから、せんたく場が、コンクリートになつたら……』と言つた。

編集後記

十一月二十三日宇治に用務があつての帰りに、久し振りで真法院庵庵に稲垣足穂氏をお訪ねした。氏は開口一番「果樹園が文學の本道を歩いてゐると激励して下さい。池沢氏の短篇はその本質を秘めてゐることだつた。森氏の訳詩も立派だとのことであつた。芳野氏の詩人大垣圓司の運命を書いた文章、上村氏の水橋記には涙が流れた由だつた。福地氏の凝視と歩行の貴さも賞めて下さつた。この本は同人の呼吸が合つてゐる文學雜誌は珍らしい由で、本号に掲載した詩をいただいた。
十一月二十五日福地氏が高松高校の生徒を引率して来阪したが、時間がなくて会へなかつた。
十一月二十八日電通賞の會で竹中郁氏にお会い出来た。数年前開口大学先生を興津にお訪ねした際、氏の詩集「動物磁気」は戦後最高の詩集だと推賞された。旅から帰るとその「動物磁気」をいただいでゐた。その御礼を自然の機会にと思つてゐたが、その願ひを果した。(〇)

果樹園 第二十四号(毎月二日発行)
昭和三十三年一月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行所 同朋舎
池田市野町一六八
印刷所 同朋舎
發行所 果樹園社
定価 三十円

定価 三十円

33. 1. 10

果樹園二十四号 昭和三十三年一月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園二十五号昭和三十三年二月一日発行(毎月一回二日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第25号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
ナカイ氏「四行詩集」 矢野・森共訳
愁 い 堀ノ内 歴
新詩を賦す 山根忠雄
ムッシュウ・オノレの詩石 浜恒夫

堂島河畔 福地邦樹
黒犬物語 デオンテュク
落日の河 浅野晃
日曜左官 池沢茂
螺旋階段 上村肇
噴水 美堂正義
発芽 田垣晴子
雲 服部三樹子
東京通信 田中克巳

書簡から見た

伊東静雄 (二三四)

小高根二郎

淡水の中で

私の皮膚に卵を生みつけて行く
無郎気な魚の後から
私は一度は呼びかける
君 苔藻とまらがへて
うっかり自分で食べぬ様にし給へ

Verkehrsinself (交通の島)

私はのめる
汚れ梢の上に故郷の谷川祭が
安全地帯に残つた私の下半身
(註・谷川祭とは故郷讃草の本明川で行はれる盆の燈籠流しであらう。)

修身

植物園・身に合ふ新衣裳、靴
「お早う」
発声学の教材は其れから始まる

風景

傀儡師は山へ去り
紙切れの化けた鳩だけが
バタ／＼と私の頭の上を
飛びまはる

音楽

私は何時も風景の中で端役だったが
或る日 高貴な花環をおくられた時
私は少しも疑はなかつた

川沿ひの公園

物静かな遊歩者の目に
美しい冷淡な川波にうつしたの
ひき／＼に浮び上る
真白い死魚の腹だつた

散步

水から上り 凝つとしてゐる蟹よ
堅い甲羅よ
(早や鰓は乾きだす)
私の詩の様なはないあぶくよ

神様に

かいつぶりは水の上に
私はあなたに落書きをする

牧羊人

私はなぜ私の犬を牧羊人と呼ぶか
私の野性の花は清く小さく あまりに脆
いから

註・伊東の鯛犬ヒルトに関しては昭和五年四月七
日 附酒井百合子さん宛書簡参照

後退

後退には何時も楽しさが
遠くなり 又急に近くなる太陽が

昨日の敵

然し夜は——
或る深夜に私が公園の中を通ると
百獣の号び声の間に
胸に泌み入る獅子の呻きがはっきりと聞
こえた

H・G・ナカイの
四行詩集 抄録1

矢野峰人 共訳
森亮

第一歌

陶人の窯に収むる埴となる。
壺の蓋焼かれざる原のすがたは
玉光る冠か、王の首か。

第五歌

堂々と大地の背に乘れるまま
え知れざる的さして射らるるわれら。
楽しかれ、万劫年の過ぎゆかばわれら残ら
ず
神秘の国にたどりつくさだめ負へれば。

第八歌

幸ある人かな、甘睡に陥ちてふたたびと
覚めざる人は。斯くやすらかに人果てなむ
や。
わざはひ充ちて賤しかるこれなる世をば
慮りも憂ひもなくて誰か渡りし。

第十五歌

危殆のときは今迫れり。味はひたまへ
愛蔵の小瓶より、愛と勇気の霊薬を。
葡萄の酒のひとつと歌ひとふしに
晴らずぞよけれ、汝が憂ひ、汝が苦しみを。

第十七歌

ああ酌人よ、わがそばに坐れ、ひと杯の酒
を以て

私は昨日の敵に言ってやった
それは一つの石だ
それは一茎の草だ
そして お前は私の敵だったと
或る友に

「静かなクセニエ」のエピローグとして

獅子は屋は兎に角楽しかった
目の前の鉄格子は
人間共を寄せつけない
自家の警句や格言とも思へたから

よきひとよ、わが手の杯に注ぎたまへ
そのみぞ我が歎びの葡萄の酒を。
われらが身たとへ疲れて眠るともなにか楽
しき。
酌めよ酒、君若しも夢幻楽土に遊ぶを願は
ば。

第二歌

生るるすなはち揺籃にわれら縛られ、
死ぬるすなはち塚穴にわれら棄てらる。
斯かるみじめの姿して来たり去りゆく、
ああ、そのゆゑか増上慢、我執ぞ深き。

第三歌

往にし世の騎馬兵の、歩兵の驅

われ楽しみて煩ひごとを忘れなむ。
数知れぬ王者らの冠を奪ひし「時」は
なにほどの良き計らひをえやはする、われ
と汝とに。

第十八歌

われら喜憂の照り蔭る隠棲にかく籠らひて
無益の理性の誤れる用兵に疲れ、あくみぬ。
策戦にひと日はつひえ、次の日は激戦に暮
れ、
理性ゆゑ、わが生の日々はいや増しに闇を
濃くする。

第十九歌

解き難きこの世の謎に自失するわれなら
ず。
狂者に非ず、外道に非ず、われ酔へるの
み。
酒飲まぬ人いかで我より賢しからむや。
極めたる賢者のわざは己をば忘ずること
ぞ。

第二十一歌

恋人の思ひあふれて草となり、
恋人の思ひあふれて木と芽ぶく。

あなたは
(僕らにもせて真の深夜があればいい)
と考へないか

エケード

私から詩人への手紙のザッハリッヒな一
節
「この夏は殊に暑い、町中が海岸に集つ
てゐる
町立の無料脱衣場はいつも一杯だ
そしていたづらな青年団員が
掏摸をつつて海岸をほつつきまはる」

詩人から私への返事中の情熱的な一節

第二十二歌

恋人たちは地の下、のど渴かしてうち臥せ
ど、
一口の水掬ひなば彼等よく甦るべし。
天路黄泉路は遠くして誰か知るべき。
彼の岸に黄金しろがね移すべき術はた知ら
ず。
さればこの世を楽しくあらむ。死てふ雄々
しき鬼は
成吉思の、帖木児の軍怖れて、逃がれしや。

第二十三歌

友よ、いかなれば過ぎし日のおのれの業に
力及ばで為さざりしことどもに、心を痛む
る。
この日楽しくあれよ。大方の汝が生の月日
事なくて
過ぎしかば、残れる日々もなかさは過ぎ
ざらむ。

註 これの四行詩の原作者ホセイン・ゴツツ・ナカイ
氏は昨秋まで駐日イラン大使として東京に在った人
でも、本国で外務省の重要なポストに就いてゐたこと
もある外交官であるが、哲学や歴史に関する著書も
あるし、このやうな四行詩も書く。わが国では一向
知られてゐないが、中近東では氏の文名は高いと聞
いてゐる。この邦訳は矢野峰人先生の協力を仰いで
私が試したもので、近くオランダの某書店から出版
される「二国語版ルバイヤート」に収められること
になつてゐる。(森亮記)

「私が田舎へ永久に帰ったことを
さぞ、そっちのすべての人は評判をして
めるだらう
ついでがあったら君は新聞にかう書いて
くれ給へ
あの男は日記と書信の外はヴェルケを信
じてないって」

私が生徒達にした訓話の簡条

「どんな種類のトレモロにもスイッチを
入れること
テーマのためにはどんな時間も早すぎは
しないといふこと
深い山林に退いて多くの旧い秋らに交っ
てゐる

今年の秋を見分けるのに骨が折れるとい
ふこと」

(昭和八年『呂』四月号)

この四月に発表された十五篇の詩には、「交
通の島」(Verkehrinsel)と云ふ主題が附け
られてゐる。多分、「川沿ひの公園」とある
やうに、堂島川に浮んだ中之島公園に取材し
たものであらう。然し、第十四篇目の「或る
友に」の副題は、——静かなクセニエのエピ

愁い

堀ノ内 歴

新春の町で どの場しよへでも
次から次と人が出てくる、私も、
私は時計をみる、
それは昨年止まったまゝ、
尤もらしく覗いてはみても。

年が改まると 私の背丈は又、
がくんと一段無用の方へ延びている、
死ぬ時きつと背丈は愚凡に
天に届いていよう、
よし！ その時こそ身が解き放たれるの
だとしても。

みていると どの人もどの人も
戸外の寒波に 襟固め身を縮めてゆくが
おゝ なつかしい仕草だ、
それさえ私にもう出来ないことを。

(一九五八・一六)

新詩を賦す

山根 忠雄

昔の教へ子から

たまたま年賀状が舞ひこんだ

「謹賀新年

大変御無沙汰してをります

故郷を離れて四年目

はや女房がかたはらはに……

東京の郊外に居を構へ

しづかに正月を迎へました

本も読めず

芝居も見られず

ただ仕事仕事ですが

詩の情は決して忘れてはあません」

うれしき心意気よ！

先生はおもむろに盃をあげて

はるかに

彼の健在を祝福した

(三三・一)

ローグとして——とある。やはり、「静かな
クセニエ」の方が真の主題で、「交通の島」
は変化を見せるための配慮なのだらう。

この十五篇中、「交通の島」の主題に該当
すべき初めの十二篇には、昭和五年三月十七
日附宮本新治氏宛書簡の解説で既述したやう
に、ジュール・ルナール (1864—1910) の影
響が感じられる。が、問題はむしろルナール
の影響のない末尾の三篇——「昨日の敵」或
る友に「エケード」にある。

この三篇の対象は、多分、青木敬磨氏であ
らう。読者には少しげんごな感じがするかもし
れないが、伊東は生前、「敵意を感じぬやう
な友情は真の友情ではない」と放言してはば
からなかったことを思ふと、別に不思議では
ない。事実、第七篇目の「音楽」には、△私
は何時も風景の中で端役だった△の不本意感
に始まり、△高貴な花環をおくられた時……
少しも疑はなかった△の絶大な自負で結んで
ゐることを思ふと、「呂」の主宰者青木氏に
「昨日の敵」を感じ、△それは一つの石△
△それは一茎の草△△お前は私の敵だった△
と痛烈な啖呵を切ったとしても肯けさうであ
る。

この啖呵をもっと具象化したのが「或る友
に」である。

ここで伊東が獅子に譬喩してゐるのは、真
鉄のやうに頑固な意志を持ち、Vorwärts(進
め)と叫び止まなかった青木氏のことであら
う。時には、動物園の獅子が深夜にする呻き
のやうな弱音を、伊東は聞き取ったのであ
らう。事実、青木氏は当時の伊東の詩を認め
る弱音を持ち合せてゐなかつたのである。

「『呂』の初期に出た伊東の詩文は、ほく
も少々おどろいた。……中略……韻律を意識的に
殺してゐる。殺そうとしてゐる。その意識
だけが露出していやなものになった。ほく
が……中略……びっくりしたのは「曠野の歌」を
コギトの何号かで見たとときだった。今度は
腹の底からびっくりした。そしてうれしか
った。ここに鋼然とひびくものを、ぼくは
口のながで溶けるほどくりかへした。」

(昭和十二年『呂』コギト二月号、青木
敬磨「哀歌」)

この青木氏の述べた述懐でも判るやうに、彼は「コ
ギト」の田中、保田両氏のやうには、伊東の
天才の萌芽を発見することができなかったの
である。もともと青木氏は「呂」にワルト・
ホイットマンを翻訳連載したほどのどちらか
と言へば万葉派であつたから、それにひと
ネリを与へた古今派の伊東に、理解がとどか
なかつたのは当然である。

この対青木意識の他に、「或る友に」はリ

ルケの「豹」(Der Panther) にヒントを得
てゐるらしい点は注目し得る。

鉄棒の掃過のために

Sein Blick ist vom Vorübergeln der

Stäbe

彼の眼はつかれて、もう何も見ない

so müd geworden, dass er nichts

mehr hält.

彼には千の鉄棒があつて

Ihm ist, als ob es tausend Stäbe

gäbe

千の鉄棒の向ふに世界は存在せぬ

und hinter tausend Stäben keine

Welt.

(大山定一氏訳)

このリルケの豹に限る千の鉄棒を、伊東は
獅子に限る鉄格子——人間を寄せつけぬ警句
や格言に見立てたのであらう。が、リルケの
視覚的な思惟に対し、伊東は譬喩としての視
惟をすでに自立してゐる点は賞讃していい。
最後の「エケード」はさらに問題を含んでゐ
る。そもそも「エケード」とは何を意味する
のか判明しない。この詩の筆写を担当してく
れた福地邦樹氏の見解によると、そもそも伊
東の原文は「エチュード」であり、それを植
字工が「エケード」と誤植したものであらうと

云ふ。

私はこの詩が△私から詩人への手紙のザッハリッヒな一節▽△詩人から私への返事の中の情熱的な一節▽△私が生徒達にした訓話の簡条▽の三聯の多角的な構成から成り立ってゐる点から、Ecke (多角) とKarte (葉書) との合成語ぐらいに想像してゐた。

然し、高橋重臣氏の専門的な見解によると、この合成は少し無理のやうである。高橋氏の想定によると、希臘語エケード (Ekeid) — あちらへ、彼岸へ — ではないかと云ふ。このエケード論から、図らずも私に、何国語かの「反響」(Echo) ではないかとの空想が浮んでくる。この「反響」ないし「木魂」と云ふ解釈が、この詩の題名に最もふさはしい。大方の示教に俟ちたい。

この題意論は兎に角、第一聯△私から詩人への手紙のザッハリッヒな一節▽の詩人とは肺疾患のため大谷女専の教職を辞し、故郷である兵庫県世保郡御津町岩見港に帰った青木

氏のことだらう。さびれた漁港に帰った青木氏に、堺大浜界隈の喧嘩な海辺の模様を知らせた伊東の手紙の一節だらう。伊東はこの第一聯と第二聯から、次のやうな作品を合成して十一月の『コギト』に発表してゐる。

この夏は殊に暑い 町中が海岸に集つて
ある

町立の無料脱衣所のへんはいつも一ぱい
だ

そして悪戯ずきな青年団員が
掏摸を釣つて海岸をほつつきまはる

町にはしかし海水浴をしない部類がある
その連中の中には 私をゆるすまいとす
る

成心のある噂がおこなはれる
(有力な詩人はみなこの町を見捨てた)
と

(第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」—海水浴—)

つまり、「海水浴」では大阪の町を見捨て得ぬ伊東に対する「呂」同人一部の揶揄を對象としてゐるのであらう。

話は「エケード」に戻るが、第二聯△詩人から私への返事の中の情熱的な一節▽は、岩見

堂島河畔

福地 邦樹

窓からは暗い河面が見えている
今宵は冷えるかして
もう霧が立ちはじめている
私たちは船室のように温い部屋で
ビールをかたむける

そこへ美しいお嬢さんがあらわれる
灯がついたようにその辺りが明るくなり
まもなく その恋人君がやってくる
その二人を眺めながら
私たちはゆっくりビールを飲む

向う岸の建物のおかりが
だんだんうるんで
血色のいい恋人君は話題に事欠いて
野暮な仕事の話などしてららしい
私たちは何度もビールを注文する

銭 湯

くたくたの心わびしければ
夜更けて銭湯にゆく

近松の戯曲にある

下大和橋

の袂のアルバイトへ引越したが

新築なので部屋が湿っけて

簾筒はしまらなくなり

オレの膝までロイマチスを

ぶりかえし

ガス・ストーブをじゃんじゃん焚いたら

壁からなにやら

植物の芽がはえてた

モヤシのような……

ネギのような……

ああ この現実におどろいて

この芽を愛して

成長したら食べてみよう決心する

食塩をふりかけ

パリリと新鮮な音がしよう

いまのところ まったく

俗世とは縁が遠い

(非現実)

なる青木氏から伊東に送った書簡中の文学論であらう。△日記と書信の外はヴェルケを信じない▽と云ふ所信は、いかにも徹底した青木氏らしい作品観である。私はこの青木氏の所信を、伊東の信念として昭和五年秋の百合子さん宛書簡の解説で書いたが、これは青木氏の見解を伊東は我が物としたのだと想像したからである。事実、伊東は青木氏に熾烈な敵愾心を燃やしながら、同時にまた最上の畏敬を払っていたからである。伊東はよく文学は排便のやうな生理作用だと口癖にしてゐたが、これは「文学は糞壺だ」と主張した青木氏の影響であつたやうである。

「エケード」の第三聯△私が生徒達にした訓話の簡条▽は頗る興味がある。教師生活四年の体験を経た伊東の、天晴れな教師振りが想像できるからである。△どんな種類のトレモロにもスイッチを入れること▽と△テーマのためにはどんな時間も早すぎはしない▽は流行を、去年の『呂』十一月号に発表した在原元方の歌に典拠した時の不識別観を歌つた△深い山林に退いて多くの旧い秋らに交つてゐる、今年の秋を見分けるのに骨が折れる▽は不易を、解りやすい言葉で生徒達に説いたものであらう。

言はば、「エケード」は第一二聯で伊東、

だいぶ濁つてはいるが
湯はひろびろと湧き
呆然とつかりいると
やがて頭はしびれ
なにとなくゆるやかな気持となる
だまされたやうに
うらがなしいあたかき
あの眉つばな憂などをほかにすれば
人の心に花と咲くものの何があるのだら
う
友もなく酒もないときは
どこに思いを放てばいいのか
石炭でぬくめた
湯ばかりがぬらぬらと湧いて

青木の対応を、第三聯で次代に語りつぐべき文学原理——芭蕉の不易と流行とを語つてゐるのだと思はれる。

その月末、伊東は次のやうな書簡を百合子さんに書き送つてゐる。

「久し振りのお手紙有難う。東京に行かれたのですか。私など学校と家との間を十町ほどあるく外、この半年ほど、どこにも行ったことのない様な、ひっこんだ生活をしてゐます。安代さんに、ついでありまし

黒犬物語

ピオンテエク

大きくあくびしながら四つ肢の骨をのぼす

それから背中中の蛋をかき

バラ色の舌で鼻づらを舐める

おお まだ月が出ている

それに 水たまりにうつってぞっと寒気を

感じさせる白い錫 夜明の明星

あれは夢だったのか 野獣の群が

森の縁を駆けてゆく わあっと叫びながら

おれは切株の上をのりこえて走る

耳鳴りするほど風をきり

眼は琥珀のように光る

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

歓喜と放肆にかつと燃えて

汗ばむ血管 最後の飛躍へと

臆はするどく緊迫する

牡鹿は角をふりかざして嚇す

それっ！

それから月は蒼白く消えてゆき

戸口の隙間から あったかい

ミルクの匂 迷夢はほろ苦い

黒犬阿呆はまたよたと垣根へ向い

ぶるるっ顔をふるう

夜明の明星を喰っちゃおうと思ってみるが

獲物としてはあんまり貧弱だから

そのままに輝かしておいた

(たかはしげおみ訳)

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

二三日、家も少しは広い表記の所に移りましたので、勉強も出来ることせう。

姫路にも行きたい行きたいと思つてをります。けれどどうしても暇がありません。

身体も毎日ぐったり疲れるものだから。

実にいい気候ですね、昨年頃まで春になると頭が爰になってこまりましたが、今年などは、ほんやり木々がすすみのやうに若芽立つのをみてる、春は自分の外にあるが、楽しい、といふやうな気持で、うつくしいと思つてをります。永く〜生きてゐねば、立派な、少くとも自分らしい仕事は出来ぬとしみじみ感じて、身体にも気をつけてみます。

先生におかあさんにもどうぞよろしくおっしゃって下さい。字が乱雑になってすみません。

第一書房から出たツルゲネーフの散文詩

(註 中出省三郎氏選) は黄色い皮のうつくしい、又内容も立派な本です。

ゆりこさん

ピアノひきますか

伊東生

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

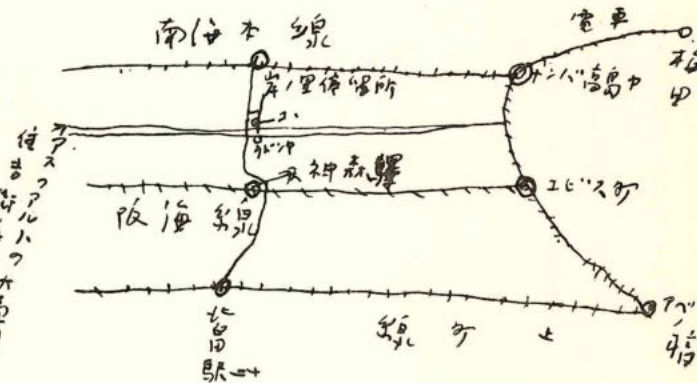
.....

.....

.....

.....

.....



(昭和八年六月二十九日天下茶屋―酒印―より兵庫
 県武蔵郡魚崎町横田字内田二九宮本新治宛はがき)

この新居で伊東は、『わがひとに与ふる哀歌』の中の主要な作品のほとんどを執筆したのである。『呂』六月号の次の作品も、

全く後代の伊東の風韻を先駆ける詩篇であるが、この転居と母、妹を引取つての新生活の荷重は時宜を得たからであらう。

病院の患者の歌

あの大へん見はらしのきいた、山腹にある
 友人の離室^{リシツ}などで、
 自分の肺病を癒さうとしたのは
 私の不明だった。

友人といふ者は あれは、
 私の生きてゐる亡父だ。
 あそこには計画だけがあつて、訓練が欠けてゐた。

今度の 私は入った、町中の病院に来
 て見給へ
 深遠な書物の如^{ごと}な あそこでのやうに、
 景色を自分で截り取る苦勞が
 だいじ、私にはまぬかれる

そして、きまつた散歩時間がある。
 狭い中庭に
 コースが、一目でわかるやう 稲妻や

いろ／＼な平仮名やの形になつてゐる。思ひがけず接近する弯曲路で、他の患者と微笑を交はすのは遜った楽しみだ。

その散歩時間の、始めと終りを病院は患者に知らせる仕掛として、振鈴などの代りに

俳優のやうにうまくしつけてある、犬を鳴かせる。

そして私達はみんな、小気味よく知つてゐる。

(僕らはあの犬のために 散歩に出てやる。)

あんなに執念く、私の睡眠の邪魔をし、

時計は、この病院にはないのかつて。

あるよ。あるにはあるが、使用方法がまる

で違ふ。

私は独木舟に乗り、銃銃を提げてその十二個のどの島にでも

四 月

彼女が 幼い時に呼びならはした

草木や昆虫らの名前は、今は一つも通用

しない。

野に 一概に白い花が咲いて、胡顔子

木蓐 ぎつた 茨は見分けにくい。

野犬は其れらの間を、首で物を捜して絶

えず不安に垂れ、

だが四肢は軽く跳んでゐる。

みどり色をした空に、鳥賊の白い甲に似

た雲が懸る。

変へねばならないものは、彼女自身では

なく、又植物や昆虫らでもない。

汝ら心を騒がすな。神を信じ、又我を信

ぜよ。

始め彼女に好かれず、けれど ゆめみた

この野辺の内て彼女の頼つた、

彼女があの短句を、彼女の枕元にかけてく

れた。

字彙は 字彙のためにある。

熟しかゝつたものを成熟させ、死にかけ

たものを死なせる。

姿見の奥はあまりギラ／＼として眩しい

彼女が姿見のまはりに、葡萄や獅子の唐

草模様をつけたのを、兄弟や友人達は

笑つた。

彼女が真に愛したもう一人の人よ。

彼女の、残つた室に行つて、その曆を見

て下さい。

自分がつけた唐草模様を、彼女がどんな

に信じなかつたかを。

稲光りは、夕方の野辺の上を、彼女を捜

して走り 自らくらんで通りすぎる。

あなたもきつと此処に誘はるゝ。

しかしこれらは何の復讐の意味もない。

いや、彼女はその時に準備し、今 彼女

とあなただけが知る道に

信じないこれらの花ですら楽しく花環を

編んでゐる。

あなたは、この野に一概に白い花や、そ

の中に栖む昆虫らを、

あなたの冠と呼ぶことを思ひつく。

泥 棒 市

私と弟が 市街の中央の

事務所区に通ふために利用する、

早朝の割引電車の窓から、

数年の間といふもの、眺めつゞけた泥棒

市は、

私達の電車が、高い軌道堤の上を走つた

し

それは、まだ朝露の晴れ始めない時間だ

つたので

私達に現実に見えたことは

一度もなかつた。

ところが私が新しい一人を

私達の貧しい、共同の住居に引き入れた

いと弟に申出で

その機会に、

今迄に彼女に見せかけて来たよりも

私がどんなに多くのものを持ってゐない

か

それだから、夫としての幸福な尊敬を

落日の河

浅 野 晃

松林のある丘から

下をながれる河を見る

落日は河の上

野の上にある

降りてくる風船玉のやう

影は水の面に

金の橋を架けてゐる

日のくだけち この時に

いくたび私は会つたことであらう

旅と故郷とを記憶は

いつも重ねて出して見せた

余光はあはあはしく松の幹を染め

彼女から受けることが、

どんなに困難かといふ

悲しい告白を私がしたときに、

きいてみた弟は笑つて、突然に

泥棒市を行つて見よう

と、私を誘ひ出た。

さて、泥棒市から帰つた私が、

非常な安心と確信とで、早速私のノート

に書きつけた、

すぎ去つた木犀の香で

黒光りする角柱にかかつた

孫次郎の面を

浮き上らせる

いまの世の信うすく

白い壁は墜ち

乞食の掌さへこのいやはての贈与をむさ

ぼろうとせず

虚脱の中の時はずき

おどろきさめて聞耳を立てれば

何の物音もない

河につづく街々には

円や四角の工場の建物も見え

国道には無数の車が走つてゐるのに

人も車も茫とくすむ路上を

黙劇のごとくにすぎる

日の風船はますます膨れ

新しい信条は左の通りである。

泥棒市が、泥棒市でなかつたら

どんなに魅力がないことだらう。

私たちは商人の詐りの機に

謝せねばならぬ。

私に欠けてゐるすべてのものを

盗まれたと、思ひこむのは

これは、私のこの上なく楽しい権利。

(昭和八年「呂」六月号)

(訂正・第二十四号「事物の本抄」第三聯第一行

「白は花環」は「白い花環」の誤植)

河の向ふ 幾層の人家の向ふ

きれいに開かれた野の向ふ

一帯低い山の稜線に

落ちかかる

空はいつか夕映をひろげた

やがて真紅の舞台に

千万の仏や菩薩の顔が

びっしりかなしく微笑する

千年むかしもさうであつたし

千年末年もさうであるだらう

河は皺だつたまま

流れてゐるとも見えず

水の流れとも見えず

むしろ心やさしい素肌の反射鏡

ただ かすかにかすかに

うたつてゐる

神よ安らぎを与へたまへ――

あくる朝、目がさめると、脚や、肩から腕のあたりが、やはり痛んでいた。それでも、これまで経験してきた神経痛とは、どうやら、違わらしかった、いつもなら腰の下のほうを中心に脚全体へかけて、きもちのわるい疼痛が、ザク／＼と波及してゆく。そういう「きもちのわるい」痛みは、たしかに、ない。ひさしぶりで急に酷使された筋肉が、たゞ一時的に、びっくりし、ちとこまっただけらしいか。さらに一日、二日たつと、そのことは、もっと、はっきりしてきた。ながいあいだ使われずに放っておかれた筋肉は、たま／＼使用され、その疲労から回復すると、もう一ぺん運動させてやってくれと、逆に要求して見みたいだった。ぼくは、ほつとした。安心したというよりも、うれしかった。耳の遠いぼくは、そのほかに体の障害がおこると、精神的にも、生活の負担に耐えられなくなってしまうからだ。妻からは、妊娠を打ちあけられたばかりだった。体の調子がいくことはしかし、妻には、だまっておいた。公休日になったら、一日がかりで、せんとく場にセメント

トをぬらねばならない。その仕事がぶじに出たら、だまっけていても、しぜんにわかることだからだ。もと／＼ぼくは左官の仕事などうまれてから一度も、したことがない。義父に話をきかされ、そのとおりに、やってみようとするにすぎない。しかし体が自分でも意外ほど回復したので、その日が、むしろ待ちどろしくなった。

ところが、その前日は、夕方から雨が降りだし、だん／＼ひどくなった。夜半ころには、ざあ／＼と納屋のトタン屋根を打って、まっくらなへやのなかまで、すっかり雨の音に、みだされていった。

「あすは、こんな雨だと、晴れたところで、あかんやろなあ。第一、セメントと砂を持ってきてくれるかどうか、わからんなあ」

ぼくがひとりごとみたいに話しかけると、妻は、いらだ／＼しように、なにか言って、ためいきをついた。いつもじきに寝入ってしまった妻なのに、なか／＼ねむれずに、しきりに寝返りを打っている。腹にやどっている子のこと、気がか／＼っているのかもしれない。

ぼくも、朝がおそいかわりに帰りは夜ふけになりがちな勤めのせいか、どうしても寝付きがわるい。そのかわり、朝はたいいてい、日が高くなるまで、寝込んでいた。

螺旋階段

上村 肇

三間半に四間半の小さな正方形に近い家を新築することにした。南に六畳の居間と四畳半の子供の勉強室をとり二階は六畳ひと間の静かな私の書斎階下の食堂は調理場を兼ねてや／＼広くとり

外にタイル張りの浴室と洗面室。私が設計図を差し示すと独身のまだ若い建築士は大きな瞳を輝やかし図面を美しい指でこつこつ叩きながら云ふのだ。

この明るい東向きの玄関の傍らから螺旋形の優美な階段を貴方の二階の部屋にかけませうそれはこの家全体の化粧になるのですから――。

「セメントが来ましたよ。バタ／＼で、かどまで……」

この日もぼくは、あわただしく駆けこんできた妻の声に、ようやく目をさました。起きてゆくと、オート三輪から、直接道路のうえに、砂をかきおとしているところだった。よ

噴水

美堂 正義

葉を落しつくした樹木のへんに明るい公園の午後噴水は空に噴けてゐる

もうひととは見向きもしないし色豊かな睡蓮も枯れ沈んで真夏の烈しい光のもとで咲き誇った色彩を覗ふことは出来ないそのとき

一本の光る柱と眩しく輝き私の眼を楽しませて呉れたがいまはひっそり静まった空気のなかに休みなく耐へてゐる 立つてゐる

うやくセメントの袋だけ庭まで運びこんでもらい、砂は、ぼくと妻とで、スコップですく

って箱にいれ、まえとうしろを持って、なんべんも往復して、運び入れた。それから、セメントをこねるのには、適当な箱もブリキもないので、とう／＼／＼／＼を使つた。たらいのなかに砂をいれ、その六分の一か七分の一ほどのセメントを加え、水をそ／＼い、スコ

ップで、かきまぜる。昨夜の雨で土がしめつていられるけれど、セメント屋は「かわいていたら、水をまいて、しめらんならん。雨がふつたんで、かえて、よろしかったかな」と言っていた。ぼくはセメントをこねおわるとスコップですくって、土のうえに放りだす。

すると妻が、くわや板を使って、たいらに、のぼしてゆく。それから、義父から教えられたとおり、ノリのカンのふたで、なでる。長方形のノリのカンのふたは、平面で、どこにも筋や凹凸がないから、コテがなくても、どうやら、その代用をする。そして、せんとく場は、はしのほうから、すこしずつ出来あがつてゆく。たゞ、たらいでセメントをこねるのは、スコップが、さきの四角い、小型の、セメント専用のものでなく、土を掘るための、さきのがつた、大型のものだから、おもしろい、骨が折れた。とがったさきが、たら

水事で一夜にして妻を失った私は何気ないこの

化粧と云ふ言葉にひどくうたれた。そして予算をはるかに超える螺旋階段を

現実的に実現しようと切に念つたが――。

いふふちや底につかえて、おもうようにあつかえないからだ。すみのほうには、全然まざらない部分が残ってしまう。大きすぎるために、力がか／＼つて、腕や腰や脚がじきに疲れて、立っているのも、しんどくなってくる。とう／＼／＼／＼は園芸用の小さなスコップを持つちだし、しゃがみこんだまゝ、ぼつ／＼、つゞけた。そうしても、たらいに二ばいぐらい、いくらにもならない。四はいも五はいも作らねばならない。それでも、ひるすぎには、半分ほど出来あがつた。ぼくはぬれえんに腰をおろし、たばこをすった。妻は食事の用意をし、ぬれえんまで運んできた。そして、ぼくたちは、いつもと違って、庭に直接面したまゝ、ありあわせの昼食にかゝった。「こうしてると、なんだか、職人になつたみたいやなあ」とぼくは話しかけた。「いまはどうか知らんけど、ぼくらが子どもころに

発芽

田垣 晴子

陰影が初めて地上にゆらめき立った日
彼女は小さい呱呱の声を上げた。
豆もやしのように偏執で
水母のように照準も持たぬ
白い螺旋型の海を腹に抱いて——
最初の夜の潮騒に
彼女はまどかな月を恋した。
二日の夜の海鳴りのとき
葦も無い錆色のデルタに密かに吻けた
そして三日目の夜荒れ狂った吹雪は
彼女にふちのかけた木匙と
色褪せたペチコートと
遠い彼女の母の体臭とを遺した——
誰も居ぬ刻。
彼女は彼女の海の円礫に身を投げる——
いんいんと魚たちの鼓動がはじまり
海は初めて螺旋の底辺に墜ちた。
天空はなまぬるく湿って
びっしりと無際限に飢えていた。

して、さん／＼しぼられて、修業せんならん
のやるなあ。学校の土木科や建築科を出たら
いゝやるけど、大きな組織へはいれば、結局
サラリーマンや。サラリーマンになってしま
たら、さきには、停年というやつが……」
ぼくはしかし、ふいに口をつぐんだ。言っ
ても、なんの役にも立たないことだからだ。
兵隊にとられたり、いゝ就職口にありつかな
かったりして、ぼくたちの結婚は、ふつうよ
り、だいぶおこなわれている。健康保険、厚生年
金、退職金などの整備されている勤め口を得
たのも、つい最近のことにすぎない。つまり、
それだけ近い将来に、サラリーマンの終点と
いう不安がせまってきているうえに、せつか
く整備されている恩恵も、年限がみじかいた
めに、十分に受けられない。といって、その
日その日をごまかし、平然として、目さきの
ことだけに努力してゆくよりほか、しかたが
ないではないか……。

「どれ、あと半分ほどや。晩までに仕上げて
しまおう。きょうじゅうに終わったら、あと二、
三日で、使えるようになるんやからな」
ぼくは立ちあがって、たらいに砂をいれ、
セメントを加え、水をそゝいで、スコップで
こねはじめた。

は、植木屋や大工が来て、ひるじぶんになる
と、えんの、はしっここのほうに、遠慮しいし
い腰をおろしてね。いくらすゝめても、あつ
いお茶のほかには要求しない。自分の大きな
弁当箱を出してきて、梅ぼしや塩さけなんか
で、あついお茶をうまそうに、すゝり、すゝ
り、たべるんや。いまのぼくらが、そういう
職人と、おんなじ状態なんやなあ」

ぼくはしかし、みじめな気がしているの
はなかつた。むしろ、その反対だといって、
よかつたかもしれない。左官の仕事などやっ
たことがないし、おつくうで仕方がなかつた
けれど、さて、手をつけてみると、案外に出
来てゆく。心配していた神経痛も、逆になお
つたらしい。そして、いつも水がたまり、敷
板もくさり、どろ／＼になっていた庭が、い
まや、コンクリートで固められ、不似合なく
らいに立派な、一面のせんたく場に、変つて
ゆくらしいのだ。

ぼくはこれまで、ながい生涯のあいだ、ず
っと、下積みの生活を送ってきた。いろ
／＼欠点があるからだろが、ひとつには、
おさないときから中耳炎をわずらいつゞけ、
両方とも耳が遠くなっているためだろが。ぶ
じにサラリーマンになっているいまも、その
劣等意識をしきりに呼びさまされながら、社

東京通信

田中 克己

十何年間、関西住ひをして来た私にとって
去年四月以来八ヶ月間の東京での暮しは、眼
を見はることはかりであった。やつとそれに
慣れたので、そろそろ正気にかへって、なつ
かしい大阪京都の人たちに報告してみようと
思ふ。

東京は広すぎ、大きすぎて中々まはり切れ
ない。いやな奴には会はなくすむ、とはい
へるが、会ひたい人でもまだ会ってあない人
が多い。そのうへ昨年暮にかういふことが
起つた。第一は長谷健氏である。野田宇太郎
氏の「関西文学散歩」の出版記念会が十二月
十八日にあつて、伊東のことを書いていただ
いたお札を兼ねてゆくと、中々の盛会で、メ
イン・テーブルには野田氏夫妻のほか、日
夏耿之介、矢野峰人、石田幹之助、西脇順三
郎とあつたにお目にかゝれない諸先生が列席
され、うしろの方には森茉莉、幸田文、嘉治
隆一など文豪の二世がそろつておいでであ
る。この方々の祝辞をつぎ／＼にきいての感
想はいまは略する。出席できなかつた火野葦

会のすみのほうで、そつと小さく息をしてい
るにすぎない。将来もたぶんそのとおりであ
るにちがいない。それなら、せんたく場にし
る、なにか永続的なものを作りあげ、はつき
りとだれかのために役立ち、それで生活が成
り立ってゆくとしたら、そのほうが、生きが
いがあるし、将来にも不安がすくないのでは
ないか……。

「ぼくでも、大工か左官か、そういう職人の
環場に生まれていたら、もつと手さきが器用
で、筋肉労働もできて、りつぱに生活できて
いたかもしれないなあ」とぼくは言つた。

妻は顔色をかえた。かの女にしたら、ぼく
が会社の勤めで、さぼつたり、しくじつたり
するのが、なにより心配で、おそろしいのだ。
「なに言うてんの。わたし、左官や大工さん
の家、知つてるけど、みじめな生活やわ。あ
んなになんか、とつても、つとまれへん。つ
とまつたにしたかて、わたしはあんな仕事、
きらいやわ」

「じょうだんだよ。いまさら、しょうばい変
えなんか、できるはずがないやないか」

「お金がたくさんもうかるときもあるか知ら
んけど、雨がふつたら休まんならんし、仕事
がなかつたら、さがしにまわらんならんし」
「おまけに、あれはあれで、親方に弟子入り

平氏にかはって同郷の代表として祝辞を述べ
たのが長谷氏で私は「浅草の子どもたち」の
作者だなと思つてきいてゐる。そのあと洗面
所へ起つと、隣りに用達してゐるのは長谷氏

雲

服部三樹子

たらちねの母さへ知らず年明けの思ひの
空を東ゆく雲
ゆくりなく雪は降りたり帰り来し人と高
みに見る京の街
かゝふりて雪にやさしき京の街八坂の塔
は何時も高く
朝空の晴れし青さに雲のこり雪ふみゆき
ぬ公園の道
少女の日かく希ひしにあらねどもかね言
のごと雪は積りつ
夜深く枝に積りて朝ゆくに肩に零ける雪
解水かも
君しるす雪の足跡ふみゆきぬ稚なき日こ
そ帰り易けれ
雪積もる木の俣にいま生れ来ぬ雪解の音
をひそと伝へて

である。盛会ですねと挨拶して座にもどった。その翌日の新聞に、自動車事故で長谷氏の急死が出てゐる。

次は牧野吉晴氏である。「文芸日本」の会に出で、一度お目にかかったただけだが、私はこのごろ、この人の「閻魔の前で」といふ自叙伝を愛読してゐる。つづけてよましてもらへるつもりでゐたのが、二十二日の新聞を見ると昨夜銀座のバーで斃れた云々である。二十四日中谷孝雄氏はこれから本当の仕事をする男だったと声涙ともに下る演説をされた。

長谷氏にしても牧野氏にしても、したいだけの仕事はしおへられなかつたといふのが定評であるとしたら、自ら頼みて愕然たるものがある。今年からしたいだけの仕事をしようと思ふ。出来るか出来ないか知らないが、いままではそんな決心もしなかつたのである。

それ見る、早くいい詩を書け、といふ小高根君はじめ諸公のきつい眼つきが目の前に浮ぶが、詩歌ではあらはし得ない世界を私は考へてゐる。そのくせ今日、わざわざ探し歩いて新聞で見た「文学界」の特集「現代詩の展望」といふのをよんで、がっかりした。こんなのが特集なら、詩も、また詩に対する世間の眼もたかが知れてゐる。私はもすこし本当

のものを書きたく、よみたいのである。なんせお先まっくらで、しかも時間が短いのだ。

新年になつてからのある会で、こはい発言をきいた。某流行作家のあとの寿命（ここでは作家的）は何ヶ月か、といふのがジャーナリズムの賭けになつてゐて、三ヶ月乃至六ヶ月だといふのが大体の公論ださうである。夜の目もねせせずに書かして、いまも書かせつつあつて、その寿命を予測してゐる。これがいまのジャーナリズムなのださうだ。これより冷酷なものはあるまい。私はジャーナリズムと無関係なことをこの時ほど幸福だと思つたことはない。うそつけ、といふ人には首を

某大新聞の幹部に会つたら、「もう極度に腐敗してゐるからな」といった。何がはいはなかつたが、東京がともいいし、日本はともいいと思ふ。マスコミの偉力を以てしても何とも出来ないのだ。いなマスコミこそ責任を負はねばならないのだ。私は同感と憤懣と絶望を感じながら、これが東京で、これが日本だつたかと、ひとりごとをいつてゐた。詩や文学の世界はこれから逃れ得るだらうか。真の詩や文学だけがこの腐敗から脱却し得るのだ。

33. 2. 5.

果樹園二十五号昭和三十三年二月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園二十六号昭和三十三年三月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第26號

書簡から見た伊東静雄 小高根 二郎 ナカイ氏「四行詩集」 矢野・森 共訳 花のゆくへ 服部三樹子 せんたく場 池沢 茂 哀れなB・Bについて プレヒト	自画像 福地邦樹 父の留守 小山正孝 不在風景 浅野晃 早春 山根忠雄 K大使の息子 芳野清 羞恥の侵入 堀ノ内 歴 故国 岩崎昭弥 稲妻階段 上村 肇
---	---

書簡から見た

伊東静雄（二十五）

小高根 二郎

伊東は「病院の患者の歌」「四月」「泥棒市」でやうやく円熟した格調を見せだしてゐる。冒頭の「病院の患者の歌」は一月おいて「コギト」八月号にも転載され、詩集「わがひとに与ふる哀歌」にも収録されてゐる。肺疾患で帰郷した青木氏が、帰郷するまでに何処かの病院に入院し、それを見舞つた時にでも取材したものだらうか？ この詩の核心は、友人といふ者は あれば、

私の生きてゐる亡父だ。あそこには計画だけがあつて、訓練が欠けてゐた。

である。父を歌つた詩としては昨年八月の『呂』に「父祖の肖像」があつた。然し、それは、画像を介しての単なる存在の回想にすぎなかつたが、こゝでは父に対する批評にまで回顧がまともなつてきてゐる。伊東は父を友人と感じてゐる。自分の血肉に流れてゐる同型の資質が、伊東は気になりだしてゐたのだらう。伊東の父は糸商も業としたが、商人と云ふよりむしろ俠客的な存在であつたらしい。その野放しの豪放さは、計画性はあつたが、事を拾取る訓練に欠けてゐたのだらう。それが家を没落させたわけである。父の没後、

編集後記

一月二日伊東静雄の隠れた研究者である大阪女子大学の星立瑛子さんが来訪した。立原道造に比し伊東の評価があまり不当なのが研究の動機ださうである。すでに会員である大村の津江京子さんも、昭和女子大当時、卒業論文に伊東静雄を扱ひでゐた。さう言へば、伊東の評価は巷間に於けるより大学の方が遙かに高い。年賀状で拙論を激励して下さつたのも、広島清水文雄、早大川副園基、奈良女子大藤田俊一、高知女子大清水孝之、成蹊女子大内藤健三の教授方からであつた。

一月四日休暇で帰阪した福地邦樹氏を囲んで新年茶会を開いた。集つた者石浜恒夫、山根忠雄、堀ノ内歴諸氏、それに大東探博と令夫人幸子さんの七人だつた。伊東芭蕉説や東京在住同人を落にして林橋酒を酌んだ。田中克己氏が「東京異歌」に代へて「東京通信」を届けられる由で賑やかなる。今号で「果樹園」も三周年を迎へた。桃栗ぐらゐはそろそろ実つてくるだらう。(O)

果樹園 第二十五号（毎月一回発行）

昭和三十三年二月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
発行人
京都市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

負債と云ふ家督を継いだ伊東は、継承したその資質に自戒し、それを療治し超克するため「病院の患者の歌」を書いたのだらう。

真中の「四月」にはどこかリルケ風な風韻が感じられる。が、いさゝか充分な理解を妨げる難澁さも秘めてゐる。その難澁さは、この主題である女性が、安代、百合子姉妹、それに花子夫人を抽象した彼女のせめによるのかもしれない。伊東の言ひ分は、詩句の中に配されてゐる次の箴言である。

汝ら心を騒がすな。神を信じ、又我を信ぜよ。
言葉は 言葉のためにある。
熟しかゝつたものを成熟させ、死にかけてたものを死なせる。

この箴言を取り除いて、もう一度「四月」を読み直すと、そこに詩像がはつきりしてくる。真に愛した人と離れて生きてゐる彼女の運命の肯定なのだ。それを裏返せば伊東の愛の閨歴の肯定にもなる。その閨歴の肯定は、「熟しかゝつたものを成熟させ、死にかけてたものを死なせる」の箴言に照応する。つまり、現在の運命の自然な肯定なのである。末尾の「泥棒市」にはケストネル風な風韻がある。泥棒市とは日本橋四丁目の「五階の市」のことであらう。こゝには明治二十年代

東京浅草の十二階に対応して眺望閣と云ふ五階があったところからその名がある。もともとこゝらあたりは武家邸であったが、維新に当って扶持を離れた武士達は、日々家財道具を売却したので、自然、こゝに古物市場が生れたのだ……と云ふのが、古老の話である。

この俗称泥棒市と呼ばれる五階の市に、伊東は結婚に先立って弟寿恵男氏とながしかの世帯道具を求めに行ったのである。既述したが、結婚に当って伊東が花嫁花子さんに指し示した家財は、小机と本の山とレコードだけであった。その他の家財は盗まれたのだ……と云ふ詩因は、五階の市を彷徨してゐる間に頭に浮んだのだらう。事実、伊東は亡父から引継ぐべかりし家財は、借金のかたとして債権者達に運び去られたわけだから、「私に欠けてゐるすべてのものを盗まれたと思ひ込

H・G・ナカイの 四行詩集 抄録②

矢野峰 人共訳
森亮

第二十九歌
秘密あまた、はなやがむ己が時待ちて潜むなり。
秘あまた、初夏月は胸よりぞ花咲かすらむ

む」権利があったわけである。
伊東は「呂」の翌七月号に「市中の或る一家」と云ふ主題で、次の四篇の作品を発表してゐる。

市中の或る一家

新世界のキノノ

……前略……

馬用水の傍で彼は歌ふ

何かそれで買ふことの出来るものを
どうしても思ひ出せない、一つの小さい
銀貨と
恐ろしく永い退屈な時間が私にある。

木々は銅像よりもっとよごれてゐて、

愛らしき花々を咲かせつこの地ぞ
愛らしき花々をうち殞し、もて隠しつる。

第三十三歌

胡琴の糸ふるへて洩れし数知れぬ歎きの唄よ。
庭士の深みよりする莖の上に数知れぬ花の
ゑまひよ。
歎きの唄は浮世の望みなほつなぎある人の

その下の
馬用水の所に馬が行きつき
よろ／＼と其処からのむ。

さつきから私の前を往ったり来たりする

巡査は

次の、或はその次の電車で

私の思ひもかけないものが来るだらうと
いふ遊戯を
私に許してゐる。

換軌夫は鉄の棒を突っこみながら
交代の時間をはかるために胸のかくしに
左手をやる。

残された夫

胸より。
胸より。
花は咲き出づ、世の縁なくしてはてたる人の
胸より。

第三十七歌

われ靈妙なる考ふる力もてるは如何によき
かな。
愛しき、やさしき天女らしい群れをる天を戴
き、

いみじき酒に醸さるる葡萄は樹に熟り、
薔薇、撫子を偲ぼする汝が住む現し世は嬉
しきかなや。

第四十歌

われ夢にエデンの園を探り当てしが、
アダム、エバ、カイン、アベルら手を取り
あひて
世の子らに、またも楽土を来たらしめむと、
喜びに悲しみ交へいそしみるたり。

第四十一歌

輝ける昼は、ああ、入り日と共に去りゆけ
ど、
人の生は暗闇の夜に入るとも歩みをとめず
さはれ世の子よ、明日の日の夜明けとなり
て、
目覚むるは誰ぞ、安き眠りを続けるは誰ぞ。

第四十三歌

塵の身の塵の古巢にかへりし時
土より借りし命をもこれに返しぬ。
無垢にして野心なく人はこの世に生れしが
帰りゆくやつれ姿に野心憑き、汚辱纏はる。

第四十六歌

われは宇宙の万象のわが杯に映るを見たり

数知れぬ「時」のなごりは杯の底に沈めり。
四方にひろがる平原も流沙も谷も愛しきに
遠近に指ら睫毛ら唇らさらほひて散り乱れ
たる。

第四十八歌

ああ、汝とならびていざ坐り、今日のみを
思ふべし。
われら謀りて冬ぞらの物憂さを春立つ朝の
輝きにせむ。
ひと杯の酒、歌ひとつ、汝がくちづけの加
はらば、
老いらくの来むことも、思慮の違ひしも何
か歎かむ。

第四十九歌

空にきらめく星々の白きおもてに
今宵われさだかに見るはいちじろき悲しみ
の跡。
声ならぬ声もてわれにいふを聞けば、
「時の懸けたる蜘蛛の網に、痛ましや汝が
囚はれし。」

第五十三歌

ひと日わが運命の種を見とめたる「時」の
園守
毒もてる刺の数々わが胸に深く刺したり。

終日、わが胸の底の心に風、雨雲吹き入れ
につつ
園守は破りけり、その曉にわが咲かせたる
花の命を。

第五十四歌

そも汝はいくそ年、疲れし軀にいのちみた
し、
世の軍場に数多の軍たたかふと励まし来し
一杯の酒あらばたはやすく眠らむものを、
いかなれば覚めてあらむと汝が命かくも努
むる。

第五十九歌

美しきわが薔薇いま花咲きて
きららかに光れる涙かの頬を流れ流る。
はつかなる蕾の花を見し日より言ひかはし
花薔薇かの床にわれを待ち、待ちもかねつ
る。

註二十九歌、三十三歌は前回の二十一歌もさうであつた
が、地下にある死者の体から草木が生え出るといふ思
想に基づいてゐる。同じ思想はナカイ氏の古い先輩、
中世紀のオーマー・カイヤムによつても歌はれてゐ
る。四十六歌の宇宙の万象を映す杯もナカイ氏の独創
ではなく、ジャムシード王の七環杯から来てゐるやう
である。波斯神話に知られたこの名器は世界のどの部
分をも映し出すことができ、その所有者は過・現・未
が察知できた。(森亮記)

私はまだ床の中にゐるうちに妻は出て行つた。
貧乏学校の子供らに不良な日曜を与へてはならぬ

彼らは紙屑や襦袢の散らばった臭いにはひのする広場に集められて
彼女の指図でお遊戯やお相撲をしてゐることだらう。

大人だつてする事がないからくるつと彼らを取巻いて、
寧ろ、燥いでゐる彼女をにや／＼眺めてゐることだらう。

匿名の慈善家は今日もそれらの哀れな子供らに、
彼女の手から食べ物の袋を配らせるだらうか。

市中の或る一家
苦勞をしてゐる兄さんを此処の植物園に遊ばせたい、と
農科大学にをる弟が書いて寄越した。

昨日はまことに、うれしく、有難くありました。久振りに悠々たる心になり長い憂鬱もけしとび、元氣百倍しました。

あれから帰りつきましたのは、十時。
途中花子とも相談し、土曜日(午前中)花子とおりつとで参上することにきめ……中略……
下され度く候。
土曜にはお留守にのりこんでゐますから
その点ご兩人ご容捨下さい。……後略……

十八日夜 静雄
昭和八年十月十九日大阪市西成区松原通二丁目一五より兵庫県武庫郡魚崎町字内田二九宮本
新治宛封書

この書簡で伊東は永らく憂鬱症にかゝつてゐる事実が知られるが、それを証明するやうに作品は一篇しか作つてゐない。しかも、その作品は、既述したやうに、「エケード」の第一、二節から合成した「海水浴」であつたのである。その上、この「海水浴」を「呂」【コギト】の十一月号に同時掲載してゐる。或ひは、伊東の憂鬱症とは、この二誌間の去就に迷つたためかもしれない。

海水浴

……前掲省略……
訂正・第二十五号、淡水の中で「第三行、無郎氣」は「無邪氣」の誤植

或る日訪ねて来た妻の友人と、妻は激しく議論をした。
私はその友人を慰めながらそつと停車場まで送つた。

妻は毎朝、こは高に野菜を売りつけられる。
母は老いて小さい箱に余念なく二三種の花をそだてた。

妹らは悪い風にあふとみんな目を病んだ。
白いガーゼをあてた彼女らを、

花のゆくへ 服部三樹子

いつよりか降りいでにけむ夢の外になれたる雨の音にたがひて
たのまるゝ何も持たぬを或る時になしきことを頼まれてみき
もの言へば御伽となりゆきて冬田に遠く陽は薄るなり
ふり返り過ぎし思ひもわりなきにふと立ちどまり物を思ふも
一本の白き花見し夢さめて花の行方を知らず

るよしもなき
うつつにてきのふ言ひしを夢となしけふ
新しき花を語りつ
波よする白き渚に遊びつゝ夢と現を人にゆだねつ
小女の日よなしし言を吹きぬ思ひいづれば白梅の花
現身のまゝに遊びし夢の世を人に答へて
白梅の花

せんたく場 池沢 茂

左官の仕事など全然やつたことがないのにせんたく場の工事が案外に出来てゆくらしいのがわかつたとき、そのセメントの残り、おなじやうに、こんどは納屋の土台を固めようと、ぼくはもう、思ひたつていた。がらくたを入れておくために、義父が柱をたて、そのうえにトタン屋根をおいてくれただけの納屋だが、台風でこわれたとき、ぼくが改造して、うしろを板壁でかこい、位置も、すこしでも庭がひろくなるように、一番すみへ移した。元よりもよくなつたくらい出来ばえだけれど、土台は、土のまゝで置いてある。日あたりのわるい湿気の多い庭だから、丸太や

私は蝶々のやうにつれて病院に通ふ。
(昭和八年「呂」七月号)

この七月号の四篇の詩は、先月号の「泥棒市」と共に、明らかに新即物主義の影響下に作られてゐる。「なるべく事物に即し、明澄な鏡での様にこの紛難した世界に對し、それを透徹しよう」と云ふ趣旨に則つてゐるやうに思はれる。然し、それは事物そのまゝではなく、あくまで詩と現実であることは、「新世界のキノコ」で詳述した通りである。「残された夫」では、花子夫人は幼稚園の先生になつてゐるが、事實は堺高等女学校の先生であつたし、「市中の或る一家」で、弟寿恵男さんは農科大学の学生になつてゐるが、眞実は京大文学部哲学科の学生だつたのである。又、「市中の或る一家」では、妹らは……と複数型になつてゐるが、實は、妹りつさん一人であつた。

その後、伊東は十一月まで、「病院患者の歌」を「コギト」八月号に再録してゐる他は、作品を発表してゐない。その間、宮本新治氏夫人貞子さんは雙生児比呂志、多加志さんを分娩したので、妹りつさんを手伝ひにやる書簡があるだけである。
「宮本さんご夫婦

板など敷きならべても、下積みの荷物など、じきに、くさつたり、かびがはえたりする。「砂とセメントは、六と一の割合が一番いけど、七と一でもかまへん、八と一でも、なんとかなるやろて、言うとなつたなあ」
義父から聞かされた話の一部をとりだしてぼくは妻に話しかけ、しきりにセメントのけんやくをはじめた。砂の分量をふやして、なるべく多くのセメントを残し、納屋の土台に使おうとしたのだ。妻は不安そうにしてたものゝ、ぼくはあたらしい計画のほうに、頭をとられていた。そのうちに、日が暮れはじめた。あかるいうちに来るあがるとばかり予想していたぼくたちは、あわてだした。せんたく場の底は全部塗れてゐるものゝ、ふちが残つてゐる。ことに一方のふちには、練瓦をおいて、わくを作らねばならない。ノリのカンのふたでは、まにあわないので、ぼくは手で直接に、なでたり、たゝいたり、おしついたりした。セメントは皮膚をおかすのか、手は、色が白くふやけ、ヒリ／＼痛んだ。まっくらになつたので、台所の電灯で照らし、やけくそで、夢中になつて続けた。そして最後に、塗りたてのセメントのうえに板をわたし、かわくまでは、そのうえを通ることにした。「いつごろ使えるようになるかしら……」と

哀れなB・Bについて

ブレヒト

小生・ベルトルト・ブレヒトは黒い森林地方の産です

母の胎内にいだかれたまま

都市へとはこぼれましたが、森の寒気は

終生小生の身に凍りついていてことでしょう

アスファルトの都会に育ちました 出生以来

あらゆる臨終の秘蹟を授かりました

すなわち新聞 ついでタバコ ついで火酒

結局おぼえたのは不信、怠惰、知足というこ

とです

小生ひとさまには親切丁寧をむねとし

みなさんの習慣通り堅い帽子をかぶりませ

まったく世間さまは鼻もちなりませぬが

小生もその一人たいして気にはいたしません

妻は心配そうにしている。

「天気よかったら、二日か、せい／＼三日

もおけばい／＼ように、セメント屋は言うとな

たなあ。まあ用心のために、三日おいといた

ら大丈夫やろ。そのあいだに、せんとくもの

いつもは空っぽの揺れ椅子に 時には
朝から二三の女性をお招きすることもありま

す

小生屈託なく彼女等を見つめ

「たよりにならない奴だとお考えてしょうね」

日暮れになると男性たちが集まってきました

お互いに 紳士あつかいで話しあいます

彼等は机の上に両脚なげだして われわれに

も

芽が出そうだと申しませす いつのことだか小

生問いはいたしません

めぐる朝 灰いろの空に縦の枝が小便し

虫けらの小鳥どもがさえずりはじめます

頃や頃 小生巷にて盃すて タバコの吸がら

ばいと投げ やるせなき臥床に入るのです

小生ら軽輩共も不朽建築と約束された建物に

ができた、めんどくさいけど、台所のなが

しかな庭さきか、まにあわせとくことやな。

それまで、雨がふらなんだら、い／＼やんがな

……」とぼくは言った。まえの晩にも大雨が

あり、とにかく秋になって、とくに雨が多い

永年住みついております

(同じ事情でマンハッタンの小島に高層ビル

が建ち大西洋を楽しませる細いアンテナが

建ちました)

これらの都会のなかで残りゆくものは ここ

を通りぬけてゆくもの 風でしょう

建物は喰いつく風をよるこぼせ 風は建物を

空っぽにたいらげていきます

小生らは わたしたちが仮初のものであるこ

とを存知てはいますが

後から来る筈のものも とりあげて申すほど

のものではありません

いつか地震がおこりますようなときも

願わくば小生 からさのあまり薬巻の火を消

したりなどいたしませぬよう

小生・ベルトルト・ブレヒト ずっとむかし

母の胎内にいだかれ黒い森を出て以来 アス

ファルトの都会へ漂着したものです

(たかはし・しげおみ訳)

ようだったからだ。

ぼくはしかし、そう言うてから、ふと、息

が止まった。塗りあがったばかりのせんとく

場をあらためて見たとき、まえの半分

と、あとの半分とが、たしかに、色が違って

見える。午前中に行った半分は、もう白くかわいて、いかにもコンクリートらしい色をして

ているのに、ひるからの半分は、しめって、砂そのものみたいに、アメ色をしている。納屋の土台のほうに使用して、途中から、セメントをしきりにけんやくし、砂の分量をふやしたからにちがいない。そして、その半分は、二、三日たつて、かわいても、かたまらずに、ぼろ／＼の砂になって、くずれてしま

うかもしれない……。「赤ちゃんが出来たら、おむつのせんとくをせんならんから……だから、せんとく場がコンクリートになつたら……」と言った妻のことばを思い出し、ぼくは、ひやつとなつた。はじめて子を生まうとして

いる妻は、コンクリートのせんとく場が出来あがることに、男ではちよつと気づかないほどの、大きなよろこびや切実な期待をかけているにちがいない。もう一度セメントを塗りなおしたら、い／＼だろうけれど、おなじことを二度くりかえし、なれない労働で、あらためて体のふし／＼をいためるのかと思うと、ぼくは、ぞつとなつた。

わりに早く目をさました。いつもなら、もつとおそくまで目がさめない。目がさめても、かなりのあいだ、寝床のなかで、ぐず／＼している。ところが、この朝、ぼくはじきに起きて、庭へおりました。だん／＼さむくなるころで、さむがりのぼくはふるえあがったけれど、ねまきのまゝであった。会社から帰ったときも、さつそく服のまま、台所の電灯を窓から出して照らし、せんとく場を見にいった。あ

くる朝も、その晩も、やはり、せんとく場を見た。しかしコンクリートは、ことに、あと半分のところは、こすると、砂がざら／＼けずれてゆき、つよく押すと、くぼむようであった。ところが三日目、この日は早帰りの番で、まだあかるいうちに帰ってくる、せんとく場には、水をながしたあとがある。

『もう使ったのか』

『どうやら、大丈夫らしいわ』と妻は、くすんと笑顔になった。

そのとおりに、せんとく場はその後、たしかに使えるようになった。セメントと砂がう

まくまざらなかつたせい、と、ころ／＼虫く

いみたいになり、ことに一か所には、かなり

大きな穴があいたもの、さしつかえるほど

ではない。その後、ぼくはまた、予定どおり

に、納屋の土台にセメントをぬつた。ふちも

練瓦をおいて、セメントで固めた。もう、庭

の雨水がながれこむこともないし、がけや地

下から、湿気がわきでることもない。そうして、何年かたつた。そのあいだに、妻はぶじ

に男の子を生み、ぼくたちはその子に、幸吉と名づけた。幸吉は生まれたとき、非常にや

せていた。にわたりの脚みたく、ほそくて、コツ／＼と骨ばっている。ぼくたちの結婚が、

ふつうよりだいたいおそかつたうえに、親もと

「赤ちゃんの写真、がくぶちにいれて、保健

所の壁に、永久的に飾られるんやって！」
「へえ、えらいことになったなあ！ 国会議
事堂における歴代の議長、どこかの会社にお
ける歴代の社長、というぐあいにか……」

ぼくはなんべんも噴声をあげた。が、いく
らかは、キツネにつままれていたみたいだっ
た。ぼくには、そのころから、なにかしら不
安なもの、しのびよっていたのかもしれない。
そのことは、月日がたつにつれて、だん
／＼はつきりしてきた。幸吉は、からだは大
きく、丈夫にそだってゆくのに、三つになっ
ても、四つになっても、カタコトしか言えな
いのだ。ぼくも妻もずいぶん無口だが、その
せいか幸吉は、めったに、ものを言わない。
とき／＼ひとりごとめいたカタコトを言うだ
けで、いくら話しかけても、ほとんど返事を
しない。たぶんそのために、おなじ年ごろの
友だちも、ひとりも出来ない。むりに遊ばせ
ようとすると、いじけたり、こわがったり、
すねてあばれたりする。そして結局、親とあ
そぶほかは、いつも、ひとりぼっちでいて、
ます／＼反応がぶくなり、興味の対象がせ
ばめられ、知能の発育がおくれてゆく。それ
でも、ひところ、水にたいして、極端な興味
を示すようになった。ことに、どぶやみぞの、
ながれる水があるところでは、一時間でも、

二時間でも、しゃがみこんだまゝ、じつと見
つめている。家では、水道の水を出して遊ぶ。
ぼくが早帰りの番で、あかるいうちに帰って
きたりすると、幸吉はさっそく、ぼくの手を
とって、せんとく場のほうへ引っぱってゆき

自画像

福地 邦樹

私は朝七時に起き
乾布摩擦と体操をし
それだけは教育的だから
いつか生徒に披露しておかねばならぬ
伝える所によれば私は厳格な授業をし
ひそかなる敬愛に見まもられ
私が彼等に希望なんか持っていないことを
まして冗舌なやつらには
ついに何も出来る筈がないと
この私が確信していることを
誰にも告げはしない
私があつた不純な木の芽どもの名前を
一々覚えぬからとて
そして私がほめちぎって教える国文学が
実は大嫌いだということを
虐殺の歴史や姦淫の歌や

父の留守

小山 正孝

本当とは、私の思っている「本当の事」と
ちがふのだとしたら、どんなにいいだらう。
カウンターの向ふ側の女の顔を見つめなが
ら、私はそこに坐つてゐる自分のぶくぶくと
太ったからだを持てあましてながら、そんな事
を考へてゐた。

「行って来たよ。おっしやる通りにね」
「お逢ひになりました」
「逢はなかつた」
「どうして。せつかくでしたのに」
「逢はうと思つて行つたんだよ。ところが
門まで行かなかつたんだ」
「やっぱり、いざとなると駄目なんでせう。
何でもないぢやありませんか。知らん顔して
門をおあけになれば、それでよかつたのでは
ありませんか。それぢや、行って来たんぢや
ないんぢやありませんか」
「行つたんだ。駅から、近くまでは」
「いざとなると、そんなものでせうかね。
いろいろな事を考へるんでしょ。もしかして、
御亭主がゐたら。もしかして留守だつたら。
お客さんでも来てゐたら。お好きな方が

生物の栄養やチベットの宗教とかに
ずつと興味があるからとて
それは私の罪ではない
つまらぬ映画をやたらに見
夜更けた街をいつまでも
未練気に歩き廻る姿を
人には見せまい

そして寒い部屋にカーテンをしめ
長い間の抜きがたい悪癖で
死者のように胸の上に手をくみ
重くるしく見るさまさまの夢のことを
人には決して知らせまい
不幸になるのはおいやでせうからね。ああ、
あなたって、ほんとに愛してらっしゃるのね。
まるで十六か十七の小娘の恋みたいよ」
「さうではないんだ。俺はね、亭主の居な
い事はしらべて知つてゐたんだ。出張から
その翌日に帰つて来る予定なのだ。誰に逢つ
ても不自然にならない位の芝居も出来るん
だ。俺は、君の考へてゐる程、いい人間では
ないよ。目的は達したんだ。ただ、あと味が
にがいんだ。かうなってみると、君のおっしや
るやうにだな、どきまぎしてあの人の家の門
の前に立つた方がよかつたのかも思ふよ」
「あなたのせりふは、やあ、しばらく、俺

「みず！ みず！」と言う。台所の水道にホ
ースをつなぎ、水を出してくれと、せがんで
いるのだ。妻はつぎの子をみもごつており、
水道代が倍以上にもかさむので、とき／＼、
しかなかったり、かまいつけなかつたりする。ぼ
くはしかたなしに、台所の窓からホースをの
ぼし、水道のせんをひねってやる。すると幸
吉は、その水をたらいにあふれさせたり、カ
ンに入れてはあけたり、せんとく場に流した
りして、いっしんに遊びはじめる。そして、
やがて「父ちゃん、おすわり！」と言う。ど
こへも行かずに、近くにすわって、見ていて
くれというのだ。ぼくはぬれえんのはしに腰
をおろし、とき／＼「幸ちゃん、川みたいや
なあ」「どう／＼と音をたてて、水がおちて
るなあ。たきみたい。たき。たきやなあ」な
どと声をかける。もう四つになつてゐるのだ
から、すこしでも、ことばをおぼえてくれる
ようにという心からだ。幸吉はしかし、めつ
たに返事をしない。気がむいたときだけ「川
みたい」「川やなあ」などと、わかつただけ
の、カタコトのひとりごとを言う。たらいか
らあふれ、あるいは、せんとく場に流された
水は、どぶの落ち口のほうへと、せまいみぞ
へあつまつてきて、小さな川みたいに流れお
ちてゆく。

だ、君は僕を離れ、僕から逃げられると思つ
てゐるのかい。俺はお前を離すものか」
「へへ、新派みたいだね」
「さうよ、あなたって、酔ふと、このせり
ふですものね」
隣りのバーからは、流しのギターがきこえ
て来る。私は耳を傾けた。感傷的になつた。
「をぢさん、ガム買ってちやうだいな」
顔見知りの子でない方の、この頃来るやう
になつた子だ。
「一つおくれ」
「ありがたう。をぢさん、またお願いしま
す。さよなら」
ガムをポケットにしまった。
「あら、しまつちやふの」
「酒のさかなにならないよ」
「私にukれないの」
「いやだよ」
「けち」
「あの子はこの頃だね」
「可愛い子ね。夜まであんなにしてゐるん
だつたら、学校の勉強するひまなんかないで
せうね」
「君も大変だね」
「なあぜ」
「だって、人の子供の勉強の事まで心配す

不在風景

浅野 晃

北の不毛
樹木のない火山灰地を
一本走った国道の飢渴
せり科の草本が
人骨めいた茎をそばたて
ときに郭公をとまらせてめたり
気まぐれなこの鳥は
頭蓋のてっぺんから
海をのぞいて
古風な機械音を押し出す
くろい海の空洞は
地の眼窩みたいに凹んである
曇天
誰もぬない
引込線に貨車が三台
おとなしく並んで

そこらの草を喰ふでもなく
工場の庇からはみ出した
水溜り
ふやけた材木の土左衛門どもが
風に吹き寄せられる
白い煙突の口からは
灰色の煙が
もくもくもくもくもくもくもく
面白いやうに出てくる
面白いやうに出てくる
そして曇天になる
時計の針が十三時を指す
爆音がきこえて来た
窓のいくつもあいた胴体が
まっすぐに飛んでくる
窓は密に閉じた拒絶
そして銀色の翼は
幼い心臓をわくわくさせながら
曇天のあちら側へ
突っ込んでゆく

るんぢや、さぞかし、おつかれでござりませうってんだ」
「人さまの昔の恋人のありかまで、お調べ申しあげてね。聞くだけ聞いてしまったら、お逢ひになったのに、逢ひませんよなんて。」

だまって聞いてればいい気になって、顔に書いてあるわよ。逢ひました、逢ひました、逢ひましたって」
「隣のバーの客の年をあてて見せようか。四十一。俺と同じか、少し上かな」

駅の前には一台のバスが——東京駅行のバスがとまって、砂利の上に影を落してゐた。一時間に一度出るらしく、運転手と車掌が、客のまだ居ないバスの中で話してゐた。電車から下りて、改札を出て、私がきよるきよるしてゐた時、私は利子にそっくりの少年に逢った。利子の子供だな、と直観した。彼は駅前の銀行の支店の扉を押して、外に出て来た所だった。十一才位の、半ズボンの彼が、支店の扉口に立ってゐる姿に、私は、はっとなつて息をのんだ。

入場券が半分折られて握られてゐた。ドアがしまつた。
ドアが開いて、ドアが閉るまでのあひだに、どれ程の時間がたったのであらうか。永い時間だった。永遠のやうにさへ感じた。私には後悔はない。私には後悔はない。私が彼に言ひかけた「さやうなら」といふ言葉は、かすれてゐたかもしれない。それは、彼の頭の上で炸裂した何ものかであるかもしれない。又は、パラシットにぶらさげられた時限爆弾のやうに、しばらくのあひだ彼の頭上をたゆたふものであつたのかもしれない。私だつて、かつての日に、さうだったのだ。腰から下がなくなつてしまふ位に、やりきれないものだったのだ。私が彼と同じ年頃に味はつた時には、やはりさうだつた。

私は彼に近づき、話しかけて、いろいろと話した。その結果、私は利子に逢はない事にした。気が変わったのだ。そして、少年に送られて、私は同じ駅から、電車に乗って、そこを去つた。
「さやうならをしよう。もう、今度は、いつ逢へるかわからないけど」
電車がとまって、ドアが開いた時に、私はさう言ったのだ。ホームの砂利は、駅前の砂利よりも大粒であつた。ホームの砂利の方は、一つ一つが細長い、うすい影を持つてゐるのだ。もう、夕暮も近づいたのか。少くも、さつきよりは、日は西に傾いたわけだ。私は、まだ、両膝が少しふるへてゐる彼をホームに残して車中の人となつた。彼の右手に

私は彼に話しかけ、私は彼に、彼の母を知つてゐると言つた。別れる時に、彼が、私を駅まで見送ってくれる気になつたのも、私の話から、彼の受けた感動によつてなのだ。
彼のからだは崩れさうだ。彼の目は、もはや私の目を見ようとはしない。
電車が走りはじめ、お互が、お互を見る最後の機会となつた。ドアの所に立つて、ガラスの中で、私は右手を肩まであげて、指をヒラヒラさせて、にこやかな顔をして、口の中

「見えないのにわかるはずないわ」
「ところがだ、その客が恋をしてゐるらしい。誰かにほれてるよ」
「どうしてだらう。変な人。ああ、流してわかるの」
「御名答。——かれすすき——あなたと共に行きませう——俺は待ってるぜ——水色のワルツ。大体に於て、古いな。感覚が。そのうち軍歌が出て来るぜ」
「あの人も、ずるぶん声が荒れたわよ。でも、あれはいいのよ。三曲百円でね。この前の、ほら、御存じでしよ、足の少し悪いの。あれなんか、三百円とって二曲なんて、ひどい事するのよ。インチキなのよ。あの人はサンバシミチャのものがいいのよ」
「なんだ、そのサンバシって」
「ふふ」
十五年前に利子は結婚した。その相手も、住所も、わからなかつた。私はもう一度だけ逢ひたかつた。ずうと、さう思つてゐた。利子の住所がわかつた。偶然の事からわかつた。行きつけのバーの女が、利子の主人を知つてゐたことがわかつた。私は利子に逢ひに出かけた。もう春も終り——桜の葉はこんもり茂りはじめてゐた。

で、もう一度、さやうならを言つた。彼の手は意味もなく、半分あげられた。もう二寸も高くあげられてゐたら、彼も同じやうに私にさやうならを言つてゐるのだと、言へたであらうに。重い手なのだ。彼は自分の手の重さにたへる事が出来なかつたのだ。
私の思つてもみなかつた方向に、事態は進み、私は凱歌を奏して、車内の椅子に腰をおろした。深く腰かけて、じっくりと、私のした話や、私が彼に与へた圧力を考へた。
もはや、彼の目はどんよりと曇り、思つたよりも早く、彼には人生の夕暮がやつて来るのだらう。私の場合と同じやうに。私にあつたあのすばらしい少年の日が、気づいた時には、わけのわからないどんよりとした日に變つてゐたやうに。しかも、彼は、私を憎むといふ事にさへ気づかないだらう。かへつて私の姿を恋ひしたふであらう。やつと、辿りついたとしても、彼に出来る事は、自分の母親を呪ふ事だけであらう。私が目をつぶると、すぐ目の前に彼の姿がうつる。彼が、また赤ん坊の顔が、ひげづらなのだ。いや、もう六十才位の老人の顔なのだ。かんしやくをおこしてゐる。くさつた魚のやうな目をした、ぢぢいの赤ん坊。おむつからは、うんこをた

れ流して、叫んでゐる人間の姿なのだ。泣きやむと、老眼鏡でもかけた分別くさい顔になり、一瞬後には赤くなり、ひたひに太い青すぢを二本。しわだらけな両手両足を空にもちあげて、しやがれて泣きわめく姿なのだ。

私は利子と結婚するつもりだった。約束もした。畳の上で抱きあひ、利子の裾から不思議なものが見えさうな事もあった。もう一度逢つて、私の方に心交りはなかったと言ひたかつた。すべては戦争の結果なのか。何事かを果したい。果したい事の一つに私は利子を、もう一度、前と同じ状態に置いてみたいと思つたのだ。相手はどうともあれ、私の方に心交りはなかつたのだ。しかし、年月のたつた事を、別の面から眺めれば、私は私自身で考へてゐる程には出世しなかつた。利子と約束した程の人間にもなれなかつた。女である利子が理想としてゐたよりは、勿論、ずっと駄目な人間になつてゐるわけだ。

私は駄目な人間だ。
利子を思ひ出してやりきれなくなると、私は別の女と逢つた。似てゐるにしろ、似てゐないにしろ、抱いて胸に顔をくっつけてゐると安心した。障子の外の寛の水の音を聞いて、私は利子の家で、同じやうな音を聞いて

「どうしたの。どうして、お前は、宮本さんのをぢさんにあんな事を言ったの」
「少しやさしく父は言った」
「宮本さんのをぢさんに」
私はわざと首を横にしてみて、考へて言ふふりをした。母が涙を押さへてゐる手ぬぐひの紺と白のあひだから、真赤な目で私の方を見た。お互に目をそらせた。

「お前は言ったさうぢやないか。お母さんなんか、あんなの死んぢやうな方がいいて」
「え、僕が」
「ああ、死んぢやうな方がいいのかい」
「ううん」
「どうしてそんな事を言ふのだ」
そんな事は言はなかつた。

「どうしてそんな事を言ふのだ」
そんな事は言はなかつた。

(未完)

早春

山根 忠 雄

二月初旬にしては
めづらしくあたたかい
好天気の日
美術館を出て
疏水にそつて歩く
岸の柳の芽はまだ固い
ジャンパーを着た子供がひとり
ふと笹舟を水に浮べた
笹舟は
はやくも流れに乗つて
「春」——の方へ
つきすすんで行く

帰郷者

わづか一週間の
修学旅行とはいへ
旅人の
新鮮な眼には
エキゾチックな長崎の街
雨の雲仙
阿蘇の噴煙
別府の地獄めぐりなどは
勿論のこと
古い女房まで
なんだか
めづらしく見える

K大使の息子

芳野 清

今の中年以上の方ならK大使の名を御存知の方は多いと思ふ。第二次大戦前夜に活躍された外交官で海軍出身のN大使と共に最後の平和交渉にルーズベルトを訪れた人と云へば如何にも洗練された外交官らしい風貌の英国風の紳士を思ひ浮べるだらう。いづれにしてもこの平和交渉は今から思へば破局を予想しての絶望的なものであつたし、最後通牒の交

を離さなかつた。

私のカバンの中は、実は、ほとんどからなのだ。物が入つてゐると、あてもなく歩き廻るのに疲れる。赤皮のカバンは、しかしながら、必要なのだ。私は、仕事をしてゐて立派な人に自分を見せるのには、カバンと、金の結婚指輪とが効果があるのを信じてゐる。道で私を見たなら、資本金五千万円の会社の重役だと思ふだらう。——さう思つてもらひたいものだ。さうなるやうに私は育てられて来た。だから、外見だけは、さうなつたのだ。

私の父は人を世話するのが好きであつた。私の母はそれをきらつてゐた。それをきらつてゐたのか——いや、それをきらつてゐたと言つてはいけない。もつと、デリケートな事なのだ。デリケートな事ではあるが、ある意味では根本的な事だ。かういふ風に父と母との事を語るべきではないのだらう。いま言つたやうな事はぬきにして、私は父と母との事を——そして、もう一人の男の事を——それと私とのあひだに起つた出来事を語ればよいのだらう。

「どうしてお前は、お母さんにあやまらぬのだ」
あの時、私は十一才だつた。あやまるって、

涉前に真珠湾攻撃が開始された事から後味の悪い偽装外交などと云はれたものだった。K大使がこの任に選ばれたのは長い駐米生活でアメリカの事情に詳はしかつたと云ふばかりでなく夫人が滞米時代に熱烈な恋愛の末に結ばれたアメリカ婦人であつた事から対日感情を和らげるのによいと考へた当局の政策によるものだと云つたうが了解もあつたやうである。当のK大使こそ国家の大事と云ひながら憂鬱な役目を引受けたものである。平和どころか国交断絶、開戦の通牒を最愛の妻の母国につきつける羽目になつてしまつたのだから皮肉な運命の人と云へやう。

このK大使の息子が学校で私と同期だつた。もつとも科が違つてゐたので一度も言葉交した事はなかつたがその風貌は誰の目もひいた。華やかな外交官の息子が地味な機械のエンジニア志向もおかしなものだつたが、大体成績はよいが中流以下の子弟が集まる専門学校などに有名な子弟が入るのが場違ひの感を学生達に与へたのかも知れない。当時の校長が名教は自然なりとか云つて入学試験を突破さへすれば職業教育に似ず自由な空氣があつて、その港町出身の外交官は校長と親交のある所から子供をこへ入学させたと云ふやうな話も聞いたが、ともかく彼は本

羞恥の侵入

堀ノ内 歴

この私が 贗物だという、
屍よりもなお深々と
私が死んでいるのだという、
まったくそうに違いない。
虚ろに双つの眼は開いており、
双つ共殆んど動こうとしないが、
私の物でないとするれば、
いよ／＼無理は出来ぬ、
そう云えば手脚も何うやら同じ。
一体いつからだろう、
これらの器官を自分の一部と
思い込んだのは、して又どう云う自信で
私にとって何処かすくの背後に、

牧にある邸宅から校門まで自動車走らせる
と云った、当時の吾々、貧書生の生活とは比
較にならない環境であった。しかし、私達は心
のどこかでそんな彼をあのこぢやないかと
ひそかに侮蔑してゐた。私共と云へば二・二
六事件などの最中に中学生生活を送つたいはば
軍国主義的なスパルタ教育に慣らされてきた
者ばかりだったからこのやうな民族主義的な
考へ方をするのも無理はなかった。しかし、

程異質に見えた。然し、彼は重々しい長靴の音
を立て、毅然として歩み去った。短かいツバ
の帽子に上げる輝くやうな白手袋の敬礼も堂
に入ったものだった。しかし、暗い凹んだ眼
窩の中で何がなし彼の目は沈んだ淋しさを漂
よはせてゐるやうに私には思はれた。勿論日
本に生れてこの国の教育を受けて人となつた
彼が異国人さながらの容姿をしてゐたとして
も、その精神も日常生活も恐らく日本人と変
らなかつた事は推察出来る。寧ろ混血児であ
るが故に、彼の血は日本の軍人としての自覚
に一層湧き立ってゐたのに違ひない。当時簇
出した若い技術将校に対して世間の目は決して
甘いものでなかつた。敬礼も満足に出来ぬ
坊ちやん将校、前線行き逃れの便法など云
はれたものである。彼等は学校を卒業して入
隊すると一年程の特別教育を受けて各専門の
技術将校に任官し、大元元の就職先の会社や
工場に帰属されるのが普通であつたから、悪
く云へば、背広を軍服に着換へるだけで本人
は会社と軍から給料を貰へると云ふ至極恵ま
れた身分に思はれてゐた。工科系の青年にだ
け与へられるこの恩典を世の親達は自分の息
子にも得られることを望んでゐたし、滅私奉
公などと口では唱へながら身の危険の少ない
柄口な処世を遊ぶのがいつの世の中でも大部

非な指示者がずーつと付いて居たらしい
一見菜々と生きて来たことが、
私らしさに安んじていたことが、
今やみないら立たしく……
此処の足元の土地からは得も云われぬ
秘そやかにつよい慈温が昇つてゐる、
それは私の知る遙か以前からも
そうであつたのを、
疾く私には知つていたが、
今日いよ／＼強く充滿するらしいそれに、
逃れようのない醜造の恥ずかしさ。
然もまだ生きてゐる事の無念と悔悟、
これから後とても全く無策で、
ただ窮屈だけが来るのだとしても、
既に贗物の私に何うすればよいと云うの
だ。
一九五八・二月

一代混血児が屢々優秀である云ふ学説その
まゝ、彼はなかく／＼の二枚目で、ギリシャ型
の彫りの深い白哲の顔と丈高い逞ましい体格
はほればれする程立派だった。目の色や髪は
漆黒で異邦人の持つバタ臭さがなく、内に情
熱をかくした冷たい理性的な容貌は女性の目
には頗る魅力的であつたらしく、授業中にラ
グレターの束を回覧に及んだと云ふその方向
でもドンファンの噂が高かつたやうであ

分の青年層の理想でもあつた。私の内心彼を
時局便乗型の要領のよい青年の一人と考へて
ゐなかつたとは云へない。しかし、それから
何年かたつて終戦間近の頃と思ふが、私は新
聞の片隅に「大空に散つた花・K大尉の見出
し」と写真入りの彼の戦死の報を見て驚いた。
記事によると、彼は技術将校にあきたらなく
自ら操縦へ転科し戦闘機乗りとして千葉の某
基地にあつて首都防衛に縦横の活躍をしてゐ
たが、某日のグラマン機の本土空襲を東京湾
上空に邀撃し、壮烈な空中戦を展開し、敵機
を撃墜する偉勲を樹てたが自らも右肩から
左肺にかけての貫通銃創の重傷を負ひ、しか
もひるまず基地に帰着し、上官に戦闘状況を
報告し終へて後、血染めの胸を僚友にもたせ
て従容として瞑目した。行年二十六才。大尉
は今大戦に縁の深いK大使の息子で……云々
とあり、飛行帽をかぶつた彼の映画俳優に劣
らぬ美貌がこやかに笑つてゐるのだった。
これを見て泣く女性も多いだらうと、余りに
もその美談めいた筋書にそらざらしきを感じ
たが、彼が安易な技術将校から飛行将校に転
科して戦死したと云ふ一事は大きなショック
であつた。やがて、かうした若人達の貴重な
血の犠牲にも拘らず戦は終はり、東京は全く
の焼土と化した。生き残つた人々は明日の糧

る。彼は三年になつてラグビーの主将をやつ
てゐたからよくグラウンドで彼の姿を見かけ
た。高く球を蹴つたり、走つたりしてゐる時
の彼の怒つたやうな冷たい表情が印象的であ
つた。卒業してからの彼は当時の技術系の学
生が進んだと同じコースで航空関係の技術将
校になつたと聞いてゐたが、戦争も酷になつ
た十八年頃、当時私の勤めてゐた飛行機会社
に将校団の一人として視察に来た。当時は軍
と軍需会社の関係は今の銀行或ひは官庁と会
社との関係に近かつたから、社長、重役の出
迎へで工場を一巡する高級将校団と平社員
の私など挨拶を交すなど望むべくもなかつた
し、彼にしても全く交友のなかつた私の顔な
ど憶えてゐる筈もなかつた。然し、その将校
団の中で最も若く目立つてゐたので従業員の
若い女性達は讃嘆の声を上げて彼を見送つ
た。彼は高級将校の副官か何かで随行して来
たらしく、航空士官特別仕立のあの襟の高い
派手な軍服に長身をつゝんで上官の言葉に何
か歯切れよく答えてゐた。「何んだい、あり
や、日本の将校かよお、毛唐ぢやないか、そ
れともドイツの将校かな」後の方でワイワイ
云ふ工具達の陰口が私の耳に入った。そう云
へば私の目にも彼一人だけは日本の軍服を着
てゐながら派遣された外国将校と見間違へる

に狂奔し、いつか散つた戦士達の霊を忘れ去
つた。終戦後始めて集まつた在京連中のクラ
ス会の席上で私は級友の幾人かが戦死したの
を知つた。それらの帰へらぬ人々の追想談に
花が咲いた時、私は一人の級友の口からK大
尉戦死の真相を聞かされた。彼は空中戦で死
んだのではなく実は事故死であつたと云ふの

故 国

岩 崎 昭 彌

油を吸ふランプの明りで
また日記を書く中隊附准尉
ある夜四日市駅で別れた
若い奥さんのことだらう
俺も千里の空を飛ぶ
薄暗い台所で母と弟が
夕餉の卓を囲んでゐる
傍には南太平洋の地図がある
底醫で眼の不自由な母が
橙色に塗られたひと処
弟の解説で砥るやうにみつめる

インパール

稲妻階段

上村 肇

螺旋階段は余りお金がかかるので壁にそって
 稲妻型の階段をかけることにした。
 板を三角に切った
 若い大工は得意気であったが
 段の中途から
 急に天井がひくく下りてきて
 二階の部屋には
 頭が支えて登れなくなってしまう。
 天井を破り屋根をこわし
 ようやく二階の部屋に達したが
 それは水害の夜に
 天井を破り屋根をこわし
 無数にきらめく
 稲妻の屋根に出た誰かの姿に似ていた。
 絶叫するに今は声もなく
 私は独り不機嫌に階段を下りる
 光世の切先のあたりではなく
 光世の根元のあたり
 がたりがたりと履物鳴らし
 無人の階下を下りていく。

である。いつも機敏な彼がその日に限って何か放心したやうに滑走路上に歩み、飛行機に乗るつもりかどうかに既にプロペラ始動中の機体に近づき回転中のプロペラに触れたのだと云ふ。凄惨な勢ひで回転してゐる金属製プロペラは一瞬彼の首を断ち切り、鞠のやうに宙に舞ひ上げた、切り口はまるで鋭利な剃刀で切ったやうだったとその基地で警備兵だった級友はアルコールに番茶を入れて作った酒に顔を赤くして自分だけが知ってゐる秘密を語る時のあの得意さに鼻をうごめかすのであった。そして尚も附け加へて次の事を云った。戦時の事故死は戦死になるのは当然だが、彼の死後発見された日記の断片などから彼の死が自殺ではないかと云ふ噂が隊にひろがり、上官はその日記を没収した。彼はその日記の中に母の国と戦ふことの懐疑や自分の生ひ立についての煩悶を書き綴つてゐたそうである。ともかくいづれか今もつてその原因は分らないと。当時同期にもう一人北部派遣軍司官官になり後に戦犯で巣鴨に収容された大將の子がゐるが、勿論混血児などではなく名士の子然とした傍若無人の不良染みた振舞ひには私は反感しか覚えてゐない。

編集後記

一月十六日電通主催のカクテル・パーティで安西冬樹、竹中郁氏にお会いした。現在在任の安西氏には、特に伊東静雄に力添へをお願いした。彼の舞台の見える海岸に、将来「夕の海」の詩碑を建てるのが僕の夢だからだ。安西氏は協力を惜しまぬと云ふ暖かい言葉を下さり、後日果樹園に懇篤な言葉を寄せられた。
 二月四、五日上京した。東京の同人会を聞いていたべく予定だったが時間がなくて遺憾だった。然し、五日夕四谷の文化放送で大木博夫氏にお会いできたのは望外の喜びだった。氏には勧め先から詩を中心にしたラヂオ・ドラマ「ふるさとの歌」をお願いしてゐる。格調の高いドラマとして好評である。氏は果樹園の隅から隅まで力がみなぎつてゐると賞めて下さった。
 大谷椿の伝記小説中河与一氏の「耽美の夜」が好評七版を重ねてゐる。氏は私の伊東伝記を激励する意味であらう毎月連載中の切抜きを送つて下さる。今日流行のフィクション文学より面白いこと数等である。汎く購読をおすすめする。(0)

果樹園 第二十六号(毎月一回発行)
 昭和三十三年三月一日発行

池田市野町一六八
 編輯兼 小高根 二郎
 印刷所 同朋舎
 池田市野町一六八
 発行所 果樹園社
 定価 三十円

果樹園二十六号昭和三十三年三月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園二十七号昭和三十三年四月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第27号

書簡から見た伊東静雄 小高根 二郎
 春の歌 服部三樹子
 ナカイ氏「四行詩集」 矢野・森共訳
 日曜大工 池沢 茂
 遠方の朋 山根 忠雄

老 子 伝 説
 東 京 通 信
 油 虫
 父 留 守
 秋 風
 放 心
 雉 子
 二 月 林
 春 来 花
 僕 の 文 学 時 評
 ブレヒト
 田 中 克 己
 福 地 邦 樹
 小 山 正 孝
 岩 崎 昭 弥
 堀 内 正 義
 美 堂 正 義
 芳 野 清 晃
 林 野 富 馬
 林 野 富 馬

書簡から見た

伊東静雄(二十六)

小高根 二郎

昭和年の年末、伊東は次に掲げる二通の書簡を宮本夫妻に書き送ってゐる。
 「先日はわざわざ、ご主人おいで下され、その上まことに、ご丁寧なものを、いただき、少々、恐縮に存じました。
 されど妹は大喜びにて早速着物かなんか買ったやうでございます。お礼申します。
 又おいでの際は一向おもてなしも出来ませずすみませんでした。くれぐれ、よろし

く、お伝へ下さい。
 申込書同封の通り書きましたが、正しいかどうかわかりません。お医者さんおいで折悪いところはいくらでも訂正します故え、ご指摘下さいます様云つてをいて下さい。
 電車は南町上町線北畠停留所を下りて西へ約二十間です。
 時間は三時で結構かと存じます。二時にも一時にてもよろしくございます。十三日以後はおひるまでの授業であります故。中略。先はお礼、並びにおねがひまで
 十一日 伊東静雄様
 宮本貞子様
 (昭和八年十二月十一日大阪市西成区松原通二ノ一)(五より武庫郡魚崎町横屋内田三九宮本貞子宛封書)

これは、十一月末まで宮本夫人の暗誨の手伝ひに行つて来た妹りつさんに対する宮本氏の謝礼への礼状である。りつさんは着物を買つたところから金一封である。そのまた返しの意味であらう、数年まだ二十八才の伊東は、宮本夫人が勤務する生命保険会社の保険に加入したのであらう。——その加入に際しての来診連絡は住吉中学校にしてある。なみある教員室の先輩教師達は、年にも似つかぬ伊東の用心深さに吃驚したことがらう。伊東にすれば、りつさんを宮本家に派したことは学生時代盲腸炎で入院した際、親身も及ばぬやうな懇やかな看護をしてくれた宮本氏への報恩のつもりだったらう。その謝恩の思ひは、宮本夫妻の結婚披露宴のあった一月二十六日の夜、母ハツさん妹りつさんと共に反芻してゐた。伊東の義理堅さは、保険に加入しないではをれなかつたのである。

「宮本さん
 保険のこと万事もよろしくお願ひします。
 三十円封入」ときます。
 会社の方まで忙しいことせう。
 私は休暇になりました。お正月には一度皆さんでおいで下さい。
 一寸急、お返すからこれにて失礼します。

(昭和八年十二月二十二日大阪市西成区松原通二の一五より兵庫縣武庫郡鷺崎町横屋字内田二九の二宮本新治宛封書)

伊東は前掲の保険契約に基き掛金三十円を送ってゐる。月掛二円五十銭と見て、一年分の掛金である。恐らく、宮本氏の謝礼相当額であつたらう。

明けて昭和九年二月の「呂」に、——一老人の詩——として、次の作品を発表してゐるが、この詩は宮本氏との永く篤かつた友愛に對する回顧なのであらう。

鶯

——一老人の詩——

(私の魂)といふことは言へない、その証拠を私は君に語らう。

共に幼かつた昔、私の友人が

或る深い山の縁に住んでゐた。

私は稀に彼の家を訪うた。

すると、彼は山懐に向つて

奇妙な鋭い口笛を吹鳴らし

きつと一羽の鶯を誘つた。

そして忘れ難いその美しい鳴声で、

私をもてなすのが常であつた。

然しまもなく彼は医学校に入るために

市に行き、

山の家を見捨てられた。

それからずっと——四半世紀も後に、

私共は半白の人になつて、

今は町医者彼の診療所で、

再会した。

私は尚ほも覚えてゐた、

あの鶯のことを彼に問うた。

彼は微笑しながら

特別にはそれを思ひ出せないと言へた。

それは多分

遠く消え去つた彼の幼時が

もつと多くの七面鳥や、蛇や、雀や、

地虫や、いろんな種類の家畜や

春の歌

服部三樹子

みじろぎも我れみづからに許されず情ひ
といふは器の水のごと

閃めけば春冷たきにおどろきぬ胸の刃を

つゝむ暮空

けふの日に勝る思ひのなかりきといはね

ば雲と水とゆく春

本医院を訪れる。そこでかつて自分を酔はしたことのある鶯の話もちだす。が、宮本医師は、さあ、そんなこともあつたっかね?と

微笑するばかりである。乗馬や演劇の思ひ出

も多い彼にとっては、格別文学の小鳥だけが

クローズ・アップされないからである。

然し、事實は、伊東でさへ自作と信じない

やうな青年期の伊東の戯作の句や歌を、今でも

宮本氏はたちどころに朗唱してみせるのである。

眼つむりて按摩と聞くや夜の雨

など、その類である。

又、伊東は酒に酔つて帰ると、きまつて緑

から枇杷の立樹にしやアしやアと尿を飛ばしながら、

雨の音と小便の音分くべくもあらず夜更

けて雨しきりなり

と高々と朗吟したさうであるが、さうした類

の思ひ出は、宮本氏の方が克明に記憶してゐる

やうである。去年の十二月に伊東は宮本氏

に久し振りに会つてゐるが、さあ、そんなこ

ともあつたッけねと……懐旧談に微笑したの

は、詩とは反対に、伊東の方であつたに相違

ない。

ともあれ、この「鶯」は、宮本氏との永く

変らぬ友情を記念すると共に、再製樟脳株式

社

社

社

社

社

社

数へ切れない植物、気候の中に
過ぎたからであつた。

そしてあの鶯も亦

他のすべ々と同じ程度に

多分、彼の日々であつたのだらう。

然も(私の魂)は記憶する。

そして私さへ信じない一篇の詩が

私の唇に上つて来る。

私はそれを君の老生のために

書き止めた。

(昭和九年「呂」二月号)

この詩で「君」と呼ぶのは有能な会社員となつた宮本氏であり、鶯を口笛で呼んでみせた少年とは文学青年時代の宮本氏のことだらう。同志社高商時代の宮本氏は、短歌をたしなみ、伊東をモデルにした詩や小説を書いてゐた。その豊かな天分は、伊東に鶯のやうに歌ひかけたのである。二人は出来た作品を見せ合ひ、批判し合つて、明日の文学を語り合つてゐた。さらに宮本氏は銀鞍会と云ふ乗馬倶楽部員でもあり、学生演劇の立役者としても多彩な活動をしてゐた。

その宮本氏は、詩では町医者になつてゐるが、それは女医である貞子夫人とすりかへてゐるわけである。半白の人となつて伊東は宮

私は強ひられる この目が見る野や
雲や林間に

昔の私の恋人を歩ますることを

そして死んだ父よ 空中の何処で

噴き上げられる泉の水は

区別された一滴になるのか

私と一緒に眺めよ

弧高な思索を私に伝へた人!

草食動物がするかの楽しさうな食事を

(「コギト」昭和九年二月号)

るり……と寝転びながら、雲の去来とみ空で
する噴水の分岐を眺めたのであらう。

この噴水による発想は今に初ったわけでは
なかった。昭和六年十一月十六日附百合子さ
ん宛書簡に見えてゐた「噴水と白薔薇」に

私が青空に身を委ねた時

縫ひつけられた幾条もの銀糸が光った
とあった。更に昭和八年「呂」三月号の「輕
薄」に

私は其のまはりに

正しい花園を拵え上げ

H・G・ナカイの

四行詩集 抄録3

矢野峰人 共訳

第六十歌

われらが清き旗亭には物書く帖も筆もなし。
愛しき草木花咲けど刈り取らむ鎌あらず。
きらびやかなる頼もしき雄々し兵あまたを
太刀、喇叭、旗さしもの無くてすべなし。

第六十四歌

生るる者はおなじ道たどるさだめぞ。
苦しみをちて此処に来、悩みつつ此処を去

美しいフオンテーンを
自分のものにした

と更に抽象化してゐた。この二作の原型の上
に、喪失者としての血統の自覚を加味したの
が、「私は強ひられる——」である。が、こ
の作は詩集『わがひとに与ふる哀歌』に収録
されてゐるが、まだ原型としての価値にとゞ
まるのである。と云ふわけは、この噴水の発
想はその後も永く伊東の胸底に吹き続け、こ
れまた伊東が愛しつづけた朝顔の花と合体し
て絶唱「朝顔」を生むにはまだ三年の歳月を
り行く。

おのれのすみか背に負へる托鉢僧も
王のごとただ独り来て、王のごとただ独り行
く。

をぐらき母胎の牢屋より出づるよりして
あやにくの強き鎖に捕へられわれ縛られぬ。
生ひそだち、まことのわれを知るときし、
我は迷路に踏みまよひ出口いづくと尋めあく
みけり。

第七十一歌

庭あかあかと照らしみし美しき火の蠟燭は
燃えにぞ燃えてその果ては尽きにけらずや。

第七十二歌

女はなほも眼閉ぢ恋人を夢に見つづく。
墓は彼女が生くる悩みを逃がるる宿り、
その胸に抱かれむと母なる地に逃がれ来たれ
り。

第一百歌

飲びに胸をひらけ。けふこそは晴れ渡り楽し
き日なり。
楽の調べと歌とあらばいつれの日とて楽しき
日、
葡萄の酒と横笛に心ほのほの燃え立たば。
かかる火のほのほ燃ゆれば心のどるを如何
にせむ。

第一百二歌

生より汝が享けしもの、名と貌、
母の血が十月がほどをやしなひし
沈思の性と妄想と疑心の暗鬼。
征け日々の糧取らむ戦に、運命と思ひて。

第一百四歌

人の生はあやしき影の如く来て、幻の如く過
ぎしか。
我らその何なるか何時去りて何処に行くか知
らざりき。

要するからである。

其処と知られぬ吹上の
終夜せはしき声ありて

この明け方に見出でしは
つひに覚めぬしわが夢の

朝顔の花咲けるさま

とまれ、「呂」「コギト」二月号に発表し
た「鶯」「私は強ひられる——」の二作は、
匂ひ高い決別と愛惜の思ひと新しい出発に際
しての孤高の覚悟を表明したものだと思はれ
る。

むさぼりて黄金をこころ積み上げし我欲の爺
は
はての日は財をなべてうち棄てて崩えにけら
ずや。

わがいのちいたづらと悪行に充ちみちてあり
心逸りや、我意、我執、又まやかしに充ちて
あり。

第七十三歌

われ五体の悪しきつち若しやこれらの森の
種
おほしたてなば禍のいかがあらむと明日の恐
ろし。

第八十三歌

忙しなく我らを勞苦に、慰みに驅り立てつ
つ
人の生はおのれ巧者にするすると逃がれ去り
けり。

註 この邦訳のテキストに使った英文「ルバイヤ
ト」には百四首の四行詩が収められてゐる。従つて
今回の抄録もこの第三回を以て終る。邦訳した百四
首の中から三十六首を選んだから約三分の一を紹介
したことになる。これらの四行詩はすべて独立した
作品であるから前後を顧慮しないで一首一首で充分
鑑賞できるが、思想的にも韻律的にも大同小異のひ
と続きの四行詩を演説してその小異の変化の具合を
楽しむこともできるはずである。(森亮記)

服部三樹子著
歌集ねむの花

萬詞・保田与重郎後記・小高根二郎
戦後十年の世潮の荒廃の中を三十一文字が造型す
る夢の花をよすがにけなげに生き抜いてきた著者の
処女歌集。瀟々興亡の荒廃期を夢とうたゝねて歌ひ
すぎた式子内親王の幽艶な歌調を偲ばせるものがあ
る。二〇〇頁

果樹園社刊

第九十八歌
静かに坐れ、この地の下深く恋やみの女眠れ

玉の如く美しくとも醜くとも、やがて彼処に
帰るべし。

第九十五歌
やさしき月の光かな。花やげる春の夕べよ。
よし楽園に新しき月無からむもただ急げ。
我らもと天界の生れにて、かかる境に他国せ
しもの、

汝がからだより洗ひとる執拗き泥も
在りし日は裁きたくみとうたはれし法官にこ
そ。

第九十四歌
瓦を積みて壁となし泥塗り籠めし汝が住まひ
その瓦一つ一つぞ昔の城に集ひぬし兵の夢を
伝ふる。

嬉しくも美しき夢に見しさま今に忘れず。
われを抱き上げ、懐かしきわが母は斯くぞ語
りし
「嬰兒よ、現なく覚えなく世に生れしこと忘
るなよ。
汝去なむ日も現し心をかくも静かに失くしえ
ざらむ。」

なんの役にも立ちそうにない。そして、なにかが、そんなほくを、まもっているようだった。たとえば、棒一本、板一枚切るにしても、だん／＼面倒くさくなって、い／＼かげんな見ただけで切ったのが、もっとも正確に測定したのおなじに、びったり適合したりする。ときには、まちがえて、みじかく切りすぎたり、幅を広く取りすぎたりしても、さて出来あがってみると、計算どおりの寸法よりも、かえって、よい結果になったりする。無精もあやまちも、どういふわけか大過なく、すべて上首尾をもたらすのだ。そして、そういう経験は、ほくのこれまでの生涯を通じて、いちども有ったようではない。ほくはなんだかもと／＼なんの関心もなかった大工仕事で、ずっと以前からの、ひとつの根深い趣味だ。たみない気がした。

老子流寓途上

道德経成立之伝説

ブレヒト

一 齡七十歳、老いさらばうた師は

ちを持つている手がぶった。ほくの家は神戸の山手にあるが、山へ、海へ、あるいは、都心部へ、大阪へと、それ／＼に歓楽や向上をもとめて出さかってゆく人波のどよめきが下のほうの町から、ざわ／＼と伝わってくるようなのだ。省線や郊外電車があるあたりから、ながい坂路にそって、がけのかげにある庭の上空にまで、放射されてくるのかもしいない。ほくは公休日には、雨でもふらないかぎり、子どもと遊んだり、左官や大工の仕事をし、それを趣味みたいにしていくけれど、もっと本質的な、重要な、ほんとうにしなければならないことが、あるのではなかるうか……「松子、ちょっと……」

な。どうやな？」
なにか別に、もつ／＼言いたいことばがあったはずだが、ほくはふと、ほとんど出来あがった調理台を見せて、あらためてたずねる。「ちょうどよいかげんの高さやわ。これまでは低すぎたし、ぐら／＼やし、場所をふさげるし、便利が悪うて、かなわなんだ。お勝手しても、とき／＼いやになってしもたけど、こんどは、ぐあいがよくなって、こんなうれしいこと、あれへん」
「うん。まあな、これまでとは、だいぶ違つやる……」

「疲れたでしょ？ 手つだいましょうか」
「いや、なに……これぐらいの高さでいいか
もはや安息をもとめずにはいられなかった
というの、この国では、またもや善人のか
げがうすくなり
悪者がふたたびのさばってきたのだから
されば、師は草鞋の緒をむすんだ

二

わりなき手廻りは荷ごしらえした
僅かばかりの、それこれとは
毎夕たしなむ煙管とか
座右はなせぬ袖珍書
干飯とてほどほどばかり

三

馴れし溪谷をあらため賞したが

山道に入ればそれも忘れた

牡牛は老人をのせて、反芻し

萌ゆる青草をよるこんだ

精々速い足なみで

四

とまれ四日目は岩山の国境に達し

関所役人が道を拒んだ

「税金は高いのか」 「否」

牡牛の手綱をとっていた童が告げた

「道を教えてこられた方です」それは明かに

された

五

されど役人は派手に身体をゆさぶって

更に尋ねた「いったい何を修得されたのか」

童は答えた「優しい水も止まることなければ

いつか堅い岩にもうちかつということ

おわかりですか堅い岩が敗けるのです」

六

さて最後の日ざしがきえぬまに

童は牡牛をうながした、そして三者が

はや黒松のかげにきえざらんとしたとき

関守にはふつと気粉れがおこって

「おい、まで」とどなった

七

「老人よ、水とは、いったいどういうことに

なるのかね」

老人はとまった「それが面白いと思うのか」

男は言った「おれはいつかこの関守だが

誰が誰に勝つかは、おれにも興味がある

若しも知っているのなら、話してくれ

八

書きとめてくれ、その童に写させてくれ

さもなくば関所はなにひとつ通させないぞ

おれんとところに紙もあれば硯もある

おれんとところはすぐそこだ、夕飯もやろう

さあ、それでいい言葉があるかね」

九

ふりかえって肩ごしに老人は男を見た

上衣はつきはぎで、靴もはいてないが

額に一文のしわがよっているのを

おお、いかなる優者も彼には近かよれぬ

そこで彼はつぶやいた「おまえもね？」

一〇

ともあれいんぎん願いをことわるには

老人は老いすぎているようだ

それで高らかに告げた「尋ねるものには

答があたえられる」童が言った「もはや冷えてまいります」

「さらば、しばらくとどまろう」

一一

そこで賢者は牡牛から下り

彼ら二人は七日間書きつづけた

関守は食事をほこび（そしてほそぼそだが

その間中、通関税を払わぬ二人をぼやいた）

そんな風にして日がすぎた

一一

かくて童は関守に手わたした

ある朝、八十一章の箴言を

それからいささかの旅苞に礼を言ひ

二人はかの松かげを岩山へとまがっていった

今にして言う「これより鄭重になりえるもの

か」と

一二

されどわれら、かの書に飾られた賢者の名ば

かりを賞むるにとどまってはならぬ

われらは、賢者から先ずその知慧をうばいと

らねばならぬゆえ

かの関守にも大いに謝さねばならぬ

彼に彼は、賢者からその知慧をのぞみとった

者なれば

（たかはし・しげおみ訳）

じめた。妻はその棒のはしを動かぬようにおさえて『ひとりやと、やりにくくて、疲れるでしょ。持ってますわ』と言った。

東京通信

田中克己

好きなことだけをして、といったが、何をしてゐるのかと思ふ人もあらう。実は意けて何もしないのであるが一等好きなのだ。しかしさうばかりもしてゐられないので、歴史関係の論文を三つほど書いた。みな短くて、予想の通りには行かなかつたが、一応は書き了へた。

一つは「西王母の歴史」といふ題で、西王母伝説の変遷を書いた。これは学芸手帖（民間伝承改題）6にのつた。次は「通訳グルマフン」といふので、朝鮮人で、敵国の通訳になり、本国へやつて来て国王をはじめ国大臣たちをふるへ上らせたが、仕へてゐた清国の政変で失脚してしまふ男の伝記である。これは石浜恒夫さんの父博士の古稀論議にと書かしていただいた。

三つめは「アイタの伝記」といふ。やはり明清の交代の時に、満洲に生れた落第書生が清に逃げて行つて大官となり、朝鮮に使に行

く。朝鮮王に清国の実状を明かして、そのあと明へ逃げ帰り、改め込んで来た清軍に殺されるのである。これは東洋大学の紀要に書いて、もう校了になつた。

アイタにしてもグルマフンにしても、筆にする必要もないやうな小人物である。「伊沢蘭軒」を悠々と書いておいでだつた鴨外先生のお年に近くなつて、恥かしいやうな気がする。とりわけ朝鮮の歴史は専門でもないのだからこのたくひはもうこれでおしまひである。

x

東京へ来ての楽しみは、古本屋のぞきである。神田の一誠堂や本郷の井上など、良い本を高い値で売つてゐる店は、のぞくだけですまして、小さい店でも掘出し物と思ふがなかなかそんなわけにはゆかない。しかしおかげで大抵の本は見られる。小高根氏の「はぐれたる春の日の歌」は渋谷の店で見つけた。山根さんの「磁石」は赤門前で見つて、その次に買ひにゆくと、もうなかつた。尤も渋谷には別に詩集専門の店があつて、小山正孝さんの話では私の「西康省」も三冊あつた由であるが、ここはものすごく高いのである。いまのところ見つかからないのは、金田一京助先生の古稀記念論文集だけである。お気づきの人があつたらお教へ願ひたい。

x

一説やむ能はず、よみおはつてからも、忘れられない本を見つけた。斎藤响教授の「死ぬる前に」といふ小説である（東京ライフ社発行、二八〇円）。私は先生を哲学者と識りついで現在の日本に珍しい漢詩人として識つてゐた。今度のこの小説はよみはじめは素人の小説と馬鹿にしてよみはじめて、よみおへるまで数時間、よみおへるとこれこそ本当の文学だと呟いてゐた。孤独な少年辻讓の成長してゆくあとを追つた教養小説。「ヴェイルヘルムマイスター」の日本版だらうか。しかしマイスターよりもっと近しく親しい。こゝには事件は何もないし、いらぬのだ。しかも今の文学が大衆小説といはず純文学といはず、汚職、強盗、殺人、姦通、背信、自殺とあらゆる醜悪な特異な場をもつて来なければ成り立たないかの如く考へられ、描かれてゐるときだけに、このはこびこそ現代文学へのときびしい警告であるといへる。作者の毅然とした風貌もうかがへるではないか。私は知つてゐる限り、愛する限りの純真な魂にこれをよませたいと思ふ。

正月に街で買つて来た本の中で興味があつたのは河村敬吉「若き鴨外の悩み」（現代社刊行、二二〇円）。鴨外の死因は結核であつ

油虫

福地邦樹

油虫が死んでゐる。
白いはらわたを
ハンカチのようにちよつと出して
あおむけになつて
つややかに死んでゐる
油虫にも恋愛があるにちがいない
そしたら こいつは
ひとまわり大きながっしりした体つきで
色もしぶいウィスキー色で
触角もひと一倍長いようだから
きつと異性にもてたにちがいない
そいつがいまあっさり死んでゐる
ひとつの精巧な時計が
急におかしなこわれ方をしたみたいに
真冬の廊下の片すみで
あのすばやい六本の足を
きちんとそろえて
しごく上品に死んでゐる

た。青年時代にも罹つて家族全部でこれを秘めたが、死にぎはは鴨外自身が秘めたといふ箇所は、はじめて聞くことである。これを書く丁度そこへ届いた「青い花」をよむと萩原葉子さんの「父の思い出」がまた結核の辻野久憲氏をお祖母さんのいやがられる有様を達筆に書いておいでである。世界一の結核國で自然治癒しか方法のなかつた時代に当然といへば当然だが、二つとも尊敬する先人に関係してゐるので、ふしぎな気がした。鴨外と朔太郎のことはまたの機会にも書く。「死ぬる前に」の主人公も、そのメモント・モリの理由の一は彼の結核罹病である。結核文学論が書けさうに思ふ。

父の留守

小山正孝

私は宮本といふ不精ひげをはやした男が家に来る度に、いやな思ひをしてゐた。具体的にはなく、なんとなくいやな思ひがしたのだ。例へば、玄関から入つて来て、いきなりあがらうとする。

「お父さん みる」

と言ひながら、もう、あがつてしまつてゐる。父があるのか、あないのかは、問題では

ないのだ。そして感じるのは、父がある時は少し勢が弱いのだが、

「ううん」

と言つて留守だとわかつた時には、肩の勢が強いのだ。何か、圧力があつた。どうしても家の中に入りこんで来るのだといふ意志の力を示すのだ。さうして、あがつてしまつてから、

「おかあさんは」

と、聞くのだ。奥の室の方に入つて行く。そこには母があるのだ。

「僕、そんな事は言はないよ。お母さんなんか知るもんか言つたんだ。だつて、その前に、家で何かしてゐたら、外で遊びなさいって、どうしても外で遊びなさいって言つておこるんだもの。しゃくにさはつてゐたんだし、僕、お母さんの事知らなかつたから、知るもんか言つたんだ」

「お母さんなんかあんなの死んぢやつた方がいいんだって言つたんだろ」

私は答へなかつた。

「とにかく、お母さんに、ごめんなさいって言いなさい。あやまりなさい」

私は意外であつた。私は宮本がきらひだ。

父の留守に来たのだ。お父さんのあない時に来ると強いのだ。ずんずん私の家の中に入り

こむのだ。私は父の味方なのだ。それなのに父は宮本の言ったのを信じるのだ。母を信じるのだ。宮本と母を信じるのだ。父は宮本の味方をしてゐるのだ。私は父が馬鹿だと思つた。そんな馬鹿者を味方と思つた私が、急にとぼけたものに感じられた。

「ぢやあ、ごめん」

「ぢやあごめんとは、一体何よ」

母がヒステリックに言つた。私は父の目を見た。

「何といふ！」

さういふ目をして、父は私をにらんでゐた。「ごめんさい。ごめんさい。ごめんさい。」

その晩、寢床の中に横になりながら、私の両手も、両足も、もう無駄なものになつてしまつた。あるのか、無いのか、わからなかつた。内蔵も、股のあたりも、全部がちぢこまつて、身体全体がわけもなく、ふるへてゐた。「お父さんは知らないんだ。僕が悪くない事を知らないんだ。お前の味方なのに、味方につけなかつたんだ。おぼえてゐる。きつとおぼえてゐる。弱虫なんだ。お母さんが恐ろしいんだらう。いったい全体どこが恐ろしいんだ。あんな、あま、そら涙なんか流して、三角の目をしゃがつた。血走つたきたねえ目

秋風

岩崎 昭 彌

昨夜は「二十八哩」

点呼をうけると峻しい山々に夜があける急いでジャングル内に退避して煙を出さぬやうにと注意をしいしいめしを炊く

やがて抱きあつたまゝで眠つてゐて気がつくとも陽差はすでに西にあるあゝ けふは空の狼が来なかつた！

岩肌こそよいである風はもう秋だ昨日まで足裏を焼かれたやうな記憶だが

芋虫みたいに折り重つて横はる友よこのあたり朝鮮朝顔が無数に赤い思へば 遠くつれられて来た

——インパール——

なんかして、てめえは、自分の思ひ通りにしようたつて、お前なんかに負けるものか。絶対に負けやしない」

私はうなされた。あれは、夢なのだ。物の形ではない。白い大きいやはらかいものだ。ぶよぶよしてゐて太いものだ。太いものがどんと太くなつて押しつけてくる。次第に顔や胸に押しつけられて、息が苦しくなる。私ははねのけようとしても、かへつて、ぶよぶよに手の方がしづかにはねのけられる。いつまでも、奇妙な力でのしかかる。しかも、とても強いといふわけではないが、弱くはない。息苦しい。息苦しい程度のもんだ。声も出せない。お菓子が化けてゐるやうなものだ。お菓子にそんなのがあつた。バナナの味がついでゐた。

宮本と母との間には、何か特別な関係があつたのではないだらうか。今になってみれば疑つてもいい理由がある。男と女が一つ室にどうしてゐたのだ。私をあつた時、あんなに無理に外で遊ばせようとした事もかしい。十一才の子供の言つた言葉を、とちがへて、どうして、あんなに反感を示したのだ。宮本の所でとちがへたにしろ、母の所でとちがへたにしろ、大人が問題にするやうなものではないはずだ。実際には、父が示した私に

対する態度が一番わからないのだが、あるいは母の私に対する憎しみが、よほどひどかつたのではないだらうか。

宮本と母とは、何でもなかつたのかもしれない。私は、本當にさうであつたと思つてゐる。また、父が、あの私にとって、重大な事態に於て、私の頭を無理に母の前にすりつけさせた事は、たとへ何でもなかつたにしても結果としては変化はない。私は裏切られたのに變りはない。私は言はなかつたのだし、私は父に親しみを持つてゐたのだし、私は少年でしかなかつたのだ。

両足を切られた母が、父に憐みを乞ひ、泣いてゐる。私は、大変悲しんで、父の怒つた顔を見てゐる。両足を切られた母は、膝までの足で、部屋を歩き廻りながら、「では、みんなともお別れね」と言ふ。そして、急に笑ひはじめ、両眼からはあふれるやうな涙を流す。涙はたらたらとほほを流れる。両足からは血がにじみ、母は快活にゐなくなつて、私だけがぼんやりと叱られる姿勢で坐つてゐるしづかな室になつて、私は自分がいつまでもそこに居なくてはならないと思つてゐる。これもある晩の夢であつた。私の生活は、ひどいものになつたのだ。ひどい生活が私を両手をひろげて待つてゐたのだ。

「それはわからないよ。君はをぢさんがわからないと言つても、をぢさんはわるい気持は持たないよ。そのうち、ずうつと昔を思ひ出すやうにして、君の中にあるをぢさんを君はわかつてくると思ふからね。これから、をぢさんは君の家に行かうと思つてゐるのだがねさう、お父さんは明日でしょ。出張から帰つて来るのだね。今日かとも思つたけど、やっぱり明日のね。君、よかつたら、少し、この道を逆もどりしてくれない。一寸した買ひものだから、ついてゐてよ。いいんだよ。お母さんに先に知らせてもらはない方が、いいんだ。ああ、この道はなつかしいものだ。君の全然知らない頃——戦争の頃だつた。この桜並木の下を、警戒警報の最中に君の家から帰つた事もある。その時に、あんまさんとぶつかつて叱られちゃつた。あの頃は左側通行でね。ところが右側を歩いてゐたんだよ。あんまさんの方は左側を通行してゐて、あんまさんにしてみればぶつかるわけはないと思つてゐたんだ。どすん、とぶつかつたら、この明めくら、白い杖が見えないのか、つて言つたわ。こちがいけないもんで、さんさんあやまつた。あんまの方も少しはこわくなつたんだらうね、急にやさしい言葉になつて

ね。ただ、あの時のびっくりした両方の様子は、暗い中だけど、はつきりわかつたね。あんまさんの事は、まだおぼえてゐる位だよ。桜の木も大きくなつたわ。さういへば、をぢさんは、君がすぐわかつたよ。銀行から出て来た時にね。何しに行つたの。お使ひ。自分の用事。貯金かね、さうだ、貯金でせう。ほしいものがあるのだな。さうか、君、自転車を買ふの。もう、いくらぐらゐたまったかな。七千円。すごいね。それが通帳なの。きれいな通帳だな。をぢさんは君の名前をさつき、それで見えてね、たしかに君だといふ事がわかつたのだよ。早いでしょ。さつき走りかけた時に、君の姿があの人そつくりだつたんで、追いかけたんだ。もう少したつて君が自転車を買つてからだつたら、とても追いつけなかつたね。さあ、ここで買ひものをしよ。お待ちどほさま。ついでに、君、をぢさんはこの辺がなつかしいんだ。もう一寸つきあつてね。そつちに行つてみよう。君の学校の方にも行つてみないか。君のお母さんをよく知つてゐるよ。利子さんて言ふんだね。君が生れない時——君がお腹の中にある頃に、をぢさんは君を知つてゐたんだ。さあ、何だらう。生れたての君はお猿みたいだつたな。お湯の中で片足ぎゆうつとふんばつたりして

ね。君だったんだね。何、この指輪の事か
い。太いだろ。純金だよ。君の自転車位はす
るかな。純金だからね。お母さんもはめてあ
るでしょ。よく知ってるでせう。お父さん
ははめてゐないの。さう。さうだらうと思っ
てみた。けれど、男でもはめるものなのだ
ね。本当はね。君のお母さんも、お父さん
も、君にはをぢさんの事を話してゐないん
だらうと思ふな。全然知らなかった。だからび
っくりする。けれども、それ程びっくりもし
なかつた。どうしてか言へば、こつちで
君の事をよく知ってゐたから。それで安心し
たでせう。さうなんだね。をぢさんは君の事
がわかりすぎる程わかつてゐるからな。まる
でめくらくと誰かがぶつかつた時みたいだね。
はははは。をかしくはないの。君は、をかし
くはないかもしれないね。びっくりしたから
ね。いや、びっくりした話だったね。あれ
も。いつも、君は銀行には一人で行くの。今
日は特別。さうすると、偶然だつたのだね。
銀行って言へば、をぢさんは小さい頃に、銀
行に行くのがきらひだつたね。とても天井が
高くて、上の上に四方に手すりがあるって、西
洋の侍が現れさうだつたね。いや、その手す
りの所にはどこかのお坊っちゃんが見われさ
うだつたね。自分よりも、もっと幸福さうな

お坊っちゃんが。いつのまにか自分がその自分
より幸福さうなお坊っちゃんになつたやうに空
想してしまつてゐたのだよ。それから、いつ
か銀行が倒れてね。君だつて、さう思ふでせ
う。倒れたつて——君も一寸わからないでせ
う。いつも行く銀行の建物が倒れたのかと思
つたのだ。手すりも、窓も、高い明るい白い
天井もめちやくちやになつたのかと思つたの
だ。さうではなくて、中味が駄目になつてし
まふ事なのさ。例へば、君のあづけた七千円
がかへしてもらへない事になつたり、七千円
しかかへしてもらへなくなつてしまつたりす
るのさ。大丈夫だよ。今は、例へばといふ
話だから。この頃の銀行は絶対大丈夫だよ。
君の自転車位、さうなつても、をぢさんが買
つてあげてもいいよ。つまり、銀行が倒れる
つていふのは大変な事だつたらしいね。一番
信じてゐるものが、駄目になつてしまふのだ
からね。その時、日本中が大変だつたらし
い。銀行の思ひ出といへば、そんな、いやな
事だな。をぢさんの家は急に貧乏になつたん
だ。をぢさんの目方かい。十九貫としておか
うかな。太りすぎだつて。君も、相当太つて
る方だね。わりにね。どれ、君の手の爪はお
母さんそっくりだね。あれ、親指は一寸、を
ぢさんのに似てゐないかな。似てゐるね。ほ

放心

堀ノ内 歴

私にはこの後
死ぬことだけは出来る。
それはきつと春先であることを……
そして、強い肌寒むの日であることを……
どこでも良い手近な道ばたの泥濘に、
私が朽ち混ざりこむ事を……
水を含んで豊かな泥土に
やわらかく融けた自分を、
自ら釣り込まれる想いで
その時みつめる事が、
鮮明なたのしさにちがいない。
あゝ、然しいま春先、
昨夜不時に降つた雪が
日暮れ近い今日なおも
近くの山々に暗く冴え残るのを
泥道に立つて茫然と眺めてゐる。
(一九五八・三・七)

雉子

美堂正義

枯草から二羽の雉子が飛び立った
羽搏きが静かな空気を揺れ動し
晴れた早春の空に狐を画きながら
松の梢を掠めて谷底へ降りていった
一瞬消えた空間に残る微妙な哀愁
もはや力強い飛翔の姿はないが
鋭く呼び交はす声が段々遠のき
果ては聞えなくなつてしまつた

かのはどうか。君にしばらく逢はなかつた
わけを言はうかね。君が忘れてしまふなん
だらう。しかし、何も秘密しておかなくて
もいい。子供つていふものは本当を見抜く力
を持つてゐる。君の目には自然に、はっきり
と見えるのだから。君のお父さんがをぢさん
の事を怒つたのだよ。いや、もつと言へば、
やはり本当の事を言つた方がいい。君のお母
さんもをぢさんに怒つたのだよ。全く怒るわ
けはないの。君はわかるでせう。何となく不
思議でせう。偶然とはいひながら、こんな話
を聞くなんてね。ほら、この赤い皮の鞆の中
には何が入つてゐると思ふ。わからないでせ
う。実は、何にも入つてゐない。空気だけと
言つてもいいね。持つてごらんさい。軽い
でしょ。をじいんは、太つて大きいけど、丁
度、この鞆みたいだつたし、今も、この鞆み
たいにがらんどうだね。もしかすると、毒ガ
スかな。空気にもいろいろあるよ。君が可愛
くてね。君に逢ひたかつたのだ。もう、なん
だか、君の家に行かなくてもいいやうな気持
になつた。どうしてだらうね。ずうつと昔、
君のお母さんと、こんな風にして、この道を
歩いてゐた事がある。鞆は持つてゐたけど、
君のお母さんが持つてゐてくれたのかな。さ

うでなかつたかな。どつちでもいいやね。そ
んな事はどつちでもいいやね。その時に、急
に君のお母さんが言ふんだよ。ああ、やめよ
う。やめよう。をぢさんは帰らう。さうだな、
だから、わるいけど、もう少しだけ、君とい
つしよに居よう。君の家には行かないよ。そ
れに、時間も、そろそろだし、君の家には行
かないで、をぢさんは、駅から帰るよ。もう
少しだけね。君、駅でホームまで見送りして
ね。そこで別れませう。わるかつたね。急に
よびとめて、買ひもののつきあひをさせて、
見送りまでさせてね。つかれたかな。をぢさ
んは君がをぢさんの話を聞いてゐてくれるの
がうれしいな。このまま帰らう。君のため
にも、君のお父さんのためにも、君のお母さん
のためにも、一番いい方法だよ。さうしよ
うね。君はどうしてお母さんにそんなに似て
ゐるのだらう。ああ、あの時とそっくりだ。あ
の時、君のお母さんが言ふんだ」

「僕は、子供に逢つたんだよ」

「よくわかつたのね。利子さんといふ人に
似てゐたのね」

「さうなんだ。瞬間にわかつた。おそろし
いものだ」

「何が、おそろしいもの」

「想像だけだったので、一寸冒険だと思っただけど、その通りだったのさ」

「あの人の子供さんなら、可愛いでせう」

「あの人って。ああ、あの人ですか。ふうん、可愛いですよ。私はまた、利子さんを知らないのに妙な事を言ふと思ひました。あの人は、つまり、利子さんのあの人でありますか。ほれてるね。こいつめ」

「まさか。好きな人だったら、あなたにあらんな事教へますか」

「しかし、僕を好きといふわけではござりませんでせう」

「そちらさまは」

「もし、さうなるものならば、どちらともなく」

「あら、お上手ね。話をそらさないで。いつのまにか、そらせてしまふのね」

「さうではないよ。君の方がそらせるのさ。聞いてくれるの。僕はその少年の顔を一目見た時に、目がそっくりなのに気づいたのさ。丁度、走りはじめようとした時に追ひついて、肩に手をかけたんだ。ふりむいて、目を合せた時、きれいな目をしてゐるのだ。射るやうにね」

「昔の人そっくりといふわけね」

「それ以上。あれとはいろいろ異なる事も少し

したからね。僕は少年といっしよに歩いてゐるうちに、その先に進むのがいやになったのだ。俺の目的は何だらう。逢ふにしても、それからどうなるの」

女の顔が急に真剣になった。目がキラッと光った。バーの空気が透明になつて、しまつた。こちらの酔ひもさめさうだ。私の目的と私のしてきた事を、女に話してどうなるのだ女は戸口に目をやった。誰も入つて来ない。

「あなたは、逢はなくてもよかつたのよね」

「さうかもしれない」

「近くまで行って安心したの」

「それだけではないな。僕は電車から下りるまでは、はつきり、つきとめる気でゐたものね。胸がどきどきしてゐたものね。少年に話しかけると、はじめは逃げようとした。逃がしてはならないので、夢中で話しかけた。いや、やめよう。君は僕の結果だけを聞きたいんだらう。逢はなかつたよ。どうして逢はなかつたかは、逢はなくてもよかつたなんでものではないよ。最後には逢ひたくもなくなつた。そして、そのくせ、本当は逢つて来たんではないかといふのも、僕にははつきり否定も出来ないよ。実は、逢つて来た以上の事をしてきたんだ。あの女から、僕は奮つて来たんだ。奪つてすててしまつたと言ふ方がいい

朝日放送連続童話

日本アンデルセン

石浜 恒夫 著

メルヘンの神様アンデルセンが大坂に現われて物語る童話集。谷内六郎氏の大坂スケッチ、出陣美千代さんの挿絵に飾られたフランス装の美本。価三〇〇円二十四

大阪府大淀区中津本通三丁目 六月社刊
振替口座 大阪一八五七九

な。もう、はは、あれは駄目だよ、きつと。彼女は、少年の変化におどおどしてゐるより仕方あるまいね。側で苦しむだけさ」

「変化して言ふと」

「変化して、変わる事さ。どんなになるだらうかな。先づ、いらいらしはじめるだらう。いつかは、少年は言ひはじめるだらう。お母さんなんて、何だい。何だい。てめえなんか」

「いやあよ。大きな声を出して」

「わかるもんかい。てめえなんか、本當の事がわかつてたまるかつてえんだ」

女は、それに行く私の気持を持ってあましたのだらう。グラスを二つ、カウンターに置いて、つき終ると、一つを自分のみこんだ。

「俺は、あの少年——美しい、小さい、可愛い、生き生きしてゐた少年に言つたんだ。僕は君のお母さんといっしよにこの道を歩い

だつていふ事をね」

(未完)

僕の文学時評

林 富士馬

近頃デヤナリズムに売り出してゐる評論家の江藤淳氏が、日本読書新聞の文学月評で、エッセイまがいの小説——つまりそれが本當の意味での小説でもなく、又、同時にそれが本當の意味のエッセイでもない文章が、我が國の所謂營業文学雑誌に伝統的に根強く、「小説」として巾を利かしてゐることを指摘してゐた。

今月の例で云へば、火野葦平氏の文壇噂話とも云ふべき「誘惑状」など、その好例ならむ。

ところで私のやうな無責任の立場の者には大抵さうした、小説でもない、エッセイといふでもない、といふのが一番面白い。大体そんなに期待して、月々の文学雑誌を読むのではないためだと思ふ。編集者の立場から言ふと、それを「創作欄」に組み入れるか、随筆欄のところにするか、評論にするか、稿料支払ひの額からして大問題になるのであらうが、文壇に於ける大方の「私小説論義」と関連して、私には縁の遠い話のやうに思はれ

二月の林

芳野 清

たんだ。君のお母さんが、その時に、言ったのだ。急に言つたのだ。赤ちゃんが生れますもちろん、それが、君なのだ。をぢさんは君のお母さんに逢ひたかつたけれども、それより、君に逢ひたかつたのだ。ただ、どうな

つてゐるかを見るだけでもと思つてゐた。けれども、言ひたくなつてしまつたのだ。君はをぢさんの子供だつた。をぢさんは君のお父さんなのだ。君は、はつきりとおぼえてゐてくれたまへ。君の本當のお父さんは、この僕

つくしん坊、

袴が割れるまで生きのびられるかしら

僕がナルシス青年そっくりの

すぎなになるなんて、信じられない

△あゝ、私、長く眠つてたので

芽を出す時を忘れたわ、

永遠の白痴美、草木爪の花か

△たんぼほつて云ふと子供の花だけど

風嬢花つて呼んで頂戴、文学的でせう

△何云つてんの、私急いでるのよ

だつて直ぐ薬が立つてしまふんですもの

売口はないかなあ、

△路の霧さん、同情するけどあわてなさん

な、僕はもつとのんびりしたいよ

せはしいな、春つてやつは！

僕は花など咲かせたくないよ

△シニクならびさんだこと

△ロマンチック少女の目にふれるのも近い

わ

私は天上の星と並ぶのよ

そんなつもりぢやないのに

皮肉やのゲーテ小父さんのせいよ

あら くすぐったい

私の傍でもそ／＼すんのは誰？

△僕です、気のきかぬ代表者、

る。それより、数多くの同人雑誌に拠る人達が、文学それ自体に、直接の興味と関心を持つてくれれば有り難いやうな気がする。

と言つて、文学のみに限らないが、とにかく、それ自体が持った形式美——といったものに無関心といふのではない。江藤淳氏の指摘に反撥を感じながら、矛盾したことを言ふやうだが、例へば、室生犀星氏が、「随筆はどんな短い文章にも頭も尾も尾もなければならぬ完璧なものである。それには濃い色彩が塗られ彫りが施される小品刻文であつて、或る物は高麗青磁の象嵌に似てゐる」といふやうな、如何にも室生的表現と主張とは、それはそれなりに面白く思ふ。

小説にしたつて、崩れたまゝの形式では面白い筈が無く、そこには、形式だけをとつてみても、質物と本物との崩れがあるに違ひないのである。

ひとの振りみて、といふが、沢山の多彩な同人雑誌を眺めてゐるので、自然と、この果樹園のことが顧みられる。

一体、どういふ心算で、同人雑誌は刊行されてゐるのか、その意志的、無意識な目的のことが考へられる。多くの他の同人雑誌を眺めてゐると、その意志的な刊行目的ないし、

掲げてある看板と、その内容、或は客観的にそれが置かれた位置とは、一致しないものやうである。

私は今迄、絶えず、文学と同人雑誌といふことを切り離して考へることが出来なかつたので、そのことが、幾時の間にか、習性になつてゐる。文学に対する憧れと期待は、自分の同人雑誌に対する無限な期待と不満とであつた。

私は怠け者なので、世間の人が、所謂、宗教、政治、学問、と云つたことばで、自分を対処せしめてゐるところのことを、自分勝手に、漠然と、文学といふ名を冠してゐるのだが、私のその文学は、同人雑誌に、ものを書き、発表するといふことで、自分の対世間的な処生、考へ方を、纏めて来た。哀れな自分の小市民的家庭生活を、さういふ私の文学に纏つて、鼓舞して来た。はじめ私は、小さな自分の家庭生活を乗り越えることだけが、私の文学的課題であつた。さうして現在、私は気の毒な家長として、一生懸命、私の文学といふことばで、私の家庭生活を防衛しつゞけてゐる。

他に発表するところが無いので、私は私の妄想し、招待しなければならぬ読者のために(いつでも、何らかの意味の読者を設置しない)ゐる人に違ひないと云つた按配式である。ところで、現在の果樹園は、私にとって、どうであらうか？

第一の不満は、果樹園の同人達で、果樹園

野望がおちる
怨恨がおちる
罪のおそれもおちる
にくしみも怒りもおちる
らくになつた肩を遊ばせて
おれもみんなもくつろぎ

呪文がとけたのだ呪文を書き出した看板の字も消えたのだ
こんなきれいなさっぱり憑きものがおちると
げらげら笑ひ出したくなる
へいつくばつたりかつかつたり
しがみついたりふり廻したり
さきさまはでんと居直りたまふ
われながらだらしがなかつたよ
笹舟の上でそれ達磨が
腹をかかへてゐることだ
河はゆく兩岸の起伏をながめながら
悠々とながれてゆく
蛇も悠々とながれてゆく
仔羊も悠々とながれてゆく
達磨も悠々とながれてゆく

ければならなかつたので)幾時でも私は、自分で同人雑誌を世直ししつゞけなければならなかつた。

果樹園から、同人にさそはれたといふことは、今迄にそんな経験が無かつたので、私には大変な光栄であつた。二度目からは、さう感激出来ぬであらう。所謂友人などと互称する人々、又は互称して来たことに、無限な憤懣を抱かざるを得ぬ。併し、これは、ひとを責めても、仕方ないことである。私は、はじめて、月々、キチンキチンと、同人費用と、さうして、それに従つての原稿を送りさへすればいいわけだ。併し、私の考へてゐる同人雑誌の原稿は、依頼によつたり、原稿料のためだとか、他の口実をみつつけ易い、営業活字のなかに、文字を発表するのと、全く別な確固たる、「意味」「目的」が無ければならぬ。

おなじ理想、イデオロギーで出発した仲間だつて、月日の経過のうちには、お互ひの境遇の変化や、又、イデオロギー、芸術論、宗敎論、金銭觀等々の食ひ違ひが生じて来るのは、これはやむを得ないにしても、とにかくその世界のなかで、素朴な友情が無ければ、物足りない。相手が何等かの意味で、畏敬するに足りない人では、面白くない。同人のC

以外の同人雑誌に関係してゐる人達が、その仲間に入つてみたら、案外多かつたこと。(勿論、私も、他の同人雑誌に、ものを書いたりしてゐるので、この文章は、例により、

(囚人は独房のなかを行つたり来たり
ざらざらした壁に手をやり、そこに
つきあげた木の芽の固い外套を感ずる)
季節だあせることはない
歴史をとくすあの刻だ
南で燕が帰り支度にかかり
みどりの夏や大きな朴の木の花や
それへの距離はただの一瞬だが
悟空よそんなに赤い面をせず
いまは時よゆつくり歩め
じつくりと歴史をとくかまたとかせ
あたたかくあたたかく
この大地にしみてゆけ
あちらでもこちらでも
おちてゐるしづくそれが地熱や
樹液や合図や暦の文字や
予感にみちたねぐらのおくがで
どんなすなほな雛がすだつつか
いい気持だたのしみだ
みんな一年生だ読本の巻の一から読む
春が来たその第一章から読む。

春が来た

浅野 晃

雪どけのしづくをきいてゐるのはいい気持だ
ゆつたりと間をおいておちてくる
冬にも春

春にも春
ふる時にはふり
とける時にはとけ
運命の星よ
おまへがずっと北に移つていつてから
おれはこのおとづれを忘れてゐた
ひそむ蛇の眼も柔和

曠野の家をめぐつていま
これら無言の白い仔羊のむれだが
彼等は毛を刈りこまれ
黒い地肌がまだらに出てくる
かたまつた青い血がおちる

自分自身に向って書くのが、その主な目的である。と同時に、現在のところ、果樹園の読者はまだ広範で無いであらうから、未見の人が多にいても、その果樹園紙上に発表されてある作品から、こつちだけで、ひそかに尊敬してゐる人達——最も怖るべき大切な読者をめあてにして、私は書くのである。果して、その人達は、真に、何より果樹園を愛してゐる人達ばかりなのであらうか？ この疑問は、自分自身のために、加入して直後、自分一個の問題として、引つかうり、私は寧ろ、執筆同人であるよりは、読者の側だけの仲であるべきではないかと、何度も練り返し考へられてゐた。

若し私に率直に云はして貰ふなら、私達は「果樹園」の読者を、出来るなら、もっと広範に、獲得するやうに、努力したのである。私は、私の最も怖るべき大切な、少数の読者達によって、憂き世の艱難を越え尽し、そして鍛え上げられた私の文章や作品が幾時の日にか、ベスト・セラーにもなり、世の中の地の塩ともなるといふ滑稽な妄想を振り切ることが出来ない。

田中克己氏が上京されて、幾時の間にか、一年はとつくに過ぎた(?)。月に一辺位づ

つお逢ひ出来ることが、大変たのしく、刺激になってゐる。

昔、二十代に、萩原朔太郎氏を囲んでのパノンの会で、はじめにお逢ひした頃の、「世間知らず」のあの「文学への情熱」を、振ひ起して、「果樹園」同人諸賢の——ヒンシュク——を買いたいと覚悟してゐる。

パノンの会と云へば、「果樹園」に連載された詩人大垣国司のことをテーマにした芳野清氏の「月に招かれた男」に、パノンの会のことが出てくる。そこで私は、田中克己氏だけでなく、他の多くの人々、例へば小山正孝氏とも、おめにかゝつた。さういふ個人的なことだけでなく、例へば芳野君の「月に招かれた男」を、果樹園の力で一本に出来るやうな、そんな実力を果樹園が蓄え得ることを、矢張り仲間一人としては、夢想せざるを得ぬ。

序手にしるすと、「青い花」といふ同人雑誌に、荻原葉子さんが、お父さんの追憶記を綴つてゐる。たゞとどしく、筆をなめるやうにして、やうと出来上つたといふやうな按配式のところが、何とも云へない。変な風情を間を知り尽し、さうして、充分に世間の反響を計算せざるを得ぬ才女達の文章に馴染んだ私には、有り難い文章であつた。

編輯後記

昨年の三月田中氏を東京に送つたが、今年の三月にも服部三樹子さんを東京に送ることとなつてしまつた。滑部一年田中氏の生活もやうやく安定をみた由でまことに慶賀にたへないが、これからの服部さんの苦勞を想ひ借別の鳴も切ない。彼女は上方生活の形見に美しい歌集「ねむの花」を儀等に類した。この前掲な歌集が東部の流風に琢磨されることを明日の期待とし、その期待を近畿在住の同人からはなむけとする。

ヒマラヤ探險隊長になつた藤原武夫氏が「新潮」誌上で現代詩のくだなきを論じてをられる。同じことを本誌二十五号で田中氏も論じてゐるが、知識人たちが讀つて未熟な若者を甘やかし彼等におもねつてゐる昨今の妙な風潮への戒言である。(O)

三月十六日同人会を堂島河原の日本レイヨン寮で開催、集つた人々は小高根、杉山、石浜、池沢、高橋、岩崎、堀ノ内、服部、山根の諸氏である。(Y)

果樹園 第二十七号(毎月一回発行)
昭和三十三年四月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行人
京都市下京区壬生川通五冬下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
發行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園二十七年昭和三十三年四月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社發行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第28号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
断章 四つ 浅野晃
浅瀬 ピオンテク
「終曲」に寄す 杉本秀太郎
詩碑の夢 山根忠雄

難聴 池沢茂
そうやすやすと 福地邦樹
東京通信 田中克己
白居易詩抄 森亮
僕の文学時評 林富士馬
チビ助のお話 堀ノ内歴
東都の花 服部三樹子
「ねむの花」の反響 栗山小島板倉
夕ぐれ 美堂正義

書簡から見た

伊東静雄(二十七)

小高根二郎

伊東の「コギト」に寄せる情熱は、「[呂]」に対する愛着が薄れるに反比例して、月を追つて強くなつていった。

「肥下さんから逆に、お葉書いただいてすみません。つまらぬ私の詩よくよんで下さいます。

田舎で病氣になつた友人(註・兵庫県岩見港で療養する青木敬應)を慰めるために始めたあんな小さい雑誌が皆さんと知り合ひになる

肥下さんの小説のないかほりに近頃は田中さんの小説を愉快に拝見してゐます。然し、肥下さんがもっと筆まめになられることを衷心願つてゐます。なんかえらい口上めきまして、つまらぬ手紙になりましたが、その時、その時に又手紙差し上げたいと思ひます。

五日 伊東静雄
肥下恒夫様

(昭和九年三月五日大阪西成区松原通二の十五より
京都市中野区沼袋南三の二五二肥下恒夫宛封書)

この書簡は、伊東が「コギト」四月号に「帰郷者」の原稿を寄稿したのに対し、肥下氏が礼状を出したので、伊東は折返し小説家として有望を伝へられた肥下氏の精進を励ましたのであらう。

帰郷者

自然は限りなく美しく永久に住民は貧窮してゐた

幾度もいくども烈しくくり返し
岩礁にぶつつかつた後に

波がちり散りに泡沫になつてひきながら各自ぶつぶつと咬くのを

私は海岸で眺めたことがある
絶えず此処で私が見た帰郷者たちは

斷章四つ

浅野 晃

1

琅玕をふふむ
海の微笑
糸切齒に
日光をひきとどめ
月光をひきとどめ
すべての瞬時が我を忘れる
浜防風をとりに行った子
まだ帰って来ない

2

某月某日
たんぽぽが花をつけた
某月某日
つめくさが、じやがいもが
花をつけた

正にその通りであった
その不思議に一樣な独言は私に同感的で
なく

非常に常識的にきこえた
(まったく！ いまは故郷に美しいもの
はない)

どうして(いまは)だらう！
美しい故郷は
それが彼らの実に空しい宿題であること
を

無数な古来の詩の讚美が証明する
曾てこの自然の中で
それと同じく美しく住民が生きたと
私は信じ得ない
ただ多くの不平と辛苦のうちに
晏如として彼らの皆が
あそ処で一基の墓となつてゐるのが
私を慰めいくらか幸福にしたのである

同反歌

田舎を逃げた私が 都会よ
どうしてお前に敢て安んじよう
詩作を覚えた私が 行為よ
どうしてお前に憧れないことがあらう

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この「帰郷者」は伊東の絶唱中の一つであ
る。五年半前の年少の日、伊東は「帰郷者」
の歌として

肥の国は大和の涯はた所この思ひになくさま
なくて今朝も茶をすする
と歌つてゐた。(昭和三年八月十四日附
宮本新治氏宛書簡参照)

は、郷里に嫁ぐ日間近い安代さんを迎へ、彼
女を空しく見送つた後で歌つた、田舎者とし
ての敗北の歌であつた。その敗北感は、郷里
諫早は大和の涯であり、その涯所に根を持つ
伊東の単純な劣等感にすぎなかつたが、今度
の故郷観には明確な自覚がある。故郷に美し
いものがないのは今に限つたことではない。
美しい故郷Vなんて、土台、人間に課せら
れた永遠の宿題なのだ……と云ふ、哲理に到
達してゐる。五年と云ふ短くはあるが、充
分、苦渋に満ちた南大阪の生活体験が、この
哲理に悟達せしめたのである。

この「帰郷者」を発表した翌五月、伊東は
引続き「四月の風」を「コギト」に送つてゐ
る。
「久しぶりに詩が出来ました。もし来月号
に間に合つたらと思つて大急ぎで清書して
送ります。

郭公が来て鳴いた
はまなすが花をつけた
みな日附があつた

3

夜となり不変の星が
ふたたび現はれる
友情に似た感情が起る
歓喜をおぼえる
彼らを歓迎迎へる何ものかが
わが胸中にあつて
遠いところにある友
むしろさきだち逝つたもの

4

日々のなりはひにいそしみ
草の花をめぐる
あひともにそれが一つの
高く燃える時に逢はむことを

どうぞ適宜に処置して下さい。
皆さんよろしく伝えて下さい。

こちらでは田中さんに二度、中島さんに一
度会つて、いろんなことを話しました。
取急ぎ

一日夜 伊東 静雄
肥下恒夫様

(昭和九年五月一日大阪市西成区松原通り二の
十五丁目東区中野区船場南三丁目二五二肥
下恒夫宛封書 航空便)

この書簡で、伊東は田中、中島両氏に出会
つてゐる由見えてゐるが、この春田中氏は東
大東洋史学、中島氏は京大哲学科をそれぞれ
卒業し、前者は浪速中学教師となり、後者は
大学院に通ひ、大阪在住となつたので、自然
出会ふ機会に恵まれたわけである。

四月の風

私は窓のところに坐つて
外に四月の風の吹いてゐるのを見る
私は思ひ出す、いろんな地方の町々で
私が識つた多くの孤児の中学生のことを
真実彼らは孤児ではないのだったか

孤児！ と自身に故意と信じこんで

この上なく自由にされた氣になつて
思ひ切りふざけ悪徳をし
ひねくれた誹謗と飲び！
又急に悲しくなり
思ひつきの善行でうっとり た
四月の風は吹いてゐる、丁度それらの

昔の中学生の調子で
それは大きな恵で氣づかず
自分の途中に安心し
到るところの道の上で悪戯をしてゐる
帯ほどな輝く瀬になつて
一散に走る部分は
老ひすぎた私をからかふ
曾て私を締めつけた
多くの家族の絆はどこに行つたか
又ある部分は

見せかけだと私にはひがまれる
甘いサ行の音でそんなに誘ひをかけ
あるものには未だ若かすぎる
私をこんなに意地張らすがい
それで、も一つの絆を

その内私に探し出させてくれるのならば
伊東は「四月の風」を発表した翌七月次の

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

書簡を肥下氏に送ってゐる。

「皆さんお達者ですか、大阪は二三日来ひどい暑さです。然し壮年がひ弱い私にもや
つて来てをると見えますして、強い日光を見
てゐますと非常に不快です。」

先ごろから田中さん方も大阪に住まはれ
るやうにやり、中島さんとお会ひする機
会が多くて心がぎやかです。先日「文芸」
見てゐましたら保田さんが多くの人の中に
写ってをられて面白くありました。肥下さ
んもきつとをられると思つて、一人で推量
して眺めました。コギトの保田さんの「童
話」拜見して近來になく清々しい、又胸の
つまる様な気がしました。それに対して
中島さんの青春の文学（世紀）といふエッ
セイム一対をしてみゐて、私は二つを心の
中に思ひ並べ愉快を禁じえませんでした。
詩封入して置きます。ごらん下すつてよ
ろしく処置下さい。

肥下さんの小説、私も皆さんと一緒に待
つてをります。

七月一日夜

伊東 静雄

肥下 恒 夫様
保田 与重 郎様

（昭和九年七月一日大阪市西成区松原通三の十五より
り東市中野区大和町二五番地肥下恒夫宛封書）
この書簡で、真夏の日光にも爽快を感じる

元気な伊東が感じられる。それを伊東は壮年
としての快感としてゐるが、「帰郷者」「四
月の風」と相次いで快心作を発表した彼は、
身内に溢れる力量の自信で、さうと感じたの
であらう。

田中、中島氏との交渉もい刺戟だった。
東大の美学を出たばかりの保田氏は、すでに
ジャーナリズムの写真に影を見せるほどの大
人振りを示してゐた。伊東が統一性の欠けた
「呂」よりむしろ「コギト」に、活躍舞台を
求めたのは当然だった。右の書簡に同封した
詩は、「コギト」八月号に発表された次の詩
である。

晴れた日に

とき偶に晴れ渡った日に

老いた私の母が

強ひられて故郷に帰って行つたと

私の放浪する半身 愛される人

私がお前に告げやらねばならぬ

誰もがその願ふところに

住むことが許されるのでない

遠いお前の書簡は

しばらくお前は千曲川の上流に

行きついで

四月の終るとき
取り巻いた山々やその村里の道にさへ
一米の雪が
なほ日光の中に残り
五月を待つて

桜は咲き 裏には正しい林檎畑を見た！
と言つて寄越した
愛されるためには
お前はしかし命ぜられてある
われわれは共に幼くて居た故郷で
四月にははや縁広の帽を被つた
又キラキラとする太陽と
跣足では歩みにくい土で
到底まっ青な果実しかのぞまれぬ
変種の林檎樹を植えたこと！

私は言ひあてることが出来る
命ぜられてある人 私の放浪する半身
いつたい其処で
お前の懸念に信じまいとしてゐることの
何であるかを

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

ここで伊東が放浪する半身 愛される人
Vと呼び、Aとお前Vと呼びかけてゐる対象は
百合子さんであらう。その百合子さんと結ば
れず別れ別れに住むにいたつた運命を、生母

でさへ別居せねばならなかつた運命にことよ
せて、弁解してゐるわけである。事実、百合
子さん宛書簡に、大文字山の真下に別居して
ゐる生母に対する哀憐の記述があつた。愛さ
れるためには、互ひに別れ別れに生きねばな
らぬ運命を、百合子さんに訴へ、又、伊東自
身にも言ひきかせてゐるわけである。

詩中伊東は百合子さんをして千曲川の上流
を溯らせてゐるが、或ひはこれはフィクシ
ョンかもしれない。伊東は若い日安代、百合子

浅瀬

ピオンテク

蔓や蕨が膝や眼陸にまつわりついてくる

そこがいちばん浅いところだ

水にうつる雲 なんとまあ手近かなところ

ある雲！

ためらうような波のせせらぎ

ぶらぶらと渉りながら 足もとを探れば

潮はぼくの膝こぶしまでも洗う

心臓の鼓動をこんなにはつきりと感じたこと

はない

さんと一緒に島崎藤村に感銘し合つたことが
あつた。伊東は処女詩集を藤村にも寄贈して
ゐるが、その由を次のやうに百合子さんに報
じてゐる。「私達が、もとよく話し合ひまし
た島崎藤村氏にも本を送つてやりました。お
礼の手紙が来ました。」（昭和十年十一月二日）こ
のやうな藤村欽慕から、伊東は百合子さんに
千曲川を溯らせたのかもしれない。
それにしても伊東と百合子さんの共通の故
郷である南国諫早に植ゑた変種の林檎樹とは

追ひあう頓子の羽根音の唸り

漂う水すましの一群はおどろいて四散する

誰にふれる石くれ ここはなんだか

腐つたものの匂がする

波の光があらわれ きえてゆく

果てしない浅瀬は浮游物におおわれて

ぼくは岸まで帰れるだらうか

よるめき ためらい 飛魚におどろかさされ
ながら

ぼくは不安から逃げ出そうとする

（たかはし・しげおみ訳）

日は葉書ご転送ご面倒をおかけしました。向ふの要求通りにしてをきました。中島さんにあれからお会ひして、いろいろ噂などいたしました。」

(昭和九年十月七日大阪府西成区松原通二の一五よ)
(り東京市中央区大和町三五二肥下恒夫宛はがき)

この十月に出された肥下恒夫氏宛書簡で、おづおづと「コギト」に近寄ってゆく、いかにも用心深い田舎者の伊東がよく感じられる。

折から帰阪してゐた肥下氏と、天王寺博物館で開催中の二科展で会つてみて、その鷹揚な人柄に安心すると共に、念を押す意味合であらう、半年前の肥下氏の創作を再読して会見の印象を確かめてゐる。肥下氏は「コギト」の発行者であるから、これだけの用心をしてゐるのであらう。一方、編輯者の保田氏には「呂」に発表した旧作を送つてゐる。これは、一年後にコギト発行所から出版された「わがひとに与ふる哀歌」のための詩の詮衡と云ふ意味ではなく、編輯者に作品の閲歴と眞価を認識させるためであらう。伊東の心は「呂」を全く離れ「コギト」に拠る覚悟が固つてゐたと見るべきであらう。

この推理を正当化するやうに、伊東は「コギト」十月号に「河辺の歌」を、「呂」十月号には袂別の作となつた散文「今年の夏のこと」を発表してゐる。

河辺の歌

私は河辺に横はる
(ふたたび私は帰つて来た)
曾ていくどもしたこのポーズを
肩にさやる雑草よ

セザール・フランクの「終曲」に寄す

杉本秀太郎

語れ オルガンよ もっと語れ
お前はひとの叫びを
無限に拡大し
ついに
休息のさなかで
ひとがしずかに叫ぶものを
お前はこのふしぎな大気のなかに運んで
くる
ついに
休息の叫び！
オルガンよ
終曲にふさわしい

昔馴染の 意味深長な
と嗤ふなら
多分お前はま違つてゐる
永い不在の歳月の後に
私は再び帰つて来た
ちよつとも傷つけられも
また豊富にもされな

悔恨にずつと遠く
ザハザハと河は流れる
私に残つた時間の本性！
孤独の生確さ
その精密な計算で
熾な陽の中で
はやも自身をほろぼし始める
野朝顔の一輪を
私はみつめる

かうして此処にね転ぶと
雲の去來の何とをかしい程だ
私の空をとり囲み
それぞれに天体の名前を有つて
山々の相も変らぬ戯れよ
噴泉の怠惰のやうな
翼を疾つくに私も見捨てはした
けれども少年時の

飛行の夢に

私は決して見捨てられは
しなかつたのだ

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この詩を激賞したのは中島栄次郎氏であつた。彼は後日詩集「わがひとに与ふる哀歌」の代表作としてこの「河辺の歌」を取り上げ、左のやうな批評をしてゐる。

「見事な客観性である。イロニイなんかちつとも感じない、それになんとイロニククなことか。このイロニイは自然自体の姿である。人間は本当に己れの中にあるものだけしか現実の中に見えないといふことが人間の宿命のやうに、このイロニイはまた伊東自身の存在でありませう。いはゞ黙つてゐる自然といふものがそんな姿で存在してゐるのです、伊東自身が自分の表現を自然として見るのです、それしか見えないのです。イロニイをとくは易い、だがイロニイ自体の「姿」を見ることは難しいことです。伊東は抒情詩しか作れぬ資質なのです。

かつて伊東は二年程前、自分の詩作の仕方な話をしました、「自分は何か風景なり絵画なりに感動する、実に美しいと思ふ、すると、これはどうして美しいのか又はどう

金管の森林！

歌のはじめ

夏を招け
いと早く招け
冬を示せ
もつとはつきりと示せ
花はもはや
芽ぐみ鋭い果実のはて
花はそこに一本の木となり
たたかひのけだものら
野にくたぶれる
このとき
夏をいと早く招け
このときもつとはつきりと
冬を示せ

して美しいと感動するのかと自分を探る、するときつとそれが判る、それを書くんです」と、そんな意味のことを話しました。こんなことから、僕の伊東に対する考へは余り遠くないと自信してゐます。」

(昭和十年「コギト」一月号)
中島栄次郎「感想」

この中島氏の感想は正当であらう。然し「わがひとに与ふる哀歌」の代表作としてゐる点はいさゝか個人の嗜好に偏してゐる。伊東は同じ十月の「呂」に、「呂」への袂別の作となつた次の散文を発表してゐる。

今年の夏のこと

今年の盆は、妻、弟、親類の子供、その四人でやつた。妻は私の故郷の盆のさかんな習慣は、きいてゐるだけで、まだ見たことはなかつた。それで故郷にゐる私の母から、祭の次第や、お供へ物のことやを、細々と書き送つて貰ひ、それを台所の壁にはりつけて、それに違はぬやうにしよと骨を折つた。盆の前夜一週間づつ程、僕らは、一家が大坂移住の時持つて来た、盆のための薄い紙で作つた骨細の、それにはいろんな草や月の形などを金や銀の粉で書いてある燈籠に灯を入れて、裏の椽側の軒に吊した。これは遠い冥途から来る精霊の目あてにするためのものである。私達は父の死後、やつと五十日目位にはもう父祖の土地を見捨て、新しい家族の中心である私の、働いてゐるこの土地にやってくる仕儀になつた。

「お父さんは、うまくこの家を見つけて来

てくれるかな」と私達は冗談のやうな、真剣のやうな心配をした。私達の今のこの家と、父が建て、又そこで死んだ故郷の家とはあまり何百里も遠く、まるきり違った種類のものであったからだ。

故郷では、私たちは十四、五の両日は、夕方から、家一等の暗著を著、又子供の私たちは白麻の五紋附をつけて、墓地の前に集り、明々と数十の燈籠をその前に吊り、蟲の声をきいたり、又遠くの丘墓地の電飾にまじりやうな美しい燈籠の灯をながめながら、夜をすごした。母は家に残り、ありったけを座敷の中ちうにともした燈籠の火照りの中で、客に焼酎や菓物を振舞った。

「結局はお盆というものは、死んだ人の魂のまはりに、生き残った家族の連中が集り、睡じく話したり、仲よく遊んだりすればいいんだよ」

と私は妻に云った。然し妻にしてみれば、肝心の死んだ人とは、生前に一度も会ったことはなかった。その上全く違った風習のこの町に育ったとはいへ、私の代になってから、父祖以来の祭の風を、絶やしてはすまないという、家の女らしい律気から、壁に貼られた紙のことばかりを気にした。

子芋、水芋、おさつの初生り、蓮の実、な

がら、それらの舟を送って行き、そこで火をかけるのであった。華やかな思ひ上った歓声の中に、満月に遍照された光景は、南の地方の真昼間のひかりかゞやく寂寥を、生れながらに知ってゐる人間には、胸をしめつけられるやうな追憶である。

私達は家で相談して精霊は南海本線に沿うたみなど流すことにきめた。新曆でしたお盆には満月はなかった。その上に、はげしい風と一緒に雲がさかんに海の方から、おし寄せて来た。夏ではあるが場所をはづれた海村で、海水浴の出来さうな設備もなく、若い衆が浜に工夫した蚊帳を吊し、その中で声高に喋ってゐるだけであった。すさまじい勢を加へて来る波が、小さい燈台の下にぶち当たって一丈もの波をまつ暗い夜の空にうち上げて、まつすぐに海に向つてゐるのは怖ろしい様な景色であった。

私達は到底、普通な方法では、海の遠くに流せないことを知って、波のうち寄せない物蔭の岸を、さがした。嵐を予知したのであらう、漁舟が十艘、二十艘と、小さい灯をつけて、いつとはなく、又何処からとはなく、相応するやうに、暗澹とした水平線の方から、ぼつ／＼とつづいてあらはれた。そしてほんの短い時間に、それらの舟は皆私共のゐる小

つめの実、ほゞづき、そんなものは仲々簡単には妻の手に入らなかつた。

そして、それを心配して落ちついてはをれぬやうであった。又お供へ物というといひの中に、いろんな種類の菓子、だんご、おはぎ、そうめん、というものも、幾度となく時間をきつてとりかへるのが本式であつた。こんな小人数の家で、妻は台所にばかりにゐて、こと／＼と忙しがつた。

「おい、いゝ加減にしないか」と私は度々

詩碑の夢

小高根二郎氏

山根 忠雄

小高根二郎氏が 将来

伊東静雄作「夕の海」の詩碑を

燈台の見える

堺海岸に建てられるといふ

全くすばらしい着想であり

美しい夢である！

確実な写生と同時に

何ものかをじつと ひとりで耐へてゐる

強烈な主観を蔵するこの詩が

燈台の緑の光のともる夕の海へに

実際に刻まれるならば

そのときこそ

夕闇に包まれたその詩碑は

闇によつてしだいかかされて行く

「詩」の生成の秘密や

それがかがやくまでには

—— 燈台の緑の光のやうに ——

長い時間がかかるのだといふ

詩人の決然たる覚悟などについて

どんなに多くの意味を

人々に語りかけるであらうか！

声をかけ、習慣にばかり気をつかつて、一寸も仏壇の前で落ちつくことが、私の氣に入るということを知らぬ妻を、不本意に又、あはれんだ。

十五日の午後、知り合ひの坊んさんに来て貰つた。床の間のない畳の上に、飯台にならべた位はいやお供への前で、僧侶がお経をよむ様を私はをかしく眺めた。

十五日の夜、私たちは、燈籠や線香を消し、小さい菓子箱にお供へを詰め、家をしつかりと戸締りして、精霊流しに出かけた。こちらの習慣では、四天王寺に集つた乞食に、それを与へるのださうである。それが流れに流したりするより、ずっと意味のあることではあるが、私はそれをする氣になれなかつた。

私の故郷の家では、新仏の家では、二間もの長さの藁や、板の舟に、家々の紋章のは入つた三十も四十もの燈籠を吊し、ご馳走を満載して、賑やかな町の大通りを、歓声をあげて通りぬけ、町の中央の大川に、有明海の満潮で上つて来た海水が、ひいて行く夜の十時頃を見はからひ、その人数があやしまれる町中が兩岸にぎつしり集つて見物し、品評してゐる中に、火花をうち上げ、煙硝を鳴らして下流の有明海の入口まで、人々が泳ぎ添ひな

行かなかつた。漁船の縁にまっはり、防波堤の蔭に沿つて、一尺すゝんでは一尺かへりして滞つた。私たちは、砂地に横つた材木のかげで、線香と蠟燭をともしたが、すぐそれは風のために吹き消され、吹き折れた。

「あゝお盆もすんだ」と妻のいう言葉に、いつのまにか、私は妻と同じ複雑さで同感してゐる自分を発見した。

(昭和九年「呂」十月号)

訂正：第二十七号の冒頭「昭和八年」は「昭和九年」、
「蠟」二十五行目「家管」は「家管」の誤植。

難 聴

池 沢 茂

ぼくはおさないころから中耳炎をわずらいつづけたので、両方とも鼓膜がなくなつてゐる。いまなら、医学が進歩してゐるから、初期のうちに根治できたかもしれない。ぼくはしかし、しきりに耳だれをながしていた。最初にわずらつたのは、赤ん坊のときだったらしい。ものごゝろがついて、幼稚園へいったとき、ぼくはもう、いくらか耳が遠くなつてゐた。小学校へあがつてからも、朝礼に整列してゐたとき、耳だれが、耳たぶから、ほお

をつたって、肩のうえへ、ぼたく、した、りつづけたことがある。家がかわって、しばらく電車で通学していたとき、おりようとして、乗客のひとりの背中に耳がさわった、ずる、と、その背中に、耳だれがひつついたのも、わすれることができない。りっぱな紋付の羽織だった。なにかの会に出た帰りらしく、山高帽をかぶっていた。三十年以上もまえだから、男の礼装にも、羽織はかまが多い。ぼくは気づかれずにおりてしまったが、その人は、家に帰ってから、せっかくの紋付に、たんか、青ばな、なにか、えたいの知らない、くさい、きたないものをひつつけられていたのを知って、びつくりしたにちがいない。ぼくの家では、母の結核がひどくなっていたので、子どもの耳にまで手がまわらなかつたのだらう。それに、なんべんか医者にかけても、どうしても根治しないので、もうサジをなげていたのかも知れない。せめてオキシフルやリパノールなどの薬を使って、自分で治療していたら、それほどひどくはならなかつたらう。子どものぼくは、しかし、そんなことも、まったく知らなかつた。鼻紙などで、こよりをこしらえたりして、それを耳のなかに突っこみ、どうにか勝手に、うみをふきとっておくぐらいのことだった。それ

でも、いわゆる慢性なので、そのうちに、しぜん、うみをとまるときがくる。やがて、ふたたび、耳だけがなればじめる。それがまた、いつのまにか、とまってしまふ。小さな症状までいれたら、いままでに、何十べん、何百べん、くりかえしたか知れない。聴力のほうも、おなじように、わりあい調子のよいときと、非常にわるいときとが、くりかえして来た。病気になるてしまったぼくは、耳だれがひどくなく、聴力の調子もわるくないときには、耳のことは、ほとんど忘れていた。たいてい孤独だったが、ぼくはのんきで快活だった。しかし中学校の上級になると、ぼくはひどい憂うつに取りつかれた。聴力の調子のわるい期間がながく続いて、声の小さい先生の話はどんなに注意しても、ほんの一部分しか聞きとれなくなっていた。学友たちは、実社会へ出るものと、上級の学校へ進むものにとわかれて、それ、その準備に取りかかっている。ぼくも一応、進学する組にはいり、おなじように勉強していたもの、心の底には、たえず、黒い雲がかぶっていた。ぼくの目には紅緑色弱の遺伝がある。これはしかし軽症なので、検査表を見て練習しておけば、わりあい簡単にごまかせる。ところが耳のほうは、身体検査されたら、

浅野 晃 著
岡倉天心
亀井勝一郎氏評「天心は明治の最盛期に生きた巨人である。彼の民族のエネルギーの最大なる体現者である。彼の胸に深く息づいているものは東洋ルネッサンスの衝動である。それは明治に発せられた世界に対する発言の中で最も重大なものの一つである。今日こそ天心の真意をその本来の姿で見返さなければならぬ。」
二〇〇円
東京都千代田区神田美土町明徳会館内
明徳出版社
振替口座東京五八六三四番

がない。そして結局、自分のおそろしい未来には目をつぶり、さしあたって、周囲の人たちとおなじ道へ流れてゆくより、しかたがない。理科へ進もうとしてしくじったぼくは、一年おくれて、文科をえらんだ。身体検査で聴力の番がまわってきたとき、検査官から「目をつぶって！」と言われたが、ぼくはひそかに薄目をあけた。そして、懐中時計が、ぼくの耳の左側へ、近づけられてくるのをみとめた。

そごやすやすと

福地 邦樹

私はおまえに
そごやすやすと惚れこまない
おまえの目が
人一倍うるんでいるとしても
それは甲状腺が病気なのかもしれぬし
口紅なしでも唇が赤いといっただけ
きつとおまえの胃が悪くでもあるのだらう
おまえの胸の隆起には
時々圧倒されそうにならぬこともないが
なにになにそんなものは
おまえの好きな子にでもくれてしまえ

「きこえますか」
「はあ、きこえます」
「どちらで音がしていますか」
「左のほうです」
「こんどは、どちらでしていますか」
検査官がまともに見つめたので、ぼくはこわくて、もう薄目もあけられなかつた。それでも、いっしんに注意力をあつめて、いわば不具者のカンで、相手の腕が、ぼくの顔のま

おまえが映画をみてもすぐ涙を流すのは
涙腺もすこしおかしいにちがいないし
だからといって
ドストエフスキーが好きなのは
ちよつと女らしからぬし
おまえが淡い色や古典音楽を好むとしたら
それは没落階級の証しなのだそうだよ
おまえの声がやさしいのは
いささか思い過ぎば猫なで声だし
なににもましていけないのは
おまえは人にいわせると綺麗だそうなの
それは言にくいけど
薄命なのかもしれないよ

えを運って、頭の上のほうへあげられていたのを感じた。
「上のほうです」
「よろしい。つぎの人！」
ぼくはこうして、秒針の音など全然きこえなかつたのに、検査にパスした。しかし講義は、距離が遠くなったり、声が小さくなったりすると、ほとんど聞きとれなかつた。大学へ進んでからは、席がきまつていないので、いちばん前のほうのイスに腰をおろして、やつのことで、ノートをとった。聴力はもう、何年もあいだ、回復するどころか、だんだんおとろえてゆくばかりなのだ。なんという暗い不安な青春時代だったらう。あたらしく来ていた母は、ぼくが中学を出るまで、ずっと優等生だったので、なお、はなやかな期待をかけているらしかった。ぼくにはしかし、そういう希望は、夢のなかよりほかに、どこにも、もう存在しなかつた。大学を出ても、実際には、一人前どころか、半人前にも生きてゆける道があるうとは、どうしても思えない。成績もだん／＼わるくなり、学問はそれにつれて、ますます／＼むずかしく、むしろ、やっかいな重荷になってゆく。おそろしい未来をすこしでも先へのばすために、学校へ逃げこんでいるみだだった。そして、ともすると、暗

東京通信

田中克己

い歡樂のはうへ、はげしく引きつけられた。ところが、そんなほくでも、兵隊にとられたのだ。耳が遠いから、幹部候補生の志願など思いもよらない。健康な者にも苦しい兵隊の生活が、重大な欠陥のあるほくには、どれほど、みじめで、むごたらしいものであったか。しかも、はじめ三か月の臨時召集だったのが、戦局のせい、だん／＼のびて、大陸から帰ってきたのは、終戦のあくる年の夏。ま／＼六か年に近い歳月が流れ去っていた。ところが、この六年間にわたった苦役も、ほくはあながち憎悪しきれないのだ。というの、は、ほくははじめ歩兵で召集されたけれど、やがて衛生兵にかわったからだ。そのあいだに、ほくは人工鼓膜のヒントをあたえられ、みずからその練習をした。といっても、脱脂綿を小さくまるめてリバノール液にひたし、耳のなか深く入れるにすぎないが、これだけのことでも、ふつうの兵隊には、なか／＼出来るものではない。衛生兵のほくには、リバノールや脱脂綿など手もとにあつて、いくらでも自由になる。そうして、なんべんかやっていると、たま／＼そのリバノールの綿球が、幼児のころには存在したにちがいない鼓膜の位置に、びったり装着されたばあいには、どうやら、人工鼓膜の作用をするらしいのだった。

神保町一丁目三番地にゆくと「稲垣足穂全

てゐる。わたしはダダの詩をあらためてよみ、嬢ちゃんのことをうたった「蜆」といふ詩をよみしてここにこした。東京はうれしいところである。

神保町一丁目三番地にゆくと「稲垣足穂全

白居易詩抄(十二)

森 亮

詩情

ちからを尽くして仏法を学んでからは
むらむら湧く世の常の情を消し去ることが
できる。
ただ詩魂といふ執念深い奴だけは封じてお
けない。
たまたま空気がさはやかだ、月が美しいと
なる

それはしづかに、いとものどかに歌ひ出す。

★

安西均氏から詩集「美男」(明森社発行、三〇〇円)をいただいた。この詩集には珍らしい小説的な構成をもった詩篇が収められてゐて、読者を楽しませる。いま病床にあると聞く京都の天野忠君らとちよつと似かよつた大人の詩で、一気に読んでしまった。そのうへ題の「美男」といふ語がわたしに連想をともなはした。もつともあとがきで著者が説明しておいでなのは、普通の美男といふ語とは違ふのださうだが、フィリップンから還つて来ない畏友中島栄次郎が、二十年ほどまへ「田中、美男といふのは幼な顔を仰山残してゐるといふことやな」と定義したことを思ひ出したのである。中島は美男に反感をもつていたやうに思ふが、詩を作ることに「童心」が根柢になつてゐるやうに思ふ。わたしなどが根柢にいやでたびたび詩をやめることを宣言するのだが、この詩集は完全に大人の詩である。

わたしには口くせがあつて、「死んだ方が

ました」といふのだ。東京へ来てはじめて家

集刊行会」といふ標札を見つけた。きいて見ると全十八巻ださうである。わたしの好きな虱をわかつた数学狂のお嬢さんの話も収められるさうである。東京はうれしいところである。

長安哀歌

一新昌の家

家ちひさくて悩み多し。
雨降れば道ぬかるんで
宮仕へ馬行きなやむ。
わびしい東の街に住み、
暑さに帰る屋下がり。
庭の狭さに竹植ゑられず、
塙が高くて山見られず。
これでは心の中ししか
手足を伸ばす場所がない。

註「詩情の原詩は間吟(二)の六五七で白居易が江州司馬時代、四十六才前後の作。「長安哀歌」の原詩は題新昌所居(二)の八七八で、長慶元年(八二一年)五十才の作。居易は江州、忠州を経て前年の冬に都に召し返されてゐた。彼がその頃住まつた新昌といふ地区は長安城中で一番高い樂遊原の丘のある地区で、水辺の行樂地曲江にも近かつた。

内に叱られた。「あなたは結婚後三日めにそれをいひ出し、坊やがそれをまねしましたよ。二十何年間それを聞きつづけて来た不快さを考へてごらんない云々。」実は自分でもこの口くせは気づいてゐたが、わりあひ機嫌のよい時にいふのだから実害はないと思つてゐた。叱られたあと止めることにしたがとたん

に死んだ方がましなやうな気がした。頼だからこの来歴を考へたらわかつた。高等学校で習つたアイヘンドルフの「これはれた指環」といふ失意の詩の中に Ich möchte am liebsten sterben といふ箇所があつて、その訳なのである。結婚以前からいつてゐたに相違ない。

某日、勉強する気になつて東洋文庫に参り一時間半、漢文を写すと疲れてしまつて、出て停留所へゆくと、とまつた電車から降りて来たのは高橋新吉氏。名のると「君に会ふのははじめてだな。」戦前戦中、会つたことを云ひ、子供さんが四つになつたことを承ると、包みから角川文庫「高橋新吉詩集」をとり出して賜つた。わたしは恐縮していただいた。まだ買つてないのは手落ちだったからである。しかし新吉さんは山之口襲さんとともに、朔太郎亡きのは最も詩人的な詩人だと思つ

僕の文学時評

林富士馬

このやうにして、日々新にして又日に新なる覚悟を獲得せんがために、私は自分のために、こんな雑文を書きついで行く。あゝ、人生は、ボードレールの一行にしかないか。私の考へ、書いたものが、たつた二行でもよい、世間に役立つときが、果して来るであらうか。或る時は、それを期待し、更に考へて、その時を恐れる。世間におののき、世間を軽蔑しながら、私は、哀れな市民の生活を確保したいために、このやうな場所を捜して、日に日に新なる勇気を獲得しつづけて行かなければならない。

サルトルの「悪魔と神」といふ劇曲は大層面白かつた。如何にも劇曲といふ形式に一番ふさはしいやうに、その素材が処理されてゐたが、とにかく、近頃流行の劇詩とか、ラジオドラマなどで想像してゐる劇曲の莫迦莫迦しいのしか知らない私には、その技巧が、滅法に牙えて、剃刃のやうに眺められるところが読んでゐて、心娯しかつた。但し魂は衰弱してゐる。

そのサルトルに、「人間は人間の歴史始ま

チビ助のお話

堀ノ内 歴

チビ助がそっと寄って来る
「お話 ちてえー」
そこで 此いつを膝に上げ さて
「ある所に 熊と兎といたよ
山の中だよ 遊んでたんだよ
栗の実 一しよにたあんを取ったよ
山の爺さん来たから爺さんにもあげたよ
爺さん喜んで仲よしになったよ

オチマイ

首上げて 覗き込み

「ぼくこんど ちたるかあー

あるところに 熊ちゃんいてんてえー

うさぎちゃんも いてんてえー

そんで オチマイ

「お父ちゃん 又 ちてえー」

「お話 もう売り切れたよ」というと

小さい手を私の口へ延ばし

指尖で均み開けて

「お話 ここにあるやん！」

そこで又 又 ある所に……

—一九三三、三、三一—

って以来、最も人間について考へなければならぬ時代」にさしかかっている、といふ文章があるさうである。

その人間、或は人間の社会を知るために、さまざまな学問の領域、即ち人間の智的活動があるわけであらうが、私は私のアントロポロジーとして、私の職業としてある医学の領域の他に、仮りに私が文学と呼び馴染んである分野があるのかも知れない。

相不変、私は月に百冊位づゝの同人雑誌の作品と、他に更に又、月々の営業文学雑誌の作品とを、慢然と読みつゞけてゐる。何といふ徒勞？ 誰れも、お世話さま、とも云ふまい。併し、それはそれなりに、面白いことでもある。所謂、文学的興奮を起すことは無くとも、そこには、当代に生きてゐて、パトロギーとしての面白さが無いわけではない。

ノーベル賞を貰ったアレキンス、カロールの「人間」（この未知なるもの）に「人間を知らない人間の頭で作り出された世界は、人間の体力にも精神にも適しないものであった」といふやうなところがあつた。

従つて、私の文学時評は、当然、俊敏、辣腕の編集者、チャナリスト、或は又専門の評論家、月評家の基準と、違ふところがあるのは仕方ないのである。必ずしも、私の文学的

服部三樹子著

歌集 ねむの花

薦詞・保田与重郎 後記・小高根二郎

戦後十年の世帯の荒廃の中を三十一文字が造型する夢の花をよすがにけなげに生き抜いてきた著者の処女歌集。運平興亡の荒廃期を夢とうた、ねで歌ひすぎた式子内親王の幽艶な歌詠を思はせるものがある。
二〇〇円
果樹園社刊

才能の不足だけではないかも知れない。大抵月評とか、文学時評とかは、最もチャーナルな仕事の管で、チャナリズムの要請でのみ、成り立つ分野であらう。さういふ仕事(?)を、私は、同人雑誌の片隅に、自分に課すのである。

文学、文学と云ひながら、私の日常生活も私の周囲も、全く、文学とは縁の無い世界のやうである。昔は、月に一遍位、尊敬する詩人、小説家を訪問すると、不思議に、生活的エネルギーが湧き出たものであつた。さういふ私に、これは思ひがけず果樹園社からの服部三樹子氏の歌集「ねむの花」は疑ひなく、私には徹頭徹尾、なつかしい文学の書物であつた。この歌集を繙く間、私は不思議に、文学の世界のなかで、棲息することが出来た。

東都の花

服部三樹子

東京は家並のはざま桜咲き空より白き屋のまぼろし
魚なれば真鯉の光る背のうろこ京の家並の薨おもへば

日も夜も疲れ眠りて起き出でしおぼろ寝覚めに見そめたる花
はらからを離り来て住む東都の空屋のまほらに花ま白なり

方丈の部屋に胸せばまり夕戸開けば暮れゆくは花
山ざくら清きかげりを持つ春を見捨てしならね帰りたくもなし

我が内の少女をいくたび喪ひてまた喪はむ東都なる青春
なぞらへて思ふならねど我が身より寂し

かるらむ花の一木
方丈の部屋に夜の鍵かけ終へてさて独りなる肌冷えや春

人と車波のごとゆく昼すぎてしかと残れる愉しさや何

この人の名前は、私はほんやり知つてゐた

が、服部三樹子といふ名前から、私は例のひとりと合点で、お爺さんとばかり考へてゐた。

さうして、何故、この人は、こんな名前前で、俳句、それも月並みの風流俳句を発表しないで、和歌を発表したりするんだらうと考へてゐた。今度、はじめて、この歌集を繙き、三

樹子と素直に読むと、清潔な、お嬢さんの名前なのであるし、いまだき、珍らしい、ひとを恋ふるこゝろ、或はこひを拒否する激しい

歌集なのであつた。さうして、月刊の店頭で、営業文学雑誌、或は文壇の噂話などに案内通じている辭に、文学史などといふ教養に乏しい私であるが、この歌集を支えてゐる、「文学的技巧」とでも云ふべきもの、その抒情が大変なつかしかつた。なつかしいと云ふより

仕様が無い。それは古風でなく、私には鮮新に思はれた。
この歌集についてなら、自分の愚痴多い生活感情を托して、いくらでも書くことがありさうである。私の年若い、蓮つ葉少女にも是非読ませたいやうな書物である。

散りし花ひとひら封じおくりけり我がなみ
だよりやさしかる花
ともどもに忘れしことのなつかしさ我がゆく山に咲くねむの花

「ねむの花」の反響

歌集「ねむの花」拜受、さっそくひもとき、昨夜半ばで読みまし、今朝晩開にめざめ、枕頭で読しました。君冷えのような膚寒を感じながらも一首／＼を反覆味わいました。窓

山根 忠雄 著
詩集 岩に 刻む

大山定一氏評「ばくは君の内部でしづかに燃えてゐるもの、ゆつくり発芽して生長するものを感じてみた。深い井戸は、くめばくむほど、つめたい水がわきでくるといふ。ぼくは君のつつましい素地が、すなはち、自然に、清らかな井戸の水のやうにあふれ出すのを祈りたい。」
一〇〇円
果樹園社刊

が白むころ鶯の声がきこえ、おぼろな寝ざめ心に、この歌集は溶け入るような感銘でした。何年に一度かめぐりあう歌の伝統の脈を探りあてたやうで楽しい数刻をすごしたことを著者に感謝したく思います。一巻をつらぬく恋歌の哀韻はふくよかな清潔さで、こんな女心もあつたのかと複雑にけがれた世心を洗いたてられたやうでした。古くて新しい歌心の本意をおしげもなく陳べられたこの歌集は、私の愛着する森房子とは又異趣でありがたいものです。
栗山理一（成城大学教授）

毎々果樹園御恵と感深く拝見致してをります。扱て先日はまた服部三樹子氏のねむの花御恵と下され近來になく感銘を以て拝読致しました。小生も学生時代少しばかり歌を作り

ましたが近來歌誌の歌などには感興を覚えずおのづから遠ざかってゐましたが此の御歌集を拝読して歌興湧然たるを覚ええました。著者へもくれぐれもよろしく申上げて下さい。不敬取。
小島吉雄（大阪大学教授）

夕ぐれ

美堂 正義

水面低く飛び交ふ燕は
やがて霞の茂みの向ふに姿を消し
夕映えのいろどりが四囲を染め始める
もう あゝ軽快に飛翔する燕は融け去り
黙した風景のそこまで来て
闇がためらひながら
心のなかに重たく沈澱する

すっかり忘れていた美しい所へつれていって
もらつたやうな楽しさで拝見しております。
不敬取御厚礼申上ます。
板倉頼音（愛知大学教授）
匆々

果樹園二十八号昭和三十三年五月一日発行（毎月一回二日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円
果樹園二十九号昭和三十三年六月一日発行（毎月一回二日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園 第29号

蝶	白居易詩抄	芳野 清
父の留守	五月の花	森 亮
花三章	東京通信	小山 正
子供の日に	合 園	服部三樹子
妊 婦	福地邦樹	浅野 晃
		堀ノ内 歴
		杉本秀太郎
		美堂 正義

書簡から見た

伊東 静雄（三十八）

小高根 二郎

散文「今年の夏のこと」が『呂』への袂別の作であることは先に述べたが、それを反証するやうに、隔月であった「コギト」での発表が毎月となる。翌「コギト」十一月号には伊東の声価を高からしめた「わがひとに与ふる哀歌」がついに発表されたのである。

わがひとに与ふる哀歌
太陽は美しく輝き

四月三日板倉頼音氏が来阪した。氏のリングeltaツツ詩集が再販される由である。版元は名だたる出版社でなく、古本屋を兼業してゐるかそかな書店ださうである。かつて第一書房から出たこの名訳が……とお話をしてゐるうちほろりとした。文学界同様學界までが、ギルドに加入しないと吸もできない仕組になつてきた。
四月十一日高知から熊村の絵を見に清水孝之氏が来阪した。十年前豊橋で前記板倉氏、丸山薫氏、清水三氏と酒を汲んだ夕もあつた。あの敗戦後の荒蕪の中にも、どこか懸命に文化を求める息吹が残つてゐたやうな気がする。今、鳴物入りで国際芸術祭とやらが賑々しく開幕してゐるがなんと空々しいことか……。貸ビル業を一着に開店した大新聞の商業主義の地肌が丸だしだからである。
四月十五日「耽美の夜」執筆中の中河与一氏が来阪された。老来いよいよ元氣な氏を祝福申し上げる。僕等はかたくなほど文人墨客の道を守り抜きたい。(O)

編輯後記

果樹園 第二十八号（毎月二日一回発行）
昭和三十三年五月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
發行所 果樹園社
定価 三十円

歴然と見わたる目の発明の
何にならう
如かない 人気ない山に上り
切に希はれた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照させるのに

この「わがひとに与ふる哀歌」を萩原朔太郎氏は次のやうに批評したのである。
「此処には一つの太陽がある。だがその太陽は、生物の住む我等の地球を照らす太陽ではない。それは時間の生れない宇宙の劫初に、神と二つだけ存在した太陽。地上に一つの生物もなく、海水もなく、岩礁ばかりが固体してゐた劫初の地球。「死」の地球を照らすところの太陽である。そこには認識する主体が一つも居ない。故にその太陽は「無」を意味する。それは永劫の空虚の中で、生物のない山の頂を照らして居る『ああ わがひと！』そこに詩人の美しい恋人は座って居るのだ。如かず、むしろ冷たい大理石の中に、君のそのイメージを彫りつけよ。汝の女を真裸にして殺してしまへ。——こんな惨忍な恋愛詩がどこにあるか」
（昭和十一年「コギト」十一月号、萩原朔太郎「わがひとに与ふる哀歌」）

あるひは 太陽の美しく輝くことを希ひ
手をかたくくみあはせ
しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
無緑のひとはたとへ
鳥々は恒に變らず鳴き
草木の囁きは時をわかつたずとするとも
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無辺な広大な讃歌を
あゝ わがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでゐる
音なき空虚を

し、さすがに正鶴を衝いてゐる。この詩からくる悲劇感、伊東と「わがひと」の他の一切の人は無縁であると振り棄てゝあるところにある。鳥も草木も、この二人にだけ聞こえる特別な声と歌とで囁きかけてゐる。それを讃歌と聞いてゐるところが哀歌なのである。つまり、ダヌンチオの「死の勝利」と云つた風な、逆説的な意味での讃歌、客観的には哀歌をなしてゐるのである。手をかたく組合せて太陽を希求しながらひたむきに歩み過ぎてゆく二人の後姿には、心中行を想はずやうな悲劇感が溢れてゐる。その二人が登頂して眺める湖面。死のやうな静謐さで遍照する湖。さうした湖面は、逢坂山の峠の猿丸神社附近からよく眺められる。

伊東は四年前ひとりした琵琶行の帰りにさうした死に似た湖の遍照を峠から眺めやうたのではあるまいか？（昭和五年九月二十三日附）琵琶湖と云へば伊東にとって懐かしい曾遊の地である。その日から三年前の冬の日、遠藤さん母子に招かれて湖畔膳所に遊んだことがあった。（昭和二年十二月初旬安）さらにその翌年の真夏には、酒井さん母娘と遊んでゐるのである。（昭和三年七月十五日附）伊東は峠の石に腰をおろして一と息入れながら、かつて自分の身近かに思つてゐた人々。いつか互ひ

に行き過ぎ或ひははぐれていった人々。それらの面輪や心象が、遍照する湖心から沸き立つやうに浮んで来たであらう。伊東は岩から腰を上げると、その中一番慕はしい亡霊を伴つてゐたに相違ない。峠の空から降るやうに山鳥は鳴いたらう。脚の速い雲が登り坂にめまひのする明暗を作つたらう。伊東は亡霊と腕を組んで一歩、一歩、喘ぎながら峠を越していったらう。

冷めたい場所

この「わがひとに与ふる哀歌」の連作と思はれる作品を、伊東は「コギト」十二月号に引続き発表してゐる。

私に愛し
そのため私にうらひひとに
太陽が幸福にする
未知の野の彼方を信ぜしめよ
そして
真白い花を私の憩ひに咲かしめよ
昔のひとの堪へ難く
望郷の歌であゆみすぎた
荒々しい冷めたいこの岩石の
場所こそ

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

山根 忠雄 著 詩集 岩に刻む

大山定一氏評「はくは君の内部でしづかに燃えてゐるもの、ゆつくり発芽して生長するものを感じてゐた。深い井戸は、くめばくわほど、つめたい水がわきでてくるといふ。はくは君のつましい素直さが、すなはち、自然に、清らかな井戸の水のやうにあふれ出すのを祈りたい。」

一〇〇頁
果樹園社刊

この詩を萩原朝太郎氏は次のやうに批評してゐる。

「これは惨忍な恋愛歌である。なぜなら彼は、その恋のイメーヂと郷愁とを、氷の彫刻する岩石の中に氷結させ、いつも冷たい孤独の場所、死の墓のやうに考へこんで居るからである。」（昭和十一年「コギト」二月号）私は朝太郎のこの抽象的な解釈より、「わがひとに与ふる哀歌」の連作であると云ふ意味で、この「冷めたい場所」の舞台を、先の逢坂山に設定してゐる。△私が愛し、そのため私にうらひひとと△とは、伊東が悲痛な片恋に終始せざるを得なかつた百合子さんのことであらう。峠を越え山科盆地を展望する場所に来て、伊東は路傍の岩に腰を下して再た一と息入れたらう。その時彼は、今迄手を組み合せて共に峠を越えてきた亡霊は、幸福

哀 悼

山根 忠雄

母上様御逝去の由

さぞかしお力落しのことと拝察します
新潮の五月号に 小林秀雄氏が

「感想」と題して

母の死を美しく悼んでをります
小川のほとりを

夕闇にとぶ初螢を見て

「おつかさんは 今は螢になつてゐる」
と氏はふと思つたさうです

お手紙によりますと

母上の死が心にこたへて

連日酒に明けられてをられるとか

僕はそのお話を

——小林氏の螢の話のやうに——

感銘深く聞きました

あなたのうち沈んだ悲しさうなお姿を

（失礼かも知れませんが）

僕は非常に美しく感じます

な秋日に拵る盆地の向ふ、六条山と稲荷山を結ぶ山波の蔭——あの懐かしい南日吉町に現に健やかに息づいてゐることに氣附いたに相違ない。これから訪れてみよう。まア、久し振り……と云ふ歎声と共に、互ひにはぐれた辻まで戻ることが出来るかも知れない。いやいや、いったんはぐれたからには、はぐれねばならなかつた天命が潜んでゐたとみるべきだらう。愛し合つたが故に別れなければならなかつた幾多の人達。足引の山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし。安代さんに書き送つたことのある、愛したが故に越前に配流される中臣朝臣宅守を、愛されたが故に見送らねばならなかつた茅上娘子のあの断腸歌の惜別歌を、幾多の人が繰返し歌ひこの岩のあたりを歩みすぎたらう。（昭和三年十一月二十三日附酒井安）俺もまたその回帰者の一人なんだ。名も知らぬ野草の微塵の白い花よ。せめて、幾多の恋の葬り、俺の憩ひのためにも咲くがよい。かうした回帰と鎮魂の思ひの上になり立つた作品であらう。

思へば、ひとり琵琶湖畔を彷徨し、百合子さんの住む南日吉町の隣町北日吉町を通過して京都入りした由を報じた昭和五年九月二十三日附書簡の翌二十四日、伊東はメーリケの「ブラーグへの旅路のモツアルト」に異常に

感銘した由、再び百合子さんに報じてゐた。言はゞ、伊東の回想からすれば、湖畔から逢坂山を越え、山科盆地を過ぎて京都入りした四年前の遠足は、「京都への旅路の伊東静雄」であつたわけである。「わがひとに与ふる哀歌」「冷めたい場所」の他に、二ヶ月後に発表した「田舎道にて」が、その旅の回想の上に成り立つたとする推理も、あながち臆測ではあるまい。

「冷めたい場所」を発表した翌月、たまさかに京都に遊んだ伊東は、これまたたまさかに姫路から上落した百合子さんにゆくりなく邂逅した事実が、次の書簡で知られる。

「先日伊勢屋のお菓子有難うございました。皆でおいしくいただいてをります。お礼が大へんおくれまして、すみません。

冬の休には、あんなに云つていただきましたのに、とうとう、お伺ひ出来ませぬ、私も残念でございます。平常二人とも忙しい目をしてつかれるものですから（殊に、私の学校の近頃は殺人的です）休暇になりますとぐつたりなつてしまつて、よう外出もいたしません。

先日は、京都でお目にかゝつて、なつかしく存じました。妹と二人で京都に遊びに参り、弟と二日ほど一緒にあつちこつち見

てあるきました。中略

先生は安代さんのお内に行かれたのと、皆様お達者でおすごしでございますか私の母は未だ諫早にをります。仲々帰って来てくれません。もう殆んど半歳になります。いつになっても孝行など出来ません。中略……ゆり子さん、お暇の折は、大阪にも遊びにいらっしやいませんか、さはざはしてはゐますが、景気のいゝ町ですから、面白くもございますよ。

私の詩も少しづつ認められて参り、萩原朝太郎といふ人達から激励の手紙もらったりしてをります。これは私の只一つのたのみです。

昭和十年一月―推定―大阪市西成区松原通二の五より姫路市五軒邸六七酒井百合子宛封書

人工鼓膜

池沢 茂

ぼくは、なかば我流で、人工鼓膜らしいものをおぼえたものゝ、はじめのうちは、なか／＼むずかしかつた。脱脂綿を小さくまるめリパノールの液にひたして、幼児のころには存在していたにちがいない鼓膜とおなじ位置へ入れこむのだが、位置がわずかに違つても、

かえつて、極端に聞こえにくくしてしまふ。いったんうまく出来ても、動いたり、なにかにして、ふいに聞こえなくなつてしまふばあいもある。そのために、やっぱりだめだと思つて、なんべんか、中止した期間もあつた。何年もたつて、だん／＼なれて、じょうずになつてからも、ときにはいまでも、どうしてうまく出来ないのか、じれて、やりなおし、やりなおし、しているうちに、とう／＼、耳のなから、血が出てくることもある。それに、どういふわけか、医学的にも根拠があるのか、両方とも聞こえるようになるのは、非常にむずかしい。「ぎつちよ」でないぼくは左手が不器用だから、右のほうの綿球が入れやすい。そのせいか、たいてい、左の耳が聞こえにくく、右の耳が聞こえやすくなる。ところが、たまたまその反対に、左手のほうの綿球が、うまくはいらばあひもある。そういうときには、左の耳のほうで聞こえやすくなる。それでも、どうかすると、聞こえやすいつたり、左から右へ移つたり、また左へかえつたり、ふとまた右へかゝつたりして、へんに不安定な状態におかれてしまふ。

もと／＼脱脂綿の鼓膜にすぎない。ほんとうの鼓膜のようにいかないのが当然なのだ。おぼえてから十数年もたち、ずいぶんなれて、かえつて、極端に聞こえにくくしてしまふ。……

石浜恒夫著 日本アンデルセン

メルヘンの神様アンデルセンが大坂に現われて物語る童話集。谷内六郎氏の大阪スケッチ、出陣美千代さんの挿絵に飾られたフランス装の美本。価三〇〇円丁二四
大阪府大東区中津本河二丁目 六月社刊
振替口座 大阪 一八五七九

えなかつた。そのまえに、おなじ子が医者にかゝつたとき、紙ぶくろにはいった薬をわたされて「これを六回にわけて、いちにちに三回ずつ、のませて下さい」と言われたことがある。薬剤師もさすがに医者とおなじに調査すると思ひながら、ぼくはそれでも「六回用ですわ」と念をおした。「いや六歳用です」と相手は言い、だん／＼声を大きくして、三回目か四回目になると、往來までひびきわたる

フランソワ・ヴィヨン

に つ い て

B・プレヒト

フランソワヴィヨンは貧しき家の子であつた。揺籃をゆつてくれたのは薄ら寒い南風。風雪にさらされた青春の中で、ひろびろとした頭上の大空だけが美しかつた。誰にもふとんをかけてもらえなかつたフランソワ・ヴィヨンは、知つた。早くから、そして気軽に、冷たい風の味を

足ににじんだ血とすりむけたおいどの皮は、岩よりも石の方が鋭いことを彼に教えた。彼は早くからおぼえた。他人に石を投げつけ

ほどに「六歳用です」とわめいた。それでぼくも、あつと、聞きまちがいに気づいた。それでも、人工鼓膜を知らなかつた以前にくらべたら、ぼくは夜があけたような気がするのだ。なるほど、からりと晴れわたることはない。いつも曇つて、雨がふつたりしているものゝ、とにかく、夜はあけているのだ。調子がわるいときでないかぎり、ふつうの会話には、たいてい差支えがない。電話などでも

調子がよいほうの耳ならあまり支障をきたさない。耳が遠いことわつても、なかには全然信用しない人もある。そういう人は、つまり、地声がとくに大きいか、ひびきのよい声を持っているのだが、それほどでない人でも、事情を知らないとい、声が小さくなつたり、ことばがいくんだり、距離が遠くなつたりしたときに、はじめて気づく場合が多いらしいのだ。

かつた

警察はさつさと彼のプライドをぶちこわした。彼だつてやはり人の子だといふのに――雨風をきりぬけて長らく逃げのびたが最後のぎりぎりになつて拷問台が償いの目くばせをした。

フランソワ・ヴィヨンは死んだ。土牢から逃げの途中で、人々が彼を捕まえる前に、あつけなく、策略にかかつて敵の中で――

だが、彼の無頼の精神は、この小曲が減びないように、これからも長く生きるだらう。四本の手腕をのぼしてくたばつた時、彼は知つた。おそまきながら、氣も重くうちめされたその味を。
(たかはし・しげおみ訳)

ところが、人工鼓膜がたま／＼とびぬけてうまく装着されたせいか、それとも、聴神経の調子が異常にすぐれた状態におかれたせいか、あるいは、気象や空気の関係にもとづくのか、ぼくの耳にも、ふいに、遠い小さな音や声が、あり／＼と聞こえはじめることがある。ながい坂の、ずっと下のほうにある町のざわめきや、はるかな汽車や汽船の汽笛や、何軒かむこうの家のラジオの音楽や、おもての道路や路地であそんでいる子どもたちの声などが、とつぜん出現してくるのだ。あぶりだしの紙に字や絵が出てくるように、ぼくには全然存在しなかった音や声が、浮きあがってくるのだ。それとともに、ぼくの頭は、ながいあいだ閉ざされていた窓があけはなれたみたい、おもしろく流れていたガスが吹きはらわれ、すっと一度に、さわやかになる。からだまでが、こゝろよい熟睡のあとのように、かるく、うき／＼してくる。そんなときには、おさない小学生のころから、おさえつけ、あきらめるのに慣れてきた人なみの欲望や、中年すぎのいまではもう実現できるはずもない失われた希望などが、ふいに、おきだし、よみがえってくることもある。本来ならば存在していたらしい自分の能力に、ぼくはびびりし、愉快になり、だれかに会い

少年は何時も何かしらに熱中してゐるものである。それがスポーツであれ、学問であれ完全な自己移入が許されるのは少年の持つ特権でもある。然し、特にそれが夢見勝ちの少年にとつては屢々不幸となる場合が多い。不幸？ どうして幸福と云はぬのだと不審を抱くだらう。では次の私の話にしばらく耳を傾けてくれ給へ、私は嘗つて淋しい夢多い少年であつた。いや、そう云つた少年の姿に憧れてゐたと云つてもよい。実を云ふと、中学三年にもなつたと云ふのに私は生物学にのみ没頭してゐた。就中、蝶類の採集に憑かれてゐた。私の頭には確かに程を知ると云ふ調節弁が一つ欠けてゐたに違ひない。まるで病気のやうに私は一日中、蝶や蜻蛉を追つて夢中になつてゐた。参考書を買ふ代りに父に隠して解剖用具を一式机の中にしのばせ、時折のさ／＼するメスなどを眺めては一人心を躍らせてゐたのもその頃である。エメラルドの鎧を着た銀やんまのいかめしい胸に注射針をさす時のあの慄へるやうな残酷の喜び、青酸カリのほんの一滴が今まで精巧なモーターのやうに微細に頭へてゐた胸筋の動きを一瞬に止めてしまふ。私の顔はローマ時代の暗殺者さながらの陰鬱な昂奮と罪の意識にくろずむのだ。顕微鏡下に展かれる蝶達の鱗粉はまる

に、世のなかへ出てゆきたくなる。

こういふ状態はしかし、一年、あるいは、二、三年にかぞえるほどしか来ない。それもたいいてい二、三分、せい／＼十分か二十分ほどしか、つゞかない。じきにまた、なにかが耳の奥につまつて、いま存在していた音や声が、おしつぶされ、消し去られる。それとともに、頭には、こい霧が立ちこめてきて、おもしろい、こゝろほそい気分、しずんでしまふ。ときによると、徐々に、二、三分ほどま／＼とつてそういう状態に移行してゆくこともある。そして、ぼくは当然、一般の健康な耳の人たちには、あゝいう、いや、あ

妊婦

福地邦樹

重心をとりながらゆるやかに歩くさまが痛々しい内におもむくようにと感情までも出来るだけ節約しておのずと湖のおだやかさになっているしかし時折その眼差しがうつろになるのは

れ以上の、はるかな、小さな音や声が、いつも存在しているのだな、と思わないわけにいかない。かれらは、なにかが耳の奥につまつていることはない。そこから頭のなかへ、たえず、さわやかな風が吹きとおつてくる。かれらはたゞ、その恩恵になれて、なにも意識していないだけにすぎない。ぼくの音の範囲は、かれらに比べると、たぶん、何分の一か、何十分の一か、せまい小さな世界なのだろう。しかし、ぼくはやがて、そんなことも、めつたに思わなくなる。なにかが耳の奥につまつて、頭までがおもしろいかもしれないが、それがぼくの、平素の状態だからだ。そしてぼくは、せまい小さな世界で、人工鼓膜みたいなものに助けられながら、もう十年ほどのあいだ、一般の健康な人たちに立ちまじつて、とにかく、ぶじに、生きのびてきたのだ。

蝶

芳野清

座敷の中で 大きなあつぽつたい翼をひろげる。
細のちいさな 黒い顔と長い触手と
紙のやうにひろがるあのあつぽつたいつばきの重みと
兼原明太郎「蝶を夢む」より

宿りはじめた新しい魂の明りがまだ定かでないためだろうかそしてまた時にはもうすつかり母親の眼差しになり切つてしまふのは胎動が勇氣のようになつてくるからだろうか

山の井

私をひとりここに残すがいいそのとき私はいちばんにぎやかだそれは 人への思いがそのときこそ絶えまなくあふれ出てくるからなのだ

でインカ帝国の宮殿に聳かれた黄金の甕を想はせた。ゼンマイのやうな口を持つた蝶の顔は猿楽に使ふ面のやうにグロテスクだった。私のカバンにはいつも毒瓶や三角紙が隠され、私は町端にある中学からの帰途さへ、フアールブルの昆虫記や昆虫図鑑などを読みながら歩いて何度か電柱にぶつかりそうになつたりした。そんな私を見ていつも笑ふ少女があつた。角の肉屋の娘で小学校を卒業してから家

の手伝ひをしてゐるらしかつた。肉屋のせいでもあるまいが、十五位だと云ふのにもう一人前の女のやうな胸をしてゐた。気がつく少女はいつも私の帰校の時刻に店の前を出てゐた。そして何かと私の気を引くやうな笑ひ声を立てた。私はいつもむつ／＼して、この早熟な少女の傍をいらしながら通り過ぎた。しかし、私はこの少し足りない感じの少女に大いに興味を抱いてゐたのも事実である。たゞ、田舎町では最高学府でもある中学の生徒だといふ変な矜持が彼女と言葉を交すことをさまたげてゐた。しかし、その店は私の家の近くだったので時折使ひにやらされた或る夕刻、例によつて母に頼まれて小間切れを買ひに行つた。少女は含み笑をしながら肉を秤にかけ竹皮に包むと、何か書いた紙片を狭んで私に渡した。お粗末な恋文だと思ひながらも私は店を出ると急いでひろげてみた。少女の齒の浮くやうな文句を期待してゐた私は意外だつた。そこにはたつた一行鉛筆で、素晴らしく蝶のある所を教へてあげます、とだけ書いてあつた。私が日頃、昆虫採集網をかついで出かけてゆくのを彼女は知つてゐたのだと思ひ、私は少しおかしなやつた。無意識にその紙はポケットに入れたまゝ、家に帰へつた私は夕食後、再び紙片をひきた

して見た。不思議な事にその紙には何も書いてなくて、しかも明らかにその紙は私のノートから破られたものゝ一枚であった、何かに騙されたやうな気がしたがそのまゝ忘れてしまった。翌日も少女は店の前で私に笑ひかけたが、別に蝶については何も話すそぶりは見えなかつた。私は思ひ切つて訊ねてみようかと思つたが、気恥かしくなつてやめてしまつた。それに毎日店にゐる少女などが蝶の居場所など知つてゐる筈がない、きつと私をかつかつもりなのだと邪推したせいでもある。気候は万物が生息の息吹きにむせかへる初夏であつた。日曜になると私は昨夜から用意してゐた採集用具一式を持って朝早く家を出た。初夏の候に出る大型の揚羽蝶が目的だつた。速出するつもりでゲートルまでつけたものゝ何処と云つてあてはなかつた。北へ行く道に沿つていつか私は町端れの堀割近くまで来てしまつた。大きなK川に導かれるこの堀割には古風な眼鏡橋がかゝつてゐて水量を調節する木の扉が半分開いてゐた。鉄の大きな歯車は赤く錆びついてゐた。その小道の曲角に水色のスカートの例の少女が立つてゐた。それまで気付かなかつたので私にはその少女が突然葉の繁つた桜の樹陰から現はれたやうに奇異に感じられた。少女は例によつて低い含み

笑をして私に近寄つてきた。「ねえ、あの時の紙読んだ？ あんたがちやうちよんかに夢中になつてんの知つてたのよ、嘘だと思つたんでしょ、だから、こゝで待つてたのよ、教へてあげるわね、すぐ蝶のある所、そこ、でも一寸遠いのよ、たゞ一つ約束があんの、これからあたしときき合つてくれなきあ、や、よ、あんたつたらいつもむつりして私から逃げてばつかりゐるんだもの、あたしなんかより蝶の方が好きなんですよ」少女は白いボンネットの下ですてねて頬をふくりました。私は人家の見えない気易さから始めて少女に口をきいた。「だつて君はお店が忙がしいんじやないのか、こんな所へ出て来ていゝの？ 君が蝶の場所を知つてゐるなんて本当かなあ」少女は私に体をすりつける程寄つてくると大きな目で私を睨んだ。「あらひどいわね、あたしお店に始終ゐなくていゝのよ、お店には若いひとだつてゐるんですけど、私がお店に出る理由、あんた知つてゐるくせに、あたし本当は女学校へ行きたかつたの、でも頭が悪いから駄目なの、お店にじつとしてゐるなんていやだわ、お友達がおんな学校へ行つてゐるのに……あたし淋

しいからいつもうちのヤンつれて散歩すんのよ、ヤンつて私の犬の名よ、やんちゃだからヤンつてつけたの、それで蝶のお国を発見したのよ、私とお友達になつてくれなきあ、教へないわ」少女はすねて体をくねらせた。目にはうすらと涙さへにじんんでゐた。感情の高ぶりを押さへる事の出来ぬ精神の弱さが私の心をそくつた。私は急にやさしくなつて少女に蝶の場所を教へてくれと頼んだ。少女はうれしうに胸を弾ませお友達になれたのねと云つて私の手を握つた。熱いしめつた手だつた。少女の胸元からうつつすらと木犀に似た匂ひが立上つて私の思春の心をかき立てた。精神の弱さが彼女を体格に似ず幼女のやうに思はせ、私は幾分気が軽くなつた。少女の言葉には意識しない雅い甘さが含まれてゐた。「あたし、フミ子つて云ふのよ、フーちやんでよんでね」堀割から右に折れて小道は麦畑の中を繞いてゐた。不思議に畑には人影が見えず、夏の空はめくるめくやうに輝いてゐた。時折、道のそばに道祖神の祀つてある小さな椿の森などがあつた。少女はその形も分らなくなつた雅拙な石像に向つて手をかかえて丁寧な礼をした。

やがて私達はK川に沿つた小山に着いた。そこは遠い昔に川底の隆起で出来たものと云はれ人々はこゝを吹上山と呼んでゐた。私は少女をふり返へつた。「吹上山だつたの？ こゝは前にも来たことあるけど、そんなに蝶のゐる所なんてなかつた筈だがなあ」「いゝのよ、黙つてついていらつしやい、いまにびつくりするから」

白居易詩抄(十二)

森 亮

水辺歌

枝々に垂れつらなる藤の花ぶさに波が戯れかかる。
真菰の葉の数知れぬ緑の鋒先を風がなでて通る。

水の辺りの匂はしい花を、草の葉を指もて遊べば、
楚のむかし人の愁へがわが事のやうに偲ばれをりをり目を閉ちては離騒の章句をくちぢずさむ。

少女は如何にも自信ありげに見えた。汗が私の頬から首へ流れた。しんしんと暑さが地から湧いてくるやうに思はれた。少女はそれでも私の手を離そうとしなかつた。汗が二人の手の間からもしたゝり落ちた。しきりに喉が乾いた。丘を廻はると川の河原に出た。川風が涼しかつた。なだらかな砂丘の下に川の流れが見えた。対岸の影が川面に黒く映つて、早い水のせゝらぎがこゝまで聞えてき

水鏡

——西湖に遊んで——

ゆらゆら揺られて幾重にもかさなる影のみづかがみ。
水に映つたわたしの顔に、紅の血の気なく、ただ白髪のみ。

ああ、見失つた青春をどこにもとめることができよう。
湖のこの水にいくらねだつても結果はもう分かつてゐる。

註「水辺歌」の原詩は湖上問望(二の六五九)で、江州司馬時代の作。偶々南方「楚辭」の世界に身を置くことになつた白居易は、生命にあふれる自然の懐に抱かれながら悲劇の屈原を偲んだ。「水鏡」の原詩は湖中自照(三の四七四)で、詩人が五十一才の十月から五十三才の五月まで刺史として杭州にあつた際の作。

た。あちこちに河原撫子の桃色の花卉がやさしく揺れてゐた。少女は花のそばに蹲くまると、目を閉じてその小さな薄い花びらに頬をよせた。その姿は蝶が花にとまつて羽を閉じるさまに似てゐた。私が蝶に憑かれてゐるやうに少女は花が好きなのだと思つた。そんなに花が好きなの？と私が尋ねると、少女は大げさな表情で、私の生命よ、と答えるのだった。やつと森に着いた。涼しい樹陰に私達は腰を下ろした。私は水筒の水を殆ど夢中で半分程飲んでしまつてからやつと気付いて少女に渡した。しかし、少女はほんの少し申訳のやうにクローム鍍金のコップに花びら形の唇をつけただけだつた。彼女は蝶が逃げたしまふかも知れないと急にそはして立上つた。私は始めて異性と言葉を交す時の、自己顕揚欲に駆られて、今までの自分の蒐集した珍らしい蝶の事や、有名な和蘭の昆虫学者シユンメルダムの事や、南米の奥に棲むルリ色の不思議な蝶の話など、ダーウインの進化論まで引用して喋り始めた矢先だつたので何かはぐらかされた感じがして不気嫌に押黙つてしまつた。しかし私は蝶の群居と聞いては何時までも坐つてゐるわけにもいかなかつた松林の丘に登りつめ裏側に下つて行くと雑草の茂つた野原に出た。この道はたしか再び迂

廻した川の岸に導かれる筈だかといぶかしかったが、道はその辺で急に細くなり葦交りの湿地になった。はげしい草いきれに腐った泥の匂ひが鼻をうった。葦の細い葉先が目刺さるのを避けながら少女の後を追ふのは大へんだつた。少女はまるで葉の間を縫ふやうに身軽だつた。肥つた体の何処にそんなエネルギーが隠されてゐるのかと思議だつたが私は靴底にへばりつく泥と葦の葉と戦ふのに精一杯だつた。急に湿地が展けた。ほつとして仰いだ空には前と同じやうに夏空が明るく輝いてゐた。一面に薄桃色のねむの花の林であつた。その下に山百合が白銀のやうに日に輝いてゐる眺めに私は声をのんだ。その時だつた少女が晴れやかな声をあげたのは！

(つゞく)

父の留守

小山正孝

もう、彼の心の中から私が消えることはないであらう。いつしよに歩いてホームに達しようとして、線路をまたいでゐる時、彼のズツクの靴が一寸線路にひつかつた。カタカタカタと上りの電車が近づく音を聞きながら、私は時間を計算した。もうよい、丁度よい

時だ。私の言葉の中に――銀行が倒れるといふのがあつて、何を意味させてゐるのか――彼にはよくわかつたであらう。彼は立つてゐる。すんなりとした二本の足。しかし、彼の目に向つる風景は、意味もない。彼は私の顔を見上げた。質問をする氣力をとりもどす前に私は去らなくてはならない。猛烈な反感が彼の中に湧きおこる前に私はもう居ない。さつきまでのいいをぢさんの姿と声を残して、私は靴を彼の身体に軽くぶつけて何事もなかつたやうにして別れるのだ。ぐさつとやつてしまへば、しばらくのあいだは、同じやうな様子でゐてくれた方が都合だ。まだ、ほら、ひげが動いてゐますわよ。このえびは、目玉を二つ、かうやつてこすり合はせてごらんない。なきますわ。ながいひげが、こんなに動いて。ギーギーつて新鮮ですわ。まないたの上のえびみないなものだから。少し青ざめた顔つき。重大さに直面してゐるくせにさびすを返すこともしない。宮本の時にもさうだつた。父に叱られ、母の血走つた目を見た時に、私が父と母とばかりに反感を持つて、実際の關係がわからなかつたやうに。彼にはわかりはしないのだ。宮本の足こそ、切られ、宮本をこそ、鼻を棒でつき上げてやるべきであつたはずなのだ。私は彼に笑ひかけ

はみんなが哀れであることを。自分のお母さんが二人も、三人もと、あれをしたんだつてわかつてごらんよ。どんな風にしる、自分のお母さんが、あれをたくさんしたんだつていふことがわかつたら、いろんな男とさまざまだつていふのなら、この世で何を信じたいらいか。君の発見は正しいのだ。をぢさんはだ

から教へておくのだよ。倒れる。倒れる。君も倒れる。上りの電車が入つて来ると、彼も私にもつと近づかうとしてゐるらしい。どうしらいのかとまどつてゐるらしい。彼は親しくしたいのに、私は急につめたい態度をとりはじめた。私を憎むことも出来ないのだ。「さようなら」

服部三樹子

五月の花

棕櫚の木の数本ならば花重し足穂の稲に似通ひながら

八重さくら若葉の中に残りつゝうしろの空はうすき夕映え

かそかなる負目を持ちて歩を移す八重のさくらに残る明るさ

何にかにこゝろ残りし春日すぎ別れ来てまた明日も逢はまし

一幅の何時か見し絵が胸内をふいによぎりて我が泣きにけり

むらさきの藤の下びに牛追へるわらべを見しは絵かなうつゝか

れんぎよのさわ／＼風に揺るゝ下ふいに見

たしも靴脱ぎすて、
稚なくて露し玉のけじめ知らず伴なはれ来ていまも見わかず
夜の雨の降りはじめなる一つ音こゝろに留めて雨降りいそぐ
夕もやの坂の登りの青葉蔭わがゆくごとく人ゆきゆけり

霧ごもる道のかなたに人はゆき我が竹つところ道のはじまり
朝空の晴れしに高き桐の花夕べはうすき藤の垂れ房
真盛りのばらの奢りに氣負ふなき貧しこゝろを何時よりか持つ

れんぎよの花の盛りの長さかなやさしき文のつきしころより

服部三樹子著

果樹園社刊

歌集 ねむの花

薦詞・保田与重郎 後記・小高根二郎
(朝日新聞社評) こうした作品には読者は観賞の身構えをする要はない。文学の伝統の上に立つ落着きと安心が作品を楽しませる。変遷する歌壇の作風にもかわらず短歌の基盤は意外にもこうしたところにあることを思わせる歌集である。 二〇〇円

た。はは、と軽く咽喉の奥で声を立てた。風のやうな声だ。彼に聞かせるのには、かうした意味のない言葉が一番強烈だ。あと、さよならと言ふだけだ。言ひたいことが終つてしまつたら、おしやべりはしない方がいい。私を見上げた顔を見下ろしながら、私は彼の中に、これから行はれるであらう変貌の大半を見ることが出来た。内面までふみ入ることが出来た。私が、自分のすこしてきた道を思ひ出せばよいのだ。君も同じやうになるわけだね。君も同じやうに、わけがわからなくなつてしまふのだね。僕は君のお父さんとお母さんを奪つてしまつたわけか。靴なんかはいてゐるけれど、君の足なんか、あるものか。僕の身体の中が、がらんどどうであるやうにね。大きくなつたら、君は発見するだらう。人間

私は、わざと、ふりむきさまに、靴を少し低く持つて、丁度彼の膝小僧に強くぶつかるやうにした。ぽこんとにぶい音をたてた。ドアーがしまつた。
桜の葉が濃く繁つてゐるのが一番目についた。駅前銀行が、不自然に立派に見えた。入り口には、かすかに、西日が当つてゐて、丁度舞台でライトが当つてゐる場所のやうであつた。何の気なしに見てみると、その戸が内側から押された。あるひは、光の具合が変化したので駅前につた今下り立つた私の目を吸ひよせたのかもしれない。半ズボンの少年が立つてゐた。舞台では少年は、大変重大な役割を演ずることがある。そこで、右を見、左を見、やがて方向を見定めて、さつと走りはじめようとした姿は、私に、生きつてゐる力を感じさせた。動きははじめようとするもの。走りはじめようとするもの。しかも一寸首を上向きにして、細い左右の手と、長い二本の足は、四方にのびようとして、肘と膝との四つの点が、意志を現はしてゐた。桜並木と銀行の建物と道とが、彼をはげましてゐるやうだ。すべてが彼の為になかない。駅の前で、ははあ、このパスが東京駅に行くのか。一時間以上かかるだらうと考へてゐた私を、では、その駅の何が迎へてくれたのだ

花 三 章

浅野 晃

1

七月 豌豆が

純白の花をつける

海の影に染まつて草地をゆく

子供の掌が甲虫をつかむ

子供の掌の中で甲虫が

角をかちあげる

波打際の方まで出て

ふり返る

子供が石になつてゐる

はつとするとときに

汐の香

胸をなでおろし歩き出す

2

はまなすの花の

らう。

私は銀行の戸が押された時、思はず緊張した。私が改札を出てすぐの時間だったのだ。上手から一人が出る、下手からも一人が出る。かうした場面に自分が、つき出されてしまったやうに感じたのだ。宿命といふ感じに捉へられて。さういふ場合があるではないか。私はどうしても、走りはじめようとしてゐる少年に追いつかなければならないのだ。それが利子の子供であるのは、はじめからきまつてゐるのだ。

銀行の支店の扉を押して外に立つた彼は、ほんとい瞬間ではあつたが、立ち止つたのだ。ぼつと押された扉が光を反射させて、思はない方に光をあてて、それからそれがしまつた。押してゐた少年の白い細い右腕があげられたまま見えた。押してゐた力をなほ余してゐた。彼の目は輝いてゐた。そして、そこに見えるものを全部、非常に短い時間に、見廻してしまつたのだ。見廻して、関係のあるもの、自分に必要なことがらを選んでしまつたのだ。光と、距離とを。私の存在は無視されたのだ。私なんかはあの時の彼には見えなかつたのだ。見る必要もなかつた。彼は、確實に、自分の必要なものを選別する能力を持つてゐたのだ。荒々しく、明るく。彼は走り

はじめようとした。

ギラギラと私の目は彼を追つた。私は自分でも不思議に感じるのだが、自分の気持が何かに追ひたてられたのだ。しかも、私の方が彼よりも、もつと早く走つたのだ。

少年が十歩と走らないうちに、私は彼を立ち止まらせ、私の言葉に聞き入らせた。君のお母さんを知つてゐる。君のお母さんを知つてゐるよ。をぢさんは君のお母さんをととてもよく知つてゐて、いまから、君のお母さんにあひに行くとところだよ。私は夢中になつて、お母さんといふ言葉を言つてゐた。

もし、彼が、あのまま走つて行つてしまつたらどうであらう。少年は、いつまでも、あのやうに扉を押しあげ、あのやうに右手を振り、そして走り、汗をかいて、彼は生きものらしくふるまふであらう。

私は彼と並んで桜並木の道を行つた。どこか、昔、利子といつしよに歩いたことのある道に似てゐるやうな気がした。そして、次第に、私は彼女が好きだし、何の裏切る気持を持たなかつたのに、私を裏切つて去つた利子への憎しみが湧き出すのをどうしようもなかつた。私には何の深い憎しみもないのに、私を憎んだ人は利子だけではなかつた。私は、いつしよに歩いてゐる私よりも小さい者を、

烈しい香氣の中をゆく

すらりと立ちあがり

彼女の瞳が

微笑をおくる

その瞳に見入るとき

逝つたものの

なんと香かなことであるか

紅い紅いこの花

手にもとらず

そして帰る

3

濃くなつた夕闇の中で

かたまつて咲く除虫菊の花かと

おもつたら

一枚のワイシャツで

しだいに遠く動いていつた

草に埋もれた軌条の方へ

息をひそめて立ちどまり

見送り 頭をふつて

括弧を閉じる そして

また歩き出す

いまや、どうしてやらうか、といふ、舌なめずりするやうな気持になつた。

「あなたは疲れてゐるのね。きつと、さうよ。お仕事がいそがしいんだわ。きつと、あんまりおいそがしいのよ。あなたは疲れすぎてるのよ。あなたはいけないわ。こんなになつてはいけないわ。もつと、ゆつくり、おやすみしなくてはね。さうよ。きつと、あなたはおいそがしすぎるのよ。どうしてだかわからないけど、さうなのよ。さうなのよ。だからゆつくりおやすみなさうなうてはいけないのよ。あなたは疲れてゐるのね。もつと、ゆつくりおやすみしなくては」

「おこるものではないわ。ほんたうに、さうなのですよ」

「いいか。かうやつて、さはつてやつてもいいか」

「ゆつくりおやすみなさいよ。さうすればみんなよくなるわよ。あなたはいろいろとおいそがしすぎるのよ」

「なんだ。お前は、おめえは」

「いいいのよ」

「ないてやがらあ」

私のほほの上に落ちる涙は、思つてもみなかつた程、あつた。

「何かわるいことも言つたのか」

私はいつのまにこんな風になつたのか知らない。カウンターの横が私の身体全体のすぐ前に黒々としてゐた。女が私の頭を自分のひざの上のせてゐた。私は椅子を三分背の中と腰と足との下にしてゐた。電気はさつきのままだが、なんとなく静かだつた。サンバシミチャの声色のうまい流しも、もう聞えない。

「はは、ないてやがらあ」

「そんなこと言つていいの」

「そんなこと言つていいのつて、いいよ、君は、どうして泣くんのだ。何かしたのかな。何か言つたのかな。俺、ねたのか」

浅野 晃 著

岡 倉 天心

亀井勝一郎氏「天心は明治の最盛期に生きた巨人である。激しい民族のエネルギーの最大なる体現者であり、彼の胸底深く息づいているものは東洋ルネッサンスの祈念である。それは明治に発せられた世界に対する発言の中で最も重大なものの一つである。今日こそ天心の真意をその本来の姿で見返さなければならぬ。」

東京千代田区神田美土代町明徳会館内
明徳出版社
振替口座東京五八六三四番

さつきの女の言葉のくりかへしが、急に身体の中に甘く、とけこむやうであった。

「あなたつて、弱虫だ」

「ふうん」

「あなたつて、——ふふ、もう、おきなさいよ。あなたが、わかつたの」

「うれしさうな顔してやがらあ」

カウンターの向ふ側にもう一度廻つて、女がウイスキーをつぐあひだ、私は、さつきからの自分を考へた。しかし、どうして、女が私といふ人間がわかつたと言つたのか、わからなかつた。また、どんな風にわかつたと言つてゐるのかもわからなかつた。さむざむとした。私は両肩をすくめた。

「はいどうぞ」

「君は、うれしさうな顔してゐるね。どつかのおつかさんみたいだな」

「いいの。なんでもいいの」。

「君」

「なあに」

新潮文庫七二

伊東静雄詩集

七〇円

子供の日に

堀ノ内

歴

「父ちゃんあゝ見てえ」

空に揚がつている鯉の事だ
高架線の電車窓を見ていたチビ助が

肩叩き 私に見よと云う

「うん／＼ あるある」

はるかに屋根続きの彼方迄

かぞえ切れぬ鯉の大小のかず 町は
此んなに暮し向きが良くなつていた

「来年は家でも買おか」思うでもないのに
ただ口先だけで云うてみた私の言葉に

東京通信

田中克己

大阪を出てちやうど一年になる。そろそろ大阪がなつかしくなるころに、関西在住の三同人が次々と本を出した。たいへんうれしいと同時に、何やるなとか皮肉な感じ方をした。いただいた順に感想を申し上げると、第一

も一つ向うの席から中の娘が口突き出して

「そんなこと云うて

家に立てる所あれへんやんかアそれよか

来年も私 学校でこさえて来たるワ」

紙工作の鯉の事だ

チビ助にはそれは一向にどうでも良く
今や窓外への注意が大切である

「あ！ 又あゝ大きいでエ」

彼は手近の大きい奴ばかりを
特別に送迎している

どの鯉も風に漂よい心地よい眺めだが

ふと あんな物を毎日出し入れする
配慮と手間ばどうか 内心でもう

無精な私は先ず駄目だと思つて見ている。
昭和三十三年五月五日

られないほどのこと、耐へても打明け得まいと、私などの素人考へを押しつけて、ぬけぬけと、あるひは毅然と歌ひあかすのである。

反面、女ならでは歌へぬ、いな感じ得ぬ純粹可憐な詩情がこの歌集にいつばいあるのを、私は「祖国」誌上では見のがしたのであらうか。

色もあやもかたちかをうしなひては
だかぼとけと我がなりてまし

合 旬

杉本秀太郎

とおいとこで聞こえるものは
それに近よつて

合図をたしかめねばならない

お前の肩を台に

倒立しつゝ歩行する

お前の分身の

こたえる合図が

いなづまの一閃に浮かび上るとき

遠かつたものは

もうお前のうしろに残されている

三宝柑むきし香りの残る掌を置きどころ
なく合せて眠る

このたぐひの数十首の前に、私はただ頓首するばかりである。服部さんはいま東京に来てゐる。強い心と優しい心と両面をもつたこの女菩薩の歌のますます多からんことを私は衷心から祈つてゐる。

近いところで聞こえているものは

それをお前の足で踏みつけるがいい

足のうらがひりひり痛いかな？

頭髮の先にまでいなづまが走るか？

お前の分身は地面のうら側で

拒否の身ぶりをするだらう

地平線に吹く突風が

木々のダンスをそこに

まだ見たことのない風景として示すだらう

お前はその方に歩みを移せ／＼

太陽から矢印がくだつてくる

星から挿話の区切りが落ちてくる

びっこを引き引き

うしろ姿をもっともよくそびえさせるもの
そこにお前の詩人がいるのだ

は服部三樹子さんの歌集「ねむの花」であるが、この歌集について先月号に林富士馬さんが仰しやつたことは、全く私を同感させた服部さんの歌は「祖国」でたびたび拝見してゐたが、私は服部さんに会ふまで、これらの歌を、祖国社同人でよく存じてゐるT君の歌だと思つてゐた。実は私も女名前で歌を書いた時期があつたので、T君もやつてゐるなと信じこんでゐたのである。服部さんの歌にはそれほど強いところがあるのだ。女なら耐へ

山根忠雄さんの詩集「岩に刻む」は四月半

ばに出しますと予告を受け、予告通りの日に送られて来た。私はこの律義ぶかさに感心すると同時に、その歌はれた主題を見て「この人はもう何でも詩に出来るやうになつたな」と大喜びした。いろいろな場面が楽々と詩になつてゐるのである。ただし人がらで悲しい場面、腹の立つ場面、いやらしい場面はひとつもない。上品の人柄とはかうした人かと山根さんと会つた時、私など下品の標本はいつても感心したが、それを詩も証立してゐる。もつとも下品でもずい分、詩の作れる時代もあつたが、いまのやうな時代となると、もうだめである。ところが山根さんはさうでなく自分次第ですと、私に警告するやうにお手本を見せた。私はこの詩集を見て、しばらくはもう降参して心を入れかへようかなと考へてゐた。

x

石浜恒夫さんの童話集「日本アンデルセン」は子供にまづ見せて、私はよこで色々のことを思ひ出してゐた。思ひ出す第一は恒夫さんが帝塚山学院の小学部の制服制帽で高野線に

公園で

美堂正義

ここでは空が広い
木々の嫩葉がいつせいに噴き初め
晩春から初夏へ移る季節のもの憂い午後
草に腰を降して懶惰を楽しむ
白い雲が緩り渡つてゆき
小鳥の音が耳にくすぐつたく響く
風に頬をなぶらせながら
少女らがヴァレイボールをしてゐるのを
ぼんやりと眺める
甲高い叫びは嬌声を帯び
五月の空気を鋭く引裂いて消えてゆく
鮮やかに燃える嫩葉の時期は短く
短い時を惜むやうに
木々は急いで装ひを新らたにする
太陽はそれらのうへに
目を眩むやうに烈しく光を注ぎ
風に戦く木の葉の色彩は盛り上つて
私の胸に重たく覆ひかぶさる

乗つてゐるところである。車内のみんなが何
て可愛い子だらうといふ顔をして見てゐる
私はその時とても得意だったことをはつきり
とおぼえてゐる。いや今でも私はこのムツシ
ユイオノレの仕事と才能に得意になる時があ
るのだ。どんな縁故だつて。いや縁故などな
くつてもいいのだ。しかしこの本でも気がつ
くと「てん／＼天満の」といふ歌がある。こ
の歌など、恒夫さんと同じく

ねんねんころ市、天満の市は、大根そろ
へて舟に積む。舟に積んだらどこまで行
きやる。木津や難波の橋の下。橋の下に
は鴨がゐる。鴨とりたや網ほしや。

といふ子守唄をきいたものでなければ、ほん
とうにわかりはしまいが。難波のどぶ川は埋
められて球場になり南海ホークスがいま試合
して負けかけてゐる。木津に鴨がゐたのはい
つまでやら、私の知つてゐるのでは鴨町の名
だけのこり、その鴨町には……いやこんな話
はその中、恒夫さんに会つたとき話さう。私
はいま東京で満一年をすこし、故郷など忘れ
た顔をしなければならなくなつてゐるのだ。

編集後記

五月十一日の大朝に服部さんの「ねむの花」
の書評が出た。好評だった。一読者から筆写
までして歌心を鑑賞してゐるとの便りもいた
ゞいた。
五月十五日大阪駅前の好文クラブで偶然安
西冬衛氏にお目にかゝつた。山根君が詩にま
で歌つてくれた伊東の「夕の海」の台本は、
近い将来工場建設のため取壊されるだらうと
のことだった。私は近代化否定の感傷主義者
ではないが少しほろりとした。氏は慰めるや
うに果樹園の誌風を賞めて下さり、伊東との
逸話を話して下さつた。
五月十六日熊本県の蓮田善明未亡人から伊東
書簡が数通発見されたこと知らせがあつた。清
水文雄氏から未亡人の住所を教へていただき
照会をして四年になる。天助である。
先号の後記で紹介した板倉綱晋氏訳リンゲ
ルナツツ詩集「木造の記念碑」が国文社から
出た。第一書房版より立派である。価二五〇
円。座右にお薦めする。

果樹園 第二十九号(毎月一回発行)
昭和三十三年六月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
発行人
京都市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園三十号 昭和三十三年七月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第30号

書簡から見た伊東静雄
藤の花 小高根二郎
微笑 堀内邦二
小苦笑 美堂正義
暗い顔 池沢茂

野の歌 浅野晃
東京通信 田中克己
白居易詩抄 森亮
蝶華抄 芳野清
残華抄 服部三樹子
僕の文学時評 林富士馬
果樹園 山根忠雄
後記

書簡から見た

伊東静雄(二十九)

小高根二郎

先の書簡で、伊東はゆくりなく京都で百合
子さんに邂逅した事実が知られるが、その際
伊東は、姫路にも遊びにくるやう誘はれたに
相違ない。その後歳末になって、夫婦して夫
姫するやう百合子さんから招待状が送せられ
たのであらう。

さう言へば、伊東は大学一年の正月に、故
郷に帰らず姫路の酒井家で迎春してみた。そ
の際、姉安代さんの日記を盗み見たとか、
しなかつたと云ふ、いかに青春らしい物議

を醸した事実を思ひ出す。その後、酒井家が
京都に移つてからは、正月と云へば伊東は酒
井家に入りびたつてゐたのである。百合子さ
んの正月の思ひ出には、むさい伊東の姿が必
ずと言つていゝほど影を見せるのは当然であ
る。
その昔なつかしさから伊東夫妻一特に伊東
に招待状が送せられたのだらう。が、伊東は
無精をして訪姫しなかつたのである。その心
情は、昭和十年「コギト」一月号に発表した
次の作品にうかがふことができる。多分、京
都での邂逅の直後作られたものであらう。

寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

耀かしかつた短い日のことを
ひとびとは歌ふ
ひとびとの思ひ出(まな)びの中で
それらの日は狭く
いい時と場所とをえらんだのだ
ただ一つの沼が世界ちゆうにひろこり
ひとの目を囚へるいづれもの沼は
それでちつぽけですんだのだ
私はうたはない
短かかつた耀かしい日のことを
寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

第一詩集「わがひとに与ふる憂歌」



一昭和二年の酒井家の正月一
左から伊東、婦美夫人、小太郎先生、安代さん、百合子さん

この詩は、昔はよかった……と云ふ、思ひ出が特質する単純な甘さに対する拒絶であるこの拒絶の精神は、美しい故郷なんて永遠の宿題なのだ……と、すでに「帰郷者」に顕現してゐた。昔の楽さと云ふものにかゝはづらつてゐる百合子さんに、今日の中に楽しさを見つけたければならぬ事を、伊東は教へようとしたのかも知れない。

然し伊東は、耀かしかつた短い日ではなく、悲痛であつたが故に永かつた日は歌つたのである。「わがひとに与ふる哀歌」「冷めたい場所」は皆この回想の上に成立つてゐた。翌二月号の「コギト」に発表した次の作品も、その一聯の作である。

田舎道にて

日光はいやに透明に
おれの行く田舎道のうへにふる
そして 自然がぐるりに
おれにてんで見覚えの無いのはなぜだらう

死んだ女はあつちで
ずっとおれより賑やかなのだ
でないと おれの胸がこんなに

真鍮の籠のやうなのはなぜだらう

其れで遊んだことのない
おれの玩具の単調な音がする
そして おれの冒険ののち
名前ない体験のなり止まぬのはなぜだらう

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

私はこの田舎道の舞台を、「冷めたい場所」の峠路から山科盆地を過ぎ、渋谷越にかゝる道と解釈する。つまり「京都への旅路の伊東静雄」のカタストロフである。

六条山の向ふは酒井家のある南日吉町である。かつてその南日吉町から、六条山を逆に眺めやつたこともあつたのだ。馴染ふかい山波であつた筈だ。それなのに、おれにてんで見覚えの無い自然に見えるのは何故だらう。あの山波の蔭には、今日も百合子さんがゐるのだ。充足された耀やかしい青春。その青春にふさはしい賑やかさで、今も取囲まれてゐるだらう。いや、彼女は俺の回想の中だけで生々と思つてゐるのだ。貧乏教師の俺にとつては、所詮、死んだ女に等しいではないか……。でないと、俺の回想の胸がこんなにひしやけてゐる筈がない。まるで内味

藤の花

福地邦樹

この日ごろ
私の窓から見える盛んな藤棚の下に
絶えて人影もなく
夕日を浴びた花房が
いたずらに美しい

この世の現象は
ほとんどが あのように
無駄に費されてしまふのだからか
そして時たま
病人とか恵まれること少い魂が
からうじて
その輝きのわずかな部分を受けとめる
たとえば 人の親切
あるいは暁の夢

きなりスイッチを捻つた。花のやうな蒲団の中にたしかにあのひとは臥つてゐた。侮蔑に似た一閃を眼尻に光らして病気のひとは寝返つた。破廉恥であつた△冒険▽。冒険と云ふ名あひとは俺にとつて、完全な△死んだ女▽になつたのだ。け。かうした回想と共に、伊東は百合子さんの住む南日吉町の隣町を通過して京都の馬町に入り、大津から京都への小旅を終つたのである。その四年前の田舎道での感慨を回想して、この作品は成つたのだらう。尚、伊東の「田舎道にて」を掲載した「コギト」同号に伊東が好敵手と目した田中克己氏は代表作「多島海」を発表した。その月なかば、伊東は次のやうな書簡を、百合子さんに書き送つてゐる。

「ゆり子さん 私の詩のことを尋ねて下さつてまことにうれしくありました。尾崎一雄といふ人は私のことを書いてゐませんでしたがね。知らないのです。大概の人は私のことは知りません。又、私はコギトの同人でもないのです。田中といふ人は今大阪にゐるのですが、この人は一種の天才です（早熟の）。私の詩を認めてコギトに紹介したのもこの人です。ゆり子さんは「日本

新潮文庫七二

七〇円

伊東静雄詩集

彼は日本の近代詩に消したい痕跡をのこして去つたのであつて、その細くすくい痕跡がいかにかに深く切れてこんでいたかは、時がたち、幅ひろく浅い痕跡が磨滅するにつれてはつきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであらう。

桑原武夫

のない真鍮の花籠のやうぢやないか。それにしても、空疎な花籠のやうな肋骨の内、なんと心臓は高鳴るのだらう。まるでガラ／＼か太鼓のやうな単調な音で……。△遊んだことのないおれの玩具▽。死んだ女と鳴らすべかりし玩具。さう言へば南日吉町時代、俺は宮本と一緒に訪れたものだけ。俺の影を見るなり、つ！と二階に撞消えるのが例であつたあのひと。ある夕なぞは病氣との由で影も見せなかつた。贅病だ！と俺は主張した。いや、嘘ではあるまい……。と宮本は家人の言を肯定した。よし！嘘か真実かためてやる。俺は宮本の制止もきかず私室に闖入した。室は暗かつた。開いた襖からの明りて天井の燈の位置がそれと判つた。俺はい

浪漫派」といふ雑誌が四五日中に出ることを知つてをられますか。私は中谷孝雄、亀井勝一郎といふ人にすゝめられて第二号からその同人になることになりました。仲間は今所の八人です。前記の二名に保田与重郎、中島栄次郎、神保光太郎、緒方隆士。第二号から中村地平と私とです。私以外は皆有名な人ばかりです。将来は大家になる人ばかりです。

この雑誌は大へん景気のよすぎる雑誌で、方々で一杯悪口が出てをります。三月号の文芸にも正宗白鳥が悪口を書いてゐる筈です。田中克己はこの運動には加はりませんでした。この人を好かん人も多いのです。萩原朔太郎は私に大へん深切にしてくれ、度々葉書で私をほめます。同氏の雑誌「生理」といふのにも私のことを評し、私も詩を一つおきました。朔太郎といふ人は小説で言つたら山本有三の様な人で今活動してゐる詩壇の唯一の大家です。三好達治や丸山薫、堀辰雄といふやうな人はこの人のお弟子のやうな人です。「文学界」といふ雑誌ご存知ですか。朔太郎氏からすゝめられて近い内にその雑誌に詩をのせるかも知れません。文学界は日本で唯一の最高の純文芸雑誌です。近頃は方々から注文があ

るのですが、簡単に詩は出来るものぢやありませんし、又そんなに方々に出す必要も慾望もありません。二月に一度ぐらいつつ日本浪曼派に出すのが、私には精々でありませう。送って来たら贈呈します。私が浪曼派の人から誘はれたのは全く、私が孤独な、高踏的な立場に於て詩を書いてゐるからです。これからも、そんな態度でをらうと思ひます。朔太郎にもあまり近づきにはならんでみたいと思ひます。遊びに來い、上京せよと、その人は云ひますけれど、私は東京はいやです。

詩の自慢はそれ位にします。

○宮本君も双児をうんでだいぶ苦勞をしています。奥さんは大阪の保険社会に出てゐてこの人も大へん苦勞してゐます。

○弟はJ・Oトーキーといふ活動会社には入るかも知れません。これは採用されたら一年の後アメリカにやってくるのです。今迄は作品は一つも作ってほぬないスタヂオですが、新式な設備で日本一ださうです。京都にあります。

○妹は、簡単に嫁に行くわけにも参りませんし又似合ひの人もみつかりませんので、私の知った人の知人で大きな肥料会社をしてゐる人がありますので、そこにまゐるでお客

さんの様な待遇で事務をしに行つてゐます。ソロバンも帳簿もまるで出来ないで、私はその店の氣の毒に思つてゐます。

○妻君も元氣です。私が少し得意な時代には入つたので、過をしてくれんやうにしてくれと私を戒めます。私は笑つてをります。自分の方のことばかり書きました。ゆり

子さんも是非その内遊びにいらつしやつて下さい。ご馳走します。文學論などもう近頃はやりませんから。又やつても似合はぬ程におっさんになりました。もう三十です。皆さんにどうぞよろしく、

十三日

伊東静雄

ゆり子さん

(昭和十年二月十三日大阪市西成区松原通二ノ一五より姫路市五軒町六七酒井ゆり子宛封書)

百合子さんに送つたこの書簡は、昔の書簡のやうに珍らしく長い。彼女が「コギト」で「わがひとに与ふる哀歌」「冷めたい場所」「田舎道にて」を読み、そのどこかに琴線に触れるものを感じ、感動の書簡を書き送つたからであらう。恐らく田中氏の作品についても触れるところがあつたに相違ない。「早熟の天才」と云ふ伊東の評語には、いかにも伊東らしい畏敬の氣持と同時に一種の敵愾心とが感じられる。その氣持は伊東が第二号から参加する「日本浪曼派」に、田中氏が参加し

石浜恒夫 著

日本アンデルセン

メルヘンの神様アンデルセンが大阪に現われて物語る童話集。谷内六郎氏の大版スケッチ、出淵美千代さんの挿絵に飾られたフランス装の美本。備三〇〇四二二四

大阪市大淀区中津本通二丁目 六月社刊
振替口座 大阪一八五七九

ないと云ふくたりに強められてゐる。

「日本浪曼派」は文中に名が見える神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田与重郎の諸氏が發起人である。その宣言はすでに昭和九年十月に発せられ「コギト」に広告されてゐたのである。

「平俗低徊の文學が流行してゐる。日常微温の饒舌は不易の信条を昏迷せんとした。僕ら茲に日本浪曼派を創めるもの、一つに流行への挑戦である」に始り「浪曼派は史上少しせぬ。しかも日本浪曼派は悉く総てに秀でて、至上に清らかに美しい存在である。今日の日本はかゝる芸術人を要求し、大衆は彼らの要求の最も鋭い感受者を要請する。僕ら亦希求し憧憬する、最も高貴に激烈なものを。それは日本浪曼派の目標であり現代である。憧憬の形式は奪取の

表現である。最も美しいもの、擁護のため、最も崇高なもの、顕彰のため、この必至の伝統芸術復興の便命を、茲に特に高邁急迫に表現する一方法である。」と結んでゐる。

この広告文を見て正宗白鳥氏は「文芸」三月号に頼りない宣言だとし、間違ひ易い浪曼主義より間違ひ少いリアリズムの道を選ぶべきだと戒言した。この出発前より抵抗の多い「日本浪曼派」に、伊東は深く参加を肯じたのである。幾度かの萩原朔太郎氏からの激励

微笑

堀ノ内 歴

雨で 二階で騒いでいた子供達を

呼びつけて並ばせ

頭のさきから脚もと迄

彼等をつく／＼眺めてみる

どいつのも身体には長すぎる手脚だなあ

思つた途端 それが又逆

私自身の弱々しげな老け込みを思わせる

彼等の眼元が笑ひを鎮めかねて動いている

で、伊東の意氣は「日本浪曼派」の広告文のやうに昂揚したであらう。その昂揚を、花子夫人は過誤のもととして危惧してゐる。すでに同棲三年の勞苦を共にしてきた彼女は伊東のさうした氣質の危険を、充分知悉してゐたからであらう。然し、推輓者朔太郎にもあまり近附きになるまい……と云ふほど、伊東は用心深いのである。それは朔太郎が誘惑する東京の文壇詩壇の現象主義に対する警戒であると共に、異常な天才には感銘しながら、大正期の詩人が特質とする幼稚さにあきたらぬ

陽焼けか垢か分からぬ黒い脛には

まだ乱暴さの高ぶりが残されている

神妙らしく 並んでいるのだが

あゝ、これでは暴れるよりほか手がなかる

う

叱りつけに呼んだのに

プツと吹き出してう私を

彼等はどうも始めから知つていたので

「ちよつとは静かにしろよ」

「ハァーイ」皆が同時に叫び返して

もう騒々しく馳け昇る階段の足音……

有明海の思ひ出

馬車は遠く光のなかを駆け去り

私はひとり岸辺に残る

わたしは既におそく

天の彼方に

海波は最後の一滴まで沸り墮ちたり

沈黙な合唱をかし処にしてゐる

月光の窓の恋人

叢にゐる犬 谷々に鳴る小川……の歌は無限な泥海の輝き返るなかを

縫ひながら

私の岸に辿りつくよすがはない

それらの氣配にならぬ歌の

うち顛ひちらちらとする
緑の島のあたりに

遙かにわたしは目を放つ
夢みつつ誘はれつつ

如何にしばしば少年等は
各自の小さい滑板^{アイススケート}のり

彼の島を目指して滑り行つたらう
あゝ わが祖父の物語！

洞海ふかく溺れた児らは
透明に、透明に

無数なしや、つばに化身をしたと
自註有明海の少年等は、小さい板にのり、八月の限りな
い干潟を踏つて遠く滑る。しやつばは、洞海の底に孔
をうがらねむ透明な一種の蠅。

数年^{第一詩集}前諫早に旅をした私には、この詩に抒
情されてゐる風物が充分に納得いく。諫早の
町外れから眺めやると、瑠璃の帯のやうに横
臥つてゐる有明海までの距離を、干潟にひと
しい褐色の田畑が埋めてゐる。そこを放縦に
うねつて、本明川は谷川の水を、雲仙が岬々
とした山容を浸してゐる有明海に注いでゐ
る。その梅雨どきの奔放な流れは、有明海の
上汐の抵抗に出会つて、昨昭和三十三年諫早
に未曾有の水禍を見舞つた。その地に住む詩
人上村肇氏から、首遊の折顔見織りとなつた
老母と愛妻と愛娘二人を一瞬にして奪つたの

である。犠牲数千。恐らく億万のしやつばに
今は化身してゐるだらう。

この「有明海の思ひ出」で特別すべきこと
は、この作は先月の「コギト」に発表され
た「早熟の天才」田中克己氏の「多島海」に
関係があることである。

多島海

田中克己

何がわたしをおどろかせたのだらう

その多岐の入江にわたしは踏みまよひ

海月と海藻の間に神々を見た

夕月のやうに輝く額をもつた少女たち

真紅の縷になつてゐる舌を吐く

山茶花に似た唇の貝殻たち

太陽光のあまねく照らすやうに

たのしい色んな思ひ出がこの夕あかりに
凡てかへつて来る、古代の説話のやうだ

血にまみれた楯に似た鳥がわたしの

前面に暗く立ち塞がり
背後から太陽に照らされてゐる

山根 忠雄 著

詩集 岩に刻む

大山定一氏評「はくは君の内部でしづかに燃えてゐる
もの、ゆつくり発芽して生長するものを感じてゐた。
深い井戸は、くめばくむほど、つめたい水がわきで
くるといふ。はくは君のつましい素地が、すなはち、
自然に、清らかな井戸の水のやうにあふれ出すのを祈
りたい。」

一〇〇円
果樹園社刊

わたしの立てる波がまだ彼の脚に及ばな

い

彼は様々の樹木をもつてゐて

それから露き出しの肩と顛頂とをもつ

わたしを取巻いて黄昏がある

わたしのまはりはずべて波打ち

すべてが帰還のために忙がしい

わたしは出発する

その多岐の入江を身をくねらせながら
脂粉で粧はねばならぬほど蒼ざめて。

この作は伊東の心を射たのである。その傷
から有明海の回想が吹き出た。自分の故郷を
歌はれて了つたやうな口惜しさが身を揺つた

小 豚

美 堂 正 義

微風が頬を撫で

良く澄んだ空が心よい明方

アカシアの花が散つてゐる堀割に

脊が肌色をした一匹の小豚が

手を激しく動かして泳いでゐる

漣がいく筋もの縞となり

キラキラと光り輝いてゐた

石畳の崖に登るのを諦め

家の蔭を曲つて隠れてしまつた

高い道に立つて見てゐたが

バスが来て多忙な一日が初り

仕事に取り紛れて忘れてゐたが

夕方家に帰つて

小豚のことが想ひ出された

うまく攀ち登ることが出来たらうかと

アカシアの花散る堀割の風景が

鮮やかに浮んで来た

早熟の天才奴！ 伊東は猛然とした挑みを感じ
じたであらう。即ち、「多島海」の第三聯
△夕月のやうに輝く額をもつた少女たち、真
紅の縷になつてゐる舌を吐く、山茶花に似た
唇の貝殻たち△の「少女と貝」から「少年のし
やつば」の△古代の説話△つまり、△祖父の
物語△の発想を得たのである。これは模倣で
なく、本歌取りの精神に似た伊東の一種の挑
戦なのである。

暗 い 顔

池 沢 茂

「なんで、そんなに、暗い顔してるんやね。

いつつも、怒つたみたい、ゆううつな顔し

てて、家のなかが陰気で、かなわん。なんぞ

会社で、いやなことか、つらいことが、ある

んかいな。それともほかに、なにか、わけが

あるんかいな。わけがあるんやったら、言う

たらい、やないの。だまって、ゆううつな顔

してるのん、いちばんかなわん……」

いっしょに夕食をたべているとき、妻はと

つぜん、ぼくをにらみつけて、はげしくなじ

つた。ぼくは、むっと、腹が立った。家のな
かで、顔色にまで干渉され、その奥の感情ま
で憶測されたら、やりきれない。やさしく気

づかつてくれるのならまだしも、妻の口調は
唐突で、激越で、かみついてくるようだった。

「なにも、ゆううつな顔なんか、してやせん
やないか。かりに、そういうふうに見えたと

ころで、それがぼくの顔だとしたら、いまさ

ら、しようがないやないか。人形じゃあるま

いし、人間の顔が、そうやす／＼と付けかえ

られるもんか」

「まえば、そんな顔、してへんかった」

「まえて、いつや？」

「大阪の家にいたころやがな。それ、その、
こわい顔！ わたし、こわい！ ぞつとする

！ 大阪の家にいたころはよう笑うとつた

のに……なにか、わけがあるんや。きっと大

阪の家へ帰りたいんや」

「なにっ！」

なんだかあざけるような妻の顔を見てとつ

て、ぼくは、かっとなり、からだかふるえた。

われをわすれて、手にしていた茶わんをいま

にも、ぶつつけそうになった。が、やがて、

いくらか興奮がしずまると、なんだ、そんな

ことか、と思ひ、落ちつきを取りもどした。

妻はぼくが大阪で父母といっしょに暮して
いるときに縁付いてきた。ところが、だんだ
ん折れ合いがわるくなり、ぼくはぼくで勤め
先の出版社がしだいにゆきづまり、とう／＼

妻は、やがて家を出て、縁を切った。出版社といつても、主人夫婦をいれて、四、五人から、六、七人くらい、小さな個人会社で、いまにもつぶれそうに不安にさいなまれ、ぼくはみじめなサラリーマンだった。そして、そこさえ失職すると、こんどは、うらぶれた町工場の注文取りなどとして、一層みじめな日を送った。もし笑ったときがあったとすれば戦後しばらくのあいだ、いわゆるエロ・グロ雑誌などがはらんしたころ、近所だったF氏やN氏などの世話で、いくらかの原稿料をかせいだときだったかもしれない。そんなものはむろんまもなく行きつまってしまふ。ぼくは大阪の家では、だから、自己を見失って宙にさまよっているような、気ばかりあせて空虚な、生きがいのない、暗い苦しい思い出ばかりが多い、といつてもよい。そのご、どうにも生きてゆけなくなつて、夢中で家をとびだし、別れた妻のあとを追って神戸へゆき、あらためて、ふたりで世帯を持った。

『むこうの家へ養子にゆくの、おなじことやないか。親をすててまで出てゆく気なら、いっそ、もう二度と帰ってくるな』と父母は言った。

ぼくはまったくの着のみ着のまゝで、はしや茶わんから、ふんどしや下駄にいたるまで、

岡倉天心

亀井勝一郎氏「天心は明治の最盛期に生きた巨人である。激しい民族のエネルギーの最大なる体现者であり、彼の胸底深く息づいているものは東洋ルネッサンスの祈念である。それは明治に発せられた世界に対する発言の中で最も重大なものの一つである。今日こそ天心の真意をその本来の姿で見返さなければならぬ。」

二〇〇四
東京都千代田区神田美土代町明徳会館内
明徳出版社
郵便口座東京五八六三四番

すべて妻の実家の世話になった。職も、義父の力ぞえて、手ごろな通勤距離の市内に、やがて、ありつくことが出来た。三流の地方紙だが、小さな個人経営の出版社や、場末の町工場などにくらべたべた、サラリーマンとして、どれほどたのもし「大樹のかげ」かわからない。相当なビルディングをかまえ、社員も何百人かいて、はじめてのぼくには、晴れがましいくらいだった。妻も、ぼくと別れてから、女ひとりて暮して、こゝろぼそい気持のかぎりをおぼえてきていたから、ぼくとともに、新しい生活をきずきあげてゆこうと、必死に思いつめていた。妻と家を得て、こゝに根をおろし、サラリーマンとして、あたえられたコースのまゝに生きてゆこうと、ぼくもすてに、覚悟はきまっていた。たゞ心配なのは、耳のことだった。

ぼくはおさないうちから中耳炎をわずらいつゞけ、両方とも、鼓膜がなくなつていり。耳だれもなんべんとなく再発し、年とともに聴力がおとろえて、そのまゝだったら、ぼくはおそらく、社会の表面に浮かびあがることなど、不可能だったにちがいない。戦時中、衛生兵にとられていたあいだに、人工鼓膜のようなものをおぼえて、それに熟練したときから、ぼくはよみがえつた。脱脂綿を小さく

まるめ、リパノール液にひたして、鼓膜とおなじ位置に装着するだけだが、位置がぴったり適合すると、ふつうの対話や、電話の受け答えにも、あまり支障をきたさない程度に、聴力が回復するのだ。身体障害者として廢人になりかゝつていたぼくは、そうして戦後三十を越えてから、ようやく人生の一年生として、出発できるようになった。といつても脱脂綿の鼓膜だから、声や音が、小さくなつたり、距離が遠くなつたり、いりくんだりすると、人なみには、どうしても聞くことが出来ない。脱脂綿の位置がくるつたりして、かえつて極端に聞こえにくくなつてしまふばあいもある。ところが、その新聞社では、なぜか、とくにぼくにたいして、わざと押しこめて鼻にかけたような、小さい聞こえにくい

で、わりあい耳を必要としない職場だが、読みあわせや、整理部や工場その他の連絡や、仲間どうしの話しあいなどのとき、そういうことをされると、たちまちに困つてしまふ。

野の歌

浅野 晃

ではお別れしよう
わが年少の友よ
きみは町へと帰るがよい
ぼくは野にとどまらう

きみの物足りなさうな顔
何かまだ欲しがつてゐる眼
わかるよ だが
どうしてそれが満たされる

きみの求めるものを
どうしてぼくが与へられる
きみは当てにして来た
手にかかへて帰れるものを

ぼくの顔を見たまへ
ぼくの眼を見たまへ
ぼくが何も答へなかつたのは
ぼくの胸が野にあるからだ

きみは手ぶらで帰つてゆく
ぼくにもそれは耐へがたい
だが野の歌は それがこれだ
きみの心にやどるだらう

きみにその歌を
上げよう 持つていつてくれたまへ
ぼくを忘れる日が来ても
歌はどこかで響いてゐよう

★

稲妻がきらめくときの
闇のうつくしき
そのとき空ゆく鷺は
声だけが翔る

野は声だけを見る
闇の限らない輝きの中に
野はただあやす
この闇をこの声を

闇をあやすことの
仕合せと悲しみと
野は太陽の下ですら
あまりに久しく闇を愛した

闇はまひるの中にもあつた
深く、じつに深く
その深さの故に 野の眼は
その窓をひらいてゐた

野が頭をもたせたとき
鋼なす世界はほほ笑んだ
忍耐づよい母なる野は
ひろがりの中に夢みてゐた

耳のわるいことは正直に言い、仲間の人たちにも、とき／＼了解をもとめているのに、なぜ、こんな意地わるさをされるのか、わけがわからなかった。なかには、わざ／＼大げさに、耳の悪いまねをして、得意そうに見せびらかす人たちがあつたのだ。

ぼくが入社するとき、義父は、社長や重役たちのだれかれに、いろ／＼おくりものをした。耳や年齢や職歴など、ずいぶん不利な点の多いぼくだから、そうしなければ入社できないと、察じてくれたからにちがいない。そのため、そういう人たちから、特別に目をかけられる結果にならなかったとは言えない点があつた。そして、そのために、同僚や古参たちから、よけいに、悪意や反感をそ／＼される結果になったのかもしれない。それにしても、ぼくがいじめられ、からかわれるのは、あまりに露骨で、徹底しているようだった。しかも、ちょっとした抗議しようとする、相手はじきに、ます／＼聞こえにくく、言いかたをして、ぼくをおびやかす、不安がらせ、おさえつけてしまうのだ。おさないときから耳がわるいには慣れて、ずいぶんしんぼうづくよくなっているぼくだが、さすがに、やりきれない気がした。鼓膜をうしなっている自分のせいだと遠慮して、じっと忍耐

していると、とき／＼、なんでもないときに、むか／＼と腹が立ってきた。生きてゆく権利さえ奪われようとしている自分の立場を感じて、追いつめられたけどももの怒りや恐怖が、こみあげてくるのだ。便所かどんでいるとき、夜道をひとり歩いているときなど、ぼくはとつぜん、われを忘れて、げんこつを振りまわしたり、大声で叫びだしたりしていた。

東京通信

田中克己

大阪にゐる時、東京へ行ったらと計画してゐたことの一つに、鴨外の研究がある。研究とは口幅つたいが、私が滋賀県の彦根にゐたとき大阪へ帰って来いと、いひに来てくれた庄野英二さんは、帝塚山学院短大で古典講読までやることになり、ちよつと群易してゐる私に鴨外でもやったらとす／＼めてくれた。はじめの一年はそれでも万葉集をやつたが、これは学生にも私にもむづかしいのである。略解や古義以後、ずいぶん薬学の進歩してゐることは私も認めざるを得なかった。

次の年は杉浦正一郎のす／＼めで素龍本奥の細道をやつた。これは私にくづした字をよむ

服部三樹子著

果樹園社刊

歌集ねむの花

薦詞・保田与重郎 後記・小高根二郎

(朝日新聞社評) こうした作品には読者は観賞の身構えをする要はない。文学の伝統の上に立つ落着きと安心が作品を奏しませる。変態する歌壇の作風にもかわらず短歌の基盤は意外にもこうしたところにあることを思わせる歌集である。 二〇〇円

勉強をさせたが、学生にはどうだったらうか。

三年目からは到頭、英二さんのいった通り鴨外を教へたが、これで結構、講義になつたと思ふ。寝ころがって読むものと思つてゐた鴨外の文語は、もう古典的なむづかしさを現代の学生に対してはもつてゐるやうである。ともかくこれを四年つづけての上京であるから、私が研究の対象としてもさう可怪しいことではあるまい。

私はまづ勤め先の帰りに千駄木町の観潮楼のあとに行つて見た。小公園のやうになつた邸址の胸像に敬礼したのである。出がけに千束書房に寄つて類さんと鴨外先生の孫に当られるそのお嬢ちゃんを見て、文芸春秋を一冊買った。

第二は明治十七年、ドイツへの留学旅行に同行した化学の丹波敬三博士の後嗣がわが学友鴻一郎君である。戦争末期に電波探知器を作つてゐたが、その後どうしてゐるか、きいてまはるが誰も知らない。そのうち電話帳をはぐつて見ると、有る／＼、ちゃんともとの

白居易詩抄 (十三)

森 亮

海潮

午前の潮が漸く退いたかと思ふと午後の潮が

つゝのつてくる。

ひと月にこの干満がめぐりめぐつて六十回。

朝光さし夕べは暮れて光陰は歲月と積もるが杭州でわたしがこんなな駆け足で老いて行くのは

昼に夜にこの岸に寄せる海潮のおせつかいのためだ。

劉禹錫と登った樓霊塔

この半月といふものゆるゆると揚州を遊びま

してゐると、とき／＼、なんでもないときに、むか／＼と腹が立ってきた。生きてゆく権利さえ奪われようとしている自分の立場を感じて、追いつめられたけどももの怒りや恐怖が、こみあげてくるのだ。便所かどんでいるとき、夜道をひとり歩いているときなど、ぼくはとつぜん、われを忘れて、げんこつを振りまわしたり、大声で叫びだしたりしていた。

所にあるのだ。そこで訪ねると留守。二度目には会へて、お祖父さんの渡欧日記あるか、ときくと、無い、といふ。

第三は同じくドイツへ同行した田中正平の遺族がしてゐる。この人はのち純正調ピアノを作つて戦争のあとまで生きたが、ドイツへは、

は、

楼と呼ばれ塔と呼ばれる高層建築を片端から君と登つた。

驚いたぢやないか、めいめいの足腰に筋力がまだまだ残つてゐるのには。

そして今日は到頭のぼつてしまった、樓霊塔の九階のうへまで。

註「海潮」の原詩は潮(三の五二八)で、白居易五十二、三才の作。当時の彼の官職は杭州刺史。五十三才の五月には太子左庶子に任ぜられ東都洛陽で勤務し新たに原歌まで買つたが、翌年の春に蘇州刺史に転じた。この蘇州では眼をわづらつたりして休の調子がよくなかつたので一年余りで辞職し、五十五才の詩人は洛陽に帰つた。この旅行で彼は同じく南方から長安に帰る劉禹錫と落ち合つて揚州を相携へて見物してゐる。二番目の樓霊塔に登るの詩はその時のもので、原詩は与夢得同登樓霊塔(三の七二二)。因みに劉は白居易と同年の生れであつた。

から帰つてからも鴨外先生と交際してゐる。私の祖父といふ位になるので、昭和十五年かに親類の葬式で会つて、遊びに来いといはれたのを、行かずにしまつたのである。遺族はわかつた。しかし、私はここで購置した。未亡人は鎌倉にゐて、会へば鴨外先生の面影を知つてゐるかぎり話さうとするだらう。しかし私にそれが旨くゆくだらうか。自信がない。私の父は古い文学青年である。金尾文淵堂と親友で、鉄幹、晶子夫妻ともたび／＼会つてゐる。しかし私はこの父から何一つきき出せないのだ。第四師団凱旋の歌といふ軍歌があつて、私は子供の頃うたつたが、これが鴨外さんに直してもらつたのだ、とだけ聞いたおぼえがあるが、き／＼直せばちがふかもしれない。この父をあきらめて、小林政治翁といふ鉄幹夫妻の親友に紹介してもらひ、訪ねたら留守だつたのを、やれ／＼と安堵した私はその後まもなく翁がなくなつたのをきいた時だけは、ちよつと後悔した。しかし会へたら何を聞き出せただらう。やっぱり野田宇太郎さんに行つてもらうんだ。日記でもあればともかく、と私は文献学に偏し、実地調査の出来ない自分にかういひきかせてゐる。これが東京へ来て一年で、やつと落着いた私の思案である。

「こらんさい、こです」

その声が合図のやうにねむの花影から一斉に蝶の群れが舞ひ立った。その為めに一瞬、辺りが翳った程だった。壮麗と云ふより無気味だった。バサバサと紙をふるふやうな羽音が耳元でしたと思ふと、複写用のカーボン紙程の大きさのからすあげはが悠々と肩すれすれに飛んで行った。

「さあ、眺めてないでお取りになつたらどうなの」と、少女に声をかけられるまで私は採集網を持ってゐた事さへ忘れてゐた。

「ねえ、こゝはあげはの森って云ふのよ」

そう云へば飛んでゐる蝶は殆どあげはばかりだった。黒あげは、黄あげは、青すじあげは、鴉あげは、それにじやこうの匂ひのすると云ふじやこうあげはの群舞は動く花びらの妖精のやうに華やかで又妖しかった。然し、私とて何時までこの情景に見惚れてゐるわけにもいかなかった。本来の採集欲が猛然と湧いてきた。私は毒瓶や三角紙、それに弁当などを少女にあづけて身軽になると、蝶の群れの中へ飛び込んでいった。長い寒冷紗の網を

とまってしまった。もがいても、もがいても呼吸が出来ない、仰いだ私の目に太陽が魔物のやうにぎらぎら光って落ちかゝつた。目から無数の星が飛び散つたと思ふと、青空が急に暗くなった。猛烈な偏頭痛が襲つてきた。

「あゝ、俺はこゝで死ぬんだな」

うつすらしい意識の向ふで母や父の顔が明滅した。暗い淵に私の体は引づりこまれるやうであった。どの位たったのだらう、私ははっきりと目を開けた。前と同じ青いチカチカする空が映つた。かすかに呼吸は回復してゐたが、手足は大地に縛りつけられたやうに動かなかった。うつすらと立のぼる地の匂ひが母のやうに懐しかった。あゝ、俺は生きてゐるのだな、と私ははっきり目をあけた。その時私の視界にまるで飛行機から撒かれた無数のビラのやうなものが蔽ひかぶさつてきた。何かと考へるひまもなく緑色に光る複眼が四方から私の顔に刺刺して来た。鱗粉が塵のやうにふりかゝつてきた。蝶達は私の顔と云はず手と云はず翅をバタバタさせて這ひ廻つた。閉じた眼瞼の上にあの虫のくびれそのまゝの腹がはいづり廻り、その間に又割りこまうとする蝶群の小さな足のうごめきや、長い管になつた彼等の口の触覚はたまらなかつた。そいつらは口や鼻の中にまで入りこんで来る。

残華抄

服部 三樹子

池の汀に美しき老婦人の長く佇めるに逢ひて

水蓮の花の美事さ過ぎし日もけふのいのちもはかなきがごと

うつし身の身の程しらず水渉り抛りて居らまし水蓮の花

わが捨てし春は弊履の価値もなし花と水とのひらく眺めに

星空の遙けきに似て汀なるわが身とどかぬ水蓮の花

なにゝむきあくがれいづる魂ならむもの

思ふにもあらぬ我が日を

こがれいでし魂とまがひし蜚より華やかにして出でばいでかし

下がへのつまを結はむ力さへうつけて苦しうつし身の老いは

星空の星のあまたに祈りたる願ひは降りて水蓮の花

水の上に花の薙をのべしごとひろらかにして水に咲く花

問ふ人のいまはなき日と老いし身にこゝろ置き処の水蓮の花

かけしわが夢の夜橋はと絶えしを水の広さに水蓮の咲く

生きの身の老いの奢りは水の上にひと色ならぬ水蓮の花

私はそれで声も出なければ手足も動かさない。それはきつと今思へば砂漠の獣の死骸にむらがる禿鷹さながらの状況だったのだらう

私にとりついた蝶達の無気味な触覚に私は長く堪へられなかった。全身鳥肌が立ち、脇の下には油汗がにじんだ。手足の自由の奪はれた私はこの恐ろしい刑罰の中で必死になって叫んでゐた。かんべんしてくれ！ もうお前

達を殺したり苦しめたりしないから、と。し

げはが現はれたのを見つけた私は全く狂喜した。彼女は蝶群の女王のやうに黒あげはの侍臣達に囲まれてねむの花の下に咲く百合の花に戯れてゐた。私はこのバレエ劇の平和な観客であればよかつたと後悔する。しかし、私は暗殺者の暗い本能に駆られてゐた。黒衣裳の侍臣達は忽ち私の正体を見破つたのであらう、一早く身を隠して飛び去り、あわてゝ振つた網の中には逃げ遅れた黒あげはが一つ鱗粉を撒き散らしてもがいてゐるだけだった。肝腎の女王は私の目の前をあざ笑ふやうにゆうゆうと飛んでいった。私は再び網を持ち直してその姿に向つて突進した。しかしみごとくに失敗だった。網の口すれすれに蝶は逃れた。黒あげはは最早や四散してしまひ、女王の青すじあげはだけが今、水色と黒の染め分けのハンカチのやうにジグザグの飛翔で網の届かぬ高さに飛び去らうとしてゐた。私の目にはもはやその蝶の姿しななかつた。私は夢中になって追ひかけた。いらくさの刺が腕や足を刺すのもかまはず一杯腕をのびして私は最後の一振を試みた。と、その時、私の足元の土がづつと崩れ落ちた。アツと云ふ間に私は足を踏みはずしてその小さな崖からのび切つた姿勢のまま、丁度ダイビングのやうな姿勢で落ちた。思ひ切り胸を打つた私は息が

かしそれは声にはならなかつた。ギロギロした複眼は尚も私を目掛けて押寄せた。私は再び失神してしまつた。

どれ程、時間が経つたのだらう。恐る恐る開けた私の目に映つたのは少女の白いうなじだった。胸が染になり、涼しい風が頬にあつた。その時少女の細い声が私を呼んだ。

「あゝ、気がついたのね、よかつたわ、あなたがなか／＼帰へつてこないから探しに行つたの、崖の下に棒切れみたいにくろがつてゐたのよ、全然、息しないの、私、やつこのことであんたをかついでこの川のそばまで来たんだわ、生き返へつて本当によかつたわ」

生毛の生えた少女の顔が明るくほゝゑんだ。私はやつと頭を上げると左右を見廻した。蝶の姿は何処にもなかつた。せゝらぎの音だけだった。私の下で砂がさら／＼と崩れた。対岸には名の知らぬ赤い花が咲き乱れてゐた。

「あゝ、こわかつた、俺は夢を見てゐたのかしら」しかし、私の脇の下には冷たい汗がじつとりと恐怖の名残りをとどめてゐたし、手足には液にさ／＼れた傷痕が残つてゐた。シヤツは胸の所がひらかれて水で濡れてゐた額には少女の濡れたハンカチが置かれてゐた。水色のハンカチ、私は再びあの蝶の女王を思

ひ出して身慄ひした。少女は私が起き上らうとすると、急に身を投げかけてはげしく啜り泣きながら云った。

「ゆるしてね、私がこんな所へ案内したのが悪かったのよ、もうすこし、こうしてじっとしてみて！ おねがひ」

少女は私のほだけた胸に頬をつけ強く私を抱きしめた。しかし、私にはそれに返へすだけの力がなかった。私の手ははげしく起伏してある少女の背に弱々しく置かれた。落ちた時に打った胸が呼吸の度にいたんだ。

「あ、蝶の恐ろしい復讐なんだ、俺がむやみと蝶を取って殺したからだ」

私は家に帰へると蝶の標本を全部取出して庭の片隅に埋めた。苦心して集めたものばかりだったが、蝶の死骸は見るのもいやだった。そのうち、私はスポーツや遊戯に興ずる平凡な少年の一人になってゐた。その後店先であの少女に会った。あげはの森の事を探ねてみたが勿論知らなかった。そして例の低い含み笑ひを立てながらこう云った。

「きつと夢を見たんだわ、白昼夢って云ふのよ、それとも余り蝶を苛めたからとりつかれたのかしら、おかしなひとね、あたしと今晚、お祭りに行かない？」

私はこの少女とお祭りに行ってもよいと考へ始めてゐた。(終り)

僕の文学時評

林 富士馬

前に服部三樹子氏の歌集「ねむの花」に接した驚ろきを書いた。その時、この歌集のことに触れて高知の吉村正氏から、をち方に離りある友をおもふ時かややく珠をおもひこそすれ、寂しさにおのおの耐へて在り経つゝいつか終りとならむとすらむ、といふおハガキを頂いた。若山牧水の歌集にあるのださうである。そこで若山牧水の歌集を久し振りに繙いた。(そして、その時の感慨を、果樹園宛ての原稿の心算で書いたわけであるが、少し長くなって、結局送れなかった)

服部三樹子氏、高知の吉村淑甫、正、御夫婦とも未見の方々である。(その後、服部氏にはおめにかゝれて、うれしかった)

私の持つてゐる岩波文庫の牧水歌集には、前記の歌は採ってなかったが、「山桜の歌」のなかに、友をおもふ歌として、

いま来よと言ひ告げやらば度し難き事をし
て来む友をしぞおもふ

逢ひてたゞ微笑みかはしうなづかば足りむ

逢たり逢はざらめやも

あやふかるいのちを持ちておのおのも生きこらへたり逢はざらめやも

といふやうなのが選んであった。

私は毎月、このような文章を綴る。想ひが溢れて、とにかく、机の前に坐つて、文章を綴る時が一番楽しい。生活のための勇氣も、闘争心も湧く。が、発表しなければならぬ理由は少しもない。発表しないに越したことはないのだ。たゞ文章を書く時は、既に日記をつける時さへ、一応読者を意識しなければならぬ習慣になつてゐるだけである。(その癖ひととの対談では、大抵、ひとりごとを云つてゐるのに気付く)

氣楽に自分の書いたものを発表するところと云へば、自分達の同人雜誌しかありはしない。そして、いま、私の関係してゐる(とにかく氣楽に同人にしてくれたところは)「果樹園」しかありはしない。

同人雜誌の仲間には、特別なものだ。私自身に就て云へば、長く、且つ波瀾と変化に富んだ学校生活以外には、同人雜誌の交友關係が私の人生経歴のすべてとして、残つてゐるだけである。(そして、前回は、そのことに関して、矢張り五枚の原稿を果樹園宛てに書いたが、何だか殊更にあと味の悪い文章になつ

果樹園

山根 忠雄

毎朝 電車で

果樹園のそばを通過する

桃梨柿葡萄などの樹々は

それぞれいちめん

同じやうな高さに剪定され

たつぷりと肥料がほどこされ

幹には白く防虫剤がぬられてゐた

早春の

美しい太陽光線の下に

着々と展開された万端の準備!

自然と人工に愛護されて

果樹園は

いまやあたらしい秋の結実に向つて

大きく羽ばたかんとする

その歌声が 今朝

朝日に輝やく雪をかぶつた遠くの連山に

滲刺と反響する――

たので、送ることをあきらめた。自分の性癖につくづく倦きたが、併しまあ、死ぬまでは生きていたために、こんな文章が毎月つゞけられるわけである)

君子の交は淡々如水とある。さういう風に行かないので困る。ところで「果樹園」の交際は、まことに淡々如水のやうである。東京では同人の集りもないやうである。これは大変私には有り難くもあるが、同時に大層物足りなくもある。

ときたま、田中克己氏が立教大学に出講されるとき、氣粉れにお立寄下さる。まるで私には詩神の訪れの如くである。私は自分の興奮する魂をしづめるために、すぐに、一本のビールを飲みたがるが、田中氏はご迷惑さうである。が、私の詩魂は昂揚し、生活の愚痴とひとの悪口と、文壇の(私には限りなく面白く興味の尽きない)噂話を申し述べる。さうすると、田中氏は、ポケットから、まるで手品師のように、奇妙な素晴らしい書物を取り出される。さういふことを何度か繰り返した。宝玉のやうに――さうだ、白鳥都郎遺稿集、詩集「しりうす」(昭和三十三年十二月五日発行、発行所ドン・ボスコ社、百円)も、まさに、さういふ一冊であった。

私は前に、この近代に、服部三樹子氏の新

鮮な歌集に接し得たことを、奇蹟に出逢つたやうだ、と書いたが、そして勇氣を感じたが詩集「しりうす」も、まさに又、さういふ一冊であった。詩人がひよいと蹶んで、道傍の小石を拾ひ、手渡されるのを眺めてみると、それは碧玉になつてゐるのだ。

嘗て、佐藤春夫先生が、不意に指輪を抜きとつて、この指輪の寶石の種類を知つてゐるか、と示されたことがある。それは先生の故郷である紀州の浜辺の石であるべき筈であつた。又、その時、私は若く、そして完全に詩人であつた筈であるから、それを知つてゐた。

あゝ、もう一度、私は詩人になりたい。(牛計の愚痴と、ひとの悪口と、限らない、そして知りもしない文壇噂話のなかに)

よしやわれ

まなこ首ひ

手はおとろへ

足折るゝとも

五休くちて

声だにうせゆくとも

われにはたゞ一つ

久遠の愛あり。

田中克己 李白

李白の自由奔放、磊落の境地を円熟した筆
・鑑賞の正確さによって伝える。詩人である著者
が多年の研究を大成した名著。八編賞世界名詩
選▽新訳 三〇〇円

筑摩書房

わが生のつきゆくきはみ
わが心燃え、心かぎり
われはたゞ真理に歩まむ。

(詩集、しりうす、より)

もう制限の紙数になって了った。改めて、
詩集、しりうす、に就ては書く時もあるであ
らうか。

夏になった。狭い四畳半の部屋に臥ころが
つてみると、耳もとで、うるさく蝨の羽音が
して睡り難い。そして、うとうととすると、
村の入口の神社の境内から、蟬しぐれが聞え
て来る。が眼がさめて気付くと、この二年、
遂に蟬も聞くことなく、夏を送ったことにな
る。日比谷公園に行くと聞えるのださうであ
る。が、蝨の方は、この大都会の片隅に、ま
すます五月蝨い。が、蝨叩きを手に持って、
それさへ私にはなつかしいものになりつゝあ
るやうだ。

編集後記

「果樹園」が初めて世評の対象になったのは第五号、つ
まり昭和三十一年「中央公論」八月特大号の誌上であつ
た。その「日本の地下水」で、担当の関根弘、武田清子、
簡見俊輔諸氏のうちの誰の意見か、それも共同の意見か
それはしらぬが、「果樹園」は戦前の「コギト」の伝統
を固守した血縁的な仲間である。その仲間意識の外なもの
でもないといふべきであらう。それから約二年、「中央公論」
「七月号」の同じ「日本の地下水」欄に、同じ担当で、「果
樹園」評が再び出た。今度は仲間意識ではやつつけられず
に、「後悔不感症」と云ふ光榮な仇名を賜り、世代的な敵
意を推しつけられた形である。僕等の仲間、福地、杉本
両君のやうな例外はあるが、そのほとんどは文学を志して
から十五年から二十数年になる古強者である。しかもなほ
れんれんと文学に妄執してゐるあたり、まさに「後悔不
感症」の嘲笑に値するかもしれない。
然し、いさゝか僕等はその後笑に当て外れの苦笑を禁じ
えない。つまり、三氏の云ふ後悔なもの、根底によこた
はつてゐるものは、あまりにも歴史的な文壇意識の外な
にもでもないと思はれるからである。僕等が文学をして
ゐるからである。従つて、当世風な流行や年齢は作品の真
価に無縁なものとして、一向に気にしてゐるのではない。
だから「断念の精神」と前置してゐるではないか、と
三氏は反論をするかもしれないが、僕等のモットーは「断念
の精神」ではなく、正確に言へば「断絶の精神」なのであ
る。凡そ文学史に变革を与へたほどの作品は、少くとも
前置した世代を断絶して、遠く伝統の中に血縁をさぐり、
己が血に再会して当世風ならぬ容貌と精神を持つた子を生
んでゐるからである。

今後二年して三氏はどんな仇名をくれるであらうか？
その日に僕等は後悔でなくなほけいけいとした希望をつな
いでゐる。

五月二十五日伊東静雄の信者である足立共子さんが久
し振りに来訪した。昭和女子短大の講師になつた由であ
る。同じ信者の同人杉本秀太郎君はこの春から京都女子
大に同じく講師をしてゐる。これらの信者の数へ子が成
入した日に伊東の文学史的な真価が公認のものとならう。
五月二十九日津田の上村肇氏から来信があつて、中河与
一氏夫妻とお嬢さんが、伊東の墓に詣でて下さつた由であ
る。伊東は氏が普編した「交雲世紀」に詩を発表してこ
ともあつたが、死後に於て、より深く結縁したと言ふべき
だらう。

五月三十日高知女子大の清水孝之氏が再び来阪した。東
京で開催される図書館会議の途路である。氏は寄贈した拙
誌を大学図書館に備付けて下さつてゐる由である。同じ意
図がある学校には喜んで寄贈するから、送料だけを負担ね
がへればお送りするから申出でいただきたい。(〇)

果樹園 第三十号 (毎月一日一回発行)
昭和三十三年七月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
発行人
京都市下京区壬生川通五冬下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第31号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
声をひそめて クロロフ
白居易詩抄 森亮
啞の隣人 福地邦樹

東京通信 田中克己
不治 池沢茂
緑蔭 山根忠雄
海と雷 浅野晃
方丈の記 服部三樹子
忍びいる者たち 堀ノ内 歴
編輯後記

書簡から見た

伊東静雄 (三十二)

小島根二郎

伊東は二月中旬百合子さんに珍らしく長い
書簡を書いてゐたが、翌三月中旬にそれこそ
幾年ぶりであらう、姫路の酒井家を訪れてゐ
る。

「ゆり子さん 昨夜はひさしぶりにお会い
出来、昔の通りに、ご親切にしていただ
いて大へんうれしくございました。もつと永
くおたかたかったですけれど、我儘出来ませ
んでした。その理め合せに、是非、ゆり子さ
んの方から大阪にお遊びにおいて下さい。
もしその内お嫁にでもゆかれたら、暢気に

お話など出来る機会がなくなると思ひます
から、是非奮発して、やつて来て下さい。

これは、おすゝめではなくてお願ひです。出
来るだけのおもてなしをします。内田(註・
伊東の従弟の内田健一氏。この春京大国文科)からも、
出ると半年位伊東の家に戻してゐた。)からも、
あなたによりしくと申してゐました。

二十五日以後はずつと暇です。三月中旬に
是非。お父さんさへお許しになりました
ら、とまる様にして来て下さい。私の家は
乞食の家の様に来たいたいですが、大阪の夜
の景色や気持は大へん特異な、いゝもので
すから。花子からも是非とおねがひしてゐ
ます。(駅まできつと出ますから、大概の
時間をおして下さい。私の家のところは
ひとりではあなたのやうな方は決して来れ
ないところですから)

それから、私はお内に傘を忘れたやうで
す。もしもありませんたら物置の隅にでも投
げ入れとて下さい。一二年の内にはまた
きつと、姫路に行ける機会があると思ひま
すから。 伊東静雄

ゆり子さん
(昭和三十年三月十八日大阪市西成区松原通二の十五)
(より姫路市五軒町六七番井ゆり子宛封書)

幾年かぶりで伊東が酒井家を訪問したの
は、詩人としてどうやら一家をなしたこと
を、恩師小太郎先生、婦美夫人にそれとなく
告げ、今まで幾度か抒情の対象にした百合子
さんに対して、感謝をする心づもりであつた
のだらう。

この月伊東は旺盛に四篇の作品——「曠野
の歌」「真昼の休息」「秋鶉は飛ばずに全路
を歩いて来る」「氷れる谷間」を完成してゐ
る。「曠野の歌」は「コギト」四月号に発表
された。この発想はジョヴァンニ・セガンチ
Iニの「帰郷」の画幅に得てゐることは、昭
和六年一月七日附百合子さん宛書簡の解説で
詳述したが、伊東は姫路の酒井家を訪れたこ
とによって、先覚の芸術家としての運命を改
めて覚悟したのであらう。

曠野の歌

前掲書略

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この「曠野の歌」と同じく『日本浪漫派』四月号に発表された「真昼の休息」もセガンチイーニの「昼休」に取材されてゐる。

真昼の休息

木柵の蔭に眠れる
牧人は深き休息……
太陽の追ふにまかせて
群畜らかの遠き泉に就きぬ
われもまたかくて坐れり
二番花之しく咲ける窓辺に
土の呼吸に徐々に後れつ
牧人はねむり覚まし
己が太陽とけものに出会ふ
約束の道へ去りぬ……
二番花之しく咲ける窓辺に
われはなほかくて坐れり

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

セガンチイーニの「昼休」は、午前の労働に疲れた農婦が、日蔭に長々と寝そべって午睡に耽つてゐる図柄である。傍らには身長ほどの長い鎌が投げだしてある。木柵の向ふは牧場である。燦々とした真夏の陽光に照らし

声をひそめて

ク ロ ロ フ

声をひそめてぼくはおまえに話しかける
くだける 月の気むづかしい年寄顔の後で
おまえはそれを聞くのだからか
すばらしく美しい大気の下で
夜明けになれば 朝は
ひれをふるわす赤い魚になるのだからか
おまえはうつくしい と
ぼくは緑のほうふうが生え上げた野でいう
おまえのはだはひんやりとかわいている と
ぼくは ぼくの住んでいるこの街の
屋並の間からいう
だされた其処には、羊群が動くともなく静かに動いてゐる。
伊東はこの「昼休」の画幅に見入りながら、農婦の夢に同化しつゝ「真昼の休息」を書いたのである。さう言へば四年前の百合子さん宛の書簡に、「セガンチイーニの画集は、女であるゆり子さんにみせたくあります。」とあった伊東は今度の訪問にセガンチイーニ画集を携行し、百合子さんの閲覧に供してゐたに相違ない。「曠野の歌」「真昼の休息」

おまえのまなざしはやさしくきりりとして
小鳥のようだと
ぼくはながれる風にいふ
おまえのうなじは―聞いているかい？ 空気で
できてゐる 青葉の網目からぬけてでる鳩
のようだと

おまえは顔をあげる それは
れんが壁の上に影となつてもう一度現れる
うつくしいおまえ おまえはうつくしい
ぼくの傍らでおまえのこめかみは水のように
ひえびえとしていた
声をひそめてぼくはおまえに話しかける
すると夜はソーダのように青く黒くくだけて
いく
(たかはし・しげおみ譯)

霧がためらつてゐるので
厨房のやうに温かいことが知れた
栗の燂林を宿にした夜は
反落葉にたまつた美しい露を
秧鶏はね酒にして呑んでしまふ

白居易詩抄 (十四)

森 亮

初 夏

夏来ればいぶせきわが家もまた楽しいかな。
陶潜の詩句はさすがに真実を語つてゐる。
くちのひらいた花穂に酒がこぼれ落ちる。
風が吹きすぎてゆく机で本が読まれてゐる。
近所の若い娘がみのつたばかりの木の実をく
すねに現れ、
家に使はれてゐる小者は手綱で魚をすくふ。
皇甫渥君にお尋ねするが、
君のところの池のほとりの情況も斯くの如く
であらうか。

★

波のとほい白つばい湖辺で
そ処がいかにもアット・ホームな雁と
道づれになるのを秧鶏は好かない
強ひるやうに哀れげな昔語は
ちぐはぐな合櫃できくのは骨折れるので

小 宴

―盧判官に―

酒を酌みつつ、花咲く枝を手を取れば
花びらは幾つも音なくこぼれ落ちる。
花の匂ひと酒の味はひがととも春に似つかは
しい。
けふのは江南の宴とは違ふなどと云つて下さ
るな。
曾てあの虚白亭で貴方をお招きしたのもこの
私だから。

註 「初夏」の原詩は寄皇甫七(三の六〇七)で、その
皇甫渥は洛陽で親しくしてゐた友人である。白居易
の五十四才の作かと思ふが、彼は前年の夏夏からそ
の年の三月まで洛陽で暮らし、同月二十九日に蘇州
に向けて出発した。それゆゑ陶淵明の詩句では「五
夏」とある初夏即ち陰曆の四月には居易は洛陽にゐ
なかつたはずであるから、三月中旬に早手廻しにこ
な詩を作つたものか。「小宴」の原詩は座上贈盧判官
(三の七七九)で、五十六、七才の作。その頃詩人
は長安に在つて、秘書監などの閑職に就いてゐた。
盧判官は彼が江南、杭州の刺史だつた時の下僚。

おまえは顔をあげる それは
れんが壁の上に影となつてもう一度現れる
うつくしいおまえ おまえはうつくしい
ぼくの傍らでおまえのこめかみは水のように
ひえびえとしていた
声をひそめてぼくはおまえに話しかける
すると夜はソーダのように青く黒くくだけて
いく
(たかはし・しげおみ譯)

秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る
秋鷄のゆく道の上に
匂ひのいい朝風は要らない
リース雲もいらぬ
まもなく秋鷄は僕の庭にくるだらう
そして この伝記作者を残して
来るときのやうに去るだらう
第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この詩の原典もまた伊東書簡を五年廻らね
ばならない。つまり、昭和四年十二月十一日
附宮本新治氏宛書簡に現れるチエホフ書簡集
がそれである。その一八八八年三月六日附に
モスコイのチエホフからA・N・プレスチエ
イエフに宛てられた書簡に、「飛ばないで
全路を歩いて来る秋鷄」が現れるのである。

「恐ろしく寒い。然し憐れな小鳥たちは既に
ロシアに向つて飛んで来る！ 小鳥たちは
は郷愁と祖国の愛に駆られて来るのです。
幾百万の小鳥が故郷を恋ひ慕うて生贄とな

り、幾らかの小鳥が途中で凍死し、どんな
苦悶を彼等が三月及び四月上旬に故郷に帰
着するために堪へ忍ぶかを詩人が知つた
ら、彼等は疾くその讃歌を詠つたでせう
に！……飛ばないで全路を歩いて来る秋鷄
や、凍死を免れるために人間に身を委ねる
雁の身になつて御覧なさい……何とこの世
の生活といふものは辛いものでせう！」
(改造文庫・内山實次氏
訳「チエホフ書簡集」)

このチエホフの秋鷄と雁を、伊東は彼流に

起用してあるわけである。飛ばないで全行程をこつこつ歩いて帰らねばならぬ秧鶏は、飛翔力を持ちながら凍死の恐怖から湖辺で人間の手飼ひになつてゐた雁との道づれは拒否するのである。不甲斐なく人間の手飼ひになつたいきさつを弁明する昔語りなんぞに、合組をうつのは骨が折れるからだと言ふ。

この秧鶏に譬喩されてゐるのは伊東の詩精神なのだ。雁が象徴してゐるのは翻譯者流であらう。伊東は安易な翻譯者の安直な道を拒否してゐるのである。伊東は末尾で伝記作者であることを自認してゐるが、その事實は、昭和五年九月二十四日附百合子さん宛書簡に出て来る。「私も生涯の仕事に、たれかの伝記をかきたく近頃しきり思ふので、あのメリケのことは、うらやましきかぎり。」然し、伊東はつひに伝記作者とはならず、伝記作者のモデルである秧鶏になつたのである。

「氷れる谷間」は伊東が営利雑誌として初めて書いた「文学界」の四月号に発表された。

氷れる谷間

おのれ身悶え手を揚げて
速い海波の威すこと！

階段を降りたのである。際しなにいやでも博物館正面の、仁徳天皇時代は海であつた南大阪一帯が、煤煙と春霞にかすんで眺められる。その時の印象で、伊東は地下食堂を「氷れる谷間」と感じたのであらう。三月のことだから、ストーブを取除かれた部屋はどこかに、逃げ遅れた冬が蹠つてゐたらう。そのくせ、まだ尾鰭の小さい金魚なんぞ、もう裝飾として水槽に泳いでゐたらう。これらの印象が、「呂」時代の作である「淡水の中で」(昭和八年「呂」と合体して出来た作品であらう。)

ちなみに、伊東が「コギト」から「日本浪漫派」「四季」「文学界」へと歌の翼を伸ばしたこの四月に、伊東が詩人として発足した「呂」は終刊したのである。伊東は「呂」の終刊から「コギト」に移つたとする富士正晴氏の説は誤謬である。

四月中旬伊東は久しぶりに次のやうな書簡を頼原先生に送つてゐる。

「お葉書有難うございました。
毎々ながら、お氣、配つて、いただきました。で、この上なく、うれしく、ございました。原稿なれないことですので、到底ろくなものは出来ないことだらうと存じます。」

樹上の鳥は撃ちころされ
神秘めく
きりない歌をなほも紡ぐ
憂愁に気位高く 氷り易く
一瞬に氷る谷間
脆い夏は響き去り……
にほひを途中にまごつかす
紅い花花は
(かくも気儘に！)
幽暗の底の編目よ
わが 小児の趾に

啞の隣人

福地 邦樹

隣の六畳の部屋に
啞の若者が二人越して来た
筆談によると一人は二十五才の行商人
も一人は二十七才の聾啞学校の先生
移つたばかりなのでお客さんが多く
それもみんな啞ばかりで
時には五六人も来ていて
夏なので時々見えるのだが
手まねばかりで
忙がしそうに応答している

しかしそんな情景が見えない限りは
何と静かな団欒だらう
私はかつて想像も出来なかつた事だが
そんな彼らが四五時間も
無言で楽しげにしゃべり続けたのである
「おおい お隣さん
もちょっとにぎやかに出来んのかあい」
耳の聞こえない彼らは
肅然として答えない
「おおい ばかやろう」
時々 奇妙に押しこころした
笑い声らしいものが漏れてくるだけで
私は彼らの心の内容が
知りたくてしようがない

主観的な表白、ばかりやつてゐますと、
実証的な文章がもっともかけないやうになつてこまります。これから、そつちも、勉強しなくては存じます。近い内に小詩集を出すことになりましたので、先生や昔の友人によんで貰ふことをたのしみにしてをります。

近頃、おからだはお達者でせうか。皆様ご無事ですか。京都にも時々は出たくございます。

この歩行は心地よし
逃げ後れつつ逆しまに
氷りし魚のうす青い
きんきんとした刺は
痛し！撃ろうつくし！

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

全く理解を拒絶する詩である。営利雑誌と云ふ大概の理解を要求される雑誌には、伊東はこの月に出来た作品である「曠野の歌」か、「真昼の休息」か、それとも註釈付きで「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」を選ぶべきであつたかもしれない。或ひは伊東は、わざとむづかしい作品を送つて、営利雑誌の編輯者をためしたのかもしれない。

私はこの「氷れる谷間」を取材した場所を教へられた記憶がある。新世界を見下す丘に建つてゐる天王寺博物館の地下食堂である。天王寺駅からくれば、噴水や花壇のある例の広大な平地をよぎり、亜熱帯植物を培つてゐる温室を右に見て、高いポプラの立樹の下の武者門をくぐれば博物館である。建物は旧住友邸の庭園を脊に聳えてゐる。その突き当つた場所から階段で地下食堂に導かれる。この食堂は昔よく絵や歌などの金のかゝらぬ集會によく利用された。伊東は何かの機会での

お礼のみでございます。

十六日

伊東静雄

頼原退蔵先生

(昭和十年四月十六日大阪市西成区松原通二の十五
より京都市大將軍西町三六頼原退蔵宛封書)

これは京大国文学会発行の『国語・国文』に、頼原氏が詩人の眼から見た古典論の執筆依頼を伊東にした、その返事であらう。当時同誌の編輯に頼原氏と共にたずさはつてゐられた野間光辰氏に調査を頼はしたが、伊東は執筆をしなかつたらしいとの由である。「わがひとに与ふる哀歌」を上梓する決意をした伊東は、主観的な表白を急いだあまり、暇と余裕がなかつたのであらう。

この頃は伊東静雄に出会つたのである。東京のある製薬会社のアド・ライターを辞してぶらぶらしてゐた私は、大阪のある化粧品会社に職を得て下阪した。又、私は当時百田宗治氏の「椎の木」に拠つて誌を書きだしてゐたが、同誌が乾直恵氏と山村曾之助氏の二派に分裂し、「コギト」に接近した浪漫主義を信奉する山村氏と「椎の木」をやる心づもりもあつたからである。下阪に際して「コギト」の同人であつた兄太郎(筆名三浦常夫)から、下宿を探す時に助力を頼むがいい……

と、田中克己氏宛の紹介状を託された。が、私と一緒に仕事をする手筈になってゐた凶家と同道してゐたこと、田中氏の住む高師ヶ浜の見当が判らず、勤めに便利な阪海線は天神の森に、アパートを求めたのである。

一二日経ってからであった。勤めを了へて夕刻帰つてくると、アパート管理人から手渡されたのは一枚の名刺であった。伊東静雄：とある。まさしく「有明海の思ひ出」で私を感銘させたあの詩人である。名刺を裏返へすと、「すぐそこです。遊びにいらっしやい。」と走り書きしてあり、アパートの門前を南北に走つてゐる住吉街道を北に一町、うどん屋の横を西へ曲り、竹格子のある家と、略図まで描き添へてあつた。

それにしても、どうしてそんなに早く、伊東が私の住所を知つてゐるのか不思議であつた。が、考へてみると、私は住所が決定すると山村に速達をだしてゐたので、彼から伊東に連絡をしたのだな……と、判定がついた。私はそくそくと仕出し弁当を平らげると、名刺裏の案内図を頼りにアパートを出た。目標のうどんやから西に入ると、二階建て長屋の一軒に竹格子をみつけた。標札は「伊東」とある。竹格子の内の硝子戸には、奥座敷の黄色い燈が光を投げめて、夕食後らしい賑

やかな人影が右往左往し、詩東と想定される人声も聞えた。私は細格子の表戸の前にはばらく佇んで「有明海の思ひ出」の詩人の、幽艶な面影を想像した。なんだかギリシヤ型の幻想である。思ひ切つて細格子の表戸を引いて来訪を告げると、待つてゐましたとばかり黒い影が奥座敷から踊り出て来て、玄関の燈をひねつた。サ。どうぞ……。招じ入れられた二畳の玄関に坐り込んでから確かめた伊東の顔は、凡そ想像してゐた風貌を裏切つてゐた。七三に分けられてはゐるが、楯目を受けつけぬやうな剛毛。その下に、痩せてゐるので頬骨を突き上げた赭い顔がしなびてゐた。が狼のやうに焦点の鋭い茶褐色な眼と、分厚い大きな下唇とが、その貧素さを掩ふほどの闘志と不敵な決意を表明してゐた。にはかに年輪の判定を拒むやうな険しい顔相だつた。その顔相を柔らげてゐるのは、右眉の上と右鼻柱、左目の下に配置されてゐる小豆大のホクロであつた。笑ふとそのホクロは、無限なコクと意味で険しい顔相を救つてゐた。

話は「帰郷者」「有明海の思ひ出」の詩因である郷里諫早の話となり、郷里で一番古かつた料亭を営んでゐた家の座敷から、石燈籠や庭の立樹を通して眺めやつた、有明海の夕映美しさを語つて眼を細めた。竹格子の向のふ

山根 忠雄 著

詩集 岩に刻む

大山定一氏評「はくは君の内部でしづかに燃えてゐるもの、ゆつくり発芽して生長するものを感じてゐた。深い井戸は、くめばくむほど、つめたい水がわきてくるといふ。はくは君のつつましい素地が、すなはち、自然に、清らかな井戸の水のやうにあふれ出すのを祈りたい。」 一〇〇円 果樹園社刊

は道路と云ふ陋居に起居して、いよ／＼郷愁は燃えつゝのらしい顔をした。苦勞されたらしいが元氣さうなお母さんが、水仕事で白く硬化した手でお茶を運んでこられた。お母さんの影が消えると、郷里の家は没落したんだと、伊東は訊ねもしない私事まで解説した。花子夫人が挨拶に見えて消えた後、親父の残してくれた借金の返済に協力してもらふため、髯高女の地理の教師をしてゐる旨、附言した。襖の向ふに太り肉の適齡期の娘さんがちらちらした。商社勤めをしてゐる妹りつさんとのことだつた。

伊東は「コギト」六月号にこの頃作つたと思はれる、次の作品を発表した。

行つて お前のその憂愁の 深さのほどに

緑 蔭

山根 忠雄

大観西仙の「柳蔭図」に題す

青々としげつた楊柳の木蔭を

すずしく――

清流が走つてゐる

二人の高士が

その清流に囲まれた家の二階で

窓をあけ放つて

しめやかな閑談を交へてゐる

温顔に微笑を浮べながら

いつ果てるともわからない

楽しさうな二人の話の様子……

待ちくたびれて

楊柳の木の間もとにうづくまって眠る

童子と

鞍つきの黒い馬……その馬は木に繋がれてゐない

大いなる鶴夜のみ空に翔り

あるひはわが微睡む家の暗き屋根を

月光のなかに踏みとどろかすなり

わが去らしめしひとはさり……

四月のまつ青き麦は

はや後悔の糧にと収穫れられぬ

魔王死に絶えし森の辺

遙かなる合歓花を咲かす庭に

群るる童子らはうち囁して

わがひとのかなしき声をまねぶ……

(行つて お前のその憂愁の深さのほどに

明るくかし処を彩れ)と

竹格子の家に住む伊東とこの詩の壮麗なイメージとはなかなか私の内で打ち融けなかつた。牛車が糞を垂らしながら往還する住吉街道には、鶴のツの字の幻影もなかつた。アスファルトの路面に乾燥した糞が春塵となつて舞ひ上る空には、五位鷲の影が夕に遠く浮ぶぐらゐなものである。然し、伊東の住む露路から街道に出る突き当りには、素朴な地藏尊が地に踞つてゐて、夕には必ず線香が旺んに煙を立てゝゐたし、街道を一町も北へ行くと、

太閤休息所趾と石碑の立つた、かつて門扉を

開いたところを見たこともない、庵とも寺ともつかぬ、奇妙な建物もあつたのである。新開地の中に遺留するこれらの古めかしい何か、或ひは伊東の詩風に常識離れのした古典的な格式を感応せしめたのかも知れない。

然し、抒情の主体である歌を唱ふ童子等は、昔から伊東の変らぬ関心の一つだつた。年少の日安代さんに、八何処より集る児等ならむ夕影のこゝの小路に声あげ騒ぐ」と云ふ歌を書き送つたこともあつたし(昭和二年五月附参、乞食教師になりたての日、「その時」は、夕方になると、子供達が集つて来て、……)

……わいわい／＼云つてゐます。」と頼原先生に訴へてゐたことを思ひ出す。(昭和四年四月二日附参照)この子等の事情は、いつ、どこでも変ることがない。伊東は竹格子のすぐ向ふの露路にあがる子等の歓声を聞きながら、八わが去らしめしひと／＼百合子さんが、八憂愁の深さのほどに明るくかし処を彩れ」と云つた詩への激励の言葉を、回想したまでのことであらう。

東京通信

田中克己

小高根二郎さんの「伊東静雄」はもう三十回になる。創刊以来、愛読してゐるのは私ひとりではなからう。この完結がいまのところ小高根さんの悲願なのだと思ふ。私など何もお手伝ひ出来なくて、はなはだすまなく思ふ時が多い。さてこれはお手伝ひに類するになるかどうか、反対だと大変だが、先月号のところで、申し上げたいことが二つ見つかつた。

一つは伊東の「有明海の思ひ出」と私の代表作（小高根さんに拠る）「多島海」との関係である。なるほど発表は私が一月前であるがどうだらう。この年の日記を見ると、ちやうど二月の頃に私はヘルデルリンの「多島海」の訳をのせてゐる。「くろづるたちはまたもお前のもとへ帰って来るか。船たちはまたもお前の岸をめがけて航海して来るか。……」ではじまるヘルデルリンの詩の中でも最長の（？）、代表作である。私はこれをよんでゐながら（訳する前に）、なんて下手くそな詩を作つたことだらう。これが私の代表作だとすると、冷汗一斗ではすまないと思ふ。代表作といふのだけはお取り下げねがひたいと思ふ。

ふ。伊東がこの作を見て「猛然とした挑みを感じた」といふのも、小高根さんの想像であるが、そんなことはあるまい。下手だなあ、

海と雷

浅野 晃

くもつた海の眺めで
あたりのつめくさの花も
いくぶんすでに
すがれて来てゐる
帰って茶を喫もう
かとも思つたが
ひどい湿地帯だから
水がよくないのが
残念だ。でもし
沖の方から喚びかけて
水漬いた若者たちが
四五人も還つてきて
むずと抱きつかれたなら
こちらもびしょ濡れ
だらう。さうなればやはり
つれて帰つて来る
熱い茶を喫ませる
ほかはあるまい

不治

池沢 茂

第二は日本浪漫派に私が加へられなかった理由である。私は偶然、この七月に出る広島「バルカノン」にそのところを書いた。ごらんあつて、どっちが本当か、「日本浪漫派」の発起人のうち、いまも元気な神保、亀井、中谷、保田の諸氏のお答へをききたいと思ふ——そのうへで「バルカノン」の原稿を訂正しなければならぬかもしれないと思ふ。

以上だけで夏ほけの通信を勘弁してもらふこととする。今年の東京の夏は暑さよりも水飢饉で脅かされたので、神経のほそい私には一層こたへてゐるのである。

ぼくは自分の耳の遠いことはめつたに言わなかつた。むしろ、かくすように、かくすように、していた。中耳炎も、ながいあいだの慢性で、なんべんでも再発するけれど、だれにも相談せず、医者にも見せなかつた。ひとり

で、こっそりと、いゝかげんに、うみをふきとって、すましておいた。リパノールなどの薬を使って治療するのを知らなかつた子どものじぶんには、鼻紙などで、こよりをこしらえ、耳のなかへ突込んで、うみをふくだけだつた。母が結核をわずらつて死んだころ、小学校の三年のころから、ずっと、そうしてきた。

「くさいな！ また耳だれが出るんやないかな」

父か、あたらしい母が、あるいは、兄か姉か妹たちが、食事のさいなど、とき／＼そう言つて、顔をそむけたり、鼻をつまんだりする。ぼくはすると、まっかになつて、うなだれてしまふのだつた。なんともいえないほど、はずかしい気がするのだ。非常な悪事をふいにあばかれたみたいに、うろたえ、おびえるのだ。

もっと以前の、母が生きていたおさないころには、ぼくもなんべんか医者に連れてゆかれたのおぼえてゐる。しかし、そのころの医学では、どうしても根治できなかったのだらう。やがて母が病氣になり、家のなかに不幸がかさなつて、家計も苦しくなつてくると、ぼくまでが医者にかようわけには、いかなくなつたにちがいない。そして、そのこと

★

脚速に更けてゆく夜
の中にすべてがある
と考へるのは
つつましい哲学だ
視覚が捉へてゐるのは
掛蒲団に描いてある
秋の七草 それが
屏風を倒したやうで
月は落ちた 汐はなほ
もり上がる

雷鳴は撃つであらう
撃ちはずであらう
それに値ひするもの
であらうとする私
の上にそれを
下らんことを。

は、ぼく自身が、子どもごころにも、いちばんよく知らされていた。耳が遠いために困つても、うみが流れだしたり、がん／＼耳鳴り

がしたりしても、よけいな費用を使わせまい、いやな顔をされまい、として、ぼくはだれにも言わなかつた。

「ほうつておいたら、だん／＼わるくなり、しまいには脳をおかされて、死んでしまふこともある」

いつか医者が父にそう言つていたのでおぼえていたが、それでも、ぼくはだまつていた。言つたところで、聞いてもらえないことを知つていたからだ。たとえ聞いてもらえて、医者にかゝつたところで、やっぱりむだなこと、もぼくははやくから知つていた。医者へゆくところでも、きつと、まんなかに穴のあいた反射鏡をひたひたにかけ、漏斗状の小さな器具をぼくの耳にさしこんで、なかをのぞきこむ。それから、綿棒のさきに脱脂綿をまきつけ、オキシフルにひたして、耳のなかへいれ、ぐる／＼まわす。すると、じゃあど、いきおいよく、あわだつ。それをぬぐいとつて、そのあとへ、リパノール液にひたした小さなガーゼをいれておく。どこの医者へいっても、いつも、おなじ処置で、正味の時間は、二分か三分、せい／＼四、五分だつた。そして、まもなく再発した。まもなくでなければ、半年か一年のうちに、また、うみが流れだした。ときには手術の話が出たけれど、手術しても、

聴力が回復するかどうか、医者自身にも、自信はないらしかつた。「片方だけだといふんだが、両方とも慢性になっているので……」と、はじめに手術をすゝめた医者のほうが、だん／＼あいまいな態度になり、ことばをにごしてしまふのだった。

しかし妻は、ぼくの体については、医者にたいして、妙な信頼をいだいているらしかつた。そしてぼくも、耳以外についてなら、ながいあいだの医者にたいする不信が、はずかしく、ばか／＼しくなるくらいなのだ。

ぼくは中耳炎のほかに、おなじほど長年のあいだ、痔をわずらっていた。もう小学生のころから、便所へゆくたびに脱肛するのだ。それでも、耳のために医者にすっかり失望していたぼくは、やはり、だまっていた。むだな費用をつかわせまい、よけいな心配はかけまい、とする気持からだ。それに、耳のほか

方丈の記

服部三樹子

朝さめてとりとめもなき夢みしと思ひ出
しつゝ起きも上らず

掃き溜むるちりに幾すち髪まざりまさし
く独り住める方丈

朝の間の清しきうちはずだれ巻き白き飯
はむ祈りごころに

時折に訪ひ来る人を待ち侘びて美しき菓
子も我が蔵ひおく

風いでぬ我が方丈は窓ひろく梧桐の立つ
西からの風

ばらの花見下す庭にくれなるをながく
保つ季も過ぎたり

移り日裸形なりける一木のおどろと茂
る窓のいち／＼

きら／＼と耀く夢を見て覚めぬ昼方丈は
光る海原

ガスタンク二つ並ぶが薄れゆき遠のくこ
とく夕べ終りぬ

真赤なるすもゝを購ひて独り食す感傷な
らぬ今日の食慾

風さへも触れぬこゝろのたまゆらを歌と
なしつゝ独り住みつ

訪ひゆきし人はやさしき翁にて夕空の歌
書きてたまへり

独り居のねざめごころに添ひて降る雨は
原始の音楽ならし

にも悪いところがあるのを打ちあけるのが、なせか、はずかしくてならなかつた。母が死んだあと、兄や姉など、つき／＼と結核にかゝってゆくなかで、ぼくだけはめつたに病気をしない丈夫な子だと、ぼくはしきりに思われたがつていた。そのうちに、中学生から、高校生、大学生になると、便所へゆくたびに脱肛するのが、ますます大きくなり、引込むまでの時間も、ながびきがちになりはじめた。ときには噴水みたいに血がほとばしって、失神しそうになったりする。いつまでも引込まないので、両足をひらき、しりを突きだして、がにまたみたいに、歩かねばならなかつたりする。それでも、脱脂綿にメンソレータムなどつけて、患部にあてておくと、そのうちに、出血がとまり、元どおりに引込んでしまふときがくる。そうして、ぼくは、なんべんとなく繰返し、だん／＼悪化させてゆきながら、い／＼かげんに自分で治療しておくだけで、やはり、だれにも言わず、医者にも見せなかつた。たま／＼患部にあてている脱脂綿が知らぬまに落ちて、母などから聞いたゞされたりますと、顔をあかくしながら「ちよっと、痔のけがあるもんやから……」と、なんでもなさそうに言うだけだつた。ところが、戦時中に兵隊にとられ、戦後に復員すると、ときど

忍びいる者たち

堀ノ内 歴

草地で七月の宵
ひと処広く 草の刈りとつたばしよが
仄明かりに なにやら小さく動く
訝かしく 身をかゞめると
いる居る たしかにこれはあの秋風に
大柄で出はじめの精霊ぼつたの
や／＼と一種ほどのものらだ
幾ついても とれそうなそのからだ
緑色と枯草色と その保護色はよろしく
あのひよろ長くとり澄ました恰好も
長すぎの後肢も 一種の中に
既に充分備わっている面白さ
手を出したら 巧みに跳び移るのを
かき分けた草根の下に おゝまた
他にもいた
豆粒より小さな蟋蟀たち
憶病な卵黄色の蝗の仔たち
彼等はどうやら勢一杯に

虫であるうとしているが

気付かれぬ隅つこの虫の世界が

私の脳裏で揺がりはじめ

わが七月の宵の刻をば感わせる。

一九五八、七、三

き、どうにも、こうにも、秘密にしておけなくなつた。あまりに痛みがはげしくて、あるくことはもちろん、じつとすわっていることも、出来なくなつたからだ。ぼくもそんなときは、まったくの病人になつて、二階の自分のへやで、寝床のなかにうずくまり、ひそかに、うめき声をたてた。ところが、そうなつても、父も、母も、医者へゆけとは言わなかつた。母は実母でなかつたし、父は母の言いなりだつた。そうでなくても、最初の母をはじめ、ふたりの姉と兄の、四人もの家族が、つき／＼と、ながいあいだ結核をわずらい、結局死んでいたので、父としては、ぼく以上で徹底して、医者を信用してはなかつた。というよりも、ひとの病気をもとに金をしほりあげる鬼として、むしろ、医者をうらんでいた。「病氣になつたら、なおるものは自然になおる。なおらんものは、どうしたつて、なおらん」というのが父の意見なのだ。そして、ぼくは、健康保険もない小さな個人経営の出版社につとめ、月給もわずらなかつたので、臨時に多額の費用がかかることは、自分からは、強くは言えなかつた。

そんなぼくを救ってくれたのは義父だつた。義父はぼくを、知りあひの医者がいる神戸の県立病院へ連れてゆき、雑居の大べやで

なく、個室に入院させた。妻は付添いになつて、そのへやのソファのうえで、寝泊りをした。そうして、十日ほどで退院すると、何十年かにわたつたぼくの痔も、すっかりなおつた。しまりがよくないので、とき／＼下着がよごれるだけで、そのご十年ほどのあいだ、脱肛など一度もおこらない。じつと腰かけている時間がながくても、痛みなど全然おぼえない。戦時中に腰や脚に負傷したせいか、復員後、腰から脚にかけて、とき／＼はげしい神経痛がおこるようになったのも、医者のおかげで、やはり、なおつた。神戸の妻の家へ来てからだが、ちかくの病院で注射をつゞけていられるうちに、ある日、とつぜん、腰のあたりの神経の急所に針がさ／＼つたと思つたら、足のさきまでひゞいていた神経痛が、うそみたいに消えた。その冬はそれでも、にぶい痛みが漠然とひろがつていたが、その後は、まだ一度もおこらない。まいとし、冬はもちろぬ、夏の暑いさかりにでも、たび／＼神経痛

服部三樹子著 果樹園社刊

歌集ねむの花

薦詞・保田与重郎 後記・小高根二郎
(朝日新聞社評) こうした作品には読者は無量の
身構えをする要はない。文学の伝統の上に立つ落着
きと安心が作品を築き上げる。変遷する歌壇の作風
にもかわらず短歌の基盤は意外にもこうしたこと
ろにあることを思わせる歌集である。 二〇〇円

をくりかえしていたのに、もう四、五年ほど
のあいだ、なんの異状もないのだ。

「医学はたしかに進歩したなあ。肺病なん
か、むかしは亡国病といわれて、うまいもの
ばかり食って養生しても、死ぬにきまつた
けど、いまは、たいてい助かるもんなあ」
なにかのおり、ぼくはときどき、妻にこう
言って感心する。しかし、そんなとき、話が
耳のことにふれてくると、ぼくはやはり、な
んとなく、うろたえてしまう。何十年ものあ
いだ苦しみ不便をかこつてきた耳も、その進
歩した医学ですっかりなおしてもらつたら、
と言われると、たとえば、手や足をうしなっ
た人が、その手や足をはやしてもらつたら、と
言われたときに感じるかもしれない気持を、
ぼくも感じるのだ。腹立たしいような、はず

かしいような困惑した気持なのだ。医学は進
歩したにちがいないけれど、人間の体では、
小指さきの一センチでも、抜けた歯の一本で
も元どおりには再生できない。せいと義手
や義足や義歯などの代用品があるにすぎな
い。ぼくのばあいの鼓膜はもろろん、もつと
目に見えにくい精神のどこかの個所でも、い
ったん傷害を受けたら、代用品でおぎなう以
外には、おそらく方法はないのだから。

編輯後記

六月三十日道頓堀のバー・コンパで石浜恒夫氏の「日本
アンデルセン」の出版記念会が催された。各自チケットで
自分の好きなものを飲みつゝ、談論する趣向である。長沖一
小野十三郎、庄野英二、吉井栄治の諸氏に久しぶりでお目
にかつた。その日は丁度果樹園を山根氏から受領する日
なので、僕は早々と失礼したが、僕を含めて大阪の文芸家
は少し健康すぎるやうな気がした。

七月五日東京の鹿野隆三氏から激動の端書をいたゞい
た。私は拙論にとりかゝる前に、氏の梶井基次郎研究の体
験から色々と教示を添くしてゐた。詩のない文壇は死のこ
と……と、氏は文中痛飲してをられるが、末尾に「一寸
酔つてみます」とあり、端書をしたゝめた午前四時の時
刻まで明記してあつた。現代の悲痛さを感じる度合は、や
はり東京の方が深いのかと思つた。

七月六日昨年疎早の水禍で母喪、愛妻、愛娘二人を失つ
た上村肇氏が川原田静子さんと再婚した。慶賀の至りであ
る。
七月五日大木啓夫氏が阪阪されグランド・ホテルに一泊
される由、文化放送大阪支社から連絡を受けたが、連絡の

手違ひでお会ひもせず東京にお帰へしてつた。こゝらに
もまだのんびりした大阪がある。東京であつたらもつと迅
速にしかも適宜に連絡を受けてゐたらう。氏に深くお詫
び申し上げる。
七月十一日産経文化部瀬川氏の肝入りで、堀ノ内歴氏は
弥栄学園で精海兄の詩の指導に當つた。愛子を歌つて妙で
ある氏はまことに恰好な相談相手と言はねばなるまい。瀬
川氏の鑑識眼を改めて見直した。
同人の活躍として近頃特に目立つてきたのは浅野地氏で
ある。「国民評論」「民間伝承」誌上のエッセイ、「文芸
日本」「果樹園」誌上の詩。僕より一世代も先輩である氏
のこの若さに近視眼的な世代観などは通用しない。
七月十三日発行所で池沢、山根両氏と美酒を飲みながら
反省会を開いた。両氏の意見では、「中央公論」の果樹園
評は當つてゐるところもあるとのことだつた。高松の福地
氏からの来信にも「果樹園がおとなしすぎるのを大変残念
に思ひ始終終気になります。中央公論での評のように年功の
零閉気もあるのでしょうか。」とあつた。もしさうなら少
し暑くなってはなるまい。ところでこの号は残念ながら四
頁夏更せした。(0)

果樹園 第三十一号(毎月一日一回発行)

昭和三十三年八月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
発行所 京都市下京区生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園 第32号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
ブリッティング詩抄 たかはししげおみ
祇園のマダム 山根忠雄
宵がかりに 堀ノ内 歴
赤い花 岩崎昭弥

白居易詩抄 森 亮
通勤途上 美堂 正義
初秋風 服部三樹子
東京通信 田中克己
買物が時刻 池沢 茂
わが時 浅野 晃
おまえは 福地 邦樹
編輯後記

書簡から見た

伊東静雄(三十二)

小高根二郎

その頃「コギト」は芭蕉特輯号を企劃して
ゐる。それに関連して、伊東は頼原先生に次
の書簡を送つてゐる。

「お葉書まことに恐縮に存じました。
血気の多い若い者のしますこと、さぞおか
しく、お思ひのこと、存じます。『コギト』
で八月号に芭蕉特輯号といふのを出すさう
でございますが、皆で冗談のやうに、先生
に、何か、書いていただけと、私に申しま
す。私は勿論とりあひませんが、巻末にの
せる芭蕉の著作表のやうなものを、先生に

よくおたづねして調べてくれといふ、依頼
は引きうけました。その内、親しく、お話
をうかがひに京都に出たいと存じてゐま
す。今の若い者の間には芭蕉は大した、人
気でございます。
どんな芭蕉論が出来上りますか、その時
はお笑ひ草に、お送りしたいと存じます。
これは、昨年末にやりました、独逸浪漫派
特輯と一対をなす試みのつもりでございます。
一言お礼まで
四日 伊東静雄
頼原退蔵先生

できなかった伊東の詔状に対し、頼原先生か
ら詩に精進するやう激励する返事があつたの
で、折返しこの札状が出されたものであらう
文中、伊東は芭蕉の著作表をつくるやうに言
つてゐるが、詩集「わがひと」と与ふる哀歌」
をまとめることを急いでゐた伊東は、考証的
なその仕事も放棄したのである。
この頼原先生宛書簡を出してから四日後、
つまり、六月八日に伊東は初めてアパートに
私を訪ねてきた。お茶を出すにしても下階の
隅にある炊事場までゆき、計量ガスメーター
に一銭チン！と投入して湯を沸かさねばなら
なかつたので、お茶代りにビールを出して接
待した。窓の外では梧桐の葉が宵風にざわめ
いて、向ふ側の室の居汚なさを遮蔽してくれ
てはゐるが、隣室からの若夫婦の嬌声や、廊
下を距てた前室の妾が軋ますベッドの音が、
遠慮なく聞えてゐた。
「紙はありませんか？」いさゝか酔ひが廻
つてきた伊東は、できたての詩を紹介しよう
と云ふのである。原稿用紙を出すすと彼はそゝ
くさと草稿を書き流した。

この書簡は、「国語・国文」につひに執筆

かの微笑のひとを呼ばむ

.....
われ 烈しき森に切に疲れて
日の了る明るき断崖の上に出でぬ
静寂はそのよき時を念じ

海原に絶ゆるなき波濤の花を咲かせたり
あゝ 黙想の後の歌はあらじ
われこの魁魁の白き穂波踏み
新月におほ海の面歩ると
かの味気なき微笑のひとを呼ばむ

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この未定稿を定稿と比較してみると、第一行目の「疲れて」が「憔悴」に変化してゐるだけである。

伊東はこの草稿を私に持たせると、酔眼を半ば閉ぢながら朗吟をおツ始めた。和歌の朗詠と高等学校の寮歌の節廻しをこきまぜたやうな、舌たるく甘い調子である。声は淡い顔に似合はず澄明で美しかった。伊東は朗吟の陶醉から覚めると「これは貴方の作品をまねたのです。」と言った。

この私の作品とは「椎の木」四月号に発表した「石の歌」で、「日本浪漫派」六月号の「詩壇時評」で保田氏が触れてくれた作品なのである。

石の歌 小高根 二郎

日ぐれ石は
斜傾に
水のやうに透いてみせた
そこから赤楊の梢は灼け崩れ
部落は真向ふに沈んで行った。
その極みに輝くものは
海峡なのだらう
波の上を歩みかへし
明く掌ふるひとが見えた。

つまり、夕の海を渡ると云ふ私のイメージの人に、伊東は入われ魁魁の白き穂波Vを蹈んでなつてやらうと云ふのである。朗吟に戸惑って微苦笑をしてゐる私を、導いてやらうと云ふ決意を表明しに、伊東はこの詩を作り私をその宵訪ねてきたやうに思はれる。

私はこの記念すべき伊東の草稿の末尾に、次のやうなメモを朱記してゐた。「伊藤静雄と会して飲み氏酔ひて歌ふなり。一九三五・六・八」伊東を伊藤と誤記してゐることから推すと、対面二回目と云ふ馴染みの浅さと、私自身が相当酩酊した事実を物語つてゐる。

伊東が私のアパートを訪ねてきてから六日して、彼は次のやうな書簡を百合子さんに送つてゐる。

「京都の大学の辺のパン屋で笑つたり、冗談言つたりしながら、あなたとお話してゐる夢を昨晩みました。たぶん大阪のことを復習してゐたのでせう。

東京でどんな風にお暮しだらうといつも気にかかつてゐます。村上さんが近所に来られてから酒井先生にも度々お会い出来て、にぎやかな気持がしてゐます。

姫路にもおしやべりに参りたいと思ひながら、思ふ通りにゆかずにあつた。

時々東京の話など書いて送つて下さい。

十一日

伊東静雄

ゆり子さん

ご住所村上さんにききました。

（昭和十年六月十一日大阪市内西成区松原通二の十五より
東京市大森区新井宿五ノ八奥村方酒井百合子宛封書）

この書簡を見ると、伊東がアパートに私を訪ねてきた日から間なしに、姫路から百合子さんが来阪したやうである。三ヶ月前に伊東は久しぶりに姫路の酒井家を訪ねてゐたが、その答礼の意味と、上京を予想しての別れの心づもりもあつたのだらう。伊東は難波駅を降りて心斎橋筋に入つてすぐの、馴染みの喫

ブリッティング詩抄

ナポリの猫

その肥った虎縞の猫は ピンとひげをたて
不安のあまり毛という毛を針のように立て
よごれたどぶから 鏡のように光っている
食堂へ さつととびこみ

ピカピカ輝くフォークから
鶏肉のだきみをくわえた瞬間ひきさいた
食卓で酒瓶がガチャンと倒れたが
それはまったく決して彼女のせいではない
あのしなやかさ まったく猫流というもの
だ 牡猫かしらん それとも 腹が空いて
ないてるわけでもない仔猫のことを
やさしく思ひだした牡猫かしらん

だが牡猫流ではない 牡はさきのことなど
ど考えやしない なぜって
ナポリのもえる太陽は 今日も明日も

ごみためを黄金にかえるのだから

隣のテーブルで具料理をたべていた娼婦は
グラスをかゝけて檀那に乾盃し
紅のあかい唇をひらいてためいきをつく
みんな自分の流儀にしたがつて
生きていかねばならぬのだ！

金色の世界

九月ともなれば なにかも金色になる
すみきつた空をよぎる太陽
刈らなばかりの田んぼ
籬にもたれてねむたげな日まわりの花
教会堂の屋根の十字架
枝にたわわな林檎

いまに落ちるかと思えば
さつと風が立って
金色の世界へと上げていく

十一月の夕暮

乾いた木の葉を風がかきまわす

吹きあげると思えばちらしていく
街筋を走つてくる風はビュツと音を立てて
鴉どもをおどろかす

歩調を速めだした葦毛の馬は
もうすぐ感奮だと気がついて
つかれた脚をくりのぼす
なごりのあわい夕やけをあびて

かがやく家 くらげんだ
鴉雲がながれていく ハイ シッ！
馬車は内庭へとまわり とうとう着いた！
窓ごしに灯火がおちる それはつまり
暖い部屋と夕飯とそれからそれから
あれもこれも待つてるといふことだ

戸外の風よ 吹かば吹け
木の葉と一緒に遊ぶがよい
鴉や狐がおまえの仲間だといふのに
なぜにおまえはガラスをひっかくのだ
まあまあ今夜は家にいるにこしたことはない

（たかはし・しげおみ訳）

茶店カスターニエンに、百合子さんを案内したに相違ない。灰色の煤けた壁をしたそこは、男ボーイのサーヴィスでブラジル・コーヒーの味覚だけを売物にしてゐた。その殺風景な雰囲気も潜在して、京都時代のミルク・ホールの夢に蘇ったのだらう。

小太郎先生がよく見ると云ふ村上さんとは、諫早の出身で、百合子さんより女学校で二年以上級であつた村上菊枝さんのことである。この書簡を出してから五日目に、再た伊東はアパートに私を訪ねてきてゐる。私は伊東に、若い日のロマンスを幾度か聞いたことがあるが、最初に聞いたのは恐らくこの日であつたやうである。

伊東は京大の学生時代、帰郷の車中でたやかな女人と同席したと云ふのである。話をしてゐるうちに意気投合して、そのひとの故郷である広島に着くと、つい一緒に下車して了つたと云ふ。案内されるまゝにそのひとの邸に同行し、大変な接待をうけ、末亡人であると云ふことが判るに及んで一泊した。爾後休暇で帰郷するとき、故郷から上落する途路には、必ずと言つていゝほど広島に立ち寄り、そのたをやかな末亡人との逢瀬を楽しんだものだとも云ふのである。

私はその日そのロマンスを半信半疑で聞いて

てみたが、広島とは姫路であり、たをやかな末亡人とは、安代さんと百合子さんとを抽象飯想した「わがひと」であることは、大方の読者には納得ゆくことと思ふ。恐らく伊東は百合子さんを大阪に迎へ得た喜びがまだ覚めやらす、昂奮のあまり私に披露したものであらう。

その日も伊東は私に原稿用紙を求めた。彼はそゝくさと草稿をしたため、その紙片を私に持たすと、例の朗吟をおつ始めたものであらう。

H島に寄す

底深き海藻のなほ 日光に震ひて
その巻葉とくるごとく
おのづと目あき 見知られぬ
入海にわれ浮くと悟りぬ
あゝ 幾歳を経たりけむ水門の彼方
高まり 沈む 波の揺籃
懼れと倨傲とぞ永く
その歌もてわれをねむらしめし
島人は權音高く 入海の奥の岩間に
うち群れて清水波む小舟すゝめぬ
あゝ われらあまりに遅ければ
またわれらをさまたぐるものはなし

祇園のマダム

頼心に蘇司業有りて
時々酒の銭を与ふ
杜市

山根忠雄

友人は僕をマダムに紹介した
「この男は詩のことしか考へず金もない
俺が酒代を払ふから
こいつが一人で来たときも
どうか存分に飲ましてやつてくれ」
男の友情に感じたのか
彼のその言葉を用いたのか
或は二人の間に何かあつたのか？
僕が一人でいくら飲んでも
マダムは一度も酒代を請求したことがな
い
いくらなんでも僕も男だ
そいつをいいことにしておめおめと
飲みつつけることはできやあしない
時には至つて軽少だが
「寸志」をそつと置いて出る……

宵がかりに

堀ノ内 歴

暮れ時分に何時も来る場所で
腰を降ろしてゐると
真向きの空地の傍の暗い屋根から
黒く一羽の雀が
其処にいるとは判らなかつたものが
チュンチュン鋭く二声鳴いて
空を横切り去つたのを
並んで腰おろしていたチビ助に指さして
「雀が鳴いて行ったよ
おうちへかえるんだよ」と云うと
「雀ちゃん うれちい云うてんねん
よろこんでやるねんヤ」
ひたすらな鋭さで たつた二声の
何か絶叫が
チビ助には平和な只の轉りに聞えたのか
暗くなり初めたあたりを
私は改めて見廻し
きつと雀が見た筈の漠とした不安さを
考へていたが
チビ助はと見ると彼はケロリと
別な方を向いていた。

一九五八・八・十四

木葉舞ふ柏の梢に いざ

わがひとを招ぜばや
目に見えぬ野犬の群れの島にみち
長吠きしやまぬ諸声を
いま誰れかひとつひとつにわがち得む

この草稿の末尾に、私はメモのため、「伊東静雄氏一九三五年六月十六日わが部屋に歌ふなり。」と書き留めてゐた。

この詩の主題であるH島とは、勤王の志士平野次郎、高杉晋作等を支援した愛国女流歌人として有名な野村望東尼が流された福岡県糸島郡芥屋村の海上にあるH島のことであらう。このH島は伊東が高等学校時代から愛唱した水泳部々歌に現れてゐる。

吉井浜思ひ出の歌

吉原 正俊 作
山口 正之 曲

一、夕陽は燃ゆる吉井浜
海女の乙女の沐浴する
磯部に咲くや月見草
さやけき波の音すなり

二、玄海灘の濤絶えて

夢に浮ぶや姫島の

野村の尼を偲びつゝ
渚に立ちて歌ふかな
三、大法禪寺の老銀杏
朝日の影のゆらぐ時
残んの夢に見渡さる
大門の崎の白浪や
四、灯ともし頃の山を下る
くちさぶ友の唄聞けば
魂匂ふ螢火の

飛び交ふ方に磯の町
五、白刃光る艦艦の
真昼の波の狂ひては
大海原や潮の香に
若き心の躍らずや

註・この歌の作者吉原氏の父は北原白秋と同郷の
誰ありし故、白秋補筆の勞をとりしと伝ふ。

伊東がこの部歌を愛唱したのは親友伊藤正雄氏(昭和五年京大教育卒、長崎市教育長)が水泳部選手であつた影響であらう。佐賀高校の水泳部の寮は、H島を二里の海上に望見する福岡唐津間の福吉駅から直ぐ近くの吉井にあつたのである。或ひは、伊東は夏休に伊藤氏に同行して吉井浜に遊び、H島までの遠泳に舟で随行したことがあつたかもしれない。
このH島の回想が生んだ、「H島に寄す」

の草稿を「コギト」八月号に発表した次の作品にまで彫琢したのである。伊東の彫琢の法は朗吟だった。つまり、朗吟に朗吟を重ねて、口から余塵やアクを自然に脱落させ、最後に舌に残った珠玉を作品としたのである。

漂 泊

—A・Tに—

底深き海藻のなほ 日光に震ひ
その葉とくるごとく
おのつと目あき
見知られぬ入海にわれ浮くとさとりぬ
あゝ 幾歳を経たりけむ 水門の彼方
高まり 沈む波の揺籃
懼れと倨傲とぞ永く
その歌もてわれを眠らしめし
われは見す
この御空の青に堪へたる鳥を
魚族追ふ雲母岩の光……
め覚めたるわれを過りて
躊躇はぬ糧音ひびく
あゝ われ等さまたげられず 遠つ人！
島びとが群れ漕舟ぞ
——いま 入海の奥の岩間は

赤 い 花

—杉本岩木氏に—

岩 崎 昭 彌

緑の盆地の中に城が見え
ガソリンカーがそれを巡ぐるやうに走った
街は昏れ時だったが
美しい奥さんが町寧に迎へて下さった
かつての中隊附准尉は銀行の支店長
写真を示すとよく覚へてをられ
私の方が英霊の兄のやうだとおつしやつた
これは十二年という歳月のせいだ
一枚一枚衣類に縫ひ付けて持ち帰ったといふ
ノートの従軍日記を取り出して来て

孤独者の 潔き水浴に真清水を噴く——

と告げたる

第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」

この「漂泊」の献辞A・Tとは青木敬磨氏のことだらう。伊東は京大に入学して京都町の青木氏の家に下宿した頃、京大の先輩である青木氏に伴はれて八瀬に遊んだことがあった。

拾ひ読みながら話して下さる親しみ深い顔
兄はどんな想ひでこの人に接しただらう
マラリヤの兵隊達を、前線から後退させたの
も

戦死の公報を作って下さったのもこの人だ
ほろ苦いビールをいただきながら、夜更まで
インパール戦線の模様をしみじみ聴いた
翌朝、水屋に案内される

朝鮮朝顔が小さい花をつけてゐた
毎年夏には此まで花で真赤になるさうだ
ビルマから持ち帰ったのだと奥さんがおつし
やつた

赤い花が、今年はお家にも一ぱい咲いてゐ
る

—インパール—

「或初夏の日八瀬の滝のよこに坐つて佐賀
の校歌を唄うてくれた。あれに似てゐた。
顔にもそう云へばどつか似た奥行がある。

甘い、溜るような流れるような、南の国の
溪流のひびきだった。」(昭和十一年「コギト」
に歌)

この日、青木氏が伊東から聞いたのは校歌
ではなく、恐らく「吉井浜思ひ出の歌」であ
ったらう。この思ひ出多い歌を基盤にしてで

きた「漂泊」を青木氏に捧げたのは、俊英な
才能を抱きながら、病弱のためむなく兵庫
の岩見の浜に埋もれやうとする彼を惜んだか
らであらう。当時、私は青木氏を痛惜する伊
東の声を幾度か聞いたことがある。

この頃伊東は大村中学での先輩福田清人氏

白居易詩抄 (十五)

森 亮

秋立つ日に

曲江の池のほとりを独り行き独りもの言ふ。
馬を回らして楽遊園の丘べをゆるゆる登る。
立つ涼風と色つやあせたわたしの髪。毛。
自然界もわが身も一時にうらぶれの秋だ、
まるですべてが計算されてあるかのやうに。

無は気紛れで、いつまでも同一の無であるこ
とができない。
欲びはしまひには愁へに成り果てるが、
苦しみだつて移行し移行して跡形もなくなる
老いが進めば眼の裏にもやもやと百花生じ、
現し世のひかりは風に遭つた燭火のやうに忽
ち消える。
すべて過ぎ去つた物のゆくへを尋ねるは詮な
いこと、
鳥のとびゆくみちが空にのこると君は思ふか

註 「秋立つ日に」の原詩は立秋日登楽遊園(二の八

八七)で、二八号に訳出した「長安哀歌」と同じ
く詩人が五十才の作。次の「幻世」の原詩は觀
幻(三の八四二)で、恐らく太和二年五十七才の作
この年の正月に刑部侍郎(法務次官)になつてあ
る。五行目の「眼の裏に百花生じ」といふのは眼
が霞んで見えなくなることと言つたもので、彼自
身の眼病の体験に基づく発言であらう。

で、それをお送りしてと存じてをりました
平生、あなたのお書きになりましたもの
を方々で拝見いたし、中学校の頃のお顔な
ど、思ひ浮べてをりましたが、つい近頃、
雑誌にのつてみましたお写真見まして、す
つかり変つて見えられましたので驚いたこ
とでございます。

コギトやローマン派、をかしい所が沢山
あることであらうと存じます。保田君とふ
としたことから知り合ひまして、変なこと
になつてしまひました。蒲池君とは時々お
逢ひでせうか。元氣にしてゐるでせうか。
私は一家諫早から移住いたし、大阪の女を
入れて、すっかり大阪に住みつきまして、
故郷にかへりたいとばかり思つてをります
これからまたときどき、お手紙差支上げ
たいと存じます。御健祥を祈ります。

六日

伊東静雄

福田清人様

(昭和十年七月六日大阪市西成区松原通二の十五より)

(東京市杉並区和田本町九〇一福田清人宛封書)
伊東は大村中学では福田氏より一学年下で
あった。が、伊東は校友会雑誌「玖城」にも
作品を発表したことがない。養勉強組だったの
で、福田氏の印象には全く残つてゐなかつた
のである。福田氏は高校は福岡、大学は東大
を選んだので、伊東と接触する機会もなかつ

幻 世

すべて物の生れ起るみなもとは死滅にある。

た。ところが伊東と中学同期であった蒲池敏

一氏は福田氏と接触を保ってゐた。蒲池氏は大学三年の時伊東が御大札記念児童映画脚本募集に一等当選をしたことを知ってゐたので翌昭和四年に福田氏と同人雑誌「明暗」を始める時、伊東を同人に勧誘した。伊東もその由大学時代の文学の友宮本新治氏に報じてゐた。「今度東京の蒲池氏福田氏等と一緒に同人雑誌を出すことにしました。何か書けたら送ります。」(宮本新治氏宛書簡) その書簡の解説に、伊東は作品を送らなかつた模様であると私は書いたが、それは誤謬であつた。伊東は翌昭和五年五月次の作品を「明暗」誌上に発表してゐた。

空の浴槽

午前一時の深海のとりとめない水底に坐つて、私は後頭部に酷薄に白塩の溶けゆくを感じてゐる。けれど私はあの東浄の秘呪を唱する行者ではない。胸奥に例へば驚叫する食肉禽が咽を破りつゞけてゐる。然し深海に生ずる悲劇はそこにあるのではない。あゝ誰が、私の内の食肉禽が、誰の前生の人間であつたことを知り抜いてさへゐなかつたら。

昭和五年五月「明暗」

散文詩である。詩句中、「東浄」とは禪寺の東牆にある廁の意である。非常に詩句を壯麗にしてゐるが、因縁としての肉欲を歌つたまでのことだらう。私は印刷された処女作として、この作品より二年二ヶ月後に発表した「呂」誌上の「公園」だと既述してゐたが、この「空の浴槽」であるから訂正する。

この「空の浴槽」だけを知つてゐた福田氏にとつて、「コギト」「日本浪漫派」に再発見をした伊東の生長ぶりは驚異であつたに相違ない。氏は有望な後輩を手紙で激励したのであらう。前掲の書簡はその激励に対する礼状である。

尚、文中……保田氏の肝入りで詩集を近刊する由、見えてゐるが、処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」は保田氏の尽力で着々と進行し、「コギト」には保田氏の筆になる次のやうな近刊予告が既に掲載されてゐたのであらう。

「伊東静雄の詩は今日以後の日本の新声の一つであらうと僕には感じられる。彼ほど傷つきやすい世界を至烈に歌ふ詩人は稀有の異質である。彼は心情をうたふのみでなく心情で歌ふのだ。彼の魂の歌の調べはつねに古来の詩星のごとく多分のイロニーと

通勤途上

美堂正義

通勤列車の海側の席に座るのが習慣となり

日本でも美しい海岸を走る沿線の風景が車窓をいろいろと変化させる

いまは少年達が海岸で波に戯れ赤銅色の皮膚を太陽に輝かせて海の藍色も

手に触れると青く染まりさうだ島の樹木も生々と

白い夏雲を載せて横たはって日の光も白く烈しく

車内の熱っぽい息れが汗をよび夏に弱い体質の潤んだ眸に

爽な花が開き初めたのが見える

広島へ勤めだして九年の短くない月日に毎日新鮮な眺めで

飽きささない楽しさは四季に風物に移り変わるからではあるまい命のないものは美しく流れるやうに動いてゐる

初秋風

服部三樹子

遠くより巻返し来るもの静か日かげりごろを人帰りゆき
屋すぎて夕べも宵もむし暑き一日の果のねどころの風
はや秋の来しかとばかり風たちて狭き屋内を先づ抜けてゆく
夕雨の後も涼しき宵ならで梧桐の葉陰闇を濡らせり
音たて、遊ぶ、秋の風ならむ俄雨かと思たる大木に
もの言ひて心置きなくある部屋にいま抜けてゆく秋の初風
青桐は外輪の葉のみゆらぎみて秋は前駆をつかはし、くらし
見るものもなく夕べの空を見る同じき日なし夕雲もまた
夏空の大木の上の宵の色絵とも空ともあらぬ群青
ひぐらしは鳴き止むときに一節の終りを飾るふしを聞かすも

クセニエンにめぐまれてゐる。彼は高次に己の傷を知るゆゑに、他人の傷を残忍にかきたてる。しかもそこに彼の不屈のエゴイズムは至上の純粹に濾過されて匂ひ出る。従つて彼の詩には早くもせつぱつまつた何かしかない。観念は茫漠とした空虚に純化されひたすら霧囲気のみが映し出される。僕ら彼の詩にたゞ己の故郷を回想し、群集のゐない群集を測ることのみを強ひられた。それはまさしく透明且清澄の世界である。かつて萩原朝太郎氏は彼の詩をみ、「日本にまだ一人の詩人が居ることを知り、胸の躍るやうな悦びと勇気を感じた」と誌された。伊東静雄の詩は今日唯一といふに足る本質上の意味に於てのリリックである。このたび彼の第一詩集を新しくもち得るは僕自身にも深い欣びに他ならない。」

往年一種の流行を作つた文章である。伊東の本質と云ふより、観念的に霧囲気をよく写してゐる。

この保田氏は伊東の福田氏宛書簡の二ヶ月後に、詩集刊行に関する事務を次のやうに伊東に連絡してゐる。
「別紙の如き書式(註・出版願)一通御願申上ます。美濃紙、とじられるやう前後に余白作り、著作権者の下へ捺印願ひます。」

東京通信

田中克己

東京へは学問しに來たので、学問の第一は正確を期することである。「バルカノン(呉市宮原通七丁目火の会発行)」第八号(日本浪漫派特輯)にまちがひを書いたことを、恥ぢながら訂正する。同誌一六頁の私の記載「ジャーナリズムの独占——保田、亀井、芳賀、浅野の評論はなるほど論壇を風靡した」といふ箇所から、浅野氏を除く。これを除かねばならないことは、同一八頁の浅野氏の記載をよんで始めてわかつたのである。
他人のことでは、悪意なしでも、まちがひ

があるといふことは、保田君が僕のことをいふ箇所にも見つかつたが、これは後まはしにして、偶然、同じ雑誌の梅棹氏を囲む座談会の談話中で、黙つてをられない箇所を見つけた。

竹川（哲生氏）日本浪漫派の再建と言ひますが、これは芳賀檀に主宰誌を持たして上げたい、又芳賀檀ぐらゐになると過去の経歴からいっても雑誌の一つくらい主宰してもいいといった気分が集つた連中であつた様ですね。その大分前に、日本浪漫派の中核ともいふべき例の「コギト」の再刊が企画されたことがあつたやうです。その時には井上靖や庄野潤三らも参会したらしいですが、集つた多くの人達が世に出たいといふ気分の方が強く、ついに纏らなかつたんですな。

（下略、傍点田中）

竹川氏はどこからこんな談を仕入れたのかしらないが、「コギト」の再刊の企画がいつ、誰によつて企画されたのか、驚くべき話である。コギトを十何年主宰した肥下恒夫にことはりなしにやれる筈もないから、肥下にきいてみれば宜しいが、「否」といふにきまつてゐる。井上靖氏や庄野潤三氏の名も出てゐるがこの人たちとコギトと何の関係がある

のだらう。でたらめにも程があるといふだらう。庄野氏はちやうど今ラジオで帰朝を報じられてゐる。怒らなければいいがと、私は思ふ。竹川氏の取消しを願ひたい。それにしても戦死した中島栄次郎や病死した松下武雄、杉浦正一郎らが、もう一度生きかへつて来て、コギト再刊の企画をしてくれたら、どんなにうれしいだらう。以上、私のくせで、せつかちながら二項の訂正についてしるした。

買物

池沢 茂

「平吉さんは耳が遠いというほどやないや。その程度の人なら、いくらでもある。ふつうに話してたら、全然わからんやないか」
義父がそう言ったとき、ぼくはうれしからした。肩の重荷がおりたやうに、ほつと安心もした。耳が遠いために、ことに人工鼓膜をおぼえるまでは、もう廃人だとあきらめかけていたぼくに、家や食糧や就職など、いろ／＼世話をし、力をつくしてくれた義父にたいして、ぼくはとき／＼、むしろ思苦しくなつたからだ。すでに耳がわるいのは知られてゐるのに、ぼくはなお、なるべくなら、そのやうに思われたくなかつた。ひどい痔のために入

院せねばならなかつたが、それは手術の結果、なおっている。なおる病氣なら、かまわない。取りかえしのつかない不治の損傷が鼓膜にあつて、どうしても人なみの活動はできないのだと、はつきり義父に断定されるのが、ぼくには、なんだか、不安な、こわい気がしてゐたのだ。

「補聴器という便利なものが出来てるやうやな。二倍でも三倍でも音を拡大できるから少々耳が遠くても、あまり困らんやうや」
ある日、いつものように米や野菜など持つてたずねてきた義父から、そう言われたとき、だから、ぼくは、はつとなつた。このあいだまでの義父と、まるきり反対になつてゐる。いきなり尻をまくつて強迫した人に対するやうに、わけがわからないので、ぼくはおびえ、なんだか不安にさへなつた。が、やがて、だれかから、たぶん妻から、ぼくの耳について、なにか聞かされたにちがいないと思ひなおした。いつだったか、ぼくが家で、あまりゆううつな顔をしてゐるので、妻からはげしく詰問されたことがある。ぼくはそのとき、うたぐられるやうな理由があるのではなく、たゞ耳が遠いからだ、と言つて、耳のために会社で、どんなに、つらい、つまらない目にあわねばならないか、説明した。そ

のときはそれで済んで、ぼくはその日から、会社の不愉快など、家庭へは絶対に持ちこまないやうに注意していたが、やはり、知らぬまに、ゆううつな顔を見せていたにちがいない。そして妻は、ぼくにはもう言いくくなくなつたので、義父に訴えたのだらう。
「補聴器なんか、どこに売ってるんです？ ずいぶん高いんでしょうね」

わが時刻

浅野 晃

アレグロの時よ
アダジオの時刻よ

緑の時は快活にまた重く
赤はかたまり破れて走り
コバルトは高くプロシャンブルーは沈み
インジゴは熱の熱きを秘めたり
オレンジはアルトのごとし

ああ揺籃の歌の時をすぎ
ワルツの舞の時をすぎ
讃歌の時
幻想と狂想の時をすぎ
夜歌の時こそ至るなる

ぼくは一足とびに、たずねた。すぐにも買いにゆきそうな姿勢を示さなければ、わるい気がしたのだ。耳が遠いまゝだったら、どうしても、勤めの仕事がルーズになり、まちがいもおこしやすい。それでは義父の恩義をうらざり、その感情を害するのではないかと、とつさに、責められたのだ。しかし、その一方では、ぼく自身、ちよつと、目をひらかれ

されど吾は白日の時なり
われ曠野の晩夏すぎやすきを愛す
溢るる光――

ラルゴの時よ
バツソの時刻よ

秋

ちさきわが魂を鎮めむには
一輪の野の花もてこと足るを
おんみ これら限りなき花々をめぐみ
はた 季節をめぐみぬ

はれがましいかな おんみがめぐむ
季節のなかを われ
歩みつつ歩く
わが終り わが終りへと

いまは秋なり 対面の時なり
われ 山にむかひて急ぎ
山 われにむかひてほほえみ来る

いまは秋なり 相思の時なり
われ 水にのぞみて黙し
水 われにのぞみて何をかささやく

しづかなる光のなかに
わが魂はかく鎮まりぬ
これらやさしき花々のあひだに
われ 天にその青をささぐるかな

さらば おんみ わが行きの短く
わが別れの長きをとがむるな
つねに わが歩み
おんみのものなる時とともにあるなれば

おまえは

福地邦樹

おまえは
指をきくきくさせて
白い手袋をはめる
さよならと言って
靴音かっぱつに
去ってゆく
それに耳をすましながら
私は はじめて
おまえに面と向う
私の方法が
いつもそんなふう
おかれてるのを
ちゃんと知っていて
おまえは たくらんで
いろんなおもいを
置いてゆくのだ

苦しんだりしながら、これも運命だと、たい
てい、あきらめてきた。ところが、いま義父
から指摘されてみると、おもしろいカーテン
が、ぱつと思いきって、引きあけられたみた
いなのだ。室内を見せまいとして、たえずぶ
あついカーテンをたれこめていたもの、よ
うしやく引きあけられてみれば、案外なん
でもなくて、たゞ、あかるい風が、さわやか
に、ながれこんでくる。
『めがねみたいに簡単なものちがって、そ
の補聴器、ずいぶん高いんでしようね』
『だいたい一万円ぐらいらしいな。しかし、
まあ、金のことなんか、心配せんでもいゝや
ないか』
『そうですか……』
ぼくはそのころ、入社してから半年たらず
で、月給は、その二万円より、だいぶすくな
かった。ぼくはそつと、義父の顔色を見た。
義父はしかし、わしがおるから心配するなと、
むしろ、きげんのよい笑顔だった。
ぼくはさつそく、服を着て靴をはいた。そ
して、義父に連れられ、妻もいっしょに、三
人で、補聴器を買いに出かけた。

編輯後記

八月二日正午東京から小山正孝夫妻が突然来訪した。堂
島川畔で昼食を共にして別れたが、夫人が果樹園をよく説
んで来て夫君の作品にも充分理解してをられるので安心し
た。午後呉の美堂正義氏が来訪し談話した。まきに果樹園
デーの編があつた。
八月五日京大教授野間光辰氏より激励の葉書をいただき
西鶴輪講会に於いて新しい教示を得た。
八月八日愛知大学教授倉橋音氏より果樹園を豊橋の大
学及び名古屋分校の図書館に備付けて下さつた申連絡をい
たゞいた。又、京大教授杉山産七氏と共編の三修社版強和
辞典を賜つた。音標文字と片假名の発音が附けられ不明の
私には恰好な好著であると感銘した。
八月十三日伊藤信吉氏より思ひかけず激励の葉書をいた
だいた。詩誌にしては珍らしくパンクチュアルな刊行に驚
かた由である。
この号は、池沢、山根両氏が丁度休暇で帰郷してあるの
で、折よく帰阪した福地氏と、堀ノ内氏の援助を仰いで編
輯した。

果樹園 第三十二号 (毎月一回発行)

昭和三十三年九月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
發行人 池田市東区壬生川通五条下ル
印刷所 同朋舎
池田市野町一六八
發行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園三十二号昭和三十三年九月一日発行 (毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

果樹園

第33号

書簡から見た伊東静雄
俗神の午後 小高根 二郎
白居易詩抄 浅野 晃
水媒花 森 亮
千円札物語 福地邦樹
山根忠雄

織物 芳野 清
娘に 美堂 正義
東京通信 田中 克己
補聴器 池沢 茂
オスカア・レルケ詩抄 したげおほみ
不安と危惧 堀ノ内 歴
逝きし夏雲 服部 三樹子
諫早詩篇 上村 肇

書簡から見た

伊東静雄 (三三)

小高根 二郎

見積書のうつけし

用紙白菱八五斤、一、五レン

鳥子三〇〇枚、〇、〇五

組版七〇頁、一 P 〇、三五

二頁(扉)〇、一五

二頁(目次)〇、三五

二四、五〇

〇、三〇

〇、七〇

印刷一〇台(一)三、〇〇

表紙……………三、〇〇

組換料一回五銭 (1 page) 三、〇〇

二回分……………七、〇〇

紙型(七五P) …… 七、五〇

一一八、六七

○組版はかなり安い方です。
○印刷は別刷にして、インキも結構いゝの
を使用させました。

○後で全部の精算書は送ります。

○申込は今のところ十人あります。

昭和十一年九月三十日東京市杉並区高円寺六ノ七三八
(原田方保田号東邸より大阪府西成区松原通二の二五)
伊東静雄宛封書

つまり製本代と併せ約百五十円でできたこ
とになる。部数は三百五十部だつたから、一
冊四十三銭ほどでできた勘定になる。定価は
一円五十銭だから一円七銭は自費出版者の出
費の補償に廻せる計算になる。然し、保田氏
の連絡によると、予約購読者は僅かに十人に
すぎない。この事実は、伊東の再価がまだこ
く一部にしか確定性を持つてゐなかつたと云
ふ証拠であると共に、当時の「四季」派三好
達治、丸山薫氏の主潮や、西脇順三郎氏や草
野心平氏等の流行に対し、革新的であつたこ
とをも意味する。

その後も保田氏は几帳面なほど出版に関連
した事務を伊東に連絡してゐる。

十月四日には、伊東からの出版届が間に合
はぬので、保田氏は町で伊東の印鑑を求める
と、出版届を済ました由、諒承を求めてゐる。



松原通の家を訪ねた辻野久憲氏と伊東

十月九日には、製本見本一部を送った由と大阪の本屋への委託法を細々と教へ、贈呈先を照会してゐる。

十月十五日には、五十冊送本した由と、本屋の委託手数料は、一割か、一割五分であることまで教へてゐる。

十月二十四日には、伊東の予定した贈呈先である「古き師と少なき友」の他に、斎藤茂吉、高村光太郎、谷川徹三、百田宗治、室生犀星、横光利一、千家元磨、堀口大学、武者小路実篤の諸氏を追加すべきだと意見具申をしてゐる。雑誌社としては、『三田文学』『改造』『中央公論』『文芸春秋』『第一書房』を選び、詩雑誌として詩集賞があるので、『文芸汎論』を特に寄贈先として推薦してゐる。新聞としては、読売、時事、報知、都、朝日日々を推してゐる。ぼつぼつ読まれる由と、出版記念会を開く予定を連絡してゐる。

萩原朔太郎氏には逸速く東京のコギト発行所から贈呈され、次のやうな讃辞が伊東に舞ひ込んだのである。

「わがひとに与ふる哀歌、昨日拜受致しました。新しき鳥崎藤村の詩を、若き日に再度よむ思ひです。コギトに紹介をかねて批評かきたく思つてゐます。」

（昭和十年十月十三日東京市世田谷区代田一丁目六三五）
（萩原朔太郎より大阪市西成区松原通二の一五伊東静雄宛はがき）

俗神の午後

浅野 晃

山の中腹まで段々ばたけになつてゐて、どうやら汚染されたみどりの色である鳥がさかんにいてゐる。

三種類はたしかにゐる。たのしきうで

だがまだおしやべりがすぎるのはよいことばかりともいへないやうでそのうちいつもの子が泣きだしたあとをひいて泣きだした

油蟬がまげずに鳴きだしたじりじりと照りつけられて百目紅の花が貪血をおこしてゐる大きな二本の松の木のあひだには地面の苔に青いかげ

古い家だするすると風がにげこんでいきなり抱きつく、ひやりとさせる

又、朔太郎の愛弟子の一人であつた辻野久憲氏（昭和七年東大文藝部第一書房勤務）より次のやうな共感の言葉が寄せられたのである。

「その後御無沙汰いたしてをりますが、御先祖のなかにはきつと不運な生をとげた人もあつたらうほくらはすでに未来に人質にとられてゐるだからみんな気がぬけた過去になつてゐるこんなときには下手なピアノでもよいシヨパンの即興曲をひくがよい正午の海の空いっばいの巨きな裸婦は水中の葉をならしてきかせはしないジャワの島ではソロの王宮の水城でガメランをならすいつかうとうとしてくる自分でもこれが危ない時刻だといふことはわかつてゐるしかし醒めない夢もみない いやみてしまったほくをよんでゐる声がする午後なのだ ホットするしかし いけない のろのろと牛が二頭うごいてゐるのだ石は考へこんでゐる。」

健筆の御様子、何よりのことに存じます。

さてこの度はコギト社を通じ、御詩集を御恵投にあつかりまして、大へん嬉しく存じました。御厚意のほど深く感謝いたして

をります。昨日も萩原先生や丸山君（註・丸山薫氏）と話し合つたことですが、御作品は雑誌上で拝見した時にもまして、かうして一本に纏つてみますと、一段と精彩を発したやうに見受けられます。

そしてこの御詩集が、近來出色のユニークなものとなつたことは僕の固く信じて疑はぬ所であります。そればかりか、僕にと

白居易詩抄（十六）

森 亮

途上 懷郷

日が西にどつと傾くと風すさび、野中の道は涼しくなる。
新らしい任地へと疲れた馬をゆるゆる進ませながら

わたしは胸の中でいつか別の道をたどつてゐた。

ふるりの秋の風物はちやうど此処とおなじだらう。

なつめ色濃く、梨あかく、稲の穂ははや黒ばみ。

偶 感

穀から離れられない蝸牛が縄張り争ひなぞやうに何になる。
火打ち石の火花がひらめくさ中こそ我等が生

富める者は富にしたがひ貧しきは貧しいままに欲求せよ。

口を開け腹からの笑ひがこみ上げて来ないなら死んだ方がましだ。

註「途上懷郷」の原詩は内郷県路作（二の九五七）で、白居易が五十一才のとき杭州刺史となつて任地に向ふ途上、七月の終りか、八月の初めに作つたもの。次の「偶感」の原詩は対酒五首の第二首（三の八八二）で、この絶句は有名な蝸牛角上争何事といふ句で始まつてゐる。居易が五十七才の作のやうである。

願ぬ不遜な言葉であることは承知いたしてをりますが、つまりそれほど僕はこの御詩集に感動させられたのです。

なほ装訂も内容にしつくり合つて、じつに申分ない出来栄えでした。御同慶に堪へません。

いづれどこかに感想でも書かせていたゞくつもりですが、とりあへず乱筆をもちまして一言、心からの感謝とお慶びの意を表したく存じます。

どうか今後ますますいいものをお書き下すつて僕たちを喜ばせ下さい。

廿一日

辻野 久憲

伊東 静雄様

（昭和十年十月二十一日東京市中野区上ノ原富士見荘より大阪市西成区松原通二の一五伊東静雄宛封書）

これらの札状に対して、伊東はいちいち返事を書かなかつたであらうが、百合子さんの札状に対しては、次のやうな重要な返事を書いてゐるのである。

「お手紙有難うございました。ご住所お移りなです。知らなかつたものですから、昨日奥村さん（註・前の住所）の方に、「お礼の催促」を出して置いたところでした。あなたこそ、私の第一番に送らねばならぬひとです。私の詩はいろんな事実をかかして書

いてをりますので、他人はよみにくいと存
じますが、百合子さんはよみにくくない筈
です。あなたにもわからなかつたら、もう
私の詩もおしまひです。家島（註：姫路拜合十
八キロの島）のことや姫路のことや本明川
（註：龍草の川）のことがどつさり歌つてある
筈です。

詩集はまあ好評です。いろんな手紙が来
て面白いですよ。兼常清佐（ピアノ無用論を書
批評家。日本語と歌）といふ人があるでせう。
の構造研究の善かり）

水 煤 花

福地 邦樹

少女はひとを未だ
ほんとうに愛さぬうちから
もうひとに傷ついている
そして碧潭の水煤花のように
おのが涙で悲しい思いをみごもる
聡明な 生命あたらしい時に
この世の何を見すかしたというのだろう

涙はどのような場合でも美しいと
彼等は知っているのだろうか
或いは やがて誰しもが
常にたち還らねばならぬ
静穩の在処への最初の方法を
そこに見出したともいうのだろうか

だが またの日
透明な日向で彼等が かげりなく
みごとに笑うのをみるとき
人の世に生を享けてまもない
その魂の深所にも
もはやひとつの確信があやまたず
祈られてあるのを
感じないわけにはいかない

(田 作)

あの人にも送りました。但し返事なし。先
日来た手紙の文字が大へんあなたの文字に
似てみましたので、あなたからと思ひまし
たら河上徹太郎からでした。実によく似て
ゐて驚くほどです。近い内に又東京に行く
かも知れません。しかし東京は疲れるから
いやです。

昨日、お父様が見えられました。私の話
はごく不器用なので、そんなにうまいこと
お気を慰めたりはしてをりません。只そん
な願望を持つてをるだけです。

この前は、はづかしかつたので、ごまか
して置きましたが十二月に子供が生れる予
定です。男だったら閑太郎、女だったら閑
子とつけようかと阿呆なことを考へてゐま
す。

米年の六月頃またポケットには入るほど
の詩集を出すつもりでゐます。拒絶といふ
題です。

翻訳のことは是非、冗談でなく実現される
ことを熱望します。道は偶然なところから
ひらくものと存じます。出来れば単独の方
が一層のぞましいと思ひます。自分の道は
自分独力で拓かねばいけません。

私も楽しいことなど毫末もありません。
ただ失つたものや、来さうにないものを憶

れて、それでやつとその日を過ごしてゐま
す。

私達が、もとよく話し合ひました島崎藤
村氏にも本を送つてやりました。お礼の手
紙が来ました。その他一つ一つ挙げきれな
い程寄贈しました。

字が乱暴になつて済みません。
大阪と東京のことは、あなたには東京の
方が似合はしいこと、私は断言します。

二日

伊東 静雄

ゆり子さん

(昭和十年十一月二日大阪市西成区松原通二の十五
より東京市豊島区荒川町一丁目九十九番イコー酒井
ゆり子宛封書)

この書簡は、『わがひとに与ふる哀歌』の
「わがひと」を説明する鍵となる重要な書簡
である。

伊東が『わがひとに与ふる哀歌』を贈らね
ばならぬ第一番の人であると言ひ、「あなた
にもわからなかつたら、もう私の詩もおしま
ひです。」と断言してゐるところから推すと、
どうしても「わがひと」とは百合子さんでな
ければならない。

この「わがひと」は文面によると、どうや
ら結婚でも忌避して、職業婦人にもなるつ
もりで、両親の反対を推して上京したやうで

千円札物語

山根 忠雄

大掃除のとき

妻が蔵つておいた三千円の金を
紙屑と一しょに焼いてしまつた
あとではつと気のついた妻は
狂気のやうになつて訴へたが
後の祭！
それでも断念せず
焼跡を捜して

(幸ひ子供が早く水をかけたので)

千円札だとわかる

黒こげの残骸を持つてきた

そして

「お父ちゃん！」といつて泣きついた

翌日

町の銀行で妻は

日本銀行に行つてみるといはれた

その翌日

大阪へ所用のあつた僕は

途中日本銀行に立ち寄つた

ピンセットで丁寧に

一枚一枚調べてゐた係官は

「……ではお取り換へいたします」

とはつきり言つた

まっさらな千円札三枚をみやげとして

鬼退治の桃太郎のやうに

僕は意気揚々と引き上げたのである

ある。小太郎先生が遙々姫路から伊東を訪問
したのも、思慮の外を飛翔でもするかのやう
な愛嬢の思はくや行動を、同じ若い者である
伊東に訊ねるつもりであつたのだらう。百合
子さんは翻訳を志してゐるやうであるから、
小太郎先生は愛嬢の文学熱を新進詩人の伊東
の刺戟とでも判断して、伊東をして聖射せし
めよう……との希望を抱いて来訪されたのか
もしれない。「私の話のごく不器用なので、
そんなにうまいことお気を慰めたりはしてを
りません。」云々の言葉には、そこの気配
が感じられぬこともない。

然し、伊東は百合子さんが翻訳の道を進む
ことを勤めてゐる。其訳を意図してゐるらし
い彼女に、独力で自分の運命を拓くことを求
めてゐる。その伊東の厳しさは、第二詩集の
題名に「拒絶」と云ふ言葉をすでに用意して

ある覚悟にもうかがふことができる。就職先は東京がいまだらうか、或ひは大阪が適してゐるだらうかと惑つてゐるらしい彼女に、東京の方が似合はしい……と断言してゐるところにも「わがひと」に対する峻厳な愛情のほどが判る。「わがひと」と与ふる哀歌が昭和二年五月の或る日、河原町丸太町で百合子さんと邂逅した日から、実に八年五ヶ月間の長い忍苦の年月の愛情の結晶であることを思へば、その忍苦を心ならずも強ひた「わがひと」に対して、前述した冷厳な心情で対応したとしても別に不思議ではない。

尚、書簡中家島を詩材にした由見えてゐるが、私に示した未定稿「H島に寄す」は姫島に取材したと既述したが、家島を姫島の島と云ふ意味で、H島と表現したものであつたかもしれない。

その十一月に伊東は、「コギト」には「夏の嘆き」、「日本浪漫派」には「まが猶せざる山の夢」の二篇の作品を発表してゐる。

夏の嘆き

われは叢くさむらに投げぬ、熱あつき身とたゆあき手足を。

されど草くさいきはわが体温たいふんよりも自足じそくし、

わが脈搏なごもは小川の歌を乱しぬ。

夕暮ゆふぐよさあれ中なかつ空そらにはや風のすずしき流れをなしてありしかば、

鶴かきの飛翔とせうの道はゆるやかにその方向をさだめられたり。

あゝ今朝けさわが師はかの山上に葡萄を食くつたたまひしか、われわれ縦令王者じゆうれいおうにえらばるとも格別不思議に思はざるべし、と。

第二詩集「夏花」

この詩は、伊東の推輓に力を尽された師萩原朔太郎に捧げられた作品である。先の百合子さん宛書簡に、「わがひと」と与ふる哀歌」を島崎藤村氏に贈つてゐる由見えてゐるが、云はゞ、藤村は私淑の師、朔太郎は現実の師と言へるであらう。その藤村、朔太郎の八すずしき流れである系譜の末に、「歪みたる藤村Vと朔太郎に評された伊東A鶴Vは、ゆるやかに飛翔すべき方位を見定めてゐるわけである。

後年伊東は朔太郎を追慕して、この詩を書いた理由を次のやうに説明してゐる。「言はば時代の詩人が確乎として安坐すべ

織物

芳野 清

希望は白い鳩となつて飛び立ち
私はいつも 眠い 眠い
私の目は開かれてゐるが
何も見てゐない
私は何かしら書いてゐるが
紙には何も書かれてゐない
あゝ、私はもの憂いサラリーマンだ
時折、蔓薔薇の咲いてゐる真昼や
うろこ雲の色づく黄昏などに
永遠の郷愁の影を見る
夢の中でそれらは一層生々とかへつてくる
華麗な情感の名残りに
きこえざるサイレンの唄を求めて
永遠の逆説に悩むもの
織つてはほどく
ペーネロペーアの手のかなしみ

娘に

美堂 正義

山之口貌の詩を読みながら

その場にひざまづいて僕は一言さへげたいのである

女さまよ、と

ここまできて 私は声を立てて笑つた

娘はげんな顔をして振り返つたが

楽天的な南国人の心意が

悲痛をもユーモラスにしてゐるのが楽し

かつたから

娘よ お前は未だ若く

生きる苦しみが足りなく理解しにくいだ

らう

不思議と思ふな

今頃一段と娘らしくなつた姿は

父には眩し過ぎるぐらいだ

き地盤を先生は懸命に支へられたのであつた。先生の詩が、日本の詩の伝統に於て全く孤立してゐるかに見えて、実は詩人の時代を最深所においてつなくものであるのは、この支えである。わたくしが曾て、先生を誦つて

縦令王者にえらばるとも格別不思議に思はざるべし
と先生のお心にかはつて言ったのは、先生このこの孤獨を指したのであつた。」

(昭和七年「文芸世紀」七月号、伊東静雄「愚草」)

この王者にえらばるとも不思議に思はぬと云ふ言葉は、師朔太郎の心を代つて歌つたものであると追悼記で言つてゐるが、それは同時に「わがひと」と与ふる哀歌」を編んだばかりの氣負つた伊東の自負でもあつたらう。

まだ猶せざる山の夢

彼方に 昼は睡りこみ

懈怠はつづき夜が来る

この国の夜のならばし

野づらを覆ひ

紙え問なく

稲妻は 今宵もわが窓を射る

その十の鋭矢が

小舎の内外を十倍に

ふかむる闇の恐ろしさ

待ちまうけたるその楽しさ

わが眩みの底に

この世ならぬ山脈に

あゝ 鹿が飛ぶ

無限に 地を蹴す

その四つの脚は

刃金よりもなほ薄く

尚蒼白い屋根を飛ぶ

東京通信

田中克己

長い暑かつた夏休み中は家で暮した。珍しく勉強する氣のあつた夏休みであつた。勉強とは何をといはれるかもしれないが、第一には東洋史をだいたい熱心に考へた。これは到頭、考へがまとまらなかつたが、つづけてやるつもりである。ソ領沿海州のいい地図が欲しいと思ふ。

第二は亀井勝一郎氏の紹介で、「東洋の愛情とその表現の特徴」といふ勇ましい題名で三十枚書くことになり、考へに考へたあげ

く、八月末には書き上げた。非常にむっかし
くて、えらいものを引受けたと後悔せざるを
得なかつた。考へてもごらん、東洋、愛情、
ともに定義のむっかしい名詞で、これだけで
もそれぞれ一個の論文になる筈である。これ
をなんとかしおへたあと、もう明日に迫った
学校の講義を控へて、もう一つ難題にとりか
かつてゐる。われながら勇ましいと思ふ。お
かげで体重は戦争中の兵隊にゆく前とちやう
ど同じ。三九キロまで下った。(メートル法
実施で貫目になほす必要はあるまい)。

天野忠氏の新刊詩集「単純な生涯」(京都
コルボオ詩話会、三〇〇円)をいただいた。天
野さんとは昨年春まで二年間、奈良女子大
でよくお目にかゝった。その後、体を悪くし
たといふので心配しながら見舞も差上げなかつた
だけに、この本の出たことを大変うれし
くお目出度く見ふ。作品はみると上の出来で
ある。実は出版のことを佐々木邦彦氏に承つ
て、「上手でせうが」といふと、「上手です
よ」とのお答であつた。それで予想してあた
通り、日本一上手である。年よりくさいいひ
方をすれば今の若い詩人のだれかにこれだけ
書けたら、安心なのだがと思ふ。しかし
私はたくさん人間を知つた 妻さえも一

四十五年間生きてきた
あとも少し生きるだろう

パンを食べるだろう
町角の店でパンを買うだろう。(人嫌い)
上手だなと読みながら、読みおへたあと、
ひやつとしたものを感じるのはどうしてだら
う。親しければ親しいほど、こんなことをい
はれるとたまらないと思ふ。実は私もかうい
ふ表現を好んでよくやるので、これからはも
ういはないと、天野さんと一緒に約束したく
思ふ。天野さんは跋文で「ひよつとしたらこ
れでまた別の世界にゆけるかもしれない」と
いつておいである。

補聴器

池沢 茂

補聴器を売っている店は、新開地の電車通
りに面した、ほこりっぽい、あまり大きくも
ない、ラジオを主にした電気機具店だつた。
『年々改良されてゆくんですけど、いまの
ところ、これがまあ、一番よろしいですね』
出てきた女主人は生活に疲れたようすで、
ぼくと妻と義父の、三人づれの客をむかえる
と、ほつと安心し、うれしそうにした。

つた。しかし義父は『そんなに便利なものな
ら、少々高くて、いゝやないか。とにかく
いっぺん、ためしてみいよ』と、にこ／＼わ
らつていた。
そのころは一番あたらしい補聴器といつて

オスカア・レエルケ詩抄

古い 城壁

壁はほろほろと沈黙のなかへ崩れていく
そこへ目地草が沈んで、また生える
壁の中で中世は身動きもしない
壁の中で古代は嘆ぎつけられはしない
亀裂に生える草は 不具の風が
静寂をよぎってよろめくときに倒れる
風は通りすぎる それは廢墟に
青春をよびさます杖など持つてやしない
おそらく、ぼくたちはただ城壁の過去を思い
出して

時代の幻影のためにみずから階段になるだろ
う

も、大きな電池を二本入れたふくろを腰のバ
ンドにつるし、それと針金で連絡した受話器
の箱を胸のポケットにおさめ、そこからまた
針金でつながっているボタンみたいなものを
耳の穴にさしこむ式だつた。
おそらく、神はぼくたちに時代の夢をおあた
えくださるだろう
だが、世界はかつて目覚めることが出来たよ
うなものではない

花びらのように軽いものや煉瓦壁のように重
々しい
ぼくたちのまわりにやってくるものは、もう
すっかり目覚めている
朝な夕な、ぼくたちがつくつた遺物のための
ノアの方舟
スキイのない雲の楳の
未来の積荷

市の 領域

誰もいなくなつてやしなかつた
小麦さえも数えられて穂の中に眠っていた

浅野 晃著

詩集箱 船

イズムと名の附く一切から解脫し、その概念世界
を放下した氏は、今や清澄にして潤達な悟達の新
境地に到達した。こゝに編む二十五篇はさりげな
い風物詩の外貌を装ひながら、現代の病巣をシニ
カルに切開し、その膿汁を剔抉して、新生の血汐
の所在を啓示する。読者は隨所に警世と覚醒の金
言を読みとるだらう。
(頒価三〇〇円)

果樹園社刊

『いくらですか』

『一万二千円です。でもね、明石のかたで、
これを買つてから、いままで死んでるみたい
だつたのが、やつと生きがえつたつて、よろ
こんでいらつしやるかたがありますよ。それ
から、としよりのかたですけど、これまで人
と話ができなかつたのが、これのおかげで話
ができるようになって、便利で便利で、かた
ときも耳からはなせないつて、わざ／＼な
がい手紙をくださったかたもありますよ』
ぼくは義父から、金のことはあまり心配せ
んでもいゝように言われていたものゝ、自分
の月給よりずっと高額の値段を聞いて、もう
一度、義父の顔色をうかがわずにいられな

『うん、そういうえば、たしかに、よく聞こえ
るようになった。そとを通る電車の音が、急
にガア／＼いつて、やかましいくらい……』
ラジオのダイヤルみたいなのをまわして
音を大きくしながら、ぼくは女主人と義父に、
けれども悲歎の声がしづめがたくしのびでる
誰も殺されてやしなかつた
けれどももうすあかりの中で両手がががんで
大地の血をあらっている
みんな自分の場所をもっている
ぼくはここだ！
庭ではきんちゃく草が咲いている
ああ！そして星が上つていく
みすてられた水飼槽の中へ

O. Loerke (1884-1941) は表現主義か
ら出発した。かれの自然詩は現在の自然詩
人に多くの影響を与えたといわれる。

(たかはし・しげおみ訳)

どちらへともなく言った。

『そうか、そりゃあ、よかった。しかし、なんやなあ、あまりいゝかつこうとは言えんな。とにかく、そういうかつこうでは、そとへ出歩いたり、動きまわったり、あまり活発な動作はしにくいかもしれん……』

義父はやはり、わらっていた。ぼくはしかし、はっとなった。義父の笑顔は、はじめからいくらかそうだったが、苦渋の色が急に濃くなってきたからだ。つまり苦笑なのだ。電池が一本で三百円ほどかかり、しかも月に五、六人以上も取りかえなければ、勤めの時間にたいして十分でないとかかったとき、その苦笑は、ますます暗くなり、やがて、ふいに、腹立たしそうな不安の表情にかわった。『すこしくらい大きな金でも、一ぺんだけなら出してやらんでもないが、毎月、毎月、補助するような、よぶんの金はないぞ』と言っているようだった。『なんだか見込みがあるように思っ、これまでずいぶん力をつくしてきたが、なんだ、不具同然の男だったのか』と、みずから腹を立て、せむらわらつてもいようだった。

『どうも、やつぱり、ぐあいがわるいですね。こんな補聴器なんか、いっそ無いほうが、かえって、よく聞こえますよ』ぼくは急に、補

聴器の悪口を言いださずいられなくなった。『だいいち、受話器が胸のポケットにはいつているんやもの、正面の声は聞こえるけど、よこから言われたり、うしろから言われたりしたら、さっぱり聞こえん。それに、ほんとうの人間の声とは違うみたいや。ちょうどラジオの声とおんなじやなあ。だれの声やら、はっきり区別がつかん』

ダイヤルをまわし、思いきって声を大きくしたら、とつぜんピーピーガーガーと、けたましい雑音がはいったので、『あゝたまらん、頭がいたくなる』とぼくは、投げだすように、その補聴器をなした。

『なれていなさらんからですよ。だん／＼なれて、聞くのがじょうずになったら、きつと便利になりますよ』と女主人は、はら／＼し、やがて、がっかりして『あなたはそんなに耳は遠くないんでしょ。もっと耳の遠いかたでなかつたら、補聴器はお気に召さないかもしれません』と、むっと怒った顔になった。

ペテンにかけたみたいと言われて、ぼくは顔があげられなくなった。しかしぼくは、ほんとうは、ずいぶん耳が遠いのだ。たゞりバノール液にひたした綿球を耳の奥のほうに入れ、それを鼓膜の代用におぼえてから、ふつうの会話にはどうやら差しつかえ

不安と危惧

— 分裂とその対応に —

堀ノ内 歴

ちよつと停まっても、次から次と不安がお前の中に出て来ると云う。その時々のもが、私には判っている。その時お前がお前ですらないのも……固く握られているお前の掌の中で緊迫が醸す不眠の脂汗こそ、にち日の成れ果てのお前自身だと云う事も……お前は私の目前で壁となつて立ち気おちと疲労とで残骸じみた自分いら立ってなす術もしらぬらしく此方を視る眼に焦点が失せている危うく、私がお前の肩を叩くと奇妙に一声「オーツ」と云うとつとあちら向き、解き放たれた如くに嬉しげに足速に去る。そのお前が本当は猶何一つ判っていない事がふと私には危惧せられ、呼び止めてそう云ってやろうとするのだが。

一九五八、八、二七

逝きし夏雲

服部 三樹子

寝返れば我身を越えて土に消ゆ秋の夜冷えの雨のあし音

遠くより物など負ひて来しものとまどひさせて逝きし夏雲

夏の空終りも知らぬ雲置きて深みより来る澄みし青さは

物音の身に近づくと見て覚めし衾をこえて夜の雨降る

みし影はそのまゝ、うすれほの白む夢のつづきに地震ふりてみき

弱りつゝ舞ひ降りて来し秋の蛾の臥所となりし独り寝の肌

道ばたに教へられたる花の名さへついで忘れたりましてその名を

何虫の一念ならむ単調なる雨音の中きれぎれの声

秋早き夜の短かさをかこつことよべにたがはぬ眺の虫の音

我が知れる人の限りに告げましと思ふ一つをかき抱き寝る

もの忘れしたる心地に見返れば雲より今日の思ひもとなし

ひぐらしの声に先立ち鳴く虫に遅れて知りぬ肌の冷たさ

ない程度に、やつと人為的に、聴力を回復させているにすぎない。そういう代用の人工鼓膜だから、どうしても、とき／＼は、よい調子にいかないときがある。そんなとき、会社で、同僚や古参たちから、いじめられ、からかわれるのではないかと思うと、ぞつとなり、おそろしくなってしまう。目のまえが暗くなり、おびえるのだ。やつぱり、なんとしてでも、補聴器は買わねばいけない、とぼくは思ひなおした。

『年々改良されてゆくそうやから、そのうちに、もっといい補聴器が出来てくるやろ。ちよつと耳にかけておくぐらいな小さな機械で、ていさいもわるくない、そういう補聴器が現にアメリカにあるとしたら、日本でかて、やがて出来るようになるはずやないか。とにかく、きょうのところは見るだけにしといて、こんどまた、もっといい補聴器が来たら、そのとき買うことにしようやないか』

義父はしかし、そのとき、こう言って、店から出ようとしていた。あらためてたのもうとして向けたぼくの視線を、義父は別の意味にとつたのかもしれない。ぼくと妻をうながして店から出ると、重荷をおろしたように、だん／＼晴ればれた顔になり、足とりも、

うき／＼しだした。

『むかしは五年や十年たつても、そう大して世のながが変るように思わなだけど、このごろは、きょねんとことは、もう、だいぶ違ふ。らいねんになったら、どうなっているかわからん。ラジオでも、年々あたらしい機械が出来ていきよる。おまえにはあまり関係ないかもしれないが、農業や農機具なども、どん／＼あたらしいのが出来てくるのは、おそろしいくらいや。むかしの農業とは、まるきり違つてきたな』

『ひとつは戦争のせいでしょう。日本は戦争のおかげで、十年も二十年もおくれた。そこへまた、十年も二十年もすゝんだアメリカの機械文明が、どん／＼はいつてくる……』

『とにかく補聴器でも、あと何年かしたら、見違えるほど改良されてくると思うがな。ありがたいことやないか。ふつうの者でも、としをとつたら耳が遠くなる。まして耳に故障のある者は、もっと遠くなると思わんならん。それでも、そういう機械が出来てきたら、そんなに不自由はせんでもすむ。としとつてからでも働けると思ふたら、安心していられるやないか』

うき／＼としゃべりだした義父に、ぼくはたゞ調子をあわせていただけだったが、この

諫早詩篇

上村 肇

昨年の大雨で
沢山の死者を出した
私のいる街の上を
今年も又 颯風が過ぎていこうとする。
街には釘を打つ音が
夕方からさかんに聞こえ
河の畔りの小さい家々は
屋根に石をのせ
人々は暗い一夜をすごす。
颯風はすこしばかり針路を変え
嘗てこの街が荒れたように
いまは遠い街や村が荒れている。
人々は朝早く眼覚め
新聞をよみ
とほくの知己や肉身に
見舞の葉書や手紙を出す。

義父のことばは、ふいに、ぼくの心にしみた。さしあたって補聴器は買えなかったものの、その存在を知って、としをとるまで安心して働いてゆけると思えるのは、義父が言うところ、ありがたいことではないか。しかも補聴器を使わねばならぬ時期は、もと／＼鼓膜に損傷のあるぼくには、案外早いかもしれないのだ。それにしても、補聴器をかけた男などに、末ながく、安心して働かせ、給料を支払って、人なみに生活させてくれる場所が、この世のなかにあるだろうか。いまでさえ、耳のために、よろめかされ、打ちたおされそうになっているのに……。

「なるほど、そうですわね……」

——どうだ、安心しただろう、よかったな——
——そういうように、ぼくと妻のほうへ晴ればれた笑顔を見せた義父に、ぼくも、うれしそうに笑えたが、その語尾は、ふと、とぎれた。「自分で勝手にそう思っている、さて、どこの会社が、としをとるまで、ぶじに働かせてくれるでしょうか」ぼくはそう言いかけたのだ。しかし義父の笑顔を見、うなずきながら心配そうにぼくのほうへ向けた妻の視線を感じると、そのことばは、口ごもったまゝで消えた。そして、さかんに行きかっている市電やバスやタクシーや、いそ／＼と近

くの新聞地へあそびにゆく人々のむれが、なんだか、遠い夢の世界みたいに見えた。

編輯後記

八月二十八日読売テレビ開局記念カクテル・パーティで数年ぶりで吉井勇先生にお目にかゝった。「君の文章は読んであるヨ」と、御無沙汰のお叱りもうけず有難い言葉を賜った。少しお腹せになり顔になられて讀くとなつたシミにも無量のコクが感じられた。御祖父友実伯の日誌二十冊を基にした新構想をお持ちの由で、老来いよくかくしやくとなられた先生をお慶び申し上げた。

九月一日九州旅行の帰りに西垣篤氏が立寄ってくれた。諫早で伊東の墓と詩碑に参つて下さった由である。伊東の堂も佛文学の新鋭であるこの教へ子の成長ぶりに固喜したに相違ない。

九月六日早大教授川副國基氏から敬助の贈書をいたゞいた。今春氏が渡欧に際しては、留守宅に忘れぬやう拙誌を送ることを要請せられた。無事帰朝されての御挨拶であつた。

締切間際に浅野兎氏の詩集「箱船」が刊行された。岩崎昭弥、平光善久両氏の尽瘁により見事なできである。内容の秀抜であることは論をまたない。況んや口説をおすゝめする。(O)

果樹園三十三号昭和三十三年十月二日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園三十四号昭和三十三年十一月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同明舎 定価三十円

果樹園

第34号

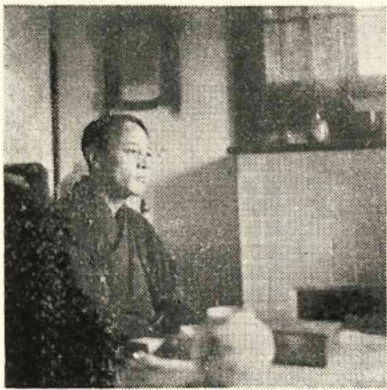
書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
誕生 堀口太
うつつと 堀ノ内 歴
演 劇 福地邦 樹
百 舌 山根忠 雄

東京通信 田中克己
古典蕪情図 芳野清
聴力検査 池沢茂
レエルケ詩抄 森 しかおは
白居易詩抄 浅野亮
遍歴の歌から 美堂正義
時 編 輯 後 記

書簡から見た

伊東静雄(三十三)

小高根二郎



応接間に於ける晩年の萩原朔太郎氏

伊東は先の号で、稲妻の射す二階の窓から屋根を飛ぶ鹿の幻影を見て歌つてゐたが、まるでその傷のついた鹿のやうに、夜も十時と云ふ時刻に、私のアパートの扉をあわただしげに叩いて、息せききって伊東が飛び込んできたことがある。

「すみません。一寸かくまって下さい。」と、苦しげな息で鼻翼をふくらせた伊東は、空いてゐる椅子に腰を掛けた。「家の者と、喧嘩して、きたんです。気を鎮めるため百米ほど、たあーつと、コンクリの道路を走つて、来たんです。」と、書架の前の椅子に背を丸めた。眼だけが闇に蹲る猫みたいにキラ／＼してゐた。私は応答のしやうもなく黙つてゐた。伊東は眼を光らせて息を調整してゐた。が、やがて落ちつきを取り戻した伊東は、書架に手

を伸ばすと一冊を抜いた。第一書房版の永井荷風氏の『珊瑚集』である。

「これを暗誦すること。それが詩上達の秘訣です。岩波版があるでせう。あれをポケットにしのばせてゐて暗誦するんです。」と伊東は前置すると、ポオドレルの「死のよろこび」「腐肉」、ヴェルレーンの「びあの」、レニエの「葡萄」、ノワイユ伯爵夫人の「西班牙を望み見て」等を片々端から朗唱した。自作の朗唱と同じ節廻しである。それから『珊瑚集』と上田敏氏の『海潮音』との比較論をやり、軍配を『珊瑚集』に挙げた。

この深夜の来訪は、伊東の跳躍の飛ばつちりであった。この跳躍と飛翔を意図した伊東は、家族——とりわけ老母のハッさんと当時よく衝突したやうである。

「親なんてちつとも有難いもんでありません！」と、吐き棄てるやうに言った伊東の言葉を再三聞いた覚えがある。伊東にすれば丁度親の負債一百万円の返済に苦労してゐる頃であるから、私は伊東を格別の親不孝とも思はなかつた。ハッさんにしてみたら、負債までして大学を出してやった息子が、折角大学を首席で卒業しながら、中学教師に甘んじてゐる不甲斐なさが愚痴の種だったのだらう。しかも飯の足しにもならぬ詩なんぞに専念し

てゐる。詩を作るよりも田を作れ……と昔から相場が定つてゐる。おまけに伊東の月給三級俸百拾七円也を遙かに上廻るやうな大金を投じて、売れるか売れないかも判らぬ詩集まで出したつてゐる。

当時、伊東の家に、法政大学講師を辞して布施施あたりに仮寓してゐた大山定一氏が來遊することがあつた。伊東は大山氏の勧めで、「ヘルデルリン詩集」を共訳すると云ふ希望を抱いたこともあつたのである。又、大阪高等学校の教授で、京大講師を兼ねた桑原武夫氏も時に入りにしてゐたのである。伊東にしても、すでに三年前、つまり、昭和七年七月二十日付で無試験検定による高等学校高等科国語科教員免許状が下附されてゐたことである。没落した伊東家を再興する榮達をハツさんが熱望したのも当然であらう。

当時の伊東と老母ハツさんの口喧嘩を伝へる文章がある。それは妹りつさんのことであつた伊東とハツさんの間の紛争であるが、奥の部屋から九州弁で抗議するハツさんに対し「やかましい！ おまえは、だまつとれ！」と、伊東はにべもなくきめつけてゐるのである。(昭和二十八年「祖國」七月号)私を深夜訪問してきたあの夜も、恐らく伊東は「やかましい！ おまえは、だまつとれ！」とハツさんに嗚咽

を投げつけて家を飛びだすと、人通りの絶えた住吉街道を太閤の休息所趾のあたりまで、蒼白い屋根を飛ぶ幻想の鹿をまねてすつ跳び、その帰りに訪ねてきたものであらう。

伊東は後年当時を回顧して、「実生活の上では、非常に危険な時期であつたやうな気がする。詩と同じ程度に、いつもその頃は故知らず激してゐて、家の中に居ても、並外れた言動をしてゐた。」(昭和十五年「ゴギト」五)と書いてゐる。

かうしてゐる間にも「わがひとに与ふる哀歌」の出版記念会の話は、保田氏の斡旋で次第に煮詰つてきたのである。

十一月十二日には、萩原朝太郎氏から出版記念会を催促された保田氏は報じ、併せて昭和十一年「ゴギト」一月号は出版記念特輯号とするので、知人に原稿を依頼するやうに伝へてゐる。

十一月十六日には、伊東から二十四日の夜東京で出版記念会を開きたいと言つてきたと云ふ話を、萩原朝太郎氏から伝へ聞いた保田氏は、その夜辻野久憲氏に會つて記念会は希望の二十四日新宿で開くことを定め、二十二日の夜行で上京するやう伊東に連絡してゐる。

十一月十八日には、発起人は保田与重郎、

誕生日

堀口 太平

きようは、あや子の誕生日。

うらの野村さんから、赤いカッコをお祝いにいただく。

夕方、店の人や文子たちに赤飯を出す。

あや子は、主人だから、

暑いけれど、赤い洋服をきてもらい、

リボンもつけてあげる。

吹く風もめでたく、

星も、白く光つて降つてきそうだ。

夏の風をうけた、十六ささげの実のよう

に、

大きくなって、

あや子は満一才になる。

(一九五六・八・四)

うつつつと

堀ノ内 歴

年毎に月の光はいよゝひかり
知らずに 私はいよゝ老ける
あんな激した心などは もう

「昨日」と一しよに消えて

月の面を妖しく次々と横切る千切れ雲の
徒らに 撫でるにまかせ

灯つけない我が浅い内陣で 居ながらに
長々と脚脛を投げやうっているのは
いたくわるい仕ぐさで

樽々と今日も夜陰のはて迄時遅れしては
凄惨な月光の流れの尖に出会つては
服装は遙かな昨日のままで 色もあせ
曠しい嵩となり

硬は張つた貌は永い埃に白けている
その滑稽さを笑えずにいるのだが 今
月の光が膝元に重く夜露を寄せて來
次のお前の寝所に就けと云う。

(一九五八・九・二七)

萩原朝太郎、辻野久憲、淀野隆三の四氏であり、出席者の予定は二十名位だと保田氏は知らせてゐる。開催場所の略図も添へられてあつた。

この保田氏の書簡の封筒には、その返事である電文の草稿が書かれてゐる。二三オヒルオタクニユクイトウ。この電文から察すると伊東は二十二日の夜行で東上をする手筈を定めたのである。

この十八日には伊東が最も愛好した詩人中原中也氏から『わがひとに与ふる哀歌』の礼状も舞ひ込んだ。

「冠省

御詩集難有拝受しました。先は右取敢えず

御礼迄

忽々」

(昭和十年十月十八日東京市牛込区市ヶ谷谷町六二
より東京市中野区大和町二五二コギト発行所宛附
伊東静雄宛はがき)

紋切型の礼状だが、伊東にとっては中也の処女詩集『山羊の歌』以来馴染みの枯れた筆跡である。と云ふのは、伊東は『山羊の歌』の少数い予約購入者の一人だつた。文圃堂から送られて來た同集には、恋文のやうな、或ひは文反故のやうな中也自筆の紙片が挿入されてゐたからである。

「どうです。いゝでせう……。これが中也の含羞の表現なのです。」と、夕映の明るみ

だけの例の女関兼書斎の二層で、私は伊東から中也自筆の紙片を見せられ、彼が愛好した「秋の夜空」の朗唱を聞いたことがあつた。伊東は予定通り二十二日の夜行で東上し、二十三日の昼に高円寺に保田氏を訪ね、一緒に新宿三越裏の路次にある会場——焼鳥屋の二階に行ったのだらう。

その会の模様を、帰阪した伊東は早速私に知らせにきた。日曜日であつたらしく、その訪問は珍らしく朝だつた。朝風呂の帰りらしく、伊東はタオルと石鹸箱を入れた小さな金盥を抱いてゐた。洗ひたての頭髮は針鼠のやうに立ってゐた。

「出版記念会で上京してたんです。」伊東の諸ら顔は、磨きたてのせみばかりでなく、その盛會を伝へる喜びに輝やいてゐた。が、その喜びを抑制するためだらう。保田氏を訪ねて一緒に銭湯に行った話から披露した。彼は上り湯で丹念にタオルをゆすぐ保田氏の習癖は、貴族趣味でいやらしいと言つた。誰の垢でも、垢は垢ぢやアありませんか……と、云ふ風なことを言つた。私も銭湯で伊東と一緒に立つたことがあつたが、彼はタオルをゆすぐながら私の裸身に狼の眼を凝らしてゐた。後日彼に出會つた時、あんなの「石の歌」が初めて判つた、裸のぎら／＼したあれなん

すね……と言った。後年彼は朝太郎先生が来阪した際、新世界のラヂョーム温泉に案内した。その時の先生の裸身の印象を彼は次のやうに書いてゐる。

「先生の思ひつきで天王寺公園のラヂョーム温泉といふ大きな風呂と一緒に入り行ったことがあった。先生は幼時ここで萬國大博覧会があった時見物においでになつて、通天閣や、ケーブルカーをなつかしく印象していらつしやるやうであつた。しかしその時は一向興味を覚えられない風で、まひるの白々しい大風呂の中を見まはしながら、つまらない」と云つておいでになつた。私はその時、先生の御体格の中々立派でおありのことに驚きもし力強くも思つたのであつた。そのことがいつも頭にあつた。」(昭和十七年「四季」九月号、)

追悼記ではこのやうに書いてゐるが、眞実は、「鶴のやうかと想つてゐたら、豚のやうにプテプテなんですよ。」と、彼はたるんだ胸と腹を抱へるやうにして、明らかに失望の表情をして見せたものであつた。

話が余談にすぎたが、その朝太郎先生が記念会の席上で活躍されたさまを伊東はこれも身振り入りで披露した。型通り出席者の「わがひとに与ふる哀歌」の批判が次々と進んで

宴も終りに近く、朝太郎先生は茶漬を小ぜはしく掻き込んでおられた。その時、誰かの評言が先生の裾に触つたらしつた。いきなり先生は茶碗を抱いたまゝ突ッ立つた。唇と頬のあたりはばあつ……と汁に濡れ、米粒まで附いてゐる。

「さう言ふお前達が詩を墮落させたんだ！」と先生は一喝されると、手に持つてゐた箸で「お前もだ!」「お前もだ!」と、なみある出席者のなから幾人かの詩人を指彈されたと云ふのである。さう語つた伊東の眼は歓喜と榮譽の思ひで燃え上つてゐた。

発起人の一人である淀野隆三氏の記憶によると、朝太郎先生を激昂させたのは三好達治氏の発言のやうである。三好氏は朝太郎先生の批評は過褒にすぎると論じたからである。

さう……三好氏に発言させるほど、眞実、朝太郎先生の批評はべた惚れで、現代の抒情詩人は伊東一人しかゐないと云つた極言で、なみある詩人達の眉をひそませるほどのものであつたと云ふのである。三好は割引を強ひた。朝太郎先生は頑として肯じなかつた。そこで伊東が語つた朝太郎先生激昂の場面となつたやうである。

伊東は中原中也氏の隣席に位置したらしつた。彼は『山羊の歌』を購入した畏敬の氣

演劇

福地邦樹

最近父をなくした生徒が父親が獄につながれる芝居をやっている去年まであんなにへたくそだったのに今日は他を圧して熱演をしているその事情を知っているものは演劇部員だけだ

一と月前 彼の父は夜釣りに行き朝水死体となつて発見されたのだ彼はこの劇を思ひ出して 明後日立つて故郷の九州にひきとられてゆく

私がねらう照明の光を受けて主役である彼は殆んどどもりながら父の無実を主張し友人達を狂おしく罵倒し続ける

百舌

山根忠雄

朝

登校の途すがら

電線に一羽の百舌が啼いてゐた
なんとなく

——青天に有明月の朝ぼらけ

——湖水の秋の比良の初霜
と蕉門の連句を口ずさむ
この平凡な風景の与へた
新鮮な感動は意外に強く

電車に乗つてからも
それは心中に長く快い尾を曳いてゐた
ヴィオロンの澄んだ高音のやうに……
遠い遠いうす雲のやうに……

持を伝へたらしつた。会が果て、一同は席を立つたが、伊東に宿泊をすゝめる誰もゐなかつたのである。

「コゴトつて水臭いんですよ全く。同人の誰も家に来て泊れとは言つてくれないんですよからね。」と、歓喜に明るんでゐた眼を、伊東は急に狼の眼に影らした。

伊東は中也に家に泊れと誘はれた。彼は途中でおでんやに誘ひ込まれた。そこで中也は詩でのオドケと同じ調子で、おでんやのおかみや女にさんざ道化てみせたと云ふのである。さて勘定と云ふ段になつて、「おい。伊東君。ところで東京と云ふ所は妙な所で、お上りさんの方で勘定を持つ仁義になつてゐますんですが……ヘイ。」と言つたと云ふのである。伊東はむツとした。誘つた方で払ふのが仁義の常道だ。さもなければ割勘だ。「この不良青年奴!」伊東は不良中学生にでも対する調子で、教師然と肩を怒らしたやうである。

が、宿のない哀しさ。伊東はみすみ勘定——宿銭の前払——をさせられたのだと云ふ。それから伊東はよろめく中也と肩を組んで谷町の中也の家に向つた。途中或る大きな家の前で伊東は一服さされた。「あれが装幀家の青山二郎の家です。」と中也は説明した。「大

家でなく大家なんです。彼は……」と、徹

頭徹尾、道化てゐたと云ふのである。

「今度中原に会つたら絶対に向ふ持です。それとも割勘です。おでん屋代を支払はされたことが口惜くて、口惜くて……」と伊東は言ふと、金盃を抱いてとツと帰つていつた。

東京通信

田中克己

浅野晃さんの詩集「箱船」が出た。ここに収められた作品は、作者のあとがきによれば、ここ二三年のあひだに「果樹園」と「文芸日本」とに発表されたもの、由である。

実は浅野さんは古い詩人である。三高時代に作られた詩が、当時の三高生すべてを驚歎させたことは御自身から承つた。それがどんな詩であつたかはまだ調べてゐないが、私どもが「コゴト」を出しはじめたころ、北川冬彦の主筆する「麵麴」といふ同人雑誌に刀田八九郎といふ詩人がゐて、特異な毅然たる詩を書いてゐた。わたしは同じ年輩の新しい詩人だと思つて、親しみと畏れとをかねていつも読んでゐた。

これが浅野さんであつたことは、ずっと後になつて、評論家としての浅野さんを知るや

うになってから、はじめてわかり、わたしは驚くと同時に、浅野さんならあたりまへだと感心した自分をも慰めたことであつた。

その後、永いあひだ浅野さんの詩は見なかつたやうに思ふ。「青墓」といふ源太義平をうたつた長い叙事詩が単行本で出たことはおぼえてゐるが、詩集はたぶんこれをはじめではないかと思ふ。「文芸日本」の会でも楠山潤さんに申上げたが、このごろ久しぶりに浅野さんの詩がたくさん見られるやうになつたことを喜ぶのは、わたしだけではいけないだらう。刀田八九郎のころと同じく、その作品はみな特異である。どんな点でと問はれれば、毅然とした慷慨の点でと答へよう。わたしどもにはない慷慨である。毅然としかいへない、独自の史観、独自の哲学がその根底にあつて、これは世上に多い「抵抗物」とは質を全く異にする。温かい情が底に溢れてゐて、なにか杜甫の「遲暮の眼」といふものを感じさせ、わたしは懐かしく、ありがたく、同時にこの大先輩ともっと詩を語る機会をもたなければと思つた。

(果樹園社・三〇〇)

滋賀県の彦根へわたしは住まつたのは、昭和二十五年の夏から十ヶ月ほどで、わたしはその冬の寒さに慄へ上つたが、人情の濃い詩

人たちとは、おかげでよそよりも、もっとありがたがって交際した。井上多喜三郎、武田豊、杉本長夫などの詩の先輩、中でも歌人で同時にわたしの心臓脚氣、喘息の主治医だつた河村純一先生とともに、小林英俊氏が一番親しくしていただいた人である。正法寺町といつても旧の中仙道の向ふの山麓までは、歩いてずいぶんかかったが、たびたび訪ねて行つた。

詩人が実は僧職にあつて、村人から御院住さまと呼ばれてゐることは、このおかげでわかつた。挨拶する檀家の人に気さくな挨拶をする詩人は、権大僧都今東光氏とともに、わたしの考へてゐた僧侶の観念を變更さすものであつた。

わたしの固定観念などどうでもよいが、今度、これも彦根の友人岩崎昭弥、藤野一雄二氏の骨折で出た小林さんの詩集「黄昏の歌」は、わたしの知つてゐた「小林さん」といふ観念をまた一変さすものである。情の厚い、献身的な快活な人だとばかり思つて来た作者は、この「黄昏の歌」では、こんなにさびしがりだつたかと、わたしを驚かせたのである。跋文でみづから「多分これが最初の最後の詩集となるであらう」といひ、題して黄昏の歌といひ、詩ばかりでなく、わたしたちを

久礼田房子著

歌集多羅

「炎道」「滝」の第一第二歌集で女身の最高の香りである殉刺きを暗示した著者は、こゝにやうやく人生の苦渋をも含蓄して、芳麗にして滋味を極めた新歌境に到達した。歌ひつゝ自ら傷き、又詠む者をして傷ける、歌と身と一つになる浪漫歌人の天稟が、高雅澄澄な清水比庵氏の装面に壮麗された豪華な歌集である。四〇〇円。

日本文芸社刊

堪へなくさせる。

もともと詩人とはさうしたものだ、とわたしの中の詩人もいふ。しかし小林さんはまだまだ生きて詩を作らねばならないのだ。河村主治医はこの前わたしに「小林さんは云ふことをきかないので困る。怒つて下さいよ」とわたしに云はれた。このよい詩集の出た機会に「憂き我をさとしがらせる」ために、閑古鳥のやうに、啼きつづけなさい、そのためには養生しなさいよと、はるかに叱りつけておく。

(長浜市大手町近江詩人会・二五〇)

森房子さん、改め久礼田房子さんは「果樹園」でお知合になつた。お会ひしたのは、去

年お宅でわたしの上京歓迎会をしていただいた時がはじめてである。わたしはのろまでこんな第三歌集「多羅」をいただいて、久礼田さんにはずいぶん近づかしてもらつたと思ふが、久礼田さんの方では、一目でわたしを見破つてしまはれたのではないかと思ふ。だい

古典慕情図

芳野 清

明るい陽の向ふで誰かが歌つてゐるとそのやうな秋の一日僕は君と歩いてゐた昔の事は忘れたふりしたうめもどきの実や

葉に透けた空の色に見惚れてゐたとりとめのない事はかり話してゐたしかし、僕は知つてゐた時折、君の眸に暗い炎の走るのを君の胸の膨みが切なく波立つのをあゝあれからいゝんな事があつた磯貝い浜辺で別れたきり君は僕を捨て去つてしまつた君の家の庭に咲いた百日紅を眺めては僕の胸の火が燃えてゐるのだと思ひ

ぶわたしの方が損をしたのである。

こんなことを思はせるほど、「多羅」の作は鋭敏なのである。

にがきもの唾下しながら瘦せたりし頬愛されてゐる過信なし

限りなくひとりとなれり冷水を浴びたる

何度も通つたのを君は知つてゐる筈だ

君は厚いカーテンのかけから

笑ひながら見てゐた……

僕は野良犬よりもみじめだつた

それから長い時がたつた

君が嫁いだとはうす／＼知つてゐたが

あの家がいくさで焼け

君の夫が戦死して

(将校だつたその人はグアム島で自決した)

君が病んで入院してゐると知つたのは

ふとした偶然の事だつた

僕は今まで君の事は知りたくなかつた

僕の傷が疼くから

あゝ、かうして病院の裏山を歩いてゐると

長い時の推移が夢のやうに思はれる

僕は平和なサラリーマンで妻子を養ひ

昔の情熱をほろ苦く思ひ

君はひたすら夫の思ひ出に生きてゐる

今更何も話すことなどないのに

ごときひとことにより

読んでゐて息苦しくなり、この作者との同座は気をつけねばと思はせる。わたしの会つた久礼田さんは、丁重なものしづかな奥様なのに、こんな強い拒絶感があるのかなとふしぎに思ふ。萩原さんや保田与重郎などが、早

君が切ない吐息を吐いたり

僕の胸が時々苦しくなつたり

何故だらう？ 目を上げると

君の肩に夕日が沈まうとしてゐる

君の髪は黄金に染まり

君の頬は逆光の中に沈み

長い時の距りが一瞬

ヴェールを剣ぐやうに消え去つた

僕は思はず手を君へさしたる

君の胸は僕の方へゆらめいた

しかし、僕の手は君に触れなかつたし

君は又僕にすがりもしなかつた

僕は夕日が何事もなく沈むことを願ひ

生きことは耐へることと学んできた

さりげなく引返へして

君は摘んだ龍胆を抱き

病院の門で別れた

僕は何か分らぬことを呟いてゐた

アルカイック・ロマンチズム……

くかち久礼田さんの理解者だったのだ。世俗の卑屈や虚偽などに対する、この激しい拒絶はそれなら当然なのだ。わたしなどいつのまにか、その卑俗やまにあはせの挨拶に身を浸すやうになってゐたのだと、あらためて感じさせられた。

木

しかし作者は意識してか、しないでか終りの方で、急にまたわたしたちをそばへひきつけられる。挟みこまれた清水比庵さんの画く爛漫たる桜花が、なにか秋空のやうな歌境からの転換を思はせたあと

学問に一途の肩の片方を落して夫がゆく下道
かけがへなき人精神に出でゆけり半ば自
が身と見ゆる後姿
と、ぬけぬけと歌ひ上げて、いつでも訪ねていらつしやいと、夫人は笑つておいでである。わたしも楽しくなつてこの歌集をとぢた。

(東京千代田区神田鐘屋町日本文芸社、四〇〇)

聴力検査

池沢 茂

『あなたはなぜ、そんなに、耳がわるい、耳が遠いって、耳のことばかり気にするの。耳なんか、そんなに遠いことないやないの。』

詩集箱 船

イズムと名の附く一切から解脱し、その概念世界を放下した氏は、今や清澄にして潤澤な悟達な新境地に到達した。こゝに編む二十五篇はさりげない風物詩の外貌を装ひながら、現代の病果をシニカルに切開し、その脳汁を別括して、新生の血汐の所在を啓示する。読者は随所に警世と覚醒の金言を読みとるだらう。(頒価 三〇〇円)

果樹園社刊

すこしぐらい遠いかもしれないけど、そんなに気にするほどやないと思うわ』
『わからんやつやなあ。あまり目立たんくせに実際は耳が遠いというのが、いちばん困るんだよ。もっと遠くて、補聴器をかけねばならんほうが、気はかえって、らくやないかと、思うくらいなんや。目立たん程度に遠いために、いろんな話が、かんじんのところで、ぼつ／＼、抜けたり、まちがったりする。ぼつ／＼と、わずかなやうだが、ながいあいだには、つもりもつって、たいへんなことになるんや。誤解をまねいたり、全然反対の結果になつたり、ひとり合点して失敗したり……結局、ふつうの人にはわからんやうな苦勞をかさねながら、らくをしてるやつらのために、どん／＼追いぬかれてゆくんや』
『そうかしらん。そういうこともあるかも知らんけど、それだけやないと思うわ。もっと大事な、もっと大きな原因が、なにか、あるように思うわ』
『……』
なんべんか妻に注意されながら、あいかわらず、泣きわらいみたいいな、ゆううつな顔をして帰つてくるので、夕食のとき、また、こんな会話がはじまる。そして、こゝまでくる、と、ぼくは一層、むっと怒つた顔になつて、

求めるほうが、まちがっているのではなからうか。ぼくだけが、なぜ、そんな重荷を負わねばならないのか。……ぼくはそうして、とつぜん怒りだすのだ。『ほかに、どんな原因もあるもんか。根本の原因はすべて耳だよ』といきりたつのだ。
『ほんとうにそう思っているの。耳のためにそんなに、苦しんだり、つらい目にあつたり

レルケ詩抄 2

牧神の音楽

遠い空の果てから筏が漂ってくる
それから たえだえにかすかに聞こえてくる
あまい なつかしいサラバンド
ぼくの眼はうるんでくる

広大な地平線を 魂が
わたるときはこんな気持なのか
陽の当たっていた平野の上で
空が予言者のように耳をすませている
すると さらに上の空がつけるのだ
その耳もとに あわれな調べを
そのうたはよるめき けれど消えることなく

せねばならないの』
『そうだよ。なんべん言うたら、わかるんや。そこの世界や人間に接してゆくのは、第一に目、そのつぎが耳やないか。その耳に故障があるということは、世のなかへ出ていったり、人と接したりするのに、言うに言われん重荷を負っているのと、おんなじことなんだよ』
『耳のために、ほんとうに、そんなに悩んで

光は光のなかをゆらぎいくのだ、と
今日 世界の神が筏にのつていく
葦の筏に坐つて
和やかな、おおらかな、たそがれゆく
世界を奏でて聞かせる
世界のおおいなる光をうたいがちだが
それは流れの底深くから
平野を通りぬけていく 長い旅路の
幽愁と永劫の香りをはなちながら
神はやさしい口もとの調べで
平野をひらき 町々をたてならべ
すべてのなりわいをみちびいていく
その果ては遊び暮らして亡びゆくまでも

いるんやったら、いっぺん大きな病院へいって、よく見てもらつたらいいと思うわ。むかしと違って医学は進歩してるんやし、なおしてもらえるかもわからへん。なおらんとしたところで、どれほど耳が遠いか、はっきり検査してもらつたら、安心できると思うわ』
『……』
ぼくは妻を上目づかいに、にらんだ。いき

けれども万物は静かに楽みを味わうかのよう
眼をときすこともなく 耳もおおわな
かくして神はおおいなる流れの上を
安らかに旅して 世界を奏でて聞かせる
かくして神の光は旅をつづけ まもなく
オリオン、白鳥、大熊のそばへ達するだらう
それらは世界の筏師をのせた筏を
空虚な海のなかへ照しだすだらう
母なるハアモニカはまもなくなりやむだらう
ぼくの魂もねむりいるだらう
まもなく高い風が吹きおりてくるだらう
そしてどんな深い思いもなくなつてしまふだ
らう
(たかはし・しげおみ訳)

白居易詩抄(十七)

森 亮

冬 夜

虫の声の物思はせる冬の哀れは秋をはるかに
越えるもの。

愁へを知らなかった人も聞いて愁へを知るだ
らう。

わたしは年寄りだから畏れず耳傾けるが、
年若い者はうっかり聞き入ってはいけない。
一すち一すちそれは白髪を君の頭に植多つけ
てゆくから。

★

ぼくがこれまで思いこんでいたように、こう
いうことは全部不可能だとしても、どの程度
に耳が遠いのか正確に診定してもらおうのは、
たしかに必要なことにちがいない。

いら／＼と腹立たしかったぼくの気持は、
ふいに、ゆらぎ、とけはじめた。ぼくをいじ
めたり、からかったりしているように見えた
妻は、たぶん、ほんとうにぼく自身のためを

悟 道

かたち有る物のむなしさを知らせて仏のみち
を踏ませようと

この花咲く樹は精舎の庭に植ゑられたのだ。

つくづく眺めて思ふところを華嚴の經文はす
でに歌ってゐる、

——法のたづきの風にひらくや智慧の花。

註 「冬夜」の原詩は冬夜聞虫(三の八三〇)で、次
の「悟道」の原詩は體院花(三の八八五)である
二篇とも白居易が五十七才頃に作つたものであ
る。

正誤 白居易詩抄(十六)の「途上懷郷」の結びの句
の「はや黒はみ」は「はや黄はみ」が正しい。

思ってくれているのだらう。大体、わざわざ
病院へゆくなどとは、自分からは言ひだした
くないことなのだ。それを妻のほうから、はっ
きり口に出してくれたのだ。

『どの病院がいい、やろな』
ぼくはすなおになつて、もうゆくのきま
つた問いかけをしていた。

『県立病院がいい』と思うわ。あそこやつたら

りたっているぼくを教えさすように、おち
ついて、微笑さえも含んで、つき／＼と言ひ
こめてくる妻が、なんとなく、カンにさわつ
たのだ。が、ぼくはまた、うつむいて、思い
かえした。ぼくは大体、自分は耳はもう絶対
になおらないと思ひこんで、理解や同情を求
めている。そのくせ、耳について忠告や注意
を受けたりすると、まっさきに「なにをいま
さら」という気がおこつて、むしろ腹立たし
くなる。じっさい、母が生きていた子どもの
ころはなんべんか医者に連れてゆかれたもの
、その後は自分でい／＼かげんに治療してお
くだけだった。一度、うみがあまり多量に流
れだしたとき、近所の町医者で、簡単に治療
してもらつたことがあつたけれど、そのとき
からでも、もう二十年以上になる。しかし医
学は戦後、急激に進歩しているのだから、中
耳炎なども、二度と再発しないように、徹底
的に根治してもらえるかもしれない。うしな
われている鼓膜なども、どこかの皮膚をとつ
て植えつけるなどの方法で、なんとか再生で
きるかもしれない。ぼくは自分で、リパノー
ル液にひたした綿球を耳の奥のほうへ入れて
人工鼓膜にしているが、こんな我流のまにあ
わせでなくて、ほんとうの人工鼓膜が出来て、
聴力なども完全に回復するのかもしれない。

神戸でいちばん大きいし、それに……」

『じゃあ、こんどの公休日はいこう。こんど
の公休日という……なんや、あすやないか』

妻が言いきらないうちに、ぼくはもう、返

遍歴の歌から

浅野 晃

時間はわが伴侶であつた

彼を信頼しなかつたわけでないが

ときに軽蔑したり忘れたり

もつとわるいことには憎んだりした

あるとき北の曠野でふみ迷つた

黒砂糖をなめなめ考へこんでゐたら

彼のことを想ひ出した

彼がいまもわが伴侶であることに

自分はぞつとした

自分は彼を喚んだが 彼は眠つてゐた

いくらゆさぶつてもさめない

地肌も草も妙に白ちやけてゐた

彼は疲れてゐたのだ

そのとき夕映がし

事をしていた。みなまで聞かないでも、わか
つている気もしたのだ。県立病院なら、ぼく
たちがまだ大阪にいたころ、義父と知りあい
の医者がいるというので、わざわざ神戸まで

もえる雲がふちを黄金に飾られて

何の物音もなく声もなく

自分はそこに立ちどまり

礼拝をした そのとき

青くけむるわが心象宇宙の底に

かなしく透明な

天の紅雀がすがたをみせ

孔雀は羽をひろげてみせ

するとふしぎな力が湧いたので

自分はまるで自由射手のやうに

孔雀の羽で時間を打つた

わが伴侶は即座に目をさました

あのとき彼が自分を見つめた

あの目のかやきが忘れられぬ

夕映よ

おまへの下で自分はいつも

打たれて立つ

銀河をひたす大きな流れに洗はれて

来て、入院したことがある。妻はそのとき、

付きそいになつて、十日間ほど、ソファのう

えで寝泊りした。小さな個人経営の出版社に

勤めていたぼくには、健康保険などなかった

から、義父はこのために、二万や三万の金は

十分使っているにちがいない。子どものじぶ

んから何十年ものあいだ苦しんできた痔だつ

たが、この十日ほどの入院で手術をすまし、

ぼくはすっかり、なが年の苦痛から解放され

た。やはり子どものじぶんから悩んできた耳

も、おなじ病院で、おなじようにしてなおる

かもしれない。妻はたぶん、そう思っている

のだらう。ぼくはしかし、このように推測す

ると、ふとまた、苦笑にかまれるのだ。「耳

は痔とは違う。どんなにしたって、なおるも

んか」と思うのだ。それでも、ぼくの知らない

医学の進歩によつて、なんとか、なおせる

よになつていないとは、自分からは、とて

も断言できない。おほつかな希望みたいな

ものが、やはり、底のほうから、ゆらぎだし

てくる。

『こんどは健康保険があるからい／＼なあ。ま
えみたいに世話にならんでも、安心して病院
へゆける。手術せんならんようなことになつ
てもな……』とぼくは言った。

☆ ☆ ☆

時に

美堂正義

私は時に地図を開いて見る
曾遊の地を眼で追ひながら
嘗つてのことをいろいろと思ひ出す
そして
行かなかつた処には絵葉書で浮べ
想像しながら充分に楽しくなり
しばらくの間を過す
いまも別府の地獄は吹き上げ
雨にけふる阿蘇山は噴煙をなびかせ
博多のネオンは河の水に伸び縮みしてゐ
るだらう
隙と金の少ないのをかこちながら
未だ見ない土地の風物を慣れ
頭の中で固定した姿を築きあげる
夢想の世界には邪魔は入らないし
少しの不平や不満は誰れにもあつて
私だけが不幸ではないと
不孝ではないと自らに言ひ聞かすのだ

編集後記

九月二十五日アメリカから帰朝された庄野潤三氏から、
戦後の伊東の作品で唯一所載誌が不明であつた「露骨な
生活の間を」の發表紙の御教示を得て、戦後に於ける伊東の
調査もは完了した。また不明な点の若干あるのは、私の
応召期間である昭和十八年十月から昭和二十一年三月まで
であるが、大方の御支援を得て次第に明らかになりつつあ
る。伊東研究を志して四年半になるが、彼の四十八年の詩
魂の歷程を究明するのであるから、当然支払はねばならぬ
歳月である。尚、今後の教示を御願ひ申し上げる。
九月二十九日中河与一氏からいたゞいたおたよりによる
と、牧水三十年忌講演会で、井上靖氏は伊東の「夏蟬」の
詩を例にあげて激賞して下さいた由である。蟬を歌つた作
品は三篇ある。「羨望」「庭の蟬」「七月二日・初蟬」で
ある。井上氏が激賞された云ふのは恐らく蟬を聞いて嘔
吐を催す「庭の蟬」であらう。もつとも「羨望」も高等学
校教科書に収録されてゐるほどの作品だから、その方が
もしれない。私が伊東の蟬の発想を聞いたのは昭和十年
で、それらの作品が成つたのは昭和十六年である。蟬は卵
から幼虫期を経て歌を唱ふまで五六六年かかる。伊東は蟬を
歌ふには蟬の生涯に匹敵する歳月を費したことになる。も
つともアメリカには十七年蟬と云ふ息の永い奴があるさう
である。これはそのまゝ、今日の日本文芸に対するクセエ
にもなる。
十月六日久礼田房子さんから芳麗な第三歌集「多羅」を
いたゞいた。服部三樹子さんと共に拙誌が誇る國秀歌人であ
る。「君を向けてひとりゐるときじんとして何やうに親し
墳墓、蒼穹」「膝に置く子の重みなど知ることなきうな
じにて風になぶらる」「人を愛する重みを負つて昏々と春
晩き日も咲く八重桜」。現代詩に比較しても一歩も譲らぬ

果樹園

第35号

書簡から見た伊東靜雄 小高根 二郎
レエルケ詩抄 小高根 二郎
空と木 服部三樹子
白居易詩抄 森野 亮
ある不時着 浅野 晃
心のあかり 堀口 平

東京通信 田中克己
女生徒 福地邦樹
拉孟 岩崎昭弥
古城の銃眼 堀ノ内 歴
佐伯祐三 山根 忠雄
検診 池沢 茂
初旅 美池 正義
通れぬ道 芳野 清
百舌 上村 肇

書簡から見た

伊東靜雄 (三十四)

小高根 二郎

出版記念会が果てゝから、伊東が中原中
氏と行を共にしたことについては、異論があ
る。当日、中谷孝雄氏の代理で出席された夫
人平林英子女史の記憶がそれである。
女史は会場である日本座敷で丁度伊東の斜
め向ひに位置してをられた。従つて会の運営
の様子や伊東の動静が一番正確に印象された
であらう。萩原朔太郎先生は茶系色の背広を
着てをられた由である。三好氏の評言に憤激

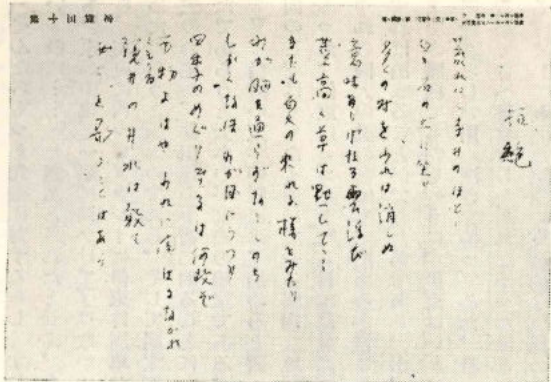
短歌を歌ひ得る数少い歌人の一人になつたとお祝ひ申し上
げる。
十月八日伊東市瓶山にをられる頼原謙蔵未亡人から御無
事であつた由のおたよりをいたゞいた。雨漏りと瓦が少し飛
んだほどの被害だつたさうである。安心されるむきもあら
うと思ふのでおしらせする。
十月十四日広島大学教授清水文雄氏が、静岡からの旅の
帰り堂島大橋近くにをられる妹さんのお家に立寄られたの
で、久し振りにお会ひできた。私は丁度今、伊東に關連し
て故蓮田善明氏に關する調査を進めてゐるので、数々の有
益な教示を得た。私は伊東が「文芸文化」の清水、蓮田、栗
山理一、池田勉諸氏と交り始めたのは「わがひとに与ふ
る哀歌」期以後であると推定してゐたが、「コギト」に参
加した頃から始つたことを知つた。これに關して成城大学
教授栗山理一氏から書簡で教示をいたゞいてゐるが、改め
て確認することを得た。さう云へば、前号に掲載した辻野
久憲と伊東の写真の撮影者は栗山理一氏であることが判つ
たので念のため追記する。
今号からとも「四季」に詩を發表してゐた堀口氏が同人
に参加した。
(O)
東京都新宿区山吹町二二 堀口 太 平

果樹園 第三十四号(毎月一回発行)

昭和三十三年十一月一日発行
池田野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
發行人 京都市下京区壬生川通五冬下ル
印刷所 同 朋 舎
池田野町一六八
發行所 果 樹 園 社
定価 三十円

した時は、すつくと立ちあがり両手をズボン
のバンドの所にもつてゆき、しきりに「ふ
ん、ふん! ふん、ふん!」を連発されたと
云ふのである。茶碗を片手に抱いて立ちあが
り箸で指弾したと云ふのは、私の聞き違ひで
あつたかも知れない。中也是一人中に置いて
伊東の右側に位置してゐた由である。会も終
りに近く、二人は互ひに上体を乗り出してし
きりに何か話合つてゐたと云ふのである。
そして会が終るか終らぬうちに立ちあがり、
参加者がまだ会場にくづくづしてゐるうち
に、二人は肩を組まんばかりにして会場を出
て行つて了つたのだと云ふ。多分、中也との
同行がすでに予約されてゐたのであらう。
その二人の後姿を見送つた保田氏は、「詩
人つてをかしいですね。あの二人は今夜始め
て会つたと思ふんだが、どつかへ出かけてし
まつて……」と、羨やむやうに言つたさうで
ある。

女史は散会后どうしたのかタクシーで朔
太郎先生と保田氏と同車して了つた。車中、
女史は「三好さんは大学時代から大麥先生を
尊敬してをられたのです。」と、とりなすと
ころがあつた。主人中谷氏と三好氏は同人雜
誌『青空』での伴侶であつた誼によつてゞで
あらう。その弁護を聞いた朔太郎先生は、



「日本浪曼派」裏表紙に書いた定稿「拒絶」

「そんならもつと先生に対するらしくすればいいのに……」と無然とされた云ふ。もしも伊東が中也と一緒に出かけて了はなかったら、女史に代つてタクシーに伊東は同車してゐたらうと云ふのである。そして朔太郎先生のお宅か、保田氏の下宿に泊ることになつたであらうと云ふのが女史の想定である。

又、当時の文学仲間には、泊めろと言へば何のこだわりもなく泊めてやる鷹揚な風習があった。伊東は『コギト』『日本浪漫派』いづれの同人の誰の家でも、泊めろと言ひさへすれば泊まることができた筈である。が、今までの歷程でも判るやうに、伊東はいかにも田舎者らしい用心深さを持つてゐた。身を切る恋でさへ譬喩でしか語れなかつたほどである。まして利発な東京の文壇的な気風の中にぼつと出た実直な中学教師であるお上りさんの彼には、泊めろと言ふ厚かましい推しつけの礼儀は存在しなかつたのである。お客さんである彼はあくまで招かれなければならなかつた。その弱身を中也につけこまれた伊東は常態以上に憤慨したのは理の当然であると言はねばならない。

伊東は前述したやうに、東京に対する感激と共に複雑な感情を抱いて帰ってきたが、その感慨を「拒絶」と云ふ作品に結晶したので

ある。その作品がまとまつた日彼は私を訪ねてくると、机上にあつた『日本浪漫派』十一月号の裏表紙に書き留め、それを私に持たせて朗読したのである。

拒絶

荒れにし寺井のほとり
白き石の上に坐り
多くの時をわれは消しぬ
意味ありげなる雲浮び
茎高く草は黙して……
またも夏の来れる様を見たり
わが胸を通らずなりし
しかくなほわが目にうつり
四季のめぐり至るは何故ぞ
万物よ はや われに関はるなけれ
隠井の井水は敢て
汝らを歌ふことはあらず

この詩は『コギト』十二月号に発表された。十一月二日の百合子さん宛書簡に、来年の六月頃ポケット型の「拒絶」と云ふ詩集を出す由見えてゐたから、或ひは伊東は「わがひとに与ふる哀歌」の反響を予期して、出版記念会の前にすでにこの詩想を発想しだして

久保田房子著
歌集 多羅

日本文芸社刊

四〇〇円

「炎道」の第一第二歌集で女身の最高の香りである鞠爛さを誇示した著者は、こゝにやうやく人生の苦澁をも含蓄して、芳麗にして滋味を極めた新歌境に到達した。歌ひつゝ自ら傷き、又読む者をして傷ける、歌と身と一つになる浪漫歌人の天童が、高麗清澄な清水比庵氏の装面に杜撰された豪華な歌集である。

年末伊東は次のやうな書簡を百合子さんに送つてゐる。

「お手紙有難う。病氣なのですか、大切にして下さい。近頃は私はめつたに病氣もありません。詩よんで下さつて本望です。雑誌送ればいいのですが、ちよつと気はづかしくなつてやめるのです。店頭で立ちよみしたり、又は買つたりして下さるのを想像するのが、私の流儀です。

子供は仲々生れませんが、今年中には駄目かとも存じます。

近頃は疾風と云ふ詩を書いてゐます。

この前お逢ひしたとき私の哀歌をモルゲン(註・Morgen朝)に似てゐる。又拒絶といふ題は独逸のリード(註・Lied歌謡)に似てゐるといはれましたが、あれは私の詩の今迄の批評の内一番正しいものです。
中略……コギトの一月号に私の詩集の評が

レエルケ詩抄 3

別れの手

死の恐怖の後に

僕の経験をおまへたちは経験しやしなかつた
僕の胸ははりさけ 身体に冷汗をぐっしよ
かいた
愛するおまへたちよ 僕は転倒してしまつた
のだ

やるなど真剣に予感したのに 僕はやつた
僕ははげしく泣きながらおまへたちをふりか
えつた

おまへたちをみんな自分の子供のように思つ
たからだ

おまへたちはまだ生長してるものをまびいた

なりのります。まちがつたところをさがし
出して私に教へて下さい。方々で私の評が
近頃のりますが、まちがひが多いと思つて
みます。

近頃、シューベルトの曲のついた冬の旅
といふ詩をみて感心し、音楽の先生にレコ
ードをかりて忠実に、きいてみて、やはり

それだけでなく、ほかのもう皮膚のこわばつ
たものたちも同様まびいた

そういうおまへたちは僕より年とつてい
ふに救いの手があらわれた

天秤宮 金牛宮 それにすべての兆しのもと
黄道帯に生きて 天の車輪とともに上りまた
下るおまへたち、みんな さよなら!

おまへたちはこの手をみる 大胆にでもなく
怖気づいてでもなく

その手は酔っていたのではなかつたが いま
酔いからさめていられるでもない

それは山ほどたくさん願ひのしたに沈んで
いくが

そのひとつはいつも再びかえつてくる
おまへたち 子供らよ 遊ぼう! と

感心しました。音楽の先生は、あれに感心
した私を軽べつしました。中でも、三つの
太陽のことを歌つたのと(註・Die Nebel-
nen) 白髪のことを歌つたのは(註・Der
Graise Kopf) 感心しました。いく詩です
ね、あれは。

遠い山彦

おまへたち 緑なす自然よ 僕は一言もい
やしない!

僕はまだおまへたちの仲間でないのだからか
おまへたちとひとつになりたい

甘い酒 辛い煎薬に酔つたように揺れる山彦
僕は一言もいやしない!

冬至

氷花が光っている
太陽は向きをかえようとしている
そして約束する

(たかはし・しげおみ 訳)

近頃はヘッセ(註・ヘルマン・ヘッセ)とレーナウ(註・ニコラウス・レーナウ)の詩をよんでみませ。あなたに訳して送ってあげたい程です。私より少しうまいです。

疾風

わが足はなぜか躊躇ふ
疾風よ いつこに落しぞ
かの暗き生活の巷をすぎつ
わが心たじろがざりし
汝は地を襲ひ砂を飛ばせしが
またわれを抗し難く駆りぬ

疾風よ いつこに落ちしぞ
わが足のすゝむ術なし
わが髪に氷りし雪は
また わが道を埋み果てつ
願はざる月さへ
やがて虚空のうちに浮びぬ

おからだ大切にして下さい。

二十一日

伊東生

ゆり子さん

(昭和十年十二月二十一日大阪府立住吉中学校
より東市豊町区元園町一丁目イワイ・コート
内酒井ゆり子宛封書)

この書簡から判断すると、伊東は出版記念会で東上した際、百合子さんに出会ってゐるやうである。なぜかと言へば、『わがひとに

空と木

服部三樹子

彼方まで光澄む中立止り距離もちて見る
今日の後手
人も透き我身も透きて昼深くこの道曲る
ところとなし
足もとにちんちろりんの跳び退きて常に
はあらぬ言ひひらし
身のふりの影にも怖ぢし春を抜け独りゆ
くとて月の下ゆく
少女子よ月仰ぐときつま立ちて白き光を
髪に冠りき
月真上に短く曳くは唯今のことより知ら
ぬ独り影なり
陳腐なる秋思運びし秋刀魚にも別れなが
らに秋深く入る
遠景に柿の実光る窓となり柿むきてゐる
我等絵の中
秋の夜の長きねむりにたくはへてあかつ
き白き淨福に居き
鈍りゆく我が感性を嘆かひてもすさま
じき桐の黄葉
日々夜々に落葉積りて驚きは遠き瞳に澄
める木と空

白居易詩抄(十八)

森 亮

わが兄

遺愛寺

知事といへばまア役人の端くれ、
只この兄がぼくの兄だといふこと
それだけはぼくの自慢である。

ぼくの兄はまだ若い頃

二千人の兵卒を手下にもった。

昼は歌と笙の笛の調べに聴きほれ、
夜は敵の陣營に切り込んだ。

軍隊をやめて故郷に帰り
頭はすっかり白くなったが、
旗と軍鼓に出会ふたびに

彼の眼は急にキラキラかがやく。
杭州では夜二人で大酒を飲んで
寝床を並べて寝たこともあった。

けふ呉郡で春の遊びに
馬を並べて歩ませる。
弟のぼくは田舎で威張ってゐるが、

? と訊ねたのではなからうか。伊東は酔ひ
に紛れて『わがひとに与ふる哀歌』の表紙絵
の少女なんです……と答へたのだらう。
伊東の『わがひとに与ふる哀歌』の表紙は
白鳥とレダの浮彫の写真版である。白鳥の両

花にあくがれ花を尋め寺のまはりをさまよ
ひ歩く。
絶えず聞えて来る鳥のさへづり、
行く先きさきに泉のあふれる声。

註

「わが兄」の原詩は奉送三兄(三の六七四)で、
白居易五十五才の作。このときは蘇州刺史の任
に在った。次の「遺愛寺」の原詩は同じ題のもの
(二の六四〇)で、彼が司馬として江州に来た翌
翌年、廬山の香林峰のすそに草堂を築いたが、こ
れはその頃(年譜で言へば四十六才)の作。

翼は遂情の情熱で八の字型に大きく拡げられ
てゐる。彼のしなやかで長い首は、円を描い
てくねりながら、羞恥で裸身を硬ばらせてあ
るレダから、唇を奪はうとしてゐる。彼の猛
しい趾はレダの太腿を巻いて授情の姿態に導
かうとしてゐる。伊東はこの表紙は含羞の表
現なのだ自ら言つてゐた。

伊東はつまり百合子さんを、この含羞の象
徴であるレダであると紹介したのでらう。こ
の会話を片耳に挟んだ保田氏が、百合子さん
を詩でうたへと言つたのだと想像する。

伊東は「わがひとに与ふる哀歌」の主人公
「わがひと」をこつそりと記念会に出席させ
て、出席者の反応をためしたのであらう。こ
の趣味は、「呂」時代O・S劇場のコスモス
で、真新しいカンカン帽を脱帽せず同人達
の反応をためした、あの実験と同趣向のもの
なのである。

その日、百合子さんは、詩集『わがひとに
与ふる哀歌』は朝に似てゐると批評してゐた
が、この批評をこれまでの誰の評言より、伊
東は信用してゐるのである。国文学者の清水
文雄氏(和泉式部の権威)は、「偉大な作品に共
通する乾燥した何か」と云ふ言葉で伊東を賞
揚されるが、その「乾燥」も百合子さんの感
じた「朝」も同じものなのである。事実、伊
東は詩を彫琢する最良の時間として、学校で

ある不時着

浅野 晃

黒い河のむかふに
もつと黒い森がみえる
黒い水がながれてゆき
黒い森は黙してゐる
浅いやうで深い夜は
明るいやうでやっぱり暗い
誰も帰ってくるものはない
みんなみんな行ってしまつた
言伝もなく招きもなく
森だけがあそこにある
この黒い水だけが
あの森へはいつてゆく
ふいに足もとから
かぶと虫がとびたつ

すると記憶の底から
誰かの声がよびかける
この濁いた肉体も
すでに黒い管ではないのか
あの森をここから隔てる
この距離は何なのか
じわじわと夜は
水の上とその庄を加へる
水はしだいに重くなるが
森はまるで無感覚だ
ひとつの瞳があらはれて
かなしくめくばせする
わかつた 少しづつ想ひ出す
炬火も喇叭も沈んだのだ
萎めいて平たいものを
足がふみつぶした
ひろひあげてみると
文庫版の黙示録だつた

の朝礼の時間を選んだのである。学年別に整列した生徒が、壇上に立つた校長と、その脇に塔列した職員に朝の敬礼をする厳肅なあの時間。朝礼がすむと生徒達は一斉に小倉の上着を脱いで白いアンダー・シャツになる。体操教師の号令一下……彼等は展開し、跳躍し、屈伸し、回転する。伊東はこの一糸みだれぬ秩序を見てゐると、いつ知らず眼頭に泪が浮かぶ特性があつた。伊東は感動で眼をしばたくと制作中の草稿を小声で口誦して見るのである。口に浮かばぬ章句は残滓としていさぎよく捨て去る。……と口に乗る章句こそエッセンスなのである。伊東は青より白熱に近い朝の耀く空を睨みながら、渋滞した章句に代へて鮮烈な言葉を掴み取つたのである。伊東の作品に「朝」が感じられるのは、遠過と彫琢を重ねたその苦心の外に、前述の朝礼の時間の起用も影響があるのである。伊東は書簡の末尾で、ヘルマン・ヘッセとニコラス・レーナウとの他に、シュニベルトの附曲で有名になつたウィルヘルム・ミュラー(1794-1827)の『冬の旅』(Winterreise)に感動してゐる旨述べてゐる。伊東はその全曲を音楽の先生から借りてきて、シュニベルトが今生最後の天才を傾けつくした譜曲に聞き入りながらミュラーの二十四の詩篇を仔細に検討したのである。

1、おやすみ。2、風見の旗。3、凍る。4、凍える胸。5、菩提樹。6、溢るる泪。7、川辺にて。8、回顧。9、鬼火。10、休息。11、春の夢。12、孤独。13、郵便。14、霜おく頭。15、鳥。16、つひの希ひ。17、村にて。18、風の朝。19、まどはし。20、道しるべ。12、はたこや。22、勇氣。23、並み懸かる陽。24、辻音楽師。
恋人との別離から始まり、雪と氷とに閉ざれた野や、村や、町を彷徨しながら、かつて在った春の日を追慕し、つひに狂乱になつて、辻で七絃琴を弾いてゐる乞食と行を共にする……と云ふ結末に、恐らく、伊東は身につまされる思ひをしたであらう。
おもへば、大正十五年八月、大学一年生の希望に溢れた日に百合子さんに初めて出会つた日から、翌昭和二年五月の河原町丸太町の邂逅。その日に始る三年に亘る曲折ある悲恋と懊惱。昭和五年九月の琵琶湖から京都への小旅に於ける貧乏教師としての懐旧。昭和七年二月の父の死でもつて明確になつた伊東家の没落。その苦境から脱出するための唯一の手段であつた山本花子さんと花開く四月の結婚。
伊東は茫々十一年間の回想を『冬の旅』を聞きつゝひとごとならず反芻したことだらう。その二十四曲中、特に伊東の関心を呼ん

だのは、次の二曲であつたのである。

並み懸かる陽
Die Nebensonnen
Wilhelm Müller

虚空に三つの陽浮びたり。
Drei Sonnen sah ich am Himmel
sche'n,
われ暫しひた……と凝視めされど
Hab' lang und fest sie angesehen;
そは濛昧のさなかに留まりぬ。
Und sie auch standen da so stier,
われを(離)りて行かんともせず。
Als wollen sie nicht weg von mir.
あゝそはわが陽にあらずー
Ach, meine Sonnen seid ihr nicht!
わが眼をかく見守れどもー
Schaue Andern doch in's Angesicht!
今し 在りし三つの陽の
Ja, neulich hat' ich auch wohl drei;
美はしき二つまでは消え失せぬ。
Nun sind hinab die besten zwei.
さらば残れる一つもはや沈みゆけかし!
Ging' nur die drit' erst hinterdein!
闇にこそわが幸はみすすなれ。
Im Dunkeln wird mir wohler sein.

Der Greise Kopf

わが髪は霜を置きて
Der Reif hat einen weissen Schein
白くぞ輝やきたり かへく
Mir uber's Haar gestreuet;
われもやうやく年老いたりと
Da glaub' ich schon ein Greis zu sein
いと悦びぬ
Und hab' mich sehr gefreuet.
されど置く霜のはや融けかりゆけは
Doch bald ist er hinweggestaut,
黒き髪ふたたび還りきぬ
Hab' wieder schwarze Haare,
椀に憩ふその日まで 遙かなる旅路おもへば

詩集箱船

イズムと名の附く一切から解説し、その概念世界を放下した氏は、今や清澄にして潤達な悟達な新境地に到達した。ここに編む二十五篇はさきげない風物詩の外貌を装ひながら、現代の病果をシニカルに切開し、その膿汁を剔抉して、新生の血汐の所在を啓示する。読者は随所に警世と覚醒の金言を読みとるだらう。
(編者 三〇〇E)

果樹園社刊

Dass mir's vor meiner Jugend graut :
おぞまじきかな われの若き日！
Wie weit noch bis zur Bahne !
夕焼けてより朝日さすまでの短き一夜！
Vom Abendrot zum Morgenlicht
白髪となりてゆく人も多きに
Ward mancher Kopf zum Greise.
この長き旅路をかさねて尚も若き人の
Wer glaubt's? und meiner ward es
nicht
われを誰か信じらへしや
Auf dieser ganzen Reise !

『冬の旅』中もつとも狂乱を感じさせる詩に伊東は感銘したわけである。この二篇と伊東の「疾風」とは直接関連はなささうである。但し、「疾風」末尾の願はざる月▽とは、ミューラーが入らば残れる一つもはや沈みゆけかし▽と歌った「並み懸かる陽」を

心
の
あ
か
り
堀
口
太
平

今日は一日秋雨がふっていた。
組橋まなこのそばを通っていたら、
宇佐美君が電車道を横断しようとしていたので呼びとめて、
しばらく彼の事務所まで話をした。
だんだん肥ってくるし、
だんだん馬鹿になるとぼしていた。
私は大水の話をした。
部屋のなかに紐をわたして、
毎日、昔の日記を干していると、
嘘っぱちばかりかいてあるのが目についた。
て厭になるよといったら、
うらやましいといった。

「面白い話をきかそうか」と前置きして、
「南京虫は蟬科だそうだ」というと、
「画鋏のようなむし。南京虫。
——クリップのようなむし。法師蟬。
——但し以上に限定してはいけない。
自由。
「ヘー、楽しいね」と目を輝かした。
「奇麗だよ。連想的だ」と私も目を輝かした。
二人とも、ここで内なるものに火がともった。
(一九五八・一〇・三〇)

編案したものやうである。つまり、伊東はミューラー、シューベルト合作にかゝる『冬の旅』全曲の印象を、「疾風」にまとめたものだらう……と云ふのが、高橋重臣氏の解釈である。

『冬の旅』の曲を聞くにふきはしく、玄関兼斎の外では竹格子が師走の風に鳴ってゐただらう。シューベルトの附曲の中途であえなく三十三歳の若さで死んでいったウイエルム・ミューラー。伊東は彼の運命を憐れみながら、閑太郎か？ 閑子か？ やがて生れでる者を迎へる自分の運命をも想望したのであらう。

ちなみに「疾風」は翌昭和十一年『新潮』三月号に発表されたのである。

備考・本号を以て拙論第一部「わがひとに与ふる哀歌期」を完結したことになる。次号から伊東が最も円熟した第二部「夏花期」にかゝることになるが、思ふところがあつて「書簡から見た伊東静雄」と云ふ主題を改め、彼の第四詩集「反響」に用ひられた「夏花期」の副題「凝視と陶酔」と云ふ言葉を中心とし、副題を「作品と書簡から見た伊東静雄」に改めることにした。三年に亘る雑々とした拙論の進行に対し、常に寛容の精神で臨まれた花子未入に深謝を捧げると共に、学界の諸家からの御叱正と懇請に対し篤く御礼を申し上げる。
さう云へば、高知女子大教授清水孝之氏から、第三十一号に書いた「天王寺博物館」とは「市立美術館」でないかと御叱正を忝くした。尚、同号の「武者門」とあるのは「倉庫敷の門」が正しいので訂正を御願ひする。

東京通信

田中克己

小高根さんの「伊東静雄」の苦心のあとを見聞するにつけても、伊東の日記がのこつてゐたらと思ふ。しかし大作家は日記などを丹念にするす神経はあまりないやうである。全集の中でも、手紙、日記のところが一番興味ふかいつけても、この二律背反が惜しまれてならない。

ところで近ごろになって、中国で李白関係の本が二冊出た。一は黄錫珪の「李太白年譜」で、これを買つて来て、少なからずおどろいた。李白の行動をくはしく年次に分けてしるしてゐて、そのうへ彼の殆んど全ての作品の製作年を定めてゐるからである。しかしこの考証の基礎は何かひびくことはしるしてゐない。しかも私などにもだいが誤りが指摘できさうである。しかしその天才的なのはほとんど感嘆した。

そのあと手に入れた詹鍈教授の「李白詩文繫年」の方はよんでこれと反対に安心した。考証の仕方も前人と同じ方法で結果も苦心のわりにあまり上つてゐないからである。

女生徒

福地邦樹

時々遊びに来る女生徒がまたふいに現われて
神妙な顔をして白い角封筒をさし出す
私が読みはじめると
ひらりとペラリと出ていった

このような事を書いてはお叱りを受ける
かもしれないが
先生をお慕ひして
夏休みにそれがわかりました
センを切つたダムのように
もう止める事が出来ませんと書いてある

ダムのセンとはおかしいな
などと思ひながら
私はやはり少し上気して
何とも当惑して
映画に行こうと急に外に連れ出した
あとから自分自身に腹が立つから
あんな事を書いてはいけない

それにそう簡単なことではないのだから
とだけ言つて映画館に行くまで殆んど口
をきかなかつた
彼女はしおしおとついて来た
西部劇をみて出てくると
用があるからと彼女を帰し
さて私はどこへ行けばいいの
か急にうろつろつた心を持って余しながら
私は足速やりに雑沓のなかに入つていった

黄さんは一九四一年に八十才で亡くなつたとあるから、たしかに先輩ではあるが、詹教授はこれを採用しなかつたばかりか、これと大分撞着するところがある。どちらが正しいか。私は詹さんの方がいいやうに思ふ。ともあれ李白自身に日記があるか、杜甫のやうに時事に即して作れば、苦心もいらぬし、理解も易いのに、日記を欠かせずつける私など小詩人はこのごろ本気で考へてゐる。

服部三樹子さんが歌以外に特技のあることはみなご存じだらうか。私は知らなかつたので、某日、私の宅へ私の運勢をトつて記した文章をもつてお越しの時にはおどろいた。お札をいつて読ましてもらふと、少くとも過去に関する限り、一条もまちがひがない。こと

はっておくが、服部さんと私とは最近のおつきあひで、この二年間のこともしくははくはく存しない筈なのにびたりと当ってゐる。来年の運勢は大分よいやうで、これもうれしく思った。姓名と生年だけわかればよいさうなので、御希望の方があれば、私がとりついでさしあげよう。お忙しいのだらうと思ふが、何

拉 孟

岩崎 昭 彌

ある朝 歩哨は全身を眼にした
確かに 百姓らしい二人がやって来る
草で包んだ天秤棒と草をつめ込んだ両端の籠
銃剣を鋭くつきつける
「木下中尉だ 小隊長を呼んでくれ」
「百姓の一人が意外な日本語を使ふのだ」
「つがうつがう 怪すう奴だ」
構へた歩哨は全身の眼で百姓達を点検する
やつれた顔 伸び放題の頭髮 裂傷だらけの
手足！
一体 二人は何ものなのか？
「異常あり 第一線に異常あり！」
小隊長が馳けつけると百姓の一人が倒れ
もう一人も ぼったり倒れてしまった

とかたのんでみようと思ふ。
たゞし、信用してもらふには、どんなに當
つてゐるか、私のいたたい運勢の文章を写
さねばならないのは、承知だが、これだけは
お許し願ひたい。私の悪かった運勢をくはし
く天下に広告することになるからである。
ともかくご信用いただければと思ふ。

陣地へつれて来て介抱して始めてわかつたの
だが
天秤棒は軍刀で 籠には自害用の手榴弾と重
要書類が入つてゐた
拉孟はビルマ・ルートが怒江を横断する唯一
の橋
惠通橋を制扼する西岸の要害である
かつて「龍」師団の一部が占領したのが昭和
十七年四月
陣地の補強に乗り出したのは二年後の昭和十
九年の正月
忘れはしない 守備隊長金光少佐の着任から
である
大木を切り出して来て地下室の屋根となし
更にその上を土砂で盛りあげた
鉄条網は二重三重に張りめぐらし
井戸を掘り貯水池を作り 弾薬庫を増築した
百日間を将兵は夜を日について働いた

せる敵を粉碎しつつあり」

某月某日

「戦死二五〇 負傷四三〇（うち休息一〇〇）
片手 片足 片眼の傷者はみな火線に
て戦闘しつつあり」

某月某日

「昨夜 歩兵砲兵の挺身斥候十組を潜入せ
しめ 七組は成功して帰還す 戦果 砲四
門破壊 迫撃砲三 機関銃五台を鹵獲」

某月某日

「陣前に横たはる敵の死体より 小銃 彈
薬 手榴弾等を鹵獲し逆用しつつあり 士
気ために振ふ」

強靱な精神力も 裏付となる物量がなくては
勝てぬ

三日続いた死闘の翌日 陣地の第一拠点が敵
手に陥ち
第二拠点も続いて玉砕し 残るは指揮所のみ
となる

硝煙ゆらぐ壕内は 大半がすでに神となつて
をり
生きてゐる兵隊の 血まみれの阿修羅達ノ
武運これまでと 決めた守備隊長の胸に映つ
た「二重橋」

時を移さず 電波は芒市の軍司令部に送られ
た

私はトひのたくひはあまり好かないので、
今まで二度しか見てもらった経験はない。一
度は昭和八年に台湾へ行った時、台北で台湾
人の易者に見てもらつた。「南方へゆけばお
金がもうかる」といふのが、その卦であつ
た。二度目は昭和十七年、スマトラのメダン
の町で阿片窟の隣りにゐる易者に見てもらつ
て

かくて築かれた陣地は 榴弾砲八門と山砲四
門が骨となり
約二十挺の重軽機関銃が肉となつてゐる
一方連合軍の目的は 印度——昆明に通ずる
レド公路の打通にある
中国各地で募集された青年学徒の六個師団が
空輸で印度に送られ
米式装備と訓練で一年間準備した精銳がフー
コン河谷から「菊」師団を圧迫してミート
キーナに進撃する それに呼応して
衛立煌大将の指揮する十五師団の雲南遠征軍
が 怒江を渡つて日本軍を挟み撃ちにした
その玄関が拉孟に當る
五月十日 朝の山野を破つて砲声がどろい
た
続けて撃ちまくる 敵は二百門の大砲と四箇
師団の兵力でこちらの二十数倍
この事あるを予期した陣地は金光恵次郎少佐

「百二十日に亘り陣地を守りしも 指揮未
熟にて弾薬つき 將兵みな死傷して遂に軍
攻勢の支所たり得ず
軍旗暗号を焼却して全員玉砕せんとす
軍司令官閣下 師団長閣下
長期に亘る特別の御配慮 感激に耐へず
今後とも將兵の遺族をよろしくお願ひし
遙かに国軍の勝利を祈る」
このとき重傷者と介錯したのは慰安婦の天草
娘達ノ
朝鮮生れの五名を投降させると彼女達は晴着
の和服に着替へ
青酸カリを一気にあほつて 抱きあつた
ああ 燃える手榴弾を握りしめ 祖国に向つ
て合掌する將兵達ノ
この光景を見とどけた金光少佐 傍の木下中
尉を呼び止めた
「ここを脱出せよ そして戦況をつぶさに
報告せよ
遺族にも この実情を伝へよ」と

拉孟が敵手に陥ちたのは 昭和十九年九月十
二日
「インパール」

以下千四百の混成部隊

隊長は しかし一兵より鍛へあげられ精勵格
勤の勇士

戦況を嘆いたことなどかつて一度もなかつた
が
五月を戦ひ 六月を戦ひ 七月を過ぎんとす
ると弾丸が欠乏する 兵力は消耗する
周囲は完全に包囲されてゐて鼠一匹も這ひ出
せぬ

頼みの綱は無線だけ そして打たれる電波の
声は
「弾丸補給されたし 手榴弾補給されたし」
と

怒り戦いて陣地に耐へる数日の 何と永い歳
月であつたことよ
しかし やがて聞いた砲爆の絶間のなつかし
い爆音ノ

小型機が 確かに四機 雲間をぬけて急降下
する。
「日章」目標に投下する弾薬を運ぶのは
兵隊でなく 大半が軍服を着た若い女性たち
かつての慰安婦はいま看護婦兼炊事婦兼戦闘
要員である

某月某日
「手榴弾一〇〇発 小銃弾二〇〇〇発受領
將兵は一発一発の手榴弾に合掌し 攻め寄

た。「五十歳になれば云々」といふので、明日をも知れぬ軍属に何をいふか、と信じなかつたが、どうやら五十まであと二年、何とかゆけるのではないかと、このごろになって思ひ出し、かたがた世間の人より心強いのだ。実際東京は自動車の数が多くて、私ら歩行人はこんな卦でもなければ、明日の生命をも自ら信じ得ない位なのだから、かたがた服部さんの卦をおすゝめする。

検 診

池 沢 茂

妻が市電をおりて、病院のほうへ、交差点をわたり、歩道をおりてゆくと、ぼくも交差点をわたり、歩道をおりていった。ふとして、ぼくのほうがさきになると、おぼつかなく立ちどまって、妻がさきになるのを待ち、そのあとから、また、ついていった。いそいそと家を出てきたものゝ、さて、いざとなると、やっぱり、自信も意志もぼやけてくる。いつものことだが、はじめての人たち——このばあいは、受付や、看護婦や、医者たち——に応答しなければならなくなるが、おっくうでたまらない。それは克服するにしても、たぶ

んすべては無駄だという自嘲が、はたらきかけてくる。すでに自分の症状を知り、八、九割まで不治だと自覚している患者が、あらためて医者の診断を受けたところで、なにになるだろう。たった一割か二割の希望に、すがりついているだけではないか……。ぼくはしかし、たとえ不治だとしても、何十年のものあいだ隠しつけ、なやみも苦しみも自分の胸のなかにおさめてきた耳の故障を、専門の医者のまえにさらけだし、さばきを受けて、さっぱりした気持ちになりたいとも思っていた。

晴れわたった青空のなかに、六甲の連山が、ちかみくと、酸素に富んだみどりいろの空気をあふれさせていた。そのみどりの手前に、県立病院のビルディングが、日光をあびて、白く大きくかどやいている。すると、ぼくはまた、なおりたいと思うのだ。一割か二割の可能性だとしても、なおせるものなら、なおしたい。この大きな病院でなら、なおしてくれるかもしれない……。ぼくはわずかな希望におぼれて、なみだぐましくなった。そしてそのあとから、じきに、体をふるわせるほどの怒りが、どっと、しゃくりあがってきた。会社の古参や同僚たちの、耳の遠いぼくをいじめたり、からかったり、けおとしたりする

古城の銃眼

堀ノ内 歴

盲いている そこにいる
無用でいる そのまゝでいる
肅然と最後の武士らの去ってから
百年を昨日にしている
この先に 年月はない

睨んでいる 相手のない前方
焦点のない瞳孔は 重い緑内障の失明
近くでは 簡素な四角に
綿襪の白い密生

吹く風が ここに届かず
降る雨も ここだけ除ける
もの音は 下手で消され そして今
最終のあの聲音を抱いている
これは未だ 元の銃眼

昭和三三・一九

佐伯祐三

山 根 忠 雄

東京美術学校卒業後

米子夫人と一子弥智子を伴ひ

フランスに赴いたのが大正十二年

彼の二十五才の時であった

昭和元年一たん帰国したが

パリの裏町忘れがたく

翌昭和二年八月

再び妻子を率ゐて渡仏……

水に帰った魚のやうに

いくたのバリ風景の傑作を描いたが

(それらは既にユトリロでもウラマンクでもない)

全く彼独自の境地を示してゐた)

過度の制作がたたつて健康をそこね

昭和三年八月十五日

パリ郊外のメゾン・ド・サンテ病院で

惜しくもこの若き天才画家は客死した

ときに——享年三十才ノ

意地のわるい顔や言動が、どすぐろい、血まみれの画面になって、わきたつてきたのだ。ぼくたちは公休日になつても、金のかゝるところへは、どこへも遊びにゆかない。映画なども見ない。肉なども、月に一度ほどしか買わない。どうしても必要な衣類だけをまとい、うえないだけの食物をとっているにすぎない。こんな生活さえも、かれらは耳が遠いのにつけこんで、ぼくから奪いさうとするのか……。ぼくはしかし、そつと口をゆがめて、にがわらいをした。ぼくはそのころ、いつも、そうしていたのだ。どうせ健康な人たちのようには、不満や怒りもぶちまけることはできない。耳が遠いのみならず、しかたがないと頭をたれて、からだの奥底から突きあがってくる激情をおさえつけてしまふと、やがて、たいてい、ほんやりと疲れきっていた。そして耳の神経だけが、しきりに興奮していた。

ぼくが浮かぬふうのためらつていると、妻は受付で手続きをすまし、耳鼻科のほうへ、廊下の人ごみをわけていった。耳鼻科の待合室にはいると、ぼくは用件をたずねられた。「聴力を検査してもらいたいんです」
ぼくはいきなり率直に答えた。ところが、

その口調は、なにかの敵にたいして、いどみかゝるみたいだつたにちがいない。くたびれた中年男のぼくは、疲れて、ゆううつな顔をしていたが、しきりに、いきごみ、いら／＼し、新聞を校正する仕事のせいで、目が血ばしついていた。相手の看護婦は、住所、氏名、年齢、職業など書きとると、ペンをなげだして、そんなぼくを、まじ／＼と、いぶかしそうに見つめた。それから、ふいに立つて、奥のへやへさがった。ぼくはまもなく、若い三、四人の医者に、取りまかれていた。医者というよりも、まだインタン中らしい、学生じみた男たちだった。よい研究材料が来たというように、かれらはしばらく、あやしむように、じろ／＼見たり、そつと横から、ようすをうかがつたりしていた。それから、そのなかの一番おとなしそうな男にみちびかれて、ぼくは別室にはいった。

「まあ、いっぶく、どうですか」

ぼくを奥のほうのソファに腰かけさせてから、かれはそう言つて、タバコに火をつけ、その火をぼくのまえに出した。ぼくはあわてて自分のタバコを取りだし、相手の火が消えたので、自分のマッチをすつた。初診のぼく

にたいして、なぜ、こんなに特別な、やさしい心づかいが示されるのか、ぼくはタバコをすいながら、ちょっと、ふしぎな気がした。「もしかしら精神に異常があるようにでも思われているのかな。ぼくはしかし、たゞ耳がわるいだけなんだ。この点、誤解がないように、はっきりしておかねば……」とぼくは思った。そして相手が二、三度タバコをすって、その手を休めたのを見ると、ぼくはいそいでタバコをもみけし、さて、気をおちつけて「ぼくは子どもの中に中耳炎をわずらい慢性になって、なんべんも再発したので、両方とも、鼓膜がすっかりなくなっています」と言いはじめた。それから、ふつうの対話に、いま、あまり支障がないようなのは、リパノールにひたした綿球を耳の奥にいれて、鼓膜

初旅に

美堂正義

秋もなかば
爽味の空気が心よく
まだ明けきらない空に

一群 また一群
燕らは集ってくる
それは二町も三町も
電線に黒く続いて止ってある
この国に生れて始めの旅路
また 再び南に帰る燕らが
尻尾を振りながら啼く
別れの鋭い叫び声
いま私の町の上空に集り
先導者に従ひはるる海を越え
遠く青い空と光とを求めての門出のとき
寄ってくる 群れてくる
空に溢れるばかりに乱舞し
罌粟粒のやうに小さく見えるのもある
すつきりした黒い羽の燕らよ
私はいまから寒い冬を迎へ
冷たい氷雨を凌がねばならない
離れるものは自由に去るがいい
誰れもその冷酷は咎めないであらう
暖い光が水を融し始めるまで
楓が青く装ふ日まで
待つてゐる 耐へてゐる

のかわりにしているからだと説明した。しかしこれでは不十分だし、ぐあいのわるいことも多いので、手術をしても、なんとか、ほんとうの鼓膜に近いものは作れないかと相談した。相手がまたタバコをすいはじめ、そまつな小さな木のイスのうえで、疲れきったみたいに、うなだれながら、とき／＼、ふん、ふん、うなずくだけなので「とにかく、さしたたて、聴力の検査をしていたゞけませんか」とたのんだ。ぼくは相手の気持をそこないように、最善の治療法をとってもらえるようにと、おど／＼していた。それで「子どもこのころというのは、いくつときですか」「脱脂綿にリパノールをひたすのは、どういうわけですか。水ではいけませんか」などとうやく言葉らしい質問が出てきたとき、ぼくは、ほっとなり、よみがえった。「赤ん坊のころだと思えます」「リパノールは消毒のためです」とぼくは答え、その理由や根拠など、知っているかぎり説明した。ぼくは自分の答弁が、本でも読むみたいに、よどみなく出来たのが、うれしかった。精神にはなんの異常もなく、耳が遠いだけだということをしっかりと説明できたらしいのも、満足な気がし

通れぬ道

芳野 清

一つの道をゆくとき
突き当りに赤い広場があった
レーニン像が雨に濡れてゐた
一つの道をゆくとき
ヴェルレーヌの落葉が舞ってゐた
ヴィオロンの音が静かだ
一つの道をゆくとき
賑やかなバザールがあった
汗臭いターバンの蛇使ひがぎろりと睨んだ
一つの道をゆくとき
サボテンの曠野に出た
口を開けた巨像の牙にソンプレロがかゝつてゐた
一つの道をゆくとき

た。相手はしかし、うなだれがちだった視線をあげ、
『よく知っていますね』と、いかにも意外そうに言った。『それがつまり人工鼓膜ですよ。腕の皮膚を取って植えついたり、竹の内がある薄い膜を利用してみたり、いろ／＼こころみられています。鼓膜には微妙な角度や傾斜があつて、どうも、うまくいかないようです。あなたはよい方法を思いつきましたね。その脱脂綿を鼓膜の位置にいれるとき、どういう方法でやっているのですか』
『ぼくはぬい針の太いのを使っています。その針の頭のほうで……』
ぼくは答えかけたが、むっとして、だまりこんだ。なんの救いも示されなかったからだ。たゞ、ぼく自身の現在やっている方法が、一番いゝとみとめられたにすぎない。一割か二割はあるうかと見込んでいた可能性も、やはりなかったのだ。ぼくはだん／＼沈みこみ、口をきくのもいやになりはじめた。ところが相手は、そんな患者のぼくから、かえって、かれ自身に必要なことをまなび取り、教わるうとしてゐるのだろうか。ぼくは自分の悩み

梨と桃の花に埋まった賢人の墓があつた
酒姫の黒瞳も酒杯と共に火殿の煙になつた
又一つの道をゆくとき……
しかし、私はそこも袋小路なのを知つてゐる
たった一つの道だけが
暮れかゝつた空の下にひらけてゐるが
あゝ、そこに佇んで待つてゐるのは
死んだ父のやさしい大きな影だ
一度行ったら帰ることのない一つの道だ
だけを見つめていて、暗く沈んだ淵の底から、ふと、怒りが、うかびあがつた。
『針の頭ですか。なるほど、いゝでしょうね。それで、その針の頭で、どんなふうにして……』
インターン中らしい若い医者は、しかし、疲れきつたようにかゞめていた体をおこし、目をいき／＼させて、ぼくのほうに、頭をかづけてきた。

百舌

上村 肇

高い電柱の頂きに
まだ年若い電工が一人登っている。

時々電線を切るための

金具の光りが走ったり

足場の綱が揺れたりしている。

そして声高に

何か下に向って呼んだりしている。

私はその下を無意識に避けて

何気なく上を見上げて通ったが。

この秋晴れの日の美しく続く日

あの若い身軽な電工は

明日又どの電柱の頂きで

作業するのであろう。

編輯後記

勸評反対闘争に次いで、今度は警職法改正反対闘争とかで世を挙げて喧騒を極めてゐる。いはゆる、この国の代表的な知識人、とりわけ文壇人の発言もなかなか狂んでゐる。が、その間に対岸で起つたノーベル賞のボリス・パステルナーク事件に関しては、不思議と沈黙の美徳を守つてゐる。或ひは、対岸の火事どころではない、足許の火事を消さねばならない……と云ふ、もつともな理由からかもしれない。

それにしてもアンケート好きなジャーナリズムが例になく無策であつたのをかしい。中村真一郎氏にどうやらまとまつた見解を書かしてゐたのは、普通新聞ではなく、確か経済新聞の日本経済新聞であつた。もつとも、この国の翻訳文芸家も文芸出版社も、パステルナーク氏に関しては全く無知であつたらしく、「ドクトル・ジバゴ」が容易なる作品であると察して、受賞決定前に版權を獲得したのは文芸出版社でない時事通信社であり、翻訳者は同社のロンドン特派員の文芸家でない原千林二郎氏であることによつても、それと知られる。

原千林の第二回目の訳文が出てゐる「世界週報」の表紙には、十月二十三日特派員の撮影にかゝるノーベル賞発表直後のパステルナーク氏の写真が掲げられてゐる。葉を落しつくした栗のやうな立樹の前に、鳥打帽を阿弥陀にかぶり、袴巻、合オパーを着たパステルナーク氏は、想ひ置けもしなかつた幸福の到来に驚ろいたかのやうに右手を胸に当て、苦節の涙がある顔をにこやかにほころばせてゐる。この無心の笑みを怒りに変貌させ、次で生存危機の恐怖で硬張らせ、ついに断念の歎きに蔭らしたのは、あの国の文芸家協会である。

私に納得ゆかぬのは、文芸家協会でパステルナーク氏に

果樹園

第36号

凝視と陶酔 小島根 二郎
白居易詩抄 森 亮
明 智 堀ノ内 歴
原退蔵先生 山根 忠雄

レエルケ詩抄 たしかはしみ
もみぢ谷 服部三樹子
風 福地邦樹
医者と患者 池沢 茂
新 年 浅野 晃
ひでり 堀口 太平
編輯後記

凝視と陶酔

小高根 二郎

作品と書簡から見た伊東静雄(三十五)

昭和十一年『コギト』一月号は伊東の『わがひとと与ふる哀歌』のため誌上出版記念会を催してゐる。執筆者は萩原朔太郎、中谷孝雄、青木敬麿、中島栄次郎、神保光太郎、山村西之助、保田与重郎、百田宗治の八氏である。

『日本浪漫派』の中谷孝雄氏は「秧鶏は飛ばず全路を歩いてくる」に穩かでない心の動揺を感ずるほど胸を打たれた由書いてゐる。

『呂』の主宰者であつた青木敬麿氏は「曠野の歌」を読んだ時、初めての腹の底から吃

驚したと述懐してゐる。

『コギト』同人中で伊東が最も敬愛した中島栄次郎氏は「河辺の歌」「わがひとと与ふる哀歌」を一番立派な作品と推してゐる。

『日本浪漫派』の仲間である神保光太郎氏は「美はしき賈貨」を推しつける凶々しい男だと酷評してゐる。

『椎の木』の山村西之助氏は「四月の風」「曠野の歌」「わがひとと与ふる哀歌」を挙げてゐる。

詩集刊行に尽瘁した『コギト』の主宰者保田与重郎氏は抒情詩の新声であるゆゑを説いてゐる。

『椎の木』の発行者百田宗治氏は傲岸無礼な男ときめつけてゐる。
「伊東君が此間東京へやつて来るまへに、

死の感傷を以て拒否のやむなきにいらした同好賞を、物理学協会ではイゴール・タム、バーヘル・チェレンコフ、イヤ・フランクの三氏に対しては、かの異議もさし

折から、わが國に招かれてゐる國のヴァイオリニストのレオニード・コガン氏が花やかな演奏会を開いた。十一月三日の夜、私もテレビで見聞したが、モスコイを一步も越せないであらうパステルナーク氏を想つて、ヴァイオリンのトレモロ以上に胸が痛んだ。なぜ物理学者や音楽家同様に文学者はこの代の榮光や楽しみを享けることを許されないのか。

それにしても、警職法改正反対で陽気に騒ぎうるこの國の文芸家は、なんと云ふ自由と幸福に恵まれてゐることであらう。その自由と幸福の感謝の意味合からも、対岸の同業者の悲劇に一滴の涙を注いでもよからう。十一月七日の読売新聞の読者欄に、東京の鷹谷青起と云ふ人から、パステルナーク事件に関して日本文芸家協会の見解を表明せよと提案されてゐた。私も如上の意味から同感である。いかにお人好しで愛想のいい吾々日本人も、日本以上に信じ得る國は世界のどこにもないし、日本人以上に信じ得る國民もどこにもないことを、もうそろそろ悟達してもいい時にきてゐる。(O)

果樹園 第三十五号(毎月一日一回発行)

昭和三十三年十二月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
発行人 池田市下京区壬生川通五条下ル
印刷所 同 朋 舎
池田市野町一六八
発行所 果樹園 社
定価 三十円

一度大阪で会つたが、はやり唄の文句のやうに、一目見たときに私はああさうか、あの詩集を書いたのはこの男だったのかと思つた。伊東静雄は、肩を落して酒が飲めるのだ。

顔のどこやらに、大きいイボだか、黒子だかがあるちよつと三好達治のやうな表情をする。私はかういふ自恥を知つてゐるやうな表情をする男はきつと不敵なものを藏してゐる男で、どうかしたら傲岸無礼の挙動が平気で行へる種類の人物だと思つた。」

(昭和十一年『コギト』一月号、百田宗治)

この百田氏の人間評には理由がある。昨十年の九月十月かに、詩人多田不二氏が文芸部長をしてゐたB・Kから「現代詩の朗読と解説」の放送があつた。その際東京から詩人群が西下した。その時、心齋橋の明治製菓で関西詩人会の歓迎会が催された。有志によつて長堀橋かの料亭で第二次会が持たれた。その詩人群の中に百田氏と解説役の丸山薫氏がゐたのである。その二人に大阪を案内しようとして伊東と山村と私は第三次会を誘つた。田中氏は第一次会だけで帰つて了つたやうな記憶がある。先づ歌舞伎座裏のオドリ館に案内した。生鞭を削いて即座にける東京館は東京人には珍らしいからである。タレをつける